
M・R・DCDシリーズ 仮面ライダーディライド

仮面ライダー大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M・R・DCDシリーズ 仮面ライダーディライド

【Nコード】

N0193K

【作者名】

仮面ライダー大好き

【あらすじ】

門矢 士/仮面ライダーディケイドの戦いから数年後、士は旅を続け、海東大樹/仮面ライダーディエンドは相変わらずお宝を求め世界を巡り、小野寺ユウスケ/仮面ライダークウガは自分の世界に戻り、光 夏海/仮面ライダーキバールは祖父の光栄次郎と共に自分の世界に戻り平和に暮らしていた。

一方とある世界では夏海と同じライダー大戦の夢を見る少女が居た。その少女の世界が終わりを迎える時もう一人の世界の破壊者が現れる。

もう一人の世界の破壊者・ディライド、新たなる九つの世界、そして幾つもの世界を巡りその瞳は何を見る？

第1話 ライダー大戦、再び（前書き）

第1話です。どうぞ！

第1話 ライダー大戦、再び

一人の黒いドレスを着た少女が荒野に立っていた。すると激しい地鳴りと共にクウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバ・デイケイドを除く全仮面ライダーが仮面ライダー幽汽を先頭に一人の標的に総攻撃を仕掛けていた。だがたった一人の標的に全ライダーは全く歯が立たなかった。そして全ライダーが全滅した。そしてその標的が姿を現し黒いドレスの少女は呟いた。

少女「デイライド・・・。」

少女はそこで目を覚ました。

岬 彩夏（以下彩夏）「デイライド、またあの夢。何でいつも泣けるんだろ？」 岬信次郎（以下信次郎）「おはよう、彩夏。」

彩夏「おはよう、おじいちゃん。」

彩夏は信次郎に挨拶をすますと、

彩夏「おじいちゃん、買い物に行ってくるね。」

信次郎「いつてらっしゃい。」

彩夏が鼻歌を歌いながら歩いているとどこからか奇妙な音が聞こえてきた。すると鏡に赤と白のボディのライダーが現れた。

彩夏「ん？」

彩夏は不思議に思ったが特に気にする様子はなく立ち去った。

一方とある世界。黄色の仮面ライダーが誰かと戦っていた。

黄色のライダー「ちっ、んだよあいつ！全然攻撃が当たらねえ！」

黄色のライダーはライドブッカー・ガンモードで攻撃を加えるが全く当たらない。

黄色のライダー「ちっ、しゃあねえ！」

黄色のライダーは飛び上がり謎の敵にキックやパンチを食らわすがやはり当たらない。

黄色のライダー「接近戦も駄目なのか!？」

すると、謎の敵は姿を消した。

黄色のライダー「あら?消えちった……。」

黄色のライダーはバックルを開き変身を解いた。青年の名は『近

藤 渚』この物語の主人公だ。

近藤 渚(以下渚)「はあく疲れたあく……。次の世界に行くか。」

渚は愛車のマシンディライダーに跨がりオーロラの壁を越えていった。

その頃彩夏は公園のベンチで休憩していた。そして渚は次の世界に到着した。渚「次は何の世界かなあ？」

渚はそう呟くと首に掛けていた黄色のトイカメラで写真を撮り始めた。写真を撮っていると渚は一人の少女と目が合った。彩夏だった。渚は微笑むと彩夏の写真を撮った。すると突然オーロラの壁が渚と彩夏の間に見えた。

彩夏「何これ!？」

渚「女!大丈夫か!？」すると渚のいる方が夜になり彩夏がいる方から見えなくなってしまった。

渚「なっ!？」

謎の青年「こんにちは、ディライド。」

渚の後ろに謎の青年が現れた。

渚「誰だっ!？」

と、渚が聞くと、

謎の青年「瀬戸 亘、またの名を仮面ライダーブレイズ」

渚「ブレイズ?そんなライダーが知らねえぞ?」

渚がそう言うと、

亘「無理ありません。つい最近誕生した世界ですから。」

渚「ふん。んで、俺に何の用?」

渚が聞くと、亘は姿を消し渚は元の場所に戻っていた。

渚「あら?あ、そっだあの女は!？」

渚はそう言う走り出した。

その頃彩夏は怪物に襲われていた。アンデットやファンガイア、イマジンの魔の手から何とか逃げきったが、ワームに追い詰められていた。

彩夏「誰か・・・助けて・・・。」

その時渚がマシンライダーに跨がりオーロラの壁を突き破り現れた。

渚「大丈夫か？女？」

彩夏「あ、カメラの人。」 渚は彩夏の無事を確認すると、デザインライダーを取り出した。

彩夏「それは・・・。」 渚「女あ、下がってる。」 渚はそう言ううとデザインライダーを腰に巻き、ライドブッカーからカードを一枚取り出し前に突き出し、

渚「変身っ！！」

と叫びデザインライダーにカードを装填すると、電子音「カメランライド・デザインライド！」

すると、十体の虚像が重なりライドプレートが顔面に突き刺さり黒かった体の一部がディープイエローに変わり目が青色にかわり、仮面ライダーデザインライドに姿を変えた。

彩夏「カメラの人が？」

するとワームはクロックアップで逃走した。

デザインライド「無駄無駄あゝ。」

デザインライドはそう言うワームを追いかけて、ライドブッカーからカードを一枚取り出しベルトに装填すると、

電子音「ファイナルカメラライド・カ・カ・カ・カ・カブト！」

そしてデザインライドはデザインライド・カブト・ハイパーフォームに変身し、カードを一枚装填した。

電子音「アタックライド・ハイパークロックアップ！」

するとDカブトHFの装甲が開きクロックアップを越える速さで

動き、カードを一枚装填した。

電子音「アタックライド・ハイパースラッシュ！」

DカブトHFはライドブッカー・ソードモードでハイパースラッシュを発動しワームに攻撃を加えた。

DカブトHF「はあああ！！」

ワームは爆発し跡形もなく消えた。DカブトHFは変身を解除しライドに戻りマシンデイルライダーに跨がり彩夏の前に現れた。

彩夏「デイルライド……」

デイルライド「お前、何でその名を？」

彩夏「どこに行くの!?」デイルライド「とりあえずお前を家まで送る。乗れ。」デイルライドは彩夏を乗せマシンデイルライダーを走らせた。道には怪物の犠牲になった人達の死体が沢山あった。デイルライドはバイクを止め、

デイルライド「ひでえ……」

そう言うつとデイルライドは再びバイクを走らせた。デイルライドが通りすぎた後、死体の一つが灰になり消滅した。

デイルライドがバイクを走らせていると触手が現れ彩夏をバイクから引きずり落とした。そこにはオルフェノクがいて彩夏を襲い始めた。デイルライドはバイクを止め、

デイルライド「女！」

デイルライドはライドブッカーからカードを一枚取り出しベルトに装填すると、電子音「ファイナルカメラライド・ファ・ファ・ファ・ファイズ！」

そしてデイルライドはデイルライド・ファイズ・ブラスターフォームに変身した。さらにもう一枚カードを装填した。

電子音「アタックライド・オートバジン！」

すると、マシンデイルライダーがオートバジン・バトルモードに変わり彩夏を救出しDファイズBFが近づいてきて、

DファイズBF「離れてろ！女！」

そしてDファイズBFはカードを一枚装填した。

電子音「アタックライド・ファイズブラスター！」

するとDファイズBFの手にファイズブラスターが現れた。DファイズBFはそれをブレイカーモードに変形させオルフェノクに戦いを挑んだ。

DファイズBF「はあ！たあ！でああ！ああ！」　オルフェノクを倒すと次は魔化猛が現れた。そしてDファイズBFはカードを一枚装填した。

電子音「ファイナルカメラライド・ヒ・ヒ・ヒ・ヒビキ！」

するとDファイズBFの体が炎に包まれ、その炎を払うとDファイズBFはデイルイド・装甲響鬼に変わった。そしてD装甲響鬼は背中についている音撃棒・烈火を手に持ち魔化猛を蹴散らした。そしてD装甲響鬼はバツクルを開き変身を解除した。

渚と彩夏が家に向かってしていると渚はポケットから九枚のカードを取り出した。渚「何だ？これ……。」「　渚が見知らぬカードに困惑していた。そして、

彩夏「どおしたの？」

彩夏が渚に近づくと二人の頭上に魔化猛が現れ、

渚「危ねえ！」

と、言って彩夏を庇いビルを見ると魔化猛やミラーモンスターが戦っていた。渚「仲間割れ？」

すると、ビルが爆発し多くの人々が巻き込まれ、親子が巻き込まれそうになりそれを助けに行く彩夏、それを追う渚。

彩夏「危ない！」

渚「お、おいつ！」

すると、渚と彩夏以外の全ての動きが止まった。そして火の中から先程現れた謎の青年・瀬戸　亘が現れた。

亘「まだ少しは時間があります。世界を救えるのはあなたしかいません。」

渚「俺が？どおゆうことだ？」

すると亘は指を鳴らした。そして渚と亘は宇宙空間のような場所に移動した。渚「んで？俺は何をすればいいんだ？」

亘「あなたには新たななる九つの世界を旅してもらいます。」

渚「新たななる九つの世界？・・・つくか何で俺なんだ？」

亘「あなたはすべての仮面ライダーを破壊する者です。創造は破壊からしか生まれませんからね。」

すると突然渚と亘がいた空間が光出し渚は元の場所に戻っていた。そして彩夏に事態を説明し、出発の準備をしていた。

彩夏「つまりあなたが九つの世界を旅すれば世界が救われるってこと？」

渚「おそらくね。じゃ俺そろそろ行くわ。達者でな。」

そう言つてバイクに跨がりオーロラの壁を出現させようとするがオーロラの壁が現れない。

渚「え？故障？マジかよ・・・。」

落ち込む渚に彩夏は、

彩夏「とりあえず家に入って？」

渚「かたじけない・・・。」

彩夏「ただいま、おじいちゃん。」

信次郎「おかえり、彩夏。おや？お友達かい？」

彩夏「うん。おじいちゃんこの人しばらく泊めていい？」

信次郎「いいよ。」

渚「は？そんなあつさり。」

こうして渚は岬家にいそろうろつすることに。

一方外では一人の青年がバイクで現れた。

バイクの青年「なんだこりや・・・。」

すると亘が現れバイクの青年にこう告げた。

亘「早くデイルライドと合流してください。」

バイクの青年「は？」

亘はそれを言うつと姿を消した。

バイクの青年「なんだっただ？」

そしてバイクの青年はバイクを走らせ前方に電王のマークが現れそれをくぐり抜けると幽霊列車に変わり次の世界に旅立った。

その頃岬写真館では、渚と彩夏がどうやって他の世界に行くか頭をかかえてあると信次郎が背景ロールの鎖をおろしながら、

信次郎「人はさ、みんな旅人だよ。」

すると鎖が引っ掛かり思いつき引くと絵が現れた。何かを感じとった渚は外に出ると渚は何故か警官の服になっていた。

渚「何だこれ？」

その頃廃工場で警察がグロンギが戦っていた。そこへ一人の青年がバイクに乗って現れた。そしてグロンギに向かって走り出しベルトを出現させ変身ポーズをとり飛び上がると同時に、青年「変身！」

すると彼の体がクウガに似た仮面ライダーへと変わりグロンギにたちむかう。そして渚はこう呟く、
渚「“ソウガ”の、世界か……。」

次回、仮面ライダーディライド

第2話 ソウガの世界

第1話 ライダー大戦、再び（後書き）

次回からオリジナルライダーが登場します。

第2話 ソウガの世界（前書き）

第2話です。どうぞ！

第2話 ソウガの世界

これまでの仮面ライダーデイライドは……。詳しくは第1話をお読みください。

渚「ソウガの……世界か……。」

ソウガ「はああ！」

ソウガはグロンギに戦いを挑んだ。ソウガが戦っている最中に廃工場の中を見ると人が沢山死んでいた。ソウガ「お前らぁ……。」「ソウガはさらにグロンギに攻撃を仕掛けた。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。新たなる九つの世界を巡りその瞳は何を見る？

その頃坪写真館では、彩夏は窓を開けこう言った。彩夏「ここって本当に別の世界なのかなあ？」

信次郎がテレビをつけると、

信次郎「彩夏、テレビついたよ。」そこにはソウガとグロンギが戦っている様子が映っていた。

渚「おい女見ろよ。」

渚は彩夏に新聞を見せると、彩夏はこう言った。

彩夏「未確認生命？学者はグロンギと呼んでいる。」渚「どおやらこの世界では警察とグロンギが日夜激しい戦いを繰り返しているみたいだな。」

すると彩夏は何かを思い出したように渚に言った。彩夏「そおいえばまだあなたの名前聞いてなかった。」

渚「あ、そおいやあそおだな。俺は渚、近藤 渚だ。宜しく。」

彩夏「あたしは坪 彩夏。宜しく、近藤さん。」

渚「渚でいい。」

彩夏「渚君、その格好何？」 彩夏は渚の警官の格好に疑問を覚えた。

渚「他の世界に着くといつもこおなる。」

渚は普通に説明した。そして彩夏はさらに問う。

彩夏「何で警官はわけ？」 渚「この世界では警官とグロンギが戦っている。とゆうことはグロンギと戦えってこった！」

彩夏「ほ、本当に？」

勢いよく家を出た渚は自転車でソウガとグロンギが戦っている現場へ走っていった。追いかける彩夏だが別の世界なので、

彩夏「ここどこ!？」

困惑していた。

廃工場では未だソウガとグロンギが激しい戦いを繰り広げていた。そこに自転車に乗った渚が現れた。

渚「仮面ライダーソウガ。クウガと同じリントの戦士。状況に応じてフォームチェンジし、周囲の物を武器に変え戦うか。クウガとそっくりだな。」 そう呟く渚に隣に居た女性刑事は、

女性刑事「あんた何やってんの!? 避難しろって言ったでしょ!？」

そう怒鳴る女性刑事に渚は、

渚「はいはい。」

と、軽くあしらうとその女性刑事の写真を撮った。その頃ソウガは、

ソウガ「豪変身!！」

するとソウガは赤色のアビシオンフォームから青色のメリクリウスフォームにフォームチェンジしそこら辺に落ちていた棒を拾い『メリクリウスロッド』へ変えグロンギに攻撃を仕掛けた。

ソウガMF「はあ! たあ!」

そしてソウガMFは必殺技の『スプラッシュメリクリウス』でグロンギを粉碎した。

グロンギ「ぐわあああ!！」 するともう一体のグロンギが空へ逃

げていった。それを見た女性刑事は、女性刑事「ユウセイ！使いなさい！」

と言つてソウガに拳銃を投げた。それを見たソウガは、ソウガ「ありがとうございます！アイさん！」

それを聞いた渚は、

渚「アイさん？」

そしてソウガは再び、

ソウガ「豪変身！！！」

と叫び、青色のメリクリウスフォームから緑色のネビリムフォームにフォームチェンジした。そして渡された拳銃を『ネビリムマグナム』へと変えグロンギを追いかけた。そして立ち去ろうとするアイと呼ばれた女性刑事は渚に、

アイ「言いふらさいよね。」

そう言つてソウガを追いかけた。

その頃ソウガはグロンギを追つてビルの屋上に居た。そしてネビリムフォームにフォームチェンジしたことによって強化された聴覚を使ってグロンギの居場所を特定し『ネビリムマグナム』ライフルモードに変形させ必殺技の『プラスチックネビリム』でグロンギを撃ち抜き粉碎した。そしてソウガが変身を解いたと同時にソウガを追つてビルの屋上にアイが現れた。変身を解いたユウセイはアイに拳銃を返しながら、

ユウセイ「いつもありがとうございます。被害者は何人位ですか？」

アイ「ざっと数十人位かな・・・。」

ユウセイ「ちくしょう・・・。」

ユウセイは強く拳を握りしめ怒りを抑えた。

警視庁未確認生命体対策本部では今回の一連のグロンギ事件について話し合っていた。

アイ「今回の事件の被害者は男性ですがただ一人だけ女性警官でし

た。」

と言うアイに一人の男性刑事が言った。

男性刑事「なあ佐藤、グロンギが出現すれば警察が出動する。被害者が警官なのは当然だ。」

すると男性刑事が喋っていると一人の警官が部屋に入ってきた。

そして男性刑事の言葉にアイは言葉を強くして言った。

アイ「しかし！女性警官を殺害したグロンギと他の被害者を殺害したグロンギは違うグロンギです！これには何か規則性があるはずです！」

アイの言葉に男性刑事が呟いた。

男性刑事「規則性かあ……。」

すると先程部屋に入ってきた警官が突然言葉を発した。

警官「規則を守って殺す。こおゆうところは雄介の世界と一緒に……。」

その警官は渚だった。するとアイは渚に怒鳴りつけた。

アイ「ここは対策班の本部よ！？あなたどこの所属！？」

するとアナウンスが鳴り響いた。

アナウンス「未確認生命体出現、未確認生命体出現、未確認生命体対策班は直ちに出動せよ。」

刑事達一斉に出動した。

その頃事件現場では一人の女性警官と他の被害者が大勢死んでいた。そこにパトカーに乗ったアイとレイドチェイサーに跨がったユウセイが到着した。沢山の死体と助かった女の子が泣きじゃくる姿を見てユウセイは、
ユウセイ「くそっ！」

と、言って拳を強く握りしめた。その頃トンネル内ではグロンギの目の前にまばゆい光と共にマシンディライダーに跨がったディライドが現れた。

グロンギ「ソウガ？」

と聞くグロンギにディライドは、

デイライド「ソウガ？違うね。」

そう言うデイライドにグロンギはグロンギ語でなんやかんや言うがデイライドは、

デイライド「ギャーギャーうるせえなあ。ちょっと話を聞きに来ただけだ。」

そう言うデイライドの言葉を無視してデイライドに襲いかかった。

その頃トンネルの外ではユウセイとアイが今回の事件のことについて話していた。するとトンネルからグロンギが何者かによってトンネル内から吹っ飛んできた。

グロンギ「ぐわあああ！！」

そしてトンネルの中からデイライドがゆっくり歩いてきた。またデイライドはグロンギに猛攻を加える。そしてバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出してベルトに装填した。

電子音「カメンライド・サガ！」

するとデイライドはデイライド・サガに変身した。そしてライドブツカーをソードモードに変形させ鞭のようにして相手に攻撃を加え、ライドブツカーからも一枚カード取り出しベルトに装填した。電子音「ファイナルアタックライド・サ・サ・サ・サガ！」 Dサガはスネーキングブレイクを発動しグロンギを粉碎した。そしてDサガはデイライドに戻り帰ろうとした。するとユウセイがデイライドに声をかけた。

ユウセイ「待ってくれ！あんた何者だ！？」

だがデイライドは背中を向けたまま手を振り帰っていった。

その頃坪写真館では彩夏があることを考えてた。

彩夏「渚君自分の使命忘れてるんじゃないや・・・。」　すると写真館の扉が開いた。彩夏「渚君？」

だが扉を開いたのはユウセイとアイだった。

ユウセイ「あれ？ここって喫茶店じゃなかったけ？」　アイ「どお見

でも違うでしょ。」

と言って写真館を後にしようとする。写真館の奥から信次郎が顔を出し、

信次郎「コーヒーには自信ありますよ。どうぞ。」

彩夏「じゃあどうぞ。」

ユウセイとアイはデイルイドについて話していた。アイ「あの黄色の奴何者だと思う?」

ユウセイ「分からない。でも悪い奴じゃなさそだった。」

アイ「確かにね。今度話を聞いてみたい。」

ユウセイ「うん。」

彩夏がコーヒーを持ってきた瞬間シャッターをきる音が聞こえた。そこにはユウセイとアイの写真を撮る渚がいた。

彩夏「渚君!」

渚「どおも、佐藤刑事。この方は?」

アイ「西代ユウセイ。ちよっと調査に協力してもらってるの。」

ユウセイは渚に軽くお辞儀をすると名刺を取り出した。

ユウセイ「西代ユウセイです。宜しく。」

名刺を見ると『夢を追う男、西代ユウセイ』とかかれていた。渚は名刺を受けとると、

渚「あんた俺の知ってる人に似てるな。」

ユウセイ「え?」

すると渚は財布から名刺を一枚取り出しユウセイに見せた。

ユウセイ「『夢を追う男、五代雄介』?」

渚「ああ。俺が一番最初に友達になった男だ。」

ユウセイ「そおなんだ。」そして渚はアイの隣に行き、

渚「佐藤刑事、グロンギの事件についてちよっと気付いたことがあるんですけど。」

アイ「本当に!?!」

するとユウセイは、

ユウセイ「じゃあ俺は先に外で待ってます。」ユウセイは写真館

を出て自分の拳を見つめていた。そこに彩夏がやってきた。ユウセイ「何?・・・あつ!コーヒー代か!」

彩夏「違います!・・・あなた、もしかしてソウガ?」

ユウセイ「え?どおして?」

彩夏「自分の拳をずっと見つめていたから・・・。」するとユウセイは自分の胸の内を彩夏に話し始めた。

ユウセイ「俺さみんなの笑顔を守りたくて戦ってるんだ。でも未だに相手を殴る感覚に慣れない。」

彩夏「普通だよ。・・・でもすごいよ。」

ユウセイ「え?」

彩夏「相手を殴るのが嫌いなのにずっと戦ってきたなんてすごいなあって。」

ユウセイ「ありがとう。でもあの渚って人の方がすごいと思うよ。」

彩夏「どおして?」ユウセイ「何かとてつもなくでかい悲しみを背負ってる。でも何にもなかったかのようにふるまっている。まるで自分ではわかっていないように。」

彩夏「え?でもそんな風には見えないけど・・・。」ユウセイ「おそらく心の奥に閉じ込めているんだな・・・。」

その頃警視庁未確認生命体対策本部では渚が今回の一連の事件について話していた。

渚「今回襲われた女性警官に共通項があるなあって思って。」

男性刑事「共通項お?」

渚「誕生日だよ。」

男性刑事「誕生日?」

渚「ああ。」

渚は立ち上がりホワイトボードに殺された女性警官の誕生日を書き始めた。

渚「この子は3日、17日、25日、6日、み・な・ご・ろ・し。」

男性刑事「そおか!次狙われるの誕生日が4日で終わる者が狙わ

れる。」

するともう一人の男性刑事が、
男性刑事2「全女性警官の誕生日をチェックさせる。4日、14日、
24日の者は外に出すな。」

アイは渚の警官にしてわ鋭い勘に不思議に感じこう聞いた。

アイ「あなた何者？」

アイの質問に渚はニコッと笑っただけだった。

次の日渚は自分の撮った写真を現像していた。

渚「これも駄目、これもこれも。はあ。」

ため息をつきながら部屋を出ると彩夏が、

彩夏「どおしたの？」

渚「俺の撮った写真だ。」 渚は彩夏に写真を見せた。だがその写
真は全て土同様ピンぼけしている酷い写真だった。

彩夏「すごいピンぼけ……。」

渚「どんなに写真を撮っても全然ちゃんとした写真が撮れない。こ
こも俺の世界じゃない。」

渚の言葉に彩夏は、

彩夏「あなたの世界？」

渚「俺は5年前から世界を旅してるんだ。でも俺は旅を始める前の
記憶が一切ないんだ。だから自分の世界を探す旅してるんだ。」

彩夏「そおなんだ……。」

渚「そんな暗い顔すんなよ、呷。今が楽しけりやそれでいい。」

そう言うと渚は電話をとり、

渚「とりあえず遊んでみるか。グロンギと。」

渚はある人物に電話をかけた。

その頃警視庁未確認生命体対策本部で眠っていたアイの携帯のバ
イブが作動した。アイが電話にでると電話をかけてきたのは、渚だ
った。

アイ「近藤巡查？・・・違う可能性？」

アイは渚にある場所に呼び出された。アイはユウセイと共に山奥へと行った。そこには私服に着替えた渚がいた。アイは渚に違う可能性について聞いた。

アイ「近藤巡查、違う可能性って？」

渚はアイに地図を見せた。

渚「見なよ。グロンギの事件が起こった場所。どこからも同じ距離にこの山が見える。」

するとユウセイが、

ユウセイ「あの山に何かあるのか？」

渚「あの山に究極の闇ってゆうのが眠っているらしい。」

ユウセイ「どおしてそんなことを？」

渚「聞いたんだ。昨日倒したグロンギに。」

ユウセイ「聞いたって・・・。」

すると渚は最初から気付いていたかのように、グロンギ語で、

渚「出てこいよ！来てるんだろ？」

すると2体のグロンギが現れた。渚は再びグロンギ語で、

渚「今回は三体がかりか！」

アイは渚がグロンギ語を話しているのを聞いて、

アイ「言語学者でも解読できなかったのに・・・。」と、驚きを隠せなかった。するとグロンギ1がグロンギ語で、

グロンギ1「そのリントを殺せばゲルは成功する！」

渚「ここで五人目を殺せば究極の闇ってやつが復活するらしいぜ。」

グロンギ三体が三人に近いてきた。ユウセイはアイの前に立つが渚はユウセイを突飛ばした。

ユウセイ「どわっ！」

渚はアイの前に立つと急に振り返りアイの鼻を殴った。

アイ「うっ！」

ユウセイ「渚！何してるんだ！」

渚「よく見る。」

アイの鼻から血が流れてきた。するとグロンギ2がグロンギ語で、グロンギ2「リントの血が流れた！」

グロンギ1「ゲゲルは失敗だっ！」

ユウセイ「渚、どおゆうことだ!？」

渚「こいつら今までの四人を一滴の血を流さずに殺していたんだ。」

アイはこれまで殺された女性警官のことを思い出した。

渚「究極の闇を復活させる為にいつもと違うゲーム、ゲゲルをしていたのさ。だが失敗だ!なんせ血が流れたんだからな。」

ユウセイ「渚、お前一体何がしたかったんだ?」

渚「余計な犠牲を出さずにゲゲルを終わらせたんだ。」

渚はそう言いながらベルトを腰に巻きカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

渚「変身!」

電子音「カメンライド・デイルライド!」

渚はデイルライドに変身するとグロンギ二体に立ち向かっていった。するともう一体のグロンギがアイに近づくがユウセイが立ちはだかり、変身ポーズをとると、

ユウセイ「変身!」

ユウセイの体がソウガ・アビシオンフォームに変身するとグロンギに立ち向かっていった。

渚はグロンギ二体に猛攻を加えていく。そしてライドブッカー・ソードモードでグロンギを一体撃破する。ソウガAFも『アビシオンキック』でグロンギを粉碎するとデイルライドの方へと歩いていった。するとデイルライドは突然、

デイルライド「西代お前、迷ってるんだってな。」

ソウガAF「えっ?」

デイルライド「佐藤から聞いたぜ。0号を倒す為には自分も究極の闇にならないといけない。だが究極の闇になった時自我を保てるかっ

てことに。」

ソウガAFは言葉を失う。そしてデイライドは、
デイライド「かかってこい。俺がお前を試してやる。」

ソウガAF「このやるお、なめるなっ！」

ソウガAFはデイライドに攻撃をしかける。デイライドとソウガAFは神社の前で戦っていた。そこに先程逃げた、グロンギがデイライドに攻撃をしかけた。デイライド「どわっ！このやるお！」

デイライドは右の拳に力をためると拳がディープライエローに輝き、ソウガAFも右足に炎の力を宿すと、デイライドは『デイメンションインパクト』、ソウガAF『アビシオンキック』をお見舞いするとグロンギは爆発した。

デイライド「さてと、邪魔者はいなくなっただぜ。」

その頃彩夏はふと外にでると、渚達がいる山にオーロラの壁が現れたのを見た。

彩夏「まさかこの世界にも滅びが？」

彩夏は山に向かって走り出した。そして彩夏がたどり着くとデイライドとソウガAFが対峙していた。彩夏「何してるの渚君！？」

彩夏が止めに行こうとするがアイが止める。

アイ「待って！」

彩夏「アイさん！？」

アイ「今近藤巡査はユウセイを試してるの。」

彩夏「え？」

アイ「だから見守ってあげて。」

彩夏はアイの言葉を聞き見守ることに。

ソウガAFは赤色の『アビシオンフォーム』から紫色の『グラジヤラボラスフォーム』へとフォームチェンジして、そこから辺に落ちていた棒を拾うとその棒は大剣『グラジヤラボラスソード』へと変え、デイライドもライドブッカーをソードモードに変形させ、応戦

した。激しい切り合いになりソウガGFはアイに、
ソウガGF「アイさん！拳銃貸してください！」

アイはソウガGFに拳銃を投げるとソウガGFは拳銃を受けとると、紫色のグラジャラボラスフォームから緑色のネビリムフォームにフォームチェンジした。そして拳銃を『ネビリムマグナム』に変えデイライドに攻撃を加えるがデイライドも負けじとライドブツカ―をガンモードに変え再び応戦する。そしてデイライドは接近戦にもちこみソウガGFに言葉をかけた。

デイライド「俺にはお前が何故究極の闇になるのを迷ってるのかさっぱりわかんねえ！」

ソウガGF「何！？」

デイライド「お前はみんなの笑顔を守る為に戦ってるんじゃないのか！？」ソウガGF「そうだ！」

デイライド「だったら！その為に闇に落ちたとしても本望じゃないのか！！」

ソウガGF「でも！今度は俺がみんなを襲うかもしれない！」

デイライド「大丈夫だ！お前が迷いを取り払えばお前は絶対自我を失わない！みんなの笑顔を守る為に打ち勝てる！！」

ソウガGF「っ！！」

デイライドはソウガGFに前蹴りを食らして間合いを取った。その頃デイライドとソウガGFが戦っている神社の階段で眼鏡をかけた帽子をかぶった男がいた。そして謎の男は呟いた。

謎の男「デイライド、お前は这个世界にあつてはならない。」

するとオーロラの壁が現れた。そしてオーロラの壁から仮面ライダーキックホッパーとパンチホッパーが現れた。

パンチホッパー「兄貴、ここにもいたよ、ライダーが。」

キックホッパー「ああ。」そしてキックホッパーはソウガGF、パンチホッパーはデイライドに襲いかかっていった……。

次回、仮面ライダーデイライド。

第3話 蒼我

全てを破壊し、全てを繋げ！

第2話 ソウガの世界（後書き）

次は第3話のライダー紹介などです。

第3話 蒼我（前書き）

第3話ですー！どじどぞー！

第3話 蒼我

これまでの仮面ライダーデイライドは！
詳しくは第2話をお読みください。

現れたキックホッパーとパンチホッパーはデイライドとソウガNFにいきなり攻撃をしかけた。二人は何とか応戦するがキックホッパーとパンチホッパーは中々手強い。二人は戦っている内に対戦相手が変わっていた。ソウガNFはデイライドに、
ソウガNF「渚、こいつら何なんだ!？」

デイライド「知るかよっ!こつちが聞きたいわっ!」 ソウガNFは青色のメリクリウスフォームにフォームチェンジしパンチホッパーに応戦する。するとキックホッパーは勘違いして、キックホッパー「お前え、今相棒を笑ったな?笑ったなあ!?!」
キックホッパーはデイライドを無視してソウガMFに攻撃をしかけた。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。新たなる九つの世界を巡りその瞳は何を見る？

デイライド「お、おい・・・。」

その状況を見て鳴滝は、鳴滝「ちっ、誰を狙ってる・・・。」

そしてデイライドはライドブッカー・ガンモードでホッパーズに攻撃を加えた。そしてデイライドは二人に聞いた。

デイライド「あんたら、どこから来たんだ？」

キックホッパー「地獄だ・・・。」

パンチホッパー「お前も、来い!」

デイライドは再びライドブッカーで攻撃を加えようとするがホッ

パイズの前にオーロラの壁が現れた。

キックホッパー「また次の地獄が待っている……。」

そう言うとホッパーズはオーロラの壁へと消えていった。ディライドとソウガMFは、

ソウガMF「何だったんだ？あいつら。」

ディライド「さあな。ただ一つ言えることがある。」ソウガMF「なんだ？」

ディライド「あの二人、相当病んでる……。」

ソウガMF「はは……。確かに地獄とか言ってたしな……。」

二人は冗談を言いながら変身を解こうとすると巨大な衝撃波が飛んできた。

ディライド・ソウガMF「うわああああ！！！！」

彩夏・アイ「きゃあああ！！」

そこには女性警官以外を殺した張本人、未確認生命体第48号だった。ソウガMFは、

ソウガMF「貴様あゝ。」ディライド「西代！早まるなっ！！」

ソウガMFはディライドの制止を聞かずアビシオンフォームにフォームチェンジし、48号に猛攻を加える。が、48号は難なく跳ね返す。

ソウガAF「このやるお！！！！」

ソウガAFは右足に炎の力を宿すと、『アビシオンキック』を発売した。

ソウガAF「おりゃああ！！」

ディライド「おいっ！！西代っ！！」

だが48号は『アビシオンキック』を難なく受け止めソウガAFを地面に叩きつけた。

ソウガAF「何！？ぐわああ！！」

そしてソウガAFの首を掴み、『レークル』に強烈なパンチをお見舞いした。ソウガAF「ぐああ……。」

『レークル』にひびがはいりソウガAFを投げ捨てた。

デイルイド「西代っ！！てめえ！！佐藤！岬！西代を頼む！！」
彩夏・アイ「うん！」

デイルイドは48号に猛攻を加えた。
48号「ぐっ・・・！中々やるな・・・。面白い、また会おう。」

48号は去っていった。デイルイドは変身を解くとユウセイの方へ走っていった。

アイ「ユウセイ！ユウセイ！しっかりして！」

渚「岬！救急車だっ！」

彩夏「うん！」

ユウセイは病院に搬送された。その頃山奥ではゲゲルを失敗させたはずなのに究極の闇が目覚めていた。

病院では渚と彩夏とアイが待ち合い室で椅子に座っていた。三人共放心状態だった。するとテレビから渚達がいた山から黒い霧が現れ、その中からグロンギが大量に現れたとゆうニュースが耳に届いた。彩夏とアイには聞こえていなかった。すると渚は立ち上がった。
彩夏「どおしたの？渚君。」

渚「ちよつとユウセイにお見舞いでも買いに行ってくるわ。」

彩夏「こんな時に・・・。」

渚「何かじつとしてらんねえんだよ・・・。」

彩夏「だよ。お願い。」渚「ああ・・・。」

渚は病院を出ると顔つきが変わった。そして手袋をはめながら、渚「ゲゲルは失敗させたのに何故だ？」

渚は色んなことを考えながら究極の闇がいる山へバイクを走らせた。そしてついに、究極の闇が復活した。警察では未確認生命体200号と呼ばれている。200号が雄叫びを上げた瞬間顔面にパンチが飛んできた。デイルイドだった。200号はデイルイドにグロンギ語で、

200号「俺は何故目覚めた!？」

デイルイド「ワッツ?」

すると200号が普通の言葉で、

200号「俺は二度と目覚めぬはずだった!」

デイルイド「そおかよっ!!」

デイルイドは200号にパンチの連打をあびせるが、200号はデイルイドの顔面にカウンターパンチをお見舞いすると、デイルイドは吹っ飛んで岩にぶつかった。

デイルイド「ぐわっ!」

200号「もおすぐリントはグロンギによって全て殺される。お前はそこでその様子を見ているがいい!」 そう言つと200号はどこかに消えていった。

その頃病院では彩夏とアイはテレビのニュースで大量のグロンギが人を襲っているという情報を聞いていた。

彩夏「そんな・・・。」

そこへ渚が病院に入ってきた。その顔からは血が出ていた。彩夏は渚にかけよると、

彩夏「渚君!どおしたの?その傷!」

渚「どけっ。佐藤、西代の容態は?」

アイ「まだ目覚めない。でもどおゆうこと?ゲゲルは失敗させたんじゃないの!？」

渚「元々奴は目覚めるはずのない存在だった。おそらく岬の世界の様に滅びの現象がおきはじめてる。」

アイ「彩夏ちゃんの世界?」

渚「俺達は別の世界から来た。」

彩夏「世界を救う為に。」 アイは驚きを隠せなかった。すると看護婦が、

看護婦「西代さんの容態がっ!」

三人はユウセイの病室へ向かった。

アイ「ユウセイ!ユウセイ!」

渚「まだ起きないようだな。あの、看護婦さん?」

看護婦「はい?」

渚「外はどおなってますかね。」

看護婦「・・・グロンギでいっぱいです。」

渚「そおですか。ありがとうございます。」

渚は癖の唇の前で親指と人差し指を擦りながら考え事をすると、決心したかのように病室を出ようとすると、

彩夏「渚君！どこに行くの！？まさか一人で行くつもり！？駄目だよ、勝てないよっ！」

渚「呷、お前は佐藤とユウセイが起きるのを待て。そしてユウセイが起きたら伝える。早く来いって。」

彩夏「・・・わかった。」

渚は病室から出ていった。

その頃外では大量のグロンギが暴れていた。

200号「リントは我々が滅ぼし我々が世界を支配する！」

するとグロンギの大群をバイクではねのける青年が現れた。

200号「貴様は先程の奴だな？何の用だ！」

渚はバイクを降りると、渚「決まってるんだろ。てめえら全員叩きのめしに来たんだよ。変身っ！！！」

渚はいつの間にか装着していたデイルイドライバーにカードを装填した。

電子音「カメンライド・デイルイド！」

渚はデイルイドに変身すると200号の所へジャンプして行った。そして攻撃を加えるがいと簡単に跳ね返し、屋上から落とされた。

デイルイド「いつてえ〜。ちっ、まずこいつらからだな。」

するとソウガを倒した、未確認生命体第48号が現れた。

48号「この間の奴か。少しは楽しめそおだな。」

デイルイド「てめえ・・・。西代の弔い合戦だっ！」　ユウセイは死んでません（笑）。

デイルイドは周りのグロンギに攻撃を加えて行く。デイルイド「どけ！邪魔だっ！ええいめんどくさい！」

デイルイドはライドブツカーからカードを取り出しベルトに装填した。

電子音「ファイナルカメンライド・ク・ク・ク・ク・クウガ!」

デイルイドはデイルイド・クウガ・アルティメットフォームに変身した。

48号「!?ふっ、面白い。」

DクウガUFは48号に向かって走っていった。

その頃病院では、彩夏とアイがユウセイが目覚めるのを待っていた。すると、ユウセイが目をゆっくりと開け、

ユウセイ「ん・・・、ここは・・・。」

アイ「ユウセイ!」

彩夏「ユウセイ君!」

ユウセイ「アイさん、彩夏ちゃん・・・。」

ユウセイはゆっくり体を起こした。

アイ「具合は?」

ユウセイ「絶対調です。・・・、あの渚は?」

彩夏「あ!渚君から伝言だよ。」

ユウセイ「何?」

彩夏「早く来いって・・・でもその体じゃ・・・。」

ユウセイは立ち上がり、ユウセイ「大丈夫、もお痛くも何ともない。」

アイ「駄目よ!まだベルトが・・・。次やられたら死ぬかもしれないのよ!」ユウセイ「大丈夫。俺は死なない。0号を倒すまでは絶対に。」

ユウセイの決意に満ちた目を見てアイは、

アイ「わかった。ただし、絶対帰ってくるよ。これは命令よ。」

ユウセイ「了解!!」

ユウセイは左手でサムズアップをすると病室を出ていった。

その頃DクウガUFはグロンギ達を倒し48号と互角の闘いをしていた。

DクウガUF「はああ！」48号「ぐっ！やるではないか！だがそお簡単にはやられんぞ。はああああ！」

DクウガUF「どわっ！」48号「これで終わりだ。」

48号は右足に力をためるとライダーキックを発動した。

48号「はああああ！」DクウガUF「っ！」

DクウガUFは48号のライダーキックを受け止め、

48号「何っ!？」

DクウガUF「ぐう！ふんっ！残念——！」

DクウガUFは48号を投げ飛ばし、ライドブッカーからカードを一枚取り出しベルトに装填した。

電子音「ファイナルアタックライド・ク・ク・ク・クウガ！」

DクウガUFは『アルティメットキック』を発動した。

DクウガUF「はああああ——！」

48号「何！ぐわああ——！」

『アルティメットキック』は48号に直撃し、48号は爆発した。

DクウガUF「ふう〜。後は200号だな。」

すると200号が雄叫びを上げると、激しい衝撃波と共に再び大量のグロンギが現れた。

DクウガUF「うわああああ——！」

DクウガUFはデイルイドに戻ってしまった。

デイルイド「くっ！」

デイルイドはグロンギの大群に突っ込んだ。

デイルイド「はああ！やああ！たああ！」

デイルイドはライドブッカー・ソードモードでグロンギを倒していくがグロンギの攻撃で壁にたたきつけられ変身が解けてしまった。そしてグロンギの猛攻を受け絶体絶命の渚だったがそこへレイドチエイサーに跨がったソウガが現れた。そしてソウガはレイドチエイサーでグロンギをはねるで、渚を救うとソウガはレイドチエイサー

からおり、グロンギに攻撃をしかけながらこう叫んだ。

ソウガ「俺は戦う！」

渚は確かめるように聞いた。

渚「何の為に!？」

ソウガはグロンギを倒しながら、

ソウガ「こんな奴等の為に!これ以上皆の笑顔を奪われたくない!
!皆に笑顔でいてほしいから!その為なら究極の闇にだってなっ
てみせる!!!だから俺と一緒に戦ってくれ!渚あ!!!」

渚「当たり前だっ!!!」

すると200号が敵味方関係なく衝撃波をあびせた。

渚・ソウガ「うわああああ!!!」

ソウガは一瞬白色のノーマルフォームになり、そのままユウセイの姿に戻った。

200号「無駄だ!リントは全て我々が滅ぼす!」

すると渚は立ち上がり、渚「違うな!滅ぶのは貴様らのほおだっ
!!!」

200号「何？」

渚はユウセイを指差しながら、

渚「この男がいる限り、この男が闘い続ける限り、それは不可能だ
!」

200号「貴様はソウガでもリントでもないな?一体何者だ!」

渚はデイルライドライバーを取り出すと腰に巻き、ライドブッカーからカードを一枚取り出しこう言った。渚「通りすがりの仮面ライダーだ……。頭にたたき込んでっ!変身!」電子音「カメ
ンライド・デイルライド!」

渚はデイルライドに変身した瞬間ライドブッカーからカードが三枚飛び出た。飛び出したそのカードはソウガのKR・FFR・FARでデイルライドの手元に収まるとカード三枚が復活した。デイルイドはカード三枚をライドブッカーになおすと、
デイルイド「ユウセイ……。行くぞ……。」

ユウセイ「ああ……。」「ユウセイは腹部に手を持っていくと、『レークル』が現れた。そして一定の変身ポーズをとると、ユウセイ「変身！」

素早くベルトのサイドスイッチを押すとユウセイはソウガアビシオンフォームに変身した。デイライドとソウガAFはそれぞれグロングに闘いを挑んだ。そしてデイライドはソウガAFの近くへ行き、ライドブッカーからカードを一枚取り出しベルトに装填した。

電子音「ファイナルフォームライド・ソ・ソ・ソ・ソウガ！」

デイライド「ちよつと痛いぜ。」

ソウガAF「は？」

デイライドはソウガAFの背中を開くと、ソウガは兜虫を模した姿『ソウガレントム』に超絶変形した。ソウガレントム「何だこれ？」

デイライド「これが俺とお前の力だ！」

ソウガレントムはグロングに突撃していった。

ソウガレントム「はああ！」

そしてデイライドはソウガレントムの背中に飛び乗り200号の所まで飛んでいった。そして勢いよく飛び上がりライドブッカー・ソードモードで200号を切り裂き、ソウガレントムは200号を壁に叩きつけ真上から飛び蹴りを食らわし、地面に叩きつけた。

200号「ぐわああ！」

デイライドとソウガレントムからソウガAFに戻った二人は地面に叩きつけられた200号を見つめていた。すると200号は雄叫びをあげた。すると再びグロングが現れ、200号はグロング達を吸収して飛び上がり、ビルの屋上を破壊しデイライド達のいる所に落とした。身構えるデイライドに対してソウガAFは再びソウガレントムへと姿を変え屋上を真つ二つにすると200号を追いかけ、捕らえる。

ソウガレントム「逃がさねえ！」

そしてデイライドはライドブッカーからカードを一枚取り出しベ

ルトに装填した。

電子音「ファイナルアタックライド・ソ・ソ・ソ・ソウガ！」

ソウガレントムは羽を広げ急降下してくる。そこへディライドがガタツクのようなライダーキックで敵を挟み潰す、『ディライドアビス』を発動した。

ディライド・ソウガレントム「はああああー！」

200号「ぐわああー！」

200号は地面に落ちた。そしてディライドとソウガAFは着地して、ディライドは200号に言った。ディライド「・・・あばよ。」

「

200号「さらばだ・・・。」

200号は爆発した。そしてディライドとソウガAFは変身を解除した。

渚「後は0号だけだな。」ユウセイ「ああ。」

渚はカメラを手に持ち、渚「お前なら、やれるさ・・・。」

ユウセイ「ありがとう。」 渚はサムズアップしたユウセイを写真に写した。

二人が病院に戻ると、彩夏とアイが出迎えた。

彩夏・アイ「お帰り！」

渚・ユウセイ「ただいま！」

渚「岬、帰るぞ。」

渚は彩夏を後ろに乗せ写真館にバイクを走らせた。それを見送ったユウセイは、

ユウセイ「さてと・・・。」

写真館では渚が写真を現像していた。渚が部屋に入ると彩夏が、

彩夏「よかったの？ユウセイ君の闘い見なくて。」

渚は机に写真を置き椅子に座ると、

渚「あいつなら大丈夫だろ。それに、見ろよ。」

渚はポケットからクウガのFKRのカードを取り出した。

彩夏はそのカードを手に取り、

彩夏「これがどおしたの?・・・きゃっ!?!」

するとカードが突然光だした。そしてクウガのFKRのカードがケータッチのコンプリートカードと同じ素材のカードに変わりそこにはソウガのマークが大きく描かれていた。

彩夏「どおゆうこと?」

渚「おそらくこの世界での役目を終えたしるしだろ。」

そして信次郎が渚の写真を手に取ると、

信次郎「これは中々良い写真だね。。。がくに入れてやるか。」

その写真にはサムズアップするユウセイの後ろに赤い目をした黒いソウガが写っていた。渚が机にもたれた瞬間、背景ロールが降りてきた。そこには城の様な物が描かれていた。

その頃どこかの雪山でユウセイとアイがいた。

アイ「本当にごめん。」

ユウセイ「は?」

アイ「あなたにこんな寄り道させなくなかった!」

ユウセイ「いいんですよ。俺アイさん達に会えて良かったって思ってます。」

アイ「ありがとう。。。。」

ユウセイ「最後に見ててください。。。俺の。。。変身。」

ユウセイは振り向くと、レールを出現させた。だがいつもと違い銀色のに輝いていた。そして一定の変身ポーズをとり、変身とは言わずサイドスイッチを押した。すると体に銀色のラインが現れ、ソウガの最終形態、四本角のファイナルフォームへと変身した。そしてアイの方を少し見ると0号のいる方へ走っていった。そこには未確認生命体第0号こと究極の闇が立っていた。そして、0号「なれたんだね。究極の闇を持つ者に。」

0号はグロンギへと姿を変えた。ソウガFFと0号は向かい合っ

て走り出した。そして二人は同時に殴りかかった……。

どこかの青空。青年がバイクを走らせていた。青年はバイクを止め、ヘルメットと手袋を外した。その青年はユウセイだった。ユウセイは青空を見上げ呟いた。

ユウセイ「平和だな……。」

そんなユウセイを後ろから一人の青年が見ていた。その青年は彩夏の世界に現れたバイクの青年だった。バイクの青年「渚あ、すぐ追い付くぜ！」

そう言っただけのバイクの青年はバイクを走らせた。そしてその後ろから黒いコウモリが現れて……。

次回、仮面ライダーディライド

第4話 第二楽章 深紅のキバ・ブレイズ

全てを破壊し、全てを繋げ！

第3話 蒼我（後書き）

ソウガ編いかがでしたか？次回からブレイズ編です。果たしてどうなることやら。でも次は一応世界観と登場人物・ライダー紹介です。

第4話 第二楽章 深紅のキバ・ブレイズ（前書き）

ようやく第4話です！なるべく2話完結にしたいのでだいぶなが
ったらしくなってます。すいません！！

第4話 第二楽章 深紅のキバ・ブレイズ

これまでの仮面ライダーデイライドは！
詳しくは第1〜3話をお読み下さい。

渚達はブレイズの世界に到着して、渚と彩夏は取り敢えず街をマシンデイライダーで散策していた。

彩夏「此処はどんな世界なのかな？」

渚「さあな。その内解るだろ。」

と、適当に返す渚。すると何処かから何かが闘う音がした。

彩夏「渚君！あれ！」

渚が博物館の方を見ると、少女と怪物が戦っていた。

渚「おいおい、あんな女の子が戦ってるぜ。」

彩夏「呑気な事言ってる場合！？助けなきゃ！」

渚「はいはい。」

渚はマシンデイライダーを博物館の方へ走らせた。

その頃少女は怪物に立ち向かうが全く歯が立たない。

少女「くっ！」　するとバイクに跨がった渚が現れた。

渚「大丈夫か？少女。」

少女「あなたは？」

渚はデイライドライバーを腰に巻き、ライドブッカーからカードを一枚取り出して前に突き出し、

渚「変身！」

カードをバツクルに装填した。

電子音「カメンライド・デイライド！」

渚はデイライドに変身すると怪物に向かって走り出した。

デイライド「はああああー！」

デイライドは怪物に猛攻を加えた。そしてライドブッカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「アタックライド・ブラスト！」

デイライドはデイライドブラストを発動した。ブラストは全て怪物にヒットした。

怪物「くっ！やるな……。ふんっ！！！」

怪物はデイライドに包帯を伸ばした。包帯はデイライドの首を絞めつけた。

デイライド「ぐっ！！こんにやるお……。。」

すると弾丸が飛んで来て包帯を引き裂いた。

デイライド「がはっ！ん？」

デイライドが弾丸の飛んで来た方を見ると先程の少女がいた。

少女「今よっ！！！」

デイライド「サンキュっ！行くぜ！！！」

デイライドはライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。電子音「アタックライド・スラッシュ！」

デイライドはデイライドスラッシュを発動し、怪物を切り裂いた。

デイライド「たあああ！！！」

その瞬間ファンガイアがデイライドに襲いかかった。

デイライド「どわっ！！！」　すると怪物はいきなりファンガイアの頭を掴み、仮面を取り付けた。するとファンガイアは怪物の意のままになりデイライドに襲いかかった。さらに怪物も同時に襲いかかってきた為苦戦するデイライド。そして怪物の攻撃で吹っ飛ばされたデイライドは変身が解けてしまった。

デイライド「うわあああ！！！」

すると渚の前に少女が立ちはだけり、

少女「逃げましょう！！！」　渚「だな……。　岬！逃げるぞっ！！！」

彩夏「了解！！！」

怪物「逃がすかっ！！！」

怪物が襲いかかるうとすると、少女が銃で地面を撃ち煙をたててその瞬間に退散した。

その様子がある洋館で三人の男性がカードから見ていた。そして一番若い少年が、

少年「何なのこいつら？ すごい強いよ。」

すると筋肉質の男性が、筋肉質の男性「レジエンドルガ……。」

少年「レジエンドルガ？」　そして渋い男性が、

渋い男性「奴等がよみがえったって事は相当大変な事が起きるなあ。

……。」

少年「大変な事？」

渋い男性「世界の滅亡……。」

そしてもう一枚のカードに月に照らされている城が映っていた……。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

渚達はカフェ・マムダムールに居た。渚は彩夏に手当てをしてもらっていた。渚「いつてえ……。」

彩夏「大丈夫？」

渚「ああ。少女、さっきは助かった。ありがとう。」少女「いいえ。

私は高橋メグミ、よろしく！」

彩夏「あたしは岬　彩夏。よろしく。」

渚「俺は近藤　渚だ。よろしく。」

渚達が挨拶をすますと、渚「高橋、あんたらは何かの組織か？」

メグミ「うん。私達は……。」

メグミが渚の質問に答えようとすると、一人の男性が立ち上がり、

男性「その事は俺が説明しよう。」

メグミ「金山さん……。」

金山と呼ばれた男性は渚の前に座り、

金山「俺は金山マモルだ。この素晴らしき青空の会のリーダーだ。」

渚「素晴らしき青空の会？」

マモル「ああ。ファンガイアを倒す為に22年以上からある組織だ。」

渚「ふん。」

渚は正直興味が全くもって無かった。マモルは資料を捲りながら、マモル「君の事は知ってる。今日からこの素晴らしき青空の会の新メンバーの近藤 渚だな？」

渚は小声で、

渚「なるほど、それがこの世界での俺の役割か……。」

そして普通の声で、

渚「んで、俺は何をすりゃあいいんだ？」

マモルはスーツの内ポケットから写真を一枚取り出した。

マモル「この男を探してくれ。」

渚は写真を見ると、

渚「誰これ？」

マモル「二週間前に刑務所を脱獄した男だ。名前は堀内タカシ。この写真はつい最近の物だ。そして……。」

マモルは内ポケットからもう一枚写真を取り出し、マモル「これは22年前の写真だ。」

渚は写真を見ると、

渚「変わってない？」

渚は二枚の写真を見比べて言った。そしてマモルが、

マモル「この男はファンガイアである可能性がある。捜し出して捕まえてくれ。」

渚「了解！」

渚は最近の堀内タカシの写真を持って彩夏と共にママダムールから出て行った。

渚と彩夏は堀内タカシを捜しながら街を歩いていた。

彩夏「いないなあ。」

渚「そんな簡単に見つかったらつまんねえだろ？」

彩夏「そおゆう問題？（汗）」

するとごみ置き場に居る堀内タカシを見つけた。

渚「堀内タカシだな？」

その瞬間タカシはその場から走り去った。

渚「あ！待ちやがれっ！！」

渚と彩夏はタカシを追いかけた。

タカシは学校に逃げ込み一人の女子生徒を人質にとった。渚と彩夏はタカシに追い付くも、手出し出来ない。

渚「やめろ！堀内！」

タカシ「近付くなあ！！こいつがどおなってもいいのかつ！！」

するとタカシの背後から一人の男子生徒が飛び蹴りを食らわした。男子生徒「やああ！」

タカシが女子生徒を離れた瞬間渚がタカシを抑えこんだ。男子生徒は女子生徒に、

男子生徒「大丈夫か？ナツキ？」

ナツキ「ありがとう、ワタリ。」

渚はタカシをパトカーで連行していた。するとレジエンドルガ二体がパトカーに襲いかかった。渚はタカシをパトカーの外に出し、渚「下がとけ！」

渚はタカシを下がらすと、デイライドライバーを取り出し腰に巻いた。そしてライドブツカーからカードを一枚取り出し、

渚「変身！！」

渚はデイライドに変身してレジエンドルガ二体に攻撃をしかけた。だがレジエンドルガはファンガイアより戦闘力が高い為二体相手となると、かなり苦戦を強いられる。すると先程学校でワタリと呼ばれた少年がバイクに跨がり現れた。

ワタリ「フレア！！」

するとキバツトのようなコウモリが飛んで来て、フレア「よっしやあ！燃えてきたぜ！！」

ワタリはフレアを掴むと、フレアに自分の手を噛ませると顔にステンドグラスのような模様が浮かび、鎖がベルトに変わりワタリの腰に巻き付いた。そして、ワタリ「変身！」

ワタリはフレアをベルトにぶら下げるように装着した。するとワタリの体が深紅のキバ・仮面ライダーブレイズに変わった。そしてバイクから飛び降り、デイルイドを救出した。その瞬間ファンガイアが二人に襲いかかった。

デイルイド「くそっ!!こおなつたら!!」

デイルイドはライドブッカーからカードを一枚取り出しバックルに装着した。電子音「ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイルイド！」

デイルイドの前方に黄色の大きなカードが十枚現れた。ブレイズもフェッスルを取り出し、フレアに吹かせた。

フレア「ウェイク・アップ！」

ブレイズの右足にあるヘルズゲートが開きポーズをとった。二人は飛び上がりキックの体制をとった。デイルイドは『デイメンションスマッシュ』、ブレイズは『ファイアームーンブレイク』を発動した。

デイルイド・ブレイズ「はあああ!!!」

ダブルライダーキックを食らったファンガイアは爆発した。その隙についてガーゴイルレジエンドルガがタカシを捕らえた。するとガーゴイルレジエンドルガとマミーレジエンドルガは何故かタカシに頭を下げ、マミー「お帰りなさいませ、我等が“ロード”。」
タカシ「はあ!？」

タカシは状況が理解出来なかった。デイルイドとブレイズはマミーとガーゴイルに攻撃しようとする、マミーが包帯でデイルイドとブレイズを捕らえ宙に浮かべ、二人をぶつけ合った。二人は変身が解け地面に落ちた。

渚「くはっ!」

ワタリ「くそっ!」

そしてガーゴイルが二人に襲いかかろうとした瞬間、白いコウモリが飛んで来てガーゴイルに攻撃を加えた。

渚「何だ!？」

すると何処かから男性の声で、

男性「レイキバット。」

レイキバットと呼ばれたコウモリは、男性の方へ飛びながら、

レイキバット「行こうか!華麗に激しく!!」

男性はレイキバットを掴むと、

男性「変身。」

と、言いながらレイキバットをベルトにぶら下げるように装着した瞬間、男性の体が仮面ライダーレイへと姿を変えた。

ワタリ「何だあいつ?」

渚「仮面ライダーレイ……。」

ワタリ「レイ?」

レイはガーゴイルに攻撃をしかけた。レイはガーゴイルを圧倒した。マミーとガーゴイルはタカシを連れて逃げ去った。

カフェ・マムダムールで渚達はレイに変身した男性と話していた。

男性「僕は山本タカト。3WAに所属しています。」渚「3WA?」

タカト「ええ。レジエンドルガを専門とする組織です。」

渚「レジエンドルガ?」

タカト「先程貴方が相手していた怪物です。」

渚「ふん。」

渚はまたも興味が無かった。

渚「そおいやあワタリは?」

その頃ワタリはある洋館に居た。

ワタリ「フレアあ、本当に過去何かに行けるのか?」ワタリはレ

ジエンドルガ復活の謎を探る為22年前に行こうとしていた。

フレア「大丈夫だって!」すると3人の男性が現れた。

ワタリ「ジロウさん、ラモン、リキさん。」

ジロウ「過去に行ってみる価値はあるんじゃないのか。」
ワタリ「でもどおやって？」

リキ「大丈夫……。」

するとラモンが扉の前に立ち、

ラモン「この扉を使えば行けるよ。」

フレア「行って来いワタリ！22年前に！」

ワタリは扉を開き過去に行った。

22年前……。

ワタリはトイレに居た。ワタリ「此处、トイレ？」　ワタリはと
りあえず外にでた。そして新聞を手にとり日付を見ると確かに22
年前に居た。

ワタリ「マジで？……確か秋葉原トワってゆうヴァイオリニスト
が刑務所でリサイタルした時にレジエンドルガの王が封印されてい
る遺跡が見つかったんだよなあ。ならまずは秋葉原トワって人を捜
さないとな……。」

ワタリは秋葉原トワを捜す為走り出した。しばらく歩いていると、

ワタリ「あ、あの人だな……。」

ワタリは一人の女性に声をかけた。

ワタリ「あのお、すいません。」

女性は振り向き、

女性「はい？」

ワタリ「秋葉原トワさんですか？」

トワ「そおですけど……。」

ワタリ「今日のリサイタルは中止して下さい。」

トワ「は？」

トワはいきなりの事で困惑していた。

ワタリ「お願いします！貴女が刑務所に行くと未来が大変な事にな

るんです！」「トワ「意味が分かりません！」

トワは行こうとするのとワタリがトワの腕を掴んだ。すると突然ワタリは誰かに殴られた。

ワタリ「ぐはっ！」

ワタリを殴った男性は、男性「行け。」

ワタリ「何ですか、貴方は！？」

男性「お前、最近トワを狙ってるファンガイアだな？」

ワタリ「ファンガイア？違います！」

ワタリは男性を無視してトワを追いかけようとする、男性がワタリを突き飛ばした。そしてワタリを蹴ろうとするのとワタリが避けた為、男性は車を思いつき蹴ってしまった。

男性「いつてえー！！！」

ワタリはその隙について男性に軽く御辞儀をしてトワを追いかけた。

男性「待てえ〜。」

男性は道を足を押さえながら歩いていた。

男性「いたいよお〜、誰か助けてえ〜。」

すると一人の女性が、

女性「ユウキ！何やってんの！？トワさんは？」

ユウキと呼ばれた男性は、

ユウキ「おお〜ユリ。トワは今ファンガイアに追われている。」

ユリ「ばか！早くいくわよ！」

ユリはユウキの腕を引っ張ってトワを捜しに行った。

その頃ワタリはトワに追いついていた。

ワタリ「待ってください！」

トワ「離してください！」　ワタリとトワがごちゃごちゃしてると

ワタリは鞭の様な物でぶたれた。

ワタリ「いてっ！」

ワタリをぶつたのはユリだった。ユリはワタリの顔を見ると、ユリ「ファンガイアにしてはかわいい顔してるね。でも！」

ユリは再び鞭でワタリに攻撃した。するとユウキが来てワタリの胸ぐらを掴み、

ユウキ「てめえ！さっきはよくもやりやがったな！」ワタリ「なんの事ですか！？離してください！」

ワタリはユウキの手を振り払うとトワの腕を掴み連れて行くことにした。するとパトカーがやって来てワタリと何故かユウキを逮捕しようとした。だがワタリとユウキは警察官を殴った。そしてワタリはトワをパトカーに乗せようとしたがユウキに阻止され、逆にユウキがパトカーに乗り込みワタリを連れていった。そしてパトカー内では、

ユウキ「お前何が目的だ？」

ワタリ「僕は未来から来ました。今未来は大変な事になってるんです！だからトワさんに刑務所に行かれたら困るんです！」

ユウキはしばらく黙ると、口を開いた。

ユウキ「未来か……。あり得るなあ。」

すると二台のパトカーが前に現れた。パトカーから二人の女性警官が降りてきた。そしてワタリとユウキをパトカーから下ろし二人に手錠をかけた。ユウキ「はあ！？何で！？」

ワタリ「そおですよ！」

女性警官「誘拐の容疑で逮捕します！」

ワタリ「そんなあ！」

ワタリとユウキは逮捕されて、タカシが捕まっている刑務所にいれられた。二人は同じ牢屋だった。

ユウキ「おい。俺を此処からだせえ。犯人は此処にいる。こいつだ。こいつは死刑にしてもいいぞお。」

ワタリ「はあ！？貴方のせいで捕まったんですよ？」

その頃トワは刑務所でリサイクルを開いていた。そして演奏を終えた瞬間、電気が消えた。すると、

トワ「きゃあああ！」

電気がつくるとトワはタカシに人質にされていた。

タカシ「近付くなあ！」

タカシはそのまま牢屋の場所に来た。

警官「無駄な抵抗をするな！堀内！！」

タカシ「黙れえ！こんなところで死んでたまるか！！」　ユウキは腕を伸ばしトワを救おうとするが、タカシの持っていたガラスの破片で手を切られてしまった。ユウキ「ぐわっ！」

ワタリ「大丈夫ですか！？」

そして警官が牢屋に入り、

警官「大丈夫かっ！！」

ユウキ「ああ・・・、警官さんすまない！！」

ユウキは警官の頭を便宜に突っ込みワタリと共に外へでた。そして二人はトワを救った。タカシは警官に抑えこまれた。ワタリはそれを確認すると、

ワタリ「よかった、これで未来は救われた・・・。」　ワタリはそう言うと未来に帰っていった。ユウキはワタリが居なくなった事に気付くと、

ユウキ「あいつ、どこに行った？」

すると先程顔を便宜に突っ込まれた警官が、

警官「あああああ！！！！」

警官は牢屋から出るとファンガイアに変身した。ユウキはファンガイアに立ち向かうが生身の為苦戦をしている。そしてファンガイアの攻撃で壁が壊れた。タカシがそこを覗きこむと、遺跡のような物があった。すると遺跡から金色のオーラがあらわれ、タカシの中に入りこんだ。ユウキがファンガイアと戦っているとユリが現れた。ユリ「ユウキ！これ！」

ユリはユウキに黒いケースを渡した。ユウキはそれを受けると、ユウキベルトを取り出し腰に巻いた。そして、ユウキ「サンキュ！ユリ！行くぜ、変身！！」

奇妙な音が流れ、ユウキがベルトにパスをセタツチした。

電子音「スカルフォーム！」

ユウキは仮面ライダー幽汽・スカルフォームに変身した。そしてサヴェジガツシャーをソードモードに組み立てて、ファンガイアに戦いを挑んだ。

幽汽SF「しゃあ！行くぜ！！」

幽汽SFはファンガイアを圧倒し、パスを取り出し、

幽汽SF「さてと、決めますか。」

再びパスをベルトにセタツチした。

電子音「フルチャージ！」 幽汽SFはサヴェジガツシャー・ソードモードに力をためて地面に叩きつけて衝撃波を発生させる、『ターミネイトフラッシュ・スカル』を発動した。

幽汽SF「はあああ！！ふう、いっちょあがり！つと。」

その頃ワタリは未来に帰ってきていた。学校の自分の席にいた。

ワタリ「あれ？此処学校？」

すると隣の席のナツキが、

ナツキ「あれ？ワタリ今日休みじゃなかった？」

ワタリ「ナツキ、今って平和？」

ナツキ「え？平和だけど？」

ワタリ「よかつたあ。」

すると二人の担当が、

先生「こら、そこ！何喋ってるんだ？」

ワタリは席を立ち、

ワタリ「すみません！」

先生「はあ、じゃあこの問題を問いてみなさい。」ワタリ「え？あ、分かりません……。」

先生「そおかあ、じゃあお仕置が必要だなあ。」

先生が腕を伸ばすと蛇が現れ、生徒達を襲いはじめた。

生徒達「きゃあああ！！」ワタリ「そんな、先生まで……。」

ナツキ「早く逃げよ!？」 ナツキはワタリの手を引き逃げた。

その頃レジエンドルガの城ではタカシがついにレジエンドルガの王・仮面ライダーアークとして覚醒した。

ガーゴイル「ついに我等がロードが復活した!!」

マミー「人間共を抹殺だ!!」

その頃ワタリは街で落ち込んでいた。その隣でメグミも落ち込んでいた。

ワタリ・メグミ「はあく。」

ワタリ「どおしたんですか?」

メグミ「ワタリ君こそ・・・。」

二人が話していると、通行人達がレジエンドルガに操れ二人に襲いかかった。

22年前ではユウキとユリがワタリについて話していた。

ユリ「あの子なんだっただの?」

ユウキ「未来から来た、って言ってた。」

ユリ「未来?そんなばかな・・・。」

ユウキ「ワタリの話だと未来は今大変な事になってる筈だ。」

すると窓からブレイズキバット、ワタリにはフレアと呼ばれるコウモリが現れ、

フレア「行ってみるか?未来に!」

ユウキ・ユリ「は?」

その頃ワタリとメグミは逃げていると、ビルの上上に追い込まれていた。そしてレジエンドルガの攻撃でメグミがビルから落ちそうになりワタリが間一髪腕を掴むが抵抗できない体制の為レジエンドルガに踏みつけられている。そしてメグミの腕を離しそうになった瞬間、誰かがレジエンドルガを突飛ばしメグミの腕を掴んだ。ユウキとユリだった。

ワタリ「ユウキさん！」

ユウキ「大丈夫か！？」

するとレジエンドルガがユウキに襲いかかった。

ユウキ「何！？」

ユウキが顔を伏せた瞬間レジエンドルガの攻撃が止まった。

ユウキ「ん？」

そこにはデイルイドがライドブッカー・ソードモードでレジエンドルガの攻撃を止めていた。

デイルイド「大丈夫か！？」

ユウキ「渚？」

デイルイドはレジエンドルガを撃退すると変身を解きメグミを救出した。

渚「大丈夫か？高橋。」

メグミ「ありがとございます、近藤さん。」

するとユウキが、

ユウキ「お前渚か？」

渚「ん？・・・ユウキ？ユウキじゃねえか！久しぶりだなあ！！」

ユウキ「やっぱり渚だ！変わってねえなあ！！」

ユリ「知り合い？」

ユウキ「俺の親友だ！」

五人はマムダムールにいた。渚とユウキは再会を楽しみ、ユリと

メグミは困惑していた。

メグミ「母さん？」

ユリ「は？」

すると渚が、

渚「あれ？そおいやあ岬は？」

メグミ「さあ？」

ユウキ「岬って？」

渚「ああ、今一緒に旅してる女だ。」

ユウキ「へえ〜。」

すると渚の携帯が鳴った。

渚「あ、岬だ。はいもしもし。」

彩夏「渚君！たすけ・・・きゃあああ！！！」

渚「おい！岬！？岬！！」 電話がきれ、渚は携帯をしまい彩夏の所に走っていった。

ユウキ「おい渚！」

ユウキとワタリは渚を追いかけていった。

渚が彩夏を捜していると渚はガーゴイルに襲われた。

渚「どわっ！てめえらが岬に何かしたのか！？」

するとメデューサが、

メデューサ「岬ってこの子の事？」

そこには気絶した彩夏がいた。

渚「岬！・・・てめえ！！！」

渚はデイルイドライバーを腰に巻きカードを一枚取り出し、

渚「変身！！！」

電子音「カメンライド・デイルイド！」

渚はデイルイドに変身してレジエンドルガ四体を相手に戦っていた。するとユウキとワタリが駆けつけて二人は変身してデイルイドに加勢した。デイルイドはマミーとマンドレイク、ブレイズはガーゴイル、幽汽SFはメデューサを相手に戦っていた。デイルイドはマミーの包帯攻撃とマンドレイクの触手攻撃に苦戦していた。そしてマンドレイクの触手を交わし、右手に力をためた。そして右手がデーパーイエローに輝き、『デイメンションインパクト』を発動した。

デイルイド「はあああ！！！」

マンドレイクは『デイメンションインパクト』を食らい爆発した。するとマミーの包帯攻撃で突飛ばされた。

デイルイド「くそっ！こおなったら！！！」

デイルイドはライドブツカーからカードを一枚取り出し、
デイルイド「変身!!」

そしてバツクルにカードを装填した。

電子音「カメンライド・ソウガ!」

デイルイドはデイルイド・ソウガ・アビシオンフォームに変身して、マミーに立ち向かっていった。その頃ブレイズはガーゴイルに苦戦していた。

フレア「ちっ、ワタリ!ガルルだ!」

ブレイズは青いフェッスルを取り出しフレアに吹かせた。

フレア「ガルル・セイバー!!」

するとガルルセイバーが飛んできた。ブレイズはガルルセイバーを掴むと、胴体と左腕と目が青色に変わり、ブレイズ・ガルルフォームにフォームチェンジした。DソウガAFもライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「フォームライド・ソウガ!メリクリウス!」 DソウガAFはデイルイド・ソウガ・メリクリウスフォームにフォームチェンジした。手にはメリクリウスロッドが握られていた。DソウガMF「しゃあ!行くぜ!」

ブレイズGFもガルルセイバーでガーゴイルに攻撃を加え、さらに緑色のフェッスルを取り出しフレアに吹かせた。

フレア「バツシャー・マグナム!」

バツシャーマグナムが現れ、ブレイズGFが右手で掴むと胴体と右腕と目が緑色に変わり、ブレイズ・バツシャーフォームにフォームチェンジした。ブレイズBFはバツシャーマグナムでガーゴイルを翻弄しながら戦った。DソウガMFは再びカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「フォームライド・ソウガ!ネビリム!」

DソウガMFはデイルイド・ソウガ・ネビリムフォームにフォームチェンジした。そして右手に握られていたネビリムショットでマミーに連射した。

DソウガNF「どうだー!!」

マミーも負けじと包帯で攻撃した。

DソウガNF「ぐわっ!このやるおー!!」

DソウガNFはライドブッカーからカードを一枚取り出しバックルに装填した。

電子音「フォームライド・ソウガ!グラジャラボラス!」

DソウガNFはデイライド・ソウガ・グラジャラボラスフォームにフォームチェンジした。そして手に握られたグラジャラボラスロードでマミーを攻撃した。ブレイズBFは紫色のフェッスルを取り出しフレアに吹かせた。

フレア「ドツガ・ハンマー!」

ドツガハンマーが現れ、両手で掴むと胴体と両腕と目が紫色に変わり、ブレイズ・ドツガフォームにフォームチェンジした。ブレイズDFはドツガハンマーでガーゴイルに猛威を加えた。そして幽汽SFもメデューサを圧倒していた。そしてマミーとガーゴイルとメデューサは逃げていった。DソウガGFはデイライドに戻り、ブレイズDFもキバフォームに戻っていた。デイライド「逃げやがったか。」

するとレイキバットが飛んで来て三人のライダーに攻撃を加えた。ブレイズKF「ぐわっ!・・・ん?」

そこにはタカトの姿があった。

デイライド「山本タカト・・・。」

タカトはレイキバットを掴み、

タカト「変身。」

タカトはレイキバットをベルトにぶら下げるように装着した。

レイキバット「変身!!」レイは変身したのと同時にウェイクアップをした。レイキバット「ウェイクアップ!!」

レイは三人のライダーに攻撃をしかけた。そして三人は変身が解けてしまった。そこにメグミとユリが現れ、銃と鞭でレイに攻撃した。だがレイにはきかず二人はお腹を殴られ気絶した。

メグミ・ユリ「うっ！」

そしてレイは彩夏を担ぎ、メグミとユリを手に持ち、
レイ「この三人はもらって行きます。」

渚「な！？待て！！！」

三人は追いかけてよととするがダメージが大きい為倒れてしまった。

ワタリ「メグミさん！！」「ユウキ「ユリ！！！」

渚「岬！！！」

彩夏とメグミとユリはレイにつれさられてしまった・・・。

次回、仮面ライダーディライド。

第5話 魔界城の王

すべてを破壊し、すべてを繋げ！

第4話 第二楽章 深紅のキバ・ブレイズ（後書き）

次でブレイズ編を完結させたいと思います！

ちなみに何故幽汽かと言うと個人的にかなり幽汽が好きだからです！

第5話 魔界城の王（前書き）

第5話です！どじろぞー！

第5話 魔界城の王

これまでの仮面ライダーデイライドは！
詳しくは第4話をお読み下さい。

渚達はカフェ・マムダムールに居た。

ワタリ「あの山本タカトって人何なんですか？」

ユウキ「レジエンドルガの仲間なのか？」

渚「恐らく・・・レジエンドルガに身も心も売ったんだろうな・・・
。気に入らねえ・・・。」

もう一人の世界の破壊者・デイライド。新たなる九つの世界を巡り、
その瞳は何を見る？

渚は拳を強く握りしめた。ユウキはふとカウンターを見ると、ワ
タリのクラスメイト・岡本ナツキが居た。ユウキはナツキの方へ歩
み寄ると、

ユウキ「君、名前は？」

ナツキ「え？・・・あ、岡本ナツキですけど・・・。」ユウキ「岡
本ナツキ・・・。」何かを考えているユウキにワタリは歩み寄り、
ワタリ「どうしたんですか？ユウキさん。」

ユウキ「ん？ああお前も過去で会ったろう？ヴァイオリニストの秋
葉原トワだ。」

その名前を聞いた瞬間ナツキの顔が変わった。

ユウキ「あれは芸名なんだ。本名は岡本ナツミ。」

ユウキはナツキの方を見て、

ユウキ「ナツキちゃん、ナツミの娘だな？」

ナツキはユウキを睨み付け、

ナツキ「やめて母さんの話は！・・・てゆうか、あんな人母さんじ

やないんだから!！」

ユウキ「何故だ。」

ユウキは冷たい声で言った。

ナツキ「あの人、いつも演奏、演奏つて。あたしに構ってくれなかった!！」

ユウキは優しく微笑み、ユウキ「ナツキちゃん良く聞け。ナツキちゃんのお母さんは演奏をする事で傷付いた人達の心を癒していたんだ。」

するとワタリが、

ワタリ「僕もナツキのお母さんの演奏を聞いたらすごく心が癒されたんだ。」

ワタリはヴァイオリンを取り出し、

ワタリ「弾いてみるよ、ナツキのお母さんの曲を。」　ワタリはナツミの曲を弾いた。みんなは聞き入っている隙に渚は外に出て行った。ワタリがヴァイオリンを弾いているのをフレアが見ていた。ナツキはワタリがヴァイオリンを弾いている姿を見てみると、ナツミの幻が見えてきた。そしてワタリが演奏を終えると、ナツキは涙を流しながら、ナツキ「聞こえた・・・母さんの演奏・・・。」

ユウキはナツキに歩み寄り、

ユウキ「わかつたる?ナツミの優しさが。」

ナツキ「うん・・・。」

ユウキ「ナツキちゃんは素晴らしい母親をもってる。誇りに思っただれよ。ナツミの事を。」

ワタリはユウキを見て呟いた。

ワタリ「・・・父さん・・・。」

すると扉の方から、

フレア「なんだてめえ!」レイキバット「邪魔だどけえ!！」

フレア「あゝ!」

レイキバットはユウキとワタリに近付き、

レイキバット「お前等あの女三人を助けたくないか?」

ユウキとワタリは三人を助ける為レジエンドルガの城に向かって歩いていった。ワタリ「ユウキさん、会えて良かったです。」

ユウキ「俺もだ。お前みたいな真っ直ぐな奴は渚以来だ。」

ユウキは立ち止まり、

ユウキ「ワタリ、此処でお別れだ。」

ワタリ「え？」

ユウキ「俺が行く。」

ユウキが歩こうとするとワタリがユウキの腕を掴み、

ワタリ「ユウキさん、貴方は僕の父さんに似ています。でも僕の父さんは僕が小さい時に亡くなってしまっただけです。だから、親孝行させて下さい！」

するとワタリはユウキの腹を殴り、気絶させた。

ワタリ「ユウキさん、僕がメグミさん達を助けに行きます。」

ワタリはそう言うのと走り出した。

ワタリは愛車のマシンブレイザーに跨がり、レジエンドルガの城を目指していた。そして城が見えてきたところで、レイキバット「先に行くぞ！」

ワタリはメデューサとガーゴイルに連れられタカシのいる玉座に到着した。

ワタリ「メグミさんとユリさんと彩夏さんを返してください。」

タカシ「かつてこの私を封印したブレイズ。その力この手に入れてやる。」

するとタカシからアークのオーラが現れた。

ワタリ「フレアー!!」

フレア「よっしゃ!!燃えてきたぜ!!!」

ワタリがフレアを掴もうとすると、マミーの包帯でフレアを絡めとり柱にぶつけられて、フレアは気絶してしまった。

ワタリ「フレアー!!」

ワタリがフレアを助けに行こうとした瞬間、タカシが頭を下げた。するとアークのオーラが牙に変わりワタリの体に入った。ワタリ「ぐわっ!!!」

するとワタリ体中にステンドグラス状の模様が現れた。

ワタリ「ぐわああああ!!!」

そこへユウキが駆けつけた。

ユウキ「ワタリ!?・・・てめえワタリに何をした!!!!!!」

そしてワタリの体が仮面ライダーブレイズ飛翔態に変わった。ブレイズ飛翔態はキバ飛翔態の赤い所が銀色に変わり、緑色の魔皇石が水色になっている。ブレイズ飛翔態は飛び上がりユウキに襲いかかった。

その頃彩夏とメグミとユリはなんとか閉じ込められている部屋から出ようと扉にタツクルしていた。

ユリ「なかなか開かないわね、この扉!!!」

彩夏「でも早く出ないと!頑張りましょう!メグミさん、ユリさん!!!」

メグミ「そうね!頑張ろう!!!」

彩夏・ユリ「うん!!!」

ユウキはなんとかブレイズ飛翔態の攻撃を交わしていた。だがついにブレイズ飛翔態の攻撃を受けてしまった。

ユウキ「ぐはっ!!!」

ユウキは物陰に隠れているとブレイズ飛翔態は何者かに撃たれた。ユウキが入り口の方を見ると、デイルイドが現れた。

ユウキ「渚!!!」

デイルイド「待たせたな!!!」

何故デイルイドはユウキ達より早くマムダムールを出たのに遅れて到着したかというと、彩夏達を助けに行ったのはいいが場所が分からなかったからである。そして水色のコウモリに案内してもらっ

ただのだ！！

デイルイドはブレイズ飛翔態を見ると、
デイルイド「渡？・・・いやワタリか！！」

するとデイルイドはマミーの包帯攻撃で変身が解けてしまった。
そしてマミーに胸ぐらを掴まれとどめをさされそうになった瞬間、
渚とマミーの間にオーロラの壁が現れ渚を包んでいった。するとメ
グミとユリが現れた。

ユリ「ユウキ！大丈夫か！？」

ユウキ「ああ、なんとかな！メグミちゃん、ユリ！これ使え！」

ユウキはメグミとユリにイクサナツクルを渡した。ユリ「メグミ、
行くよ！」メグミ「了解！母さん！！」

メグミ・ユリ「変身！！」メグミは仮面ライダーイクサバースト
モード、ユリは仮面ライダーイクサセーブモードに変身した。イク
サBMはガーゴイルと、イクサSMはマミーとメデューサを相手に
戦った。

その頃渚はオーロラの壁で城の外へ出された。すると目の前に鳴
滝が現れた。渚「鳴滝、てめえか！！」鳴滝「久しぶりだな、デ
イルイド。」

渚「確かサガの世界以来か？」

鳴滝「いや、ソウガの世界以来だ。」

渚「あん時のホッパーライダーを出したのはてめえか。」

鳴滝「今から気づいても遅い！君の旅は此処で終わりだ！」

すると鳴滝の後ろからタカトが現れた。

鳴滝「頼むぞ、レイ！」

鳴滝はオーロラの壁に消えて行った。

渚「鳴滝とも手を組んでいやがったのか！」

タカト「ふっ。レイキバット。」

タカトはレイキバットを掴み、

タカト「変身。」

レイキバット「変身！ウエイクアップ！！」

タカトはレイに変身した。

渚「ちっ！てめえの相手をしてる暇はねえんだよ！！」

渚はデイルイドライバーを腰に巻き、ライドブツカーからカードを一枚取り出し、

渚「変身！！」

そしてカードをバツクルに装填した。

電子音「カメンライド・デイルイド！」

渚はデイルイドに変身した。そしてデイルイドとレイは戦闘を開始した。だがレイの攻撃にデイルイドは押され気味だった。

デイルイド「ちっ、渡！力を貸してくれ！」

デイルイドはライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。デイルイド「変身！！」

電子音「ファイナルカメンライド・キ・キ・キ・キバ！」

デイルイドはデイルイド・キバ・エンペラーフォームに変身した。

DキバEFはレイに猛攻を加えた。そしてライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「ファイナルアタックライド・キ・キ・キ・キバ！」

DキバEFは構えをとった。

DキバEF「はあああ・・・。」

そして勢い良く飛び上がり、『エンペラームーンブレイク』を發動した。

DキバEF「はあああ！！！！」

『エンペラームーンブレイク』はレイに直撃した。レイ「ぐわああああ！！！！」

レイは爆発した。そしてDキバEFはデイルイドに戻り、

デイルイド「早く行かねえと！」

そして城の方へ走っていった。その頃城ではWイクサがレジエンドルガを圧倒していた。タカシは自分の腕にとまっているブレイズ

飛翔態に、

タカシ「ワタリ、行け。」 ブレイズ飛翔態は再び飛び上がり、Wイクサのいる方へ突進していった。するとユウキが目の前に現れ、ブレイズ飛翔態の突進をもろに食らった。

ユウキ「ぐわああああ！」 ユウキの血がブレイズ飛翔態についた。するとブレイズ飛翔態の動きがとまった。そしてユウキが、

ユウキ「お前に殺されるなら本望だ！けど今のお前はワタリじゃない！！せめてワタリに戻ってから俺を殺せ！！ワタリ！！！！」

ユウキはブレイズ飛翔態を抱きしめた。するとブレイズ飛翔態が光だした。その光に怯んだメデューサの隙についてWイクサはイクサベルトにフエッスルを装填した。

電子音「イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ライ・ズ・アツ・プ！」

Wイクサはブロウクンファングを発動した。

Wイクサ「やあああ！！」メデューサ「ぐわああああ！！」

そしてブレイズ飛翔態はユウキを包みこんだ。そしてブレイズ飛翔態はワタリに戻った。

ワタリ「ユウキさん……。」

ユウキ「ワタリ、大丈夫か？」

ワタリ「はい……。」

ユウキ「なんか親子っぽいな、こおゆうの。」

ワタリ「はい！」

タカシ「ばかな！レジエンドルガの洗礼を！何故だ！？」

すると何処かから渚の声が出た。

渚「お前なんかには一生かかってもわかんねえな！！」

タカシ「何！？」

すると入り口から渚が現れた。

渚「ワタリにはレジエンドルガの力よりもつと強い力がある！それは絆だ！こいつにはユウキとの絆！……いや、親子の絆がある！！絆つてのはな、たとえどんなに離れていても心と心が繋がっている限り絶対に断ち切れない深い繋がりなんだ！！だからてめえの

そんなちんけな力じゃあ絶対断ち切れねえんだよ！」タカシ「貴様・
・一体何者だ!!!」

渚「通りすがりの仮面ライダーだっ!!!頭にたたき込んで!!!」

渚はデイルイドライバーを腰に巻きライドブツカーからカードを
一枚取り出した。そして、

ワタリ「フレア!!!」

フレア「よっしゃ!燃えてきたぜ!!!」

ワタリはフレアを掴み自分の手にかませた。

フレア「ガブっ!!!」

するとワタリの顔にステンドグラス状の模様が現れた。

渚・ワタリ「変身!!!」 渚はバツクルにカードを装填した。

電子音「カメンライド・デイルイド!!!」

渚はデイルイドに、ワタリはブレイズキバフォームに変身した。

タカシ「倒す・・・この手で貴様等を!!!」

するとアークキバットが現れ、

アークキバット「じゃあ〜い〜きまあ〜すかあ〜。」タカシ「変身

!!!」

アークキバット「変身!!!」 タカシは身長3メートルの仮面ライダー

アークに変身した。

ブレイズKF「ユウキさん、下がって!!!」

デイルイドとブレイズKFはアークに飛び蹴りを食らわしたが簡
単に弾かれ外に出された。アークは二人を追いかけた。

ユウキ「渚!ワタリ!!!」

ブレイズKFは『ファイアームーンブレイク』を発動したがア
ークに弾かれてしまった。

ブレイズKF「ぐわっ!!!」

そしてアークの踵落としを食らい、気絶してしまった。そしてア
ークがブレイズKFを踏みつけようとした瞬間、足がとまった。

アーク「ん?」

デイルイドがライドブツカー・ソードモードで止めていた。

デイルイド「フレア！早くワタリを安全な場所に！」フレア「おう！！！」

フレアはブレイズKFを安全な場所に連れいき、デイルイドは渾身の力をこめてアークをどかした。

デイルイド「あああああ！！！」

そしてデイルイドもブレイズの後に続いた。

その頃イクサSMはマミーに押されていた。

イクサSM「うわあああ！！！」

ユウキ「ユリ！！！」

ユウキはイクサSMの前に立ち、ユウキベルトを腰に巻いた。そして、ユウキベルトにパスをセタツチした。

ユウキ「変身！！！」

電子音「スカルフォーム！」

ユウキは幽汽スカルフォームに変身して、サヴェジガツシャー・ソードモードで攻撃した。だがマミーの包帯に絡めとられて衝撃波を受けた。

幽汽SF「ぐわあああ！！このやるお！！！」

幽汽SFは再びパスを取り出しセタツチした。

電子音「ハイジャックフォーム！」

幽汽SFは幽汽HFにフォームチェンジした。そしてサヴェジガツシャー・ネオソードモードにかえ、マミーに反撃した。そして再びパスをセタツチした。

電子音「フルチャージ！」　するとサヴェジガツシャーがオーラをまとい巨大化した。そして「ターミネイトフラッシュ・ハイジャック」を発動した。

幽汽HF「はあああ！！」「マミー」「ぐわあああ！！！」

その頃城の外ではイクサBMがガーゴイルをイクサカリバーで攻撃していた。そしてフェッスルをイクサベルトに装填した。

電子音「イ・ク・サ・カ・リ・バー・ラ・イ・ズ・アツ・プ！」

イクサBMは『イクサジャツジメント』を発動した。

イクサBM「やあああ!!！」

ガーゴイル「ぐわああああ!!！」

その頃デイライドはブレイズKFを起こしていた。デイライド「おい！ワタリ!!！」

ブレイズKF「ん・・・渚さん・・・。」

デイライド「大丈夫か？」ブレイズKF「はい。」

デイライド「あいつは骨が折れるな・・・。」

ブレイズKF「でも倒します！この世界に生きる皆の為に!!！」

デイライド「だな!ん？」するとライドブツカーからカードが三枚飛び出した。ブレイズのKR・FFR・FARだった。デイライドがその三枚を手にとった瞬間三枚のカードが絵柄を取り戻した。デイライド「ん？見つかったようだな。」

岩陰からアークが現れた。

ブレイズKF「行きましよう!!渚さん!!!!！」

デイライド「ああ!!！」

ブレイズKFは飛び上がった。アークがブレイズKFを攻撃しようした瞬間、デイライドが天井にライドブツカー・ガンモードを放ち煙を立てた。

アーク「くっ!!！」

するとアークの目の前に天井に逆さにぶら下がったブレイズKFが居た。そしてブレイズKFはアークの顔面に強烈なパンチをお見舞いした。デイライドもアークの腹に飛び蹴りをお見舞いして城外に出した。だがアークも負けじと衝撃波で二人に攻撃をした。

デイライド・ブレイズKF「うわあああ!!!!！」

そこへ幽汽HFが駆けつけた。

幽汽HF「大丈夫か!？」そして三人は立ち上がり、デイライド「よし・・・行くぞ!!!!！」

幽汽HF・ブレイズKF「おう!!!」

三人は走りだし、アークに立ち向かって行った。そして三人は飛び上がり強烈なパンチをお見舞いした。デイルイド・幽汽HF・ブレイズKF「はあああ!!!」

アーク「ぐわああ!!!」

幽汽HF「やったか？」

ブレイズKF「おそらく……。」

デイルイド「いや、まだまだ!」

アークは立ち上がり空に叫んだ。

アーク「我が一族に!最後の力を!!!」

すると周りが暗くなり、アークが浮かんだ瞬間月が地上と近くなっ

った。
ブレイズKF「月が落ちる!?!」

アークに巨大な腕と翼がついた。そして衝撃波で三人を吹っ飛ばした。そして幽汽HFを集中攻撃した。幽汽HF「うわあああ!!!」
デイルイド「ユウキ!!!」ブレイズKF「ユウキさん!!!」

二人は幽汽HFに駆け寄り、アークの衝撃波を弾き返した。

ワタリ「大丈夫ですか!?!」

幽汽HF「ああ……。」デイルイド「よし……ワタリ、行くぞ!!!」

ワタリ「はい!!!」

ワタリはフェッスルを取り出しフレアに吹かせた。フレア「フレイムドラゴン!!!」

するとフレイムドラゴンが現れ、デイルイドはフレイムドラゴンの城の方へ乗り、ブレイズKFは頭部に乗った。

デイルイド「行くぜ!」

フレイムドラゴンはアークを追いかけた。デイルイドもライドブツカー・ガンモードで応戦した。そしてライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイルイ

ド！」

デイルイドは『デイメンションショット』放った。デイルイド「食らえ！」

アーク「ぐっっ！！！」

デイルイド「ワタリ！こっち来い！！！」

ブレイズKF「はい！！！」 ブレイズKFがデイルイドの目の前に来た瞬間、デイルイドはライドブッカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「ファイナルフォームライド・ブ・ブ・ブ・ブレイズ！」

デイルイド「ちよつと痛いぜ！」

ブレイズKF「はい？」

デイルイドがブレイズKFの背中を開くと、ブレイズKFはブレイズキバットを模した、ブレイズアローに超絶変形した。

アーク「なんだあれは！？」

デイルイドはさらにライドブッカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

電子音「ファイナルアタックライド・ブ・ブ・ブ・ブレイズ！」

フレア「燃えてきたぜえ！！！」

デイルイドはブレイズアローを掴み、『デイルイドボルケーノ』を発動した。デイルイド「はああ！！！」アーク「ぐわああ！！！」

アークは元の姿に戻り、地上に落ちた。デイルイドとブレイズアローからブレイズKFに戻ったブレイズKFも地上に着地した。デイルイドとブレイズKFがアークを見つめているといきなりアークが巨大な槍、アークトライデントで二人を攻撃した。

デイルイド「ぐわっ！こいつまだ立つのか！？」

すると何処かから衝撃波が飛んできた。

アーク「ぐっっ！」

二人が衝撃波の飛んできた方向を見ると、其処には幽汽SFがいた。幽汽SFはブレイズKFに近付き、幽汽SF「ワタリ、これを！」

幽汽SFはブレイズKFにフェッスルを渡した。

ブレイズKF「これは？」フレア「これは！ワタリ！それ吹かせる！！」

ブレイズKFは言われた通りにフレアにフェッスルを吹かせた。

フレア「フェニクロス！」すると何処かから不死鳥のようなものが飛んできた。

フェニクロス「さあて！行きましょう！！」

フェニクロスはブレイズKFの左腕に装着された。フェニクロス「変身！！」その瞬間、ブレイズKFは灼熱のキバと呼ばれる、

ブレイズクリムゾンフォームに変身した。それを見たデイルイドは、デイルイド「よし、行くぞ！！」

ブレイズCF「はい！！」二人は飛び上がった。

電子音「ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイルイド！」

フェニクロス「ウェイクアップ・ファイバー！！」

デイルイドは『デイメンションスマッシュ』、ブレイズCFは『クリムゾンムーンブレイク』を発動した。

デイルイド・ブレイズCF「はああああ！！！！」

アーク「ぐわああああ！！！！！！」

そしてママダムールではユウキ達が別れをしようとしていた。ユウキはワタリとナツキ、ユリはメグミと楽しく話していた。渚はそんな五人を写真に写した。そしてユリの体が光だした。

メグミ「母さん？」

ユリ「お別れよ、メグミ。」

ユウキ「ユリ……。」

ユリ「ユウキ、友達って渚君の事でしょ？良かったね、見つかって……また会える？」

ユウキ「ああ。きつとまた会いに来る。」

そしてユリは過去へと帰っていった。

メグミ「ありがとう、母さん……。」

ユウキ「渚、俺、お前と一緒に行くよ。」

渚「当たり前じゃねえか。」

渚達は写真館に帰っていった。渚はこの世界で撮った写真を原像していた。

渚「やつぱり、この世界も俺の世界じゃなかった……。」

写真はいつも通りピンぼけだった。

彩夏「でもこの世界は救われた。それでいいじゃん。」

彩夏は渚を慰めた。すると部屋の外から、

ユウキ「おい、そろそろ行こうぜ。」

渚「ああ。」

渚はリビングに入り写真を机に置いた。すると信次郎が写真を一枚手に取って、

信次郎「お？これはなかなか良い写真だなあ。」

渚「撮りぞこないだよ。」信次郎「いやそんなことないよ。」

その写真には楽しく話している、ユウキとワタリ、ユリとメグミ、ナツミとナツキの三組の“親子”だった。そして渚は机にキバのファイナルカメンライドのカードを置いた。するとカードが光だしコンプリートカードと同じ素材のカードにかわり、そこにはブレイズのマークが描かれていた。

渚「さて行くか！次の世界へ！」

ユウキ・彩夏「うん！！」　すると入り口から水色のコウモリが飛んできて、

コウモリ「ちょっと待って！あたしも行くわ！」

渚「お前は！」

コウモリ「あたしはキバット族のアクアキバットよろしく！」

渚「知るか！何でお前も来る……。」

渚が喋っていると背景ロールが降りてきた。そこには数えきれない怪物の大群が描かれていた……。

次回、仮面ライダーディライド。

第6話 ファイナルバトル！聖龍ワールド

全てを破壊し、全てを繋げ！

第5話 魔界城の王（後書き）

いかがでしたか？

感想・ご意見待ってます！！

第6話 ファイナルバトル・聖龍ワールド（前書き）

お久しぶりです。ではさっさと……

第6話 ファイナルバトル・聖龍ワールド

これまでの仮面ライダーデイライドは！
詳しくは第1〜5話をお読み下さい！

渚達は新しい仲間・倉石ユウキと共に街を歩いていた。

彩夏「この世界での渚君の役割って何なのかな？」

ユウキ「やっぱり役割があるのは変わらないだな。」渚「迷惑な話だぜ。」

すると黒いコートの青年が渚達の前を通りすぎた。

ユウキ「なんだ？」

黒いコートの青年は窓の前に立つと、カードの入った黒い箱を窓の前に出した。すると窓からベルトが現れ青年の腰に装着された。そして変身ポーズをとり、

青年「変身!!！」

そして箱をベルトに装填すると、青年の体が仮面ライダーナイトに変わり窓の中に入っていった。

彩夏「え!?!」

彩夏が驚いているとまた青年が通りすぎた。先程の青年と同じ様にベルトを出現させ変身ポーズをとり、
青年「変身!!！」

そして箱をベルトに装填すると、青年の体が龍騎と酷似した仮面ライダー聖龍に変わり窓の中に入っていった。

彩夏「何なの、あれ!？」渚「ミラーワールド・・・聖龍の世界か・・・。」

渚は絵柄の消えた聖龍のカードを見つめながら言った。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

彩夏「ミラーワールド!？」

ユウキ「俺も初めてみた・・・。」

渚「じゃ、行ってくるわ。」

ユウキ「はい!？」 渚は窓の前に立ちディライドライバーを取り出し腰に巻き、ライドブツカーからカードを一枚取り出しバックルに装填した。

渚「変身!」

ディライドライバー「カメンライド・ディライド!」

渚はディライドに変身してミラーワールドに入って行った。

彩夏「渚君も!？」

ユウキ「さすが!」

ディライドはモンスターを蹴散らしながら聖龍に近付こうとするがモンスターが多くて近付げない。

ディライド「ええい!邪魔だっちゅうの!」

デイルイドの他にも色んなライダーが戦っていた。ゾルダやファムや王蛇も戦っていた。ファムは王蛇を見付けると、

ファム「ん？萩野！！」　ファムは王蛇に襲い掛かった。それを見た聖龍は、

聖龍「おい！！止める！！！！」

聖龍はファムと王蛇を止めに行こうとするがモンスターに阻まれて近付けなかった。それを見たゾルダはカードを取り出しながら、ゾルダ「ちっ！いつまでやってんだ……。」

そしてバイザーにカードを装填した。
マグナバイザー「シユートベント！」

ゾルダの手に巨大な大砲が現れ、モンスター達に発射した。だが威力が強すぎてライダー達も巻き込まれた。

デイルイド「どわっ！！」

モンスター達は跡形も無く消えた。ライダー達はミラーワールドから出て行った。聖龍が出ようとするとデイルイドが聖龍の肩を掴み、

デイルイド「ちょっと待て。」

聖龍「ん？何だあんた。」デイルイド「この世界について色々聞きたいんだが。」

渚達は聖龍に変身している青年を写真館に招いていた。

青年「俺は城島シンヤ。よろしく。」

渚「近藤 渚だ。」

ユウキ「倉石ユウキ。よろしく。」

彩夏「呷 彩夏です。よろしくお願いします。」

渚「早速だが城島。この世界の事を聞かしてくれ。「シンヤ」じゃあライダーバトルの事を。このライダーバトルは菊池シロウとゆう男によって開かれた。」

ユウキ「何の為に？」

シンヤ「それは解らない。そしてこのライダーバトルで最後の一人になった者は願いを一つ叶えることができる。」渚「要するに、自分の欲望の為に相手を殺す、意味も無い殺し合いか。くだらねえ……んで城島、お前の願いは？」

シンヤ「俺に願い何て無い。ただ戦いを止めたいだけだ……。」
渚「……真司……。」

渚は真司という人物とシンヤを重ね合わせていた。

シンヤ「そおだ、渚！」

シンヤは目をキラキラさせながら渚に顔を近付けた。

渚「な、何だ？」

シンヤ「戦いを止めるのを手伝ってくれ!!」

渚「え……。」

シンヤはさらに顔を近付けて、

シンヤ「な!!」

渚「わ、わかったから！顔を近付けんな!!」

シンヤ「よし！仲間も出来たところで！」

シンヤは急に真剣な顔になった。

ユウキ・彩夏「ん？」

渚「何だ？」

シンヤ「怖い話しよあぜ……。」

三人はずっこけた。

ユウキ「な、なんで!?」シンヤ「いやだつて外も暗くなったから……。」

渚「別にいいけど、俺怖い話なんてねえぞ？」

彩夏「あたしも。」

ユウキ「彩ちゃんと同じく。」

シンヤ「仕方ねえな。俺がしてやるよ。」

ユウキ「なんで上から？」シンヤ「俺が子供の頃さあ、公園で一人で遊んでたんだ。そしたら全く知らない女の子が現れてさ。でも俺一人で遊んでたからその女の子と遊んだんだ。すげえ楽しくてさ。そして明日も遊ぼつて約束したんだ。でも次の日雨降つてたから行かなかつたんだ。そしたらその女の子がいきなり部屋に現れてさ。びっくりしたけどまた一緒に遊んだんだ。そしたら急にいなくなつたんだ、まるで煙みたい……。」

彩夏「不思議な話だね……。」

ユウキ「でもあんま怖くねえな。」

渚「お前そおゆうのにはめっぽう強いよな。」

シンヤ「そおなんだ……。あ、明日他のライダーも紹介するから、」

花鷄『つて店に来てくれ!』

渚「分かった。」

次の日、渚達はシンヤに言われたとおり『花鷄』を訪れた。

渚「お〜い城島あ〜。」

シンヤ「渚!来てくれたのか!」

渚「お前が来いって言ったんだろが。」

すると奥から1人の青年が出てきて、

青年「なんだ、騒がしぞ城島。」シンヤ「あ！レン！紹介するよ…、」

シンヤが渚達にレンを紹介しようとする、

渚「仮面ライダーナイトだな？」

レン「何？」

すると奥から1人の少女が出て来た。

少女「どおしたの？シンヤ君、レン。」

シンヤ「あ、ユイちゃん。この人達お客さんなんだ。」

ユイ「そおなんだ。じゃあご注文は？」

渚「とりあえずコーヒーを。」

ユウキ「俺も。」

彩夏「あたしも。」

ユイ「はい！」

ユイは渚達にコーヒーをいれた後、鏡の前で作業していると、鏡に10歳位の少女が現れた。

ユイ「え？」

ユイは後ろを見るが誰もいなかった。そしてその少女はユイにこう告げた。

少女「早くしないと、20回目のお誕生日に死んじゃうよ。」

するとユイは倒れてしまった。

彩夏「ユイちゃん！？シンヤさん！レンさん！ユイちゃんが！」

ユイは『花鶏』の二階で『花鶏』の店長である角替サナコに看病されていた。

シンヤ「おばさん、大丈夫なのか？」

サナコ「任せなさい！」

シンヤとレンが外に出ると、

彩夏「ユイちゃんは！？」シンヤ「大丈夫だ。心配してくれてありがとう。」

ユウキ「でも一体どおしたんだ？」

シンヤ「わからない。でも昔もいきなり倒れたらしんだ。」

渚「何でだ？」

シンヤ「お兄ちゃん・・・菊地シロウがいなくなったからっておばさんがいつてた。その記憶がよみがえったんじゃないかな？」

渚「ユイが菊地シロウの妹・・・。」

すると何処から金属音の様な音が聞こえてきた。

ユウキ「なんだ？」

彩夏「あ！あれ！」

渚達は彩夏が指をさした方を見た。するとレンが、

レン「菊地シロウ・・・。」

ユウキ「あれがユイちゃんのお兄さんなのか？」

渚達はシロウ

に連れられ、教会に来ていた。其処には生き残ったライダー達がいる。シロウは5つのカードデッキを並べながら言った。

シロウ「このライダーバトル、後3日の内に決着がつかなければ、お前達は願いを叶えられない。」

シュウイチ「何？」

シロウ「残ったライダーは全部で7人。」

レンは周りを見渡し言った。

レン「7人？後の1人は何処にいる。」

シロウ「いずれ現れる。お前達の前に。」

するとシュウイチが立ち上がり、

シュウイチ「じゃあ、さっさと始めるか。」

ミホ「そうね。」

タケシ「ああ。此処で決着をつけてやる。」　ミホはタケシを睨み付けた。そしてレンとシュウイチも互いを睨み付けている。するとシンヤが立ち上がり、

シンヤ「みんな待てよ！こんな戦いに意味ねえよ！モンスターを倒す為だけに戦えばいいじゃないか！」

だが誰もシンヤの言葉に耳を傾けず、カードデッキを手にとり鏡の前に立ちベルトを出現させた。

ミホ・タケシ「変身ー！」

ミホはファムに、タケシは王蛇に変身してミラーワールドに入っていた。

シンヤ「お、おい！」

別の鏡の前ではレンとシュウイチがベルトを出現させた。

レン・シュウイチ「変身！！」

レンはナイトに、シュウイチはゾルダに変身してミラーワールドに入ってしまった。シンヤ「くそ！なんでだよ！！」

すると渚が、

渚「城島、お前は松田とゾルダを止めに行け。俺はファムと王蛇を止めに行く。」

シンヤ「ああ！」

シンヤは鏡の前に立ちベルトを出現させた。そして変身ポーズをとり、

シンヤ「変身！」

シンヤは聖龍に変身してミラーワールドに入ってしまった。そして渚もデイルライダーバーを腰に装着してバックルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出し変身ポーズをとり、

渚「変身！！」

そしてデイルライダーバーにカードを装填してバックルを閉じた。

デイライドライバー「カメンライド・デイライド！」
渚はデイライドに変身してミラーワールドに入っていた。

その頃ファムは王蛇に苦戦していた。

王蛇「どおした、その程度か？」

ファム「萩野！！」

ファムが王蛇に襲いかかろうとした瞬間王蛇が何者かに撃たれた。

王蛇「ぐっ！・・・ん？」

其処にはライドブツカー・ガンモードを構えたデイライドがいた。

ファム「誰？」

王蛇「なんだ貴様！」

デイライド「とりあえず王蛇、お前を止める。」

王蛇「小癩な！」

王蛇はデイライドに襲いかかるがデイライドはいとも簡単に避け、前蹴りを喰らわし間合いをとった。

デイライド「新しいカードを試すか・・・。」
デイライドはバックルを開き、ライドブツカーからカードを一枚取り出し、

デイライド「変身！」

そしてデイライドライバーにカードを装填してバックルを閉じた。

デイルイドライバー「カメンライド・ブレイズ！」

デイルイドはデイルイド・ブレイズ・キバフォームに変身した。

ファム「姿が変わった!？」

王蛇「ほお、面白い。」DブレイズKF「行くぜ……。」

DブレイズKFと王蛇は互角の戦いを繰り広げていた。王蛇はデッキからカードを一枚取り出しベノムバイザーに装填した。

ベノバイザー「ソードベント！」

王蛇はベノサーベルでDブレイズKFを切り裂いた。

DブレイズKF「どわ!この野郎！」

DブレイズKFはバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しデイルイドライバーに装填してバツクルを閉じた。

デイルイドライバー「フォームライド・ブレイズ!ガルル！」

DブレイズKFはデイルイド・ブレイズ・ガルルフォームにフォームチェンジした。そして左手にはガルルセイバーが握られていた。

DブレイズGF「行くぜ！」

DブレイズGFと王蛇は互角の戦いを繰り広げていた。そしてDブレイズGFの一撃で王蛇は吹き飛んだ。

DブレイズGF「てやあ！！！！」

王蛇「ぐはあっ！！ちっ！」

王蛇はデッキからカードを一枚取り出しベノバイザーに装填した。

ベノバイザー「スウィングベント！」

そして王蛇はエビルウィップでDブレイズGFに反撃した。

王蛇「喰らえ！！！」

DブレイズGF「うわっ！！この野郎！」

DブレイズGFはバツクルを開きライドブッカーからカードを一枚取り出しデイルイドライバーに装填した。

デイルイドライバー「フォームライド・ブレイズ！バツシャー！」

DブレイズGFはデイルイド・ブレイズ・バツシャーフォームチェンジした。そして右手にはバツシャーマグナムが握られていた。王蛇はDブレイズBFに近づこうとするがDブレイズBFのバツシャーマグナムで射撃してくるので中々近づけない。

王蛇「イライラするんだよ……！」

そう言つと王蛇はデッキからカードを一枚取り出しベノバイザーに装填した。

ベノバイザー「ストライクベント！」

王蛇の右手にメタルホーンが現れた。DブレイズBFはバツシヤーマグナムで攻撃をするが、王蛇はメタルホーンを盾にして突進していた。

DブレイズBF「ぐわっ！ちっ、パワーにはパワーか。」

DブレイズBFはバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しデイルイドライバーに装填してバツクルを閉じた。

デイルイドライバー「フォームライド・ブレイズ！ドツガ！」

DブレイズBFはデイルイド・ブレイズ・ドツガフォームにフォームチェンジした。そしてドツガハンマーで攻撃した。二人は工場の中で戦っていた。そこには激しい戦いをしているナイトとゾルダ、それを止める聖龍がいた。そしてゾルダがデツキからカードを一枚取り出しマグナバイザーに装填した。

マグナバイザー「ファイナルベント！」

するとゾルダの目の前にマグナギガが現れた。そしてマグナギガの背中にマグナバイザーを装着した。

聖龍「やばっ！！」

ゾルダが引きがねをひいた瞬間、マグナギガの身体中からミサイルやビームが発射した。

DブレイズDF・聖龍・ナイト・ファム・王蛇「うわあああああ
あ！！！！！！！！！」

果たして渚達はどくなってしまうのか・・・。

次回、仮面ライダーディライド。

第7話 E P I S O D E F I N A L

全てを破壊し、全てを繋げ！

第6話 ファイナルバトル・聖龍ワールド（後書き）

第7話なのに題名がEPISODE FINALって……。
ややこしい……。

第7話 EPISODE FINAL (前書き)

連続投稿です。

第7話 EPISODE FINAL

これまでの仮面ライダーデイライドは……。

詳しくわ第6話をお読み下さい。

DブレイズDF・聖龍・ナイト・ファム・王蛇「うわあああああ
あ……！」

DブレイズDF達はゾルダのファイナルベントでミラーワールドから出されてしまった。

渚「どわあああ！」

彩夏「渚君！」

ユウキ「シンヤ！レン！」

ユウキと彩夏は渚達に駆け寄った。

彩夏「渚君、大丈夫？」

渚「ああ。ちつ、あいつめちゃくちゃじゃねえか……。」

シンヤ「ああ。ありゃ反則だ……。」

ユウキ「そんなにすげえのか……。」

渚君が話していると、シンヤの携帯が鳴った。

シンヤ「はい、しもしも。」

渚「古っ！」シンヤ「え！？ユイちゃんが！？」

彩夏「ユイちゃんがどおしたの!？」

シンヤ「居なくなっただって……。」

渚達はユイを探しに行った。ユイを見つけると、ユイは何かを掘り出していた。

シンヤ「ユイちゃん！どおしたんだ!？」

だがユイはシンヤの言葉も聞かず、ひたすら掘り続けた。そして何やら箱の様な物が出てきた。その箱を開けると、割れた鏡と絵が出てきた。シンヤは絵を手に取り、

シンヤ「何だよこれ……。ドラグライトニングじゃないか。ダークウィングも。」

渚「こっちはマグナギガにベノスナイカーだ……。」

その絵にはモンスターが描かれていた。すると何処から金属音が聞こえてきた。

渚「ちっ！こんな時に！」レン「行くぞ！」

シンヤ「ああ！」

渚達は音のする方へ走っていった。

渚達は変身してモンスターと戦っていた。ゾルダとファムと王蛇も戦っていた。すると数体のモンスターが何処かに逃げに行った。それを見たデイライドは、

デイライド「逃げんな！城島！松田！追うぞ！」

聖龍「ああ！」

ナイト「わかつてる！」

その頃ゾルダ達はモンスター達と戦っていた。すると何処から黄金の光と共に何者かが現れた。

????「そろそろ時間がない。貴様等は用済みだ。」

何者かはデッキからカードを一枚取り出しバイザーに装填した。

バイザー「ファイナルベント!」

すると黄金の光と共にゾルダ達は蒸発するかの様に消えてしまった。

ゾルダ・ファム・王蛇「うわあああああ!!」

その頃渚達を追ってやって来たユウキと彩夏は鏡から何か出てくる音がして、

ユウキ「ん?彩ちゃん!あれ!」

彩夏「ん?」

彩夏はユウキの指差す方向を見た。其処からは黄金の光が出ているのが見えた。

彩夏「行つて見よ!ユウキ!」

ユウキ「うん!」

ユウキと彩夏は光の方へ走っていった。

その頃デイライド達を3つに別れてモンスター達を追っていた。デイライドは駐車場でモンスター達と戦っていた。

デイライド「はあ!てや!行くぜ!」

デイルライドはバックルを開きライドブッカーからカードを一枚取り出しデイルライドライバーに装填してバックルを閉じた。

デイルライドライバー「アタックライド・スラッシュ！」

デイルライドはデイルライドスラッシュでモンスター達を一掃した。

デイルライド「ふう、こんなもんかな。」

デイルライドが帰ろうとすると、何処から足音が聞こえてきた。

デイルライド「ん？」

デイルライドが振り向くと聖龍？がこちらに歩いてきた。

デイルライド「城島か？・・・いや、違う・・・。」

そのライダーはリュウガだった。

デイルライド「リュウガだと？」

リュウガ「・・・はあ！」

リュウガは突然デイルライドに襲い掛かってきた。

デイルライド「ちっ！」

デイルライドとリュウガが戦っていると、ナイトが現れた。ナイトは暗くてリュウガが聖龍だと思い込み、

ナイト「城島・・・。」

デイライドはリュウガに苦戦していた。するとリュウガは突然攻撃を辞め去っていった。

デイライド「何だったんだ？」

渚達が花鶏に戻ると、レンが先に戻っていた。

シンヤ「レン……。」

何故かレンはシンヤを睨み付けた。

渚「ん？」

シンヤ「何だよ……。」「レン「貴様、なぜ近藤を襲った。」

シンヤ「は!？」

レン「戦いを止めたいと言って相手を油断させるのがお前の手か？」

シンヤ「なんだよ!意味わかんねえよ!」

するとレンはシンヤの胸ぐらを掴み、

レン「とぼけるな!戦え!俺と!」

するとユイが、

ユイ「二人共やめて!」

レン「ユイ……。」

ユイ「シンヤ君もレンも騙されてるんだよ、お兄ちゃんに……。」「

渚達は場所を変えて話していた。

ユイ「私ね、小さい頃鏡の中に行った事があるの。」シンヤ「え！
？どうして!？」

ユイ「小さい頃私男の子に会って一緒に遊んだんだ。そして明日も
遊ぼうって約束したのに、その子は来てくれなかった。私悲しくて、
ずっとモンスターの絵を描いてた。そしたら鏡の中の私が私をミラ
ーワールドに連れてってくれた。でも私は其処に居すぎたせいで私
は其処から出られなくなったの。そしてモンスターの絵と引き換え
に鏡の中の私の命を貰った。でもその命は20歳までしかもたない。
だからお兄ちゃんはライダーバトルを始めた。私に一番強い命を与
える為に。」

渚「成る程な……。」

シンヤ「そんな……、なんでだよ！なんでユイちゃんが死ななく
ちやいけやいんだ！」

シンヤはユイの肩を掴んで言った。するとレンが、

レン「俺は戦いを辞めるつもりはない。」

シンヤ「レン！何言ってるんだよ！」

レンはそのまま去っていった。

渚達も一度写真館に帰ろうとすると、ユウキと彩夏が、

ユウキ「渚、これ……。」

渚「これはっ！」

ユウキが取り出したのはファムとゾルダと王蛇のデッキだった。

渚「どおゆうことだ。何故デッキが……。」

ユウキ「多分誰かにやられたのかも……。」

すると現実世界にモンスターが現れた。

ユウキ「何っ!?!」

渚「お前等は行け、ミラーワールドに逃げられたら厄介だ。」

ユウキ「わかった。行こう彩ちゃん!」

彩夏「うん!」

ユウキと彩夏を帰すと渚はデイルाइドライバーを腰に装着してバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出し、変身ポーズをとり、

渚「変身!」

そしてバツクルにカードを装填してバツクルを閉じた。

デイルाइドライバー「カメンライド・デイルाइド!」

渚はデイルाइドに変身してモンスター達に挑んで行った。

その頃シンヤは花鶏で考え事をしていた。するとふとてるてる坊主が目に入った。

シンヤ「これは・・・まさか!」

シンヤは昔女の子とてるてる坊主を作ったのを思い出した。

シンヤ「ユイちゃんだったんだ、あの女の子。じゃあ、ライダーバトルが始まったのも、ユイちゃんがミラーワールドに入ったのもすべて、俺のせいじゃないか!?!?!」

シンヤが膝をつき、ショックをうけていると、

???「そおだ、お前のせいだ。」

すると鏡からもう1人のシンヤが現れた。シンヤは立ち上がり、

シンヤ「どおゆうことだ!? 誰だお前!」

もう1人のシンヤ「俺はお前だ。鏡の中のお前だ……。」

シンヤ「何?」

鏡の中のシンヤ「なあ、菊地ユイを救いたくないか?」

シンヤ「え?」

鏡の中のシンヤ「俺とお前が1つになれば最強のライダーが生まれる。そしたら菊地ユイを救う事が出来るんだぞ……。」

シンヤは首を横に振った。すると鏡の中のシンヤはシンヤに近づきながら、

鏡の中のシンヤ「受け入れろ、俺を!」

シンヤは鏡の中のシンヤに威圧されて、首を縦に振ってしまった。すると鏡の中のシンヤはニヤリと笑い、シンヤの胸に手を当てた。するとシンヤが鏡の中のシンヤに取り込まれていった。そこにレンが現れて、

レン「誰だ貴様!」

鏡の中のシンヤ「ミラーワールドからのライダー、リュウガ……!」

シンヤは完全に取り込まれてしまった。

鏡の中のシンヤ「俺はもう鏡の中の存在じゃない!俺は存在する。」

最強のライダーとして・・・！」

鏡の中のシンヤはデッキを前に突きだしベルトを装着して、

鏡の中のシンヤ「変身！」

鏡の中のシンヤはリュウガに変身してレンに襲い掛かった。

その頃ユイとある建物の一室にいた。机には自分の誕生日ケーキが置かれていた。そして、

ユイ「出てきて、お兄ちゃん！今日あたしの誕生日なんだよ？」

するとシロウが現れて、

シロウ「ユイ、俺はお前の傍にいる。そしてお前を守る、これからも。」

しかしユイは、

ユイ「お兄ちゃん、もおいしいよ。あたしお兄ちゃんに会えただけで本当によかった。ありがとう、お兄ちゃん。そして、大好きだよ・・・。」

ユイはそう言うところどころの火を消した。部屋は新聞紙などで覆われているた為、ろうそくの火が消えた瞬間真っ暗になった。

シロウ「ユイ！」

シロウは急いで部屋中に貼られた新聞紙を剥がした。するとそこには、安らかに眠るユイがいた。

シロウ「ユイ……！」

ユイの手首からは血が流れていた。

シロウ「ユイ……、あああ、あああ、うわあああああ……！！！」

シロウは悲しみのあまり街中の鏡を全て割った。

その頃ナイトはリュウガと戦っていた。だがリュウガは聖龍を取り込んでいる為、戦闘力が倍になっている。その為ナイトは苦戦していた。するとシロウの叫び声が聞こえてきた。ナイトは何かを感じ、ダークウィングでユイの居る建物に向かった。

その頃デイルイドも同じようにシロウの叫び声が聞こえてきた。そしてユイの所へ行くナイトを見て、デイルイドもその建物に向かった。レンがユイの所にたどり着くと、安らかに眠るユイがいた。

レン「ユイ……。」

手首を見ると切り傷があった。それを見たレンは、

レン「ユイ、お前何で……！」

其処へ渚が到着した。

渚「何？ユイ……。やはりそおゆう事が……。」

するとリュウガ現れた。渚は2人の前に立ち、デイドライバーを取り出し、変身しようとするが、突然オーロラの壁が現れ渚を包みんだ。そしてリュウガは2人に近付くが、安らかに眠るユイを見た途端急にリュウガは苦しみはじめた。

リュウガ「ぐっ！貴様！俺から離れようとうのかっ！」

するとリュウガの体からシンヤが現れ、リュウガとの融合が解けた。

リュウガ「貴様！何のつもりだ！」

シンヤはユイを見ると、

シンヤ「ユイちゃん、俺、わかつたから……。」

リュウガ「何を言ってる！俺を受け入れろ！戦いに勝てば、まだユイを救う事ができるんだぞ！」

シンヤ「もおお前には騙されない！ユイちゃんはそんな事望んでない！他人の命なんていらなんだよ！！それが、ユイちゃんの選んだ道なんだ……。」

リュウガ「ふっ、……馬鹿め！はあ！！！」

リュウガはシンヤに襲い掛かった。シンヤはデッキ取り出し、

シンヤ「変身！！！」

シンヤは聖龍に変身してリュウガと一緒に下へ飛び降りた。

その頃渚は河川敷にいた。するとシロウが現れた。

渚「菊地シロウ……。」「シロウ「輝く光の戦士・デイルライド。貴様の命を貰う！」

渚「久しぶりに呼ばれたな。その名で。だが！」

渚はデイルライドライバーを取り出し腰に装着してバックルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出し、変身ポーズをとり、

渚「変身ー!!」

デイルライドライバーにカードを装填してバックルを閉じた。

デイルライドライバー「カメンライド・デイルライド！」

渚はデイルライドに変身した。するとシロウは指を鳴らした。するとオーロラの壁からレイドラグーン究極態が現れた。

デイルライド「行くぜ！はああああ！」

デイルライドはライドブツカー・ソードモードを手にレイドラグーン究極態に走り出した。だがレイドラグーン究極態の攻撃の前に、手も足も出なかった。

デイルライド「この野郎！」

そう言うとデイルライドはバックルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出し、

デイルライド「変身。」

そしてデイルライドライダーにカードを装填してバツクルを閉じた。

デイルライドライダー「ファイナルカメンライド・リュ・リュ・リュ・リュウキ！」

デイルライドはデイルライド・龍騎サバイブに変身した。D龍騎Sはライドブツカー・ソードモードで反撃した。そしてバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しデイルライドライダーにカードを装填してバツクルを閉じた。

デイルライドライダー「ファイナルアタックライド・リュ・リュ・リュ・リュウキ！」

するとドラグランザーが現れ、バイクに変形してD龍騎Sを乗せて走り出した。そして『ドラゴンファイヤーストーム』を発動した。

D龍騎S「はああああー!!」

レイドラグーン究極態は爆発した。するとシロウが、

シロウ「ならば、俺が相手だ！変身！」

シロウは仮面ライダーオーデインに変身した。

D龍騎S「そうか、お前がゾルダ達を……。」「
オーデイン「奴等はお用済みだったからな。」

D龍騎S「腐ってるぜてめえ！」

D龍騎Sはオーデインの一撃で変身が解けてしまい、渚の姿に戻ってしまった。

その頃聖龍とリュウガは互角の戦いを繰り広げていた。そして屋上で戦っていたが、リュウガの一撃で聖龍はレンが居る所へ戻ってきた。そしてデッキからカードを一枚取り出しライトバイザーに装填した。

ライトバイザー「ファイナルベント！」

それを見たリュウガもデッキからカードを一枚取り出しバイザーに装填した。

バイザー「ファイナルベント！」

聖龍のは構えをとり、

聖龍「うおおおおー!!!」

またリュウガも構えをとった。

リュウガ「はああああ・・・。」

2人は走り出し、聖龍は『ライトニングライダーキック』、リュウガは『ドラゴンライダーキック』を発動した。2人の技がぶつかった瞬間大爆発が起きた。するとレンの前にシンヤがいた。レンはシンヤに、

レン「お前、城島か？」

シンヤの目からは涙が流れていた。それを見たレンは、

レン「城島……。」

シンヤ「渚は？」

レン「消えた。」

シンヤ「え？」

すると1人の青年が現れて、

青年「連れてってやるうか？」

その頃渚はオーデインにとどめを刺されそうになっていた。するとオーロラの壁が現れ、其処からシンヤが現れた。

渚「城島……。」

シンヤは頷いた。それを見た渚も頷いた。するとオーデインが、

オーデイン「貴様等！何処まで邪魔する気だ！」

すると渚が、

渚「まだわかんねえのか！！」

オーデイン「何？」

渚「俺はお前の様に、人を愛する事ができない！人の死を悲しむ事もできない！だがユイの気持ちは解る！ユイはそんな事望んでない！！他人の命なんていらねえんだよ！！！！！！」

渚は自然とシンヤと同じ事を言っていた。

オーデイン「貴様・・・一体何者だ!？」

渚「通りすがりの仮面ライダーだ!頭に叩き込んで!行くぞ!シンヤ!」シンヤ「ああ!」

渚はデイルाइドライバーを腰に装着してバックルを開きライドブッカーからカードを一枚取り出し変身ポーズをとった。シンヤもデッキを前に突きだしバックルを腰に装着して変身ポーズをとった。

渚・シンヤ「変身!!!」

そしてデイルाइドライバーにカードを装填してバックルを閉じた。

デイルाइドライバー「カメンライド・デイルाइド!」

シンヤもデッキをバックルに装填した。渚はデイルाइドに、シンヤは聖龍に変身した。2人はオーデインに向かって走っていった。そしてオーデインと間合いをとり、

オーデイン「貴様等!」

デイルाइド「こっからが本当の戦いだ。シンヤ。」

聖龍「ああ。」

するとライドブッカーからカードが三枚飛び出してきた。聖龍のKR・FFR・FARをデイルाइドがてにとると、絵柄を取り戻した。そしてFFRのカードをバックルに装填してバックルを閉じた。

デイルライドライバー「ファイナルフォームライド・セ・セ・セ・セ・セ
イリュウ！」

すると聖龍の肩に二つのドラグシールドが装着された。

聖龍「え？何だこれ？」

オーデインはデッキからカードを一枚取り出しバイザーに装填した。

バイザー「ファイナルベント！」

オーデインはゴルドフェニックスを召喚して、2人とどめを刺そうとした。するとデイルライドは聖龍を押しした。すると聖龍はドラグライトニングを模した、セイリュウドラグライトニングに変形した。そしてオーデインの必殺技を跳ね返し、ゴルドフェニックスに戦いを挑んだ。デイルライドもオーデインに戦いを挑んだ。そしてセイリュウドラグライトニングはゴルドフェニックスを倒した。そして聖龍に戻りデイルライドに加勢した。そして再びセイリュウドラグライトニングに変形してオーデインを吹っ飛ばした。そしてデイルライドはライドブッカーからカードが一枚取り出しデイルライドライバーに装填してバツクルを閉じた。

デイルライドライバー「ファイナルアタックライド・セ・セ・セ・セ・セ
イリュウ！」

デイルライドとセイリュウドラグライトニングは飛び上がり、
デイルライドシャイニング』を発動した。

デイルイド・セイリユウドラグライトニング「はあああああああ！！！！」
オーデイン「ぐわあああああ！！！！」

2人は変身を解いた。そしてオーロラの壁に包まれて元の場所に戻った。

レン「城島、近藤。」

2人は頷いた。渚がふと外を見ると、数えきれないレイドラグーンの大群がいた。

渚「ちつ、あいつ等を何とかしねえと！！」

渚がレイドラグーンの大群に向かおうとすると、シンヤが渚の肩を掴んだ。

渚「ん？」

シンヤ「ここは俺達に任せる。」

レン「お前にはやることあるんじゃないのか？」

シンヤとレンは前に出た。するとレンが、

レン「城島、俺には今まで友と呼べる者が居なかった。だが、お前と近藤は友と呼べるかもしれない。」

シンヤ「ああ、友達さ。俺達は。」

シンヤの言葉に渚は頷いた。

レン「だが、俺は勝たなければならない。たとえ可能性が無くても」

も、これに賭けるしかないんだ。・・・俺と戦ってくれ、城島。」
シンヤ「ああ。俺の願いを聞いてくれたら、考えてやるよ。」
レン「なんだ？」
シンヤ「死ぬなよ、レン。」
レン「お前もな！」

渚は2人を写真におさめると、部屋を後にした。

シンヤとレンはデッキを取り出し前に突きだした。レンは変身ポーズをとり、

レン「変身！」

レンはナイトサバイブに変身した。シンヤも変身ポーズをとり、シンヤ「変身！」

シンヤは聖龍サバイブに変身した。そして2人は互いの契約モンスターに飛び乗りレイドラグーンの大群に突っ込んでいった・・・。

渚は岬写真館に戻っていた。

彩夏「シンヤさんとレンさん、大丈夫かな？」
渚「あいつ等なら大丈夫だろ。」
ユウキ「ああ、2人にはユイちゃんがついてる。」

信次郎は渚の写真を見て、

信次郎「うん、これは中々良い写真だな。」
アキラ「うん！友情ってやつね！」

そこにはレイドラグーンの大群に目を向けるシンヤとレンの間に微笑むユイが写っていた。そして渚はポケットから龍騎のFKRのカードを取り出した。そしてカードを光、コンプリートカードと同じ素材のカードに変わり、其処には聖龍のマークが描かれていた。

渚「よし、行くか！次の世界に！」

渚が立ち上がると、背景ロールが降りてきた。其処には、石盤のような者が描かれていた……。」

次回、仮面ライダーディライド。

第8話 清掃員・フォルス

全てを破壊し、全てを繋げ！

第7話 EPISODE FINAL (後書き)

どうでしたか？感想・ご意見お待ちしております！

第8話 清掃員・フォルス（前書き）

第8話です！どうぞ！

第8話 清掃員・フォルス

これまでの仮面ライダーデイライドは……………。

詳しくは第1〜7話をお読み下さい。

闇の世界を後にした渚達は次の世界・フォルスの世界に来ていた。

「次の世界に来たのはいいけど……………」

「いいけど……………」

ユウキと彩夏は渚をじっと見ていた。

「ん？何だ？」

「その服装……………」

「作業着？」

「なんだろうな」

渚はそう言うと服のポケットを探りだした。
すると、カードが出てきて、

「「BOARD」？」

「何それ」

「まさかっ!」

すると、三人の横に一台の車が停まった。

「ん?」

車の中から気の強そうな女性と優しそうな青年が現れた。
そして二人は渚の方へ行き、

「ちょっと！こんなとこで何してんの！」

「そうだよ！早く仕事に戻るよ！」

「し、仕事！？」

そして二人は渚を車に乗りこませた。

「早く乗って！」

「ほら！」

「いてえ！いてえ！」

そして渚は車で連れさられる前にユウキと彩夏にこう伝えた。

「この世界について調べててくれ！」

「ほら！」

「だからいてえって！」

そのまま渚は連れていかれてしまった。

「渚……ガンバ……」

「グッドラック……」

もう一人の世界の破壊者・デイライド。新たなる九つの世界を巡り、
その瞳は何を見る？

第8話【清掃員・フォルス】

連れさられた渚は高層ビルに連れてこられた。

「ほら！降りて！」

「ああ〜いてえいてえ！」

渚は無理矢理車から降ろされた。

そして、

「行くよ！」

「どわあー！いてえいてえー！ひきずるなー！」

「それはやりすぎだつて！」

渚はそのままひきずられある部屋に連れていかれた。部屋に入ると三人の青年が居た。

「カズキ君、連れて来たよ！」

「シオリさん、連れて来たのはいいけど大丈夫？」

「え？」

カズキがそう言うのも仕方ない。

シオリの横にはスタボロの渚が居た。

「あ！大丈夫!？」

「そう言うなら最初っからすんじやねえよ……………」

「と、とりあえず自己紹介しようよ！」

「よし！俺は剣谷カズキ！よろしく！」

「俺は天野サクヤだ、よろしく！」

「北条ムツキです！よろしく！」

「私は江川シオリ、よろしく！あとさつきはごめんね」

「僕は竹財コタロウ、よろしくね！」

「俺は近藤 渚だ、よろしくたのむ」

自己紹介が終わると、シオリが、

「よし！それじゃあみんな仕事するわよ！」

そしてシオリは役割分担を始めた。

「じゃあ渚君はカズキ君と、サクヤ君はムツキ君と、コタロウは私
とお願いね。それじゃあみんな！しっかり働いてね！」

「……「おおー！」」「」

そして渚も遅れながら、戸惑いながら、

「お、おおー……」

渚はカズキと共にトイレを掃除していた。

「はあ、くつせえ」

「まあそう言うなって！」

カズキは渚とは逆に凄く楽しそうに仕事をしていた。そんなカズキ
を見て渚は、

「剣谷お前、楽しそうだな……」

「まあね！人の為に働くのが大好きだから！」

そして渚はカズキにある人物を重ね合わせた。

「……………一真……………」

「一真って?」

「ああ、なんでもない」

そして渚はカズキにこの世界のことを聞き始めた。

「剣谷、この会社はどういう会社なんだ?」

「え? まあ渚も清掃係に配属されたからいつか」

すると、カズキの顔は真剣な顔つきになった。

「この会社は表向きは世界的大企業だが、密かにライダーシステムを開発して、謎の不死身の生命体、『アンデッド』に対抗したんだ」

「ライダーシステムか……………。ということはお前もライダーなのか?」

「ああ。俺はフォルス、サクヤさんがギャレンでムツキがレンゲルだ」

「なるほどな……………」

岬写真館

「んで、この世界について何か解ったか?」

と、渚がユウキと彩夏に聞くと、

「全然だな……………」

「あの会社って結構謎が多いみたいだし……………」

ユウキと彩夏は収穫が0だった。

だが渚は、

「謎が多いか……」

彩夏の言った言葉が引つ掛かっていた。

BOARD

渚はこの日はサクヤとムツキと共に仕事をしていた。カズキは社長室辺りを掃除していた。

すると社長室から社長の山路ケイと秘書の会話が聞こえてきた。

「もうすぐこの世界はアンデッドの物だ……。そして彼もな…、彼の様子はどうだ？」

と、ケイが聞くと秘書は、

「まだ自我を保ってますね。でも時期に目覚めるでしょう」

「そうか。……ふふふ……」

その話を聞いたカズキは、

「世界をアンデッドの物にだと？それに彼っつていつたい……」

するとケイはカズキの気配を感じたのか、秘書に目で命令をした。その瞬間、秘書が白と緑で彩られたローチ、『デイオールローチ』に変貌して、ドアを突き破りカズキに襲いかかった。

「何！？畜生！こっつなったら！」

カズキはフォルスバツクルを取り出し、ラウズカードを装填して腰に装着した。そして変身ポーズをとり、

「変身！」

と言ってフォルスバツクルを開いた。

《オープンアップ！》

するとフォルスバツクルから白色のオリハルコンエレメントが現れ、カズキがそれを通り抜けた瞬間カズキの体が『仮面ライダーフォルス』に変わった。

フォルスは醒剣フォルスラウザーでディオールローチに斬りかかった。

そして何度か切り裂くと、フォルスラウザーからラウズカードを二枚取り出しフォルスラウザーにラウズした。

《スラツシュ・シャドウ……ファントムスラツシュ！》

フォルスラウザーが黒いオーラに包まれ、勢い良くディオールローチを切り裂いた。

「てやあああ！！」

「ぐああああ！！」

切り裂かれたディオールローチは声を上げ爆発した。

ドカアアアン！！

「ふう」

フォルスが一息ついていると、突然警報器が作動した。

ブーツ！ブーツ！

「な、なんだ！？」

フォルスが困惑していると、

『社内にアンデッドが侵入！アンデッドが侵入！社員一丸となって排除せよ！』

というアナウンスが響いた。

それを聞いたフォルスは、

「アンデッド？でもさっき俺が倒した筈……っ！まさか！」

フォルスがアナウンスの指示の意味を理解した瞬間、社長室から大量のデウォールローチが現れた。

「な、なんだと！？」

フォルスはその場を逃げ出した。

その頃別の階を掃除していた渚達もアナウンスを聞き、階段を駆け上がっていた。

すると前からフォルスが現れ、

「ああー！どいてどいて！！」

「カズキ！？」

「カズキさん！？」

「おい剣谷！何処に行くんだ！？」

と、渚達が聞くもフォルスは返事もせず階段を全速力で降りていった。

「なんなんだ？」

と、渚達が疑問に思っていると、前から大量のディオールローチが現れた。

「……うそおお！！！！！！」

三人はなんとかディオールローチの進行を交わすと、社長室に向かって階段を駆け上がった。いった。

社長室に着くと、ケイが椅子に座っていた。

「おやおやライダー諸君、どうしたのかね？」

ケイがそう聞くと、最初に口を開いたのはサクヤだった。

「社長！あの大量のローチは何なんですか！？」

サクヤが聞くとケイは、

「あれはディオールローチ。裏切者を排除するために私が造り出し

た
」

次にムツキが口を開いた。

「裏切者つてカズキさんの事ですか!？」

「ああそうだ」

「いったいどういうことですか!？カズキさんが裏切者だなんて!」

「落ち着けムツキ!」

怒るムツキをサクヤがなだめる。

そしてケイが再び口を開く。

「奴は我が偉大な計画を聞いてしまった」

「偉大な計画?」

ここで渚が口を開いた。

「何ですか?偉大な計画つて」

サクヤが聞くとケイは、

「良いだろう!冥土の土産に教えてやろう!私はこの世界をアンデツドの物にする!」

「アンデツドの物にだと!？」

ムツキは驚きの声を上げてしまった。

「彼、ジョーカーの力と我がディオールジョーカーの力を使ってな
!?!」

その瞬間ケイは、白と緑で彩られた『ディオールジョーカー』に変貌した。

「新たなジョーカーだと!?!」

ディオールは拳に力を籠めて渚達に放った。

「やべえ!?!」

渚達は急いでバツクルを取り出した。

「『『変身!?!』』」

《カメンライド・ディライド!》

《ターンアップ!》

《オープンアップ!》

三人は瞬時にディライド、ギャレン、レンゲルに変身した。だが既にディオールは姿を消していた。

「何処に行った!」

レンゲルがそう言うとディライドは、

「取り敢えず剣谷を追っぞ」

「その方が良さそうだな」

ギャレンがそう答えると3人は社長室をあとにした。

その頃カズキは変身を解除してディオールローチから逃げていた。

「何処まで追つてくんだよ〜!」

するとカズキの目の前にユウキと彩夏が現れた。

「渚君、ちゃんと仕事してるかな〜」

「彼奴の性格上ちゃんとしてるとは思えんな」

2人がそんな会話をしていると、前からカズキが全速力で走って来た。

「彩ちゃん、何あれ?」

「男の人みたいだね」

「どお〜いてえ〜!」

カズキはそう叫びながらユウキと彩夏の間を走り抜けた。

「ええ〜!?!」

「なんだよ!」

だがカズキはそのまま走り去った。

「なんだったんだ?」

ユウキが疑問に思っていると彩夏が青ざめた表情でユウキの肩を叩いた。

「ユ、ユウキ……………あれ……………」

「え?何?」

ユウキが彩夏の向く方向を見ると、大量のディオールローチがユウキと彩夏の方へ走って来ていた。

「「いゝやゝ!!!」」

ユウキと彩夏は恐怖?で、その場を動けなかった。だがその瞬間聞き覚えのある電子音が聞こえてきた。

《アタックライド・ブラスト!》

デイライドが『デイライドブラスト』放ってユウキと彩夏を救った。

「渚君!」

「助かったぜ、渚」

「ユウキ、行くぞ!」

「ああ!」

ユウキはユウキベルトを取り出し腰に巻いて、パスを取り出した。そして左上にあるボタンを押すと、変身待機音が鳴り始めた。

「変身!」

そう叫び、パスをセタッチした。

《スカルフォーム!》

ユウキは幽汽SFに変身した。

そしてデイライド・幽汽SF・ギャレン・レンゲルは一斉にディオールローチに攻撃を仕掛けた。

だが数が多くこのままではらちがあかないと思ったデイライドはデイオールローチから離れた。

「新しい力を使うか」

そう言うとバックルを開き、ライドブツカーからカードを一枚取り出し、

「変身」

そう言ってバックルにカードを装填してバックルを閉じた。

《カメンライド・セイリユウ！》

デイライドはデイライド・聖龍に変身した。

そして再びバックルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しバックルに装填してバックルを閉じた。

《アタックライド・ストライクベント！》

するとD聖龍の手にドラグクローが装着された。

そしてドラグクローから光のエネルギーを発射する『光龍突破』を発動した。

「てやああああー!!」

ドガアアアン!!

デイオールローチは一気に全滅した。

「凄い……………」

「なんて力だ……………」

ディライドの力にギャレンとレンゲルはかなり驚いた。

「さて、剣谷を追うとするか」

4人のライダーはそれぞれのバイクに跨がりカズキのあとを追った。

その頃カズキは再び出現したディオールローチから逃げていた。逃げているうちに山の中に来ていた。

逃げていると、1人の写真を撮る青年に出会った。

「ハジメ？」

「剣谷か。そんなに慌ててどうした」

「ちょっと大変な事になってさ……………」

「大変な事？」

すると後ろから、

「カズキ君！」

「探したよ」

シオリとコタロウが走って来た。

「シオリさん、コタロウ……………」

「一体どうしたのさ、カズキが裏切者って……………」

コタロウがそう聞いた瞬間再び大量のディオールローチが現れた。

「ちっ、もう来たか！」

そう言うとカズキは再び走り出した。

「ちよつとカズキ君！」

「待ってよ！」

シオリとコタロウはカズキのあとを追った。

カズキが逃げた先には4台のバイクが置いてあった。

「探したぞ、剣谷」

「渚……」

そこには渚・ユウキ・彩夏・サクヤ・ムツキが居た。すると、渚達の目の前に次元の壁が現れた。

「なんだ!？」

次元の壁から出てきたのは鳴滝だった。

「鳴滝か！」

「デイルイド、ここで貴様を葬ってやる……」

すると次元の壁から4体のアンデッドが現れた。しかも全カテゴリーキングだった。

スピードのキング・ダークネスアンデッド

ダイヤのキング・ギラファアンデッド

ハートのキング・パラドキサアンデッド
クローバーのキング・タランチュラアンデッド

「デイルイドオ！貴様の旅もここで終わりだあ！」

鳴滝はそう言い残すと次元の壁に消えて行った。

「鳴滝の野郎、面倒な事しやがって！」

5人は変身の準備を行った。
そして一斉に変身した。

「くっくっく 変身！」「くっく」

《カメンライド・デイルイド！》

《スカルフォーム！》

《《オープンアップ！》》 《ターンアップ！》

5人はデイルイド・フォルス・幽汽SF・ギャレン・レンゲルに変身した。

デイルイドはパラドキサアンデッド、フォルスはダークネスアンデッド、ギャレンはギラファアンデッド、レンゲルはタランチュラアンデッド、幽汽SFはディオールローチ達を相手に戦う。

フォルスはダークネスアンデッドに押されていた。

「くっ！こうなったら！」

フォルスは左腕に装着されたラウズアブソバーからカードを二枚取り出した。取り出したうちの一枚をラウズアブソバーに装填した。

《アブゾーブクイーン!》

そしてもう一枚をラウズした。

《フュージョンジャック!》

その瞬間フォルスの背中に翼が現れ、フォルス『ジャックフォーム』に姿を変えた。

「行くぜ!」

フォルスJFはダークネスアンデッドに猛攻を加えた。

デイライドがパラドキサアンデッドと戦っていると、緑色の衝撃波が飛んできた。

「ぐあ!」

そこにいたのはディオールジョーカーだった。

「ようやく大将のおでましか」

デイライドがそう言うと、パラドキサがデイライドに襲いかかった。だがその攻撃は黒い影によって阻止された。

「ん?」

そこに居たのはハートのライダー・カリスだった。

「ハジメ！」

フォルスJFがそう言うつと、カリスはディライドに、

「こいつは俺に任せろ」

そう言うつてパラドキサに向かつて走って行った。

ディライドはディオールと向き合うつと、

「ここで終わりにしてやる」

「やれるものならやってみろ」

ディオールがそう言うつと2人は同時に駆け出した……………。

次回、仮面ライダーディライド……………。

第9話【ミッシングエース】

全てを破壊し、全てを繋げ！

第8話 清掃員・フォルス（後書き）

感想・ご意見お待ちしております！

第9話 ミッシングエース(前書き)

ようやく書き終わりました！いや〜疲れた〜。

では〜ごんごん〜！

第9話 ミッシングエース

これまでの仮面ライダーディライドは……………。

詳しくは第1〜8話をお読み下さい。

ディライドとディオールは激しい戦いを繰り広げていた。
すると次元の壁がディライドとディオールの間を通り抜けた。

「ん？」

「また鳴滝か!？」

だが次元の壁から現れたのは、最強の鬼と言われる、仮面ライダー響鬼だった。

「ヒビキ? ……いや違う。まさかっ!」

すると響鬼は音撃鼓を取り出し自分の目の前に出現させた。
そして音撃棒・烈火を取り出し技名を叫んだ。

「音撃打! 火炎連打の型!」

勢い良く演奏を始めた。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る。

第9話【ミッシングエース】

響鬼は演奏の終わりに強烈な一撃を音撃鼓を叩き込んだ。

「はぁー……はぁー!!」

すると爆発がおこり、デイルイド達は吹っ飛ばされた。

「……うわぁー!!」「……」

爆発がおさまると、響鬼は姿を消していた。

「今の響鬼はまさか……」

疑問に思うデイルイドを笑顔で眺める一人の青年が居た。

デイルイドが辺りを見回すと、ディオールとアンデッド達は姿を消していた。

「逃げられたか……」

デイルイドがそう言った瞬間カリスが苦しみだした。

「ぐぁぁぁー!!」

「ハジメ!?!」

「どうしたんですかハジメさん!!」

カリスの体が光に包まれた。
そして光が消えた時そこに居たのはカリスではなく、

「うおおおおお!!!」

ジョーカーだった。

「ハジメ!？」

「いったいどういうことだ!？」

「ハジメさんがジョーカー?」

「そんな……」

「やはりな……」

他のライダー達が驚いているのに対しディライドだけが冷静に状況を理解していた。

そしてジョーカーはライダー達に襲いかかった。

5人のライダーはなんとか応戦するが、やはり正体がハジメと解っているためうかつに攻撃できなかった。

「ハジメ!止めてくれ!」「目を覚ますんだ!」

「ハジメさん!」

フォルスJFとギャレンとレンゲルはジョーカーに必死に呼び掛けるが、その声は届かなかった。

「渚、どうする?」

幽汽SFがディライドにそう聞くとディライドは冷静に、

「……………倒すしかない……………」

そう言い放った。

それを聞いた幽汽SFは、

「待て渚！お前自分が何を言ってるのか解ってるのか！？」

「解っている。このまま放って置けば人類はジョーカーに滅ぼされる」

デイライドはそう言うと、バツクルを開きライドブッカーからカードを取り出しバツクルに装填してバツクルを閉じた。

《ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイライド！》

するとデイライドの目の前に十枚の巨大なFARカードが現れた。そしてデイライドはそこへ右足を突きだして、くぐり抜けてライダーキックを繰り出す『デイメンションスマッシュ』を発動した。

「はああああ……！」

『デイメンションスマッシュ』はそのままジョーカーに直撃して爆発が起きた。

ドカアアアン！！

爆発がおさまると、ジョーカーではなくハジメが倒れていた。五人は変身を解除していた。

「ハジメ……！」

カズキとサクヤとムツキはハジメの方へ走って行った。

「渚、お前こうなるって解ってたのか？」

ユウキがそう聞くと渚は、

「さあな」

適当に返した。

岬写真館

「ハジメさん、大丈夫かなあ？」

彩夏が渚に聞くと、

「さあな。たぶんしばらくはジョーカーに目覚めることはないだろうな」

「渚やっぱりお前それを狙ってたのか」

信次郎がテレビをつけるとニュースが放送されていた。

ニュースの内容は、

『先程、謎の生物にアパートの一室が襲われました。そしてこの部屋に住む「森本ハジメ」さんが行方不明になっています。』

そのニュースを聞いた渚達は、

「ハジメさんが!？」

「いったいどうして……………」

「社長さんの仕業だろうな……………」

「社長ってBOARDの？」

「ああ」

そして渚達はハジメの住むアパートへと向かった。

アパートに着くとカズキ達も来ていた。

「ハジメ……………」

落ち込むカズキに渚は、

「剣谷、恐らく森本はBOARDの研究施設に連れていかれたんだろっ」

「研究施設？」

「ああ。恐らくそこで何かとんでもないことをしようとしてるのかもな」

その話を聞くとカズキとサクヤとムツキは自分達のバイクを走らせBOARDの研究施設に向かった。

「渚、俺達も行くっ!」

「ああ!」

そう言ってバイクに跨がろうとすると、一人の青年が現れた。

「よっ!」

「お前は！」

「どうしてこの世界に居るんだ？」

ユウキがそう聞くと青年は、

「おつ、ユウキじゃねえか、久しぶりだな。久しぶりだがそろそろこの世界ともおさらばだ」

「折角会ったのにか？」

「この世界にめばしい物はもう無いからな」

「そっか」

青年は立ち去ろうとする漕にこう言った。

「剣崎一真の世界でのこと覚えてるか？フォルスに同じ道を歩ますなよ、漕」

青年の言葉を聞いた漕は怒りをあらわにして、

「黙れ！！！！」

そう言ったが既に青年は居なかった。

BOARD 研究施設

ハジメは石盤の置かれた部屋に吊るされていた。

「くっくっく、これで邪神の力は私の物だ……」

ケイはそう言うのと装置のスイッチを押した。
その瞬間宙に吊るされたハジメが苦しみだした。

「ぐああああ!!!」

そしてハジメから赤いオーラが現れ、石盤にオーラが集まっていく。
そして石盤の中央にカードが一枚現れた。
その瞬間ハジメは力なく眠りについた。

「はっはっは!!!さあ目覚めよ!ジョーカー!!!」

ケイがそう言った瞬間カズキ達が研究施設の扉をバイクで突き破った。

「ハジメ!!!」

カズキ達はハジメに必死に呼び掛けるが、ハジメは全く動かない。
するとケイが、

「無駄だっ!こいつはもう人間の心を失っている!完全なジョーカーになったのだ!」

「人間の心をだど!?!」

サクヤがそう聞くと、ケイは石盤の中央を指さし、

「奴の人間の心はあのカードに封印されている!」

それを聞いたカズキ達は石盤に向かおうとすると、
ケイがハジメに、

「行け！ジョーカー！」

そう言うとハジメは急に地面に降り立った。

「ハジメ！？」

ハジメはジョーカーに変身してカズキ達に襲いかかった。

「ハジメさん！止めて下さい！」

「ハジメ！止める！」

「ハジメエエエ！！！」

カズキ達は必死にジョーカーに呼び掛けるがその声は届かなかった。

そしてジョーカーは右手に力をためてカズキ達に放った。

カズキ達はなんとか避けたが、爆風で吹き飛ばされた。

「くくくあつ！！」「」

するとそこへバイクに跨がった渚とユウキが駆けつけた。

「大丈夫か！剣谷！」

「渚……………」

渚とユウキはバイクから降りた。

そして5人は並び立って、それぞれのベルトを装着した。

「行くぞ！」

渚の言葉を合図に5人は変身ポーズをとり、

「……変身!!」「……」

《カメンライド・デイルライド!》

《スカルフォーム!》

《オープンアップ!》 《ターンアップ!》

渚はデイルライドに、ユウキは幽汽SFに、カズキはフォルスに、サ
クヤはギャレンに、ムツキはレンゲルに変身した。
すると4体のカテゴリーKが現れた。

フォルスはダークネスアンデッドと、ギャレンはギラファアンデッ
ドと、幽汽SFはパレードキサアンデッドと、レンゲルはタランチュ
ラアンデッドと、デイルライドはディオールとジョーカーという組み
合わせになった。

フォルスとダークネスは互角の戦いをしていた。

だがダークネスの攻撃力に押され始めたフォルスはラウズアブゾー
バーからラウズカードを2枚取り出し、スピードのQをラウズした。
《アブゾーブクイーン!》

さらにスピードのJをラウズアブゾーバーに装填した。

《フュージョンジャック!》

フォルスはフォルスJFに強化変身した。

フォルスJFは強化版フォルスラウザーでダークネスに攻撃した。

「はああ!!!」

ギャレンはギラファに圧倒されていた。

「ぐああ!!!ならば!」

ギャレンはラウズアブゾーバーからラウズカードを2枚取り出し、ダイヤのQをラウズアブゾーバーにラウズした。

《アブゾーブクイーン！》

さらにダイヤのJをラウズアブゾーバーに装填した。

《フュージョンジャック！》

ギャレンはギャレン『ジャックフォーム』に強化変身した。

ギャレンJFは強化版ギャレンラウザーでギラファを銃撃した。

レンゲルはタランチュラに押されていた。

「ぐあああ！！」

タランチュラはレンゲルにとどめをさそうとすると、レンゲルはレンゲルラウザーを振るってタランチュラの攻撃を防いだ。

「てやあ！！！まだ終われない！ハジメさんを取り戻すまでは！！はああ！！」

レンゲルはレンゲルラウザーでさらに攻撃した。

幽汽SFはパラドキサに苦戦していた。

「確か渚の話だといいつらは死なねえんだっただよな！！はあ！！」

幽汽SFはサヴェジガツシャーでパラドキサを切り裂くが、終わりが見えないと思った幽汽SFは、パラドキサと間合いを取りライダ

ーパスを取り出し、ユウキベルトのボタンを押すと変身待機音が流れた。

そしてライダーパスをユウキベルトにセタツチした。

《ハイジャックフォーム!》

幽汽SFは幽汽『ハイジャックフォーム』に変身した。そしてサヴェジガツシャーをネオソードモードに組み換えてパラドキサに斬りかかる。

だが幽汽HFはどうやってパラドキサを倒すか考えているとあることを思い出した。

「そうか！奴等はベルトを狙って攻撃すれば良いのか！」

幽汽HFはパラドキサのベルトを狙って攻撃を始めた。

デイルイドは二体のジョーカーを相手にかなり苦戦していた。

「ちっ！流石にジョーカー二体はきついな……」

「諦めるデイルイド！貴様の負けだ！」

「まだ終われねえなあ！」

そう言うとバックルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しバックルに装填してバックルを閉じた。

《カメンライド・セイリユウ!》

デイルイドはD聖龍に変身して、ライドブツカー・ソードモードで二体のジョーカーに斬りかかった。

フォルスJFはダークネスを圧倒していた。
そしてフォルスラウザーからラウズカードを二枚取り出しフォルスラウザーにラウズした。

《スラツシュ・シャドウ……ファントムスラツシュ!》

フォルスJFは空に舞い上がり『J・ファントムスラツシュ』を發動した。

「はああああ!!!」

「ぐわああ!!!」

ダークネスはフォルスJFの必殺技を喰らい爆発した。そしてラウズカードをダークネスに投げて、ダークネスを封印した。

ギャレンJFはギラファを圧倒していた。

そして空に舞い上がり『J・バーニングショット』を發動した。

「喰らえ!!!」

「ぐわああ!!!」

ギラファはギャレンJFの必殺技を喰らい爆発した。
そしてラウズカードをギラファに投げて、封印した。

レンゲルはタランチュラを圧倒していた。
そして『ブリザードゲイル』を發動した。

「はああああ!!!」

「ぐわああ!!!」

タランチュラはレンゲルの必殺技を喰らい爆発した。そしてラウズカードを投げて、タランチュラを封印した。

幽汽HFはパラドキサのベルトを狙って攻撃していた。そしてライダーパスを取り出しユウキベルトにセタタッチした。

《フルチャージ！》

するとサヴェジガツシャーがオーラをまとい巨大化した。

そしてベルトを目掛けて、『ターミネイトフラッシュ・ハイジャック』を発動した。

「はああああ！！」

「ぐわあああ！」

ベルトを切り裂かれたパラドキサは爆発した。

そしてギャレンから預かったラウズカードを投げて、パラドキサを封印した。

その頃、D聖龍は二体のジョーカーに苦戦していた。そしてディオルの攻撃を受けてディライドに戻ってしまった。

「ぐああああ！」

そこへ幽汽HF達が駆け付けるが、ディオールローチに行く手を阻まれた。

だがフォルスJFはなんとかローチを退けてディライドの下へ駆け付けた。

「大丈夫か！渚！」

「ああ、なんとかな……」「一人増えたところで無駄だ！」

デイオールは右手から衝撃波を放ち二人を攻撃した。

「ぐわあああ！」

二人は変身が解けてしまった。

「無駄だ！貴様等は俺には勝てん！そして愚かな人間共は我々の手で消し去る！」

デイオールは渚とカズキにそう言うが、

「どうかな……？」

「何？」

「確かに人間は愚かだ。だが人間は過ちに気付くとやり直し、例えどんなに転び、失敗しようとも人間はそれを力にして更に進化するんだ！！」

「貴様……、何者だ？」

すると渚はニヤリと笑い、

「通りすがりの仮面ライダーだ！頭に叩き込んで！行くぞカズキ！！」

「ああ！！」

二人はベルトを装着して変身ポーズをとった。

「変身！！」

《カメンライド・デイライド！》

《オーブンアップ!》

渚はデイルライドに、カズキはフォルスに変身した。
するとライドブツカーからカードが三枚飛び出した。デイルライドがそれを手に取るとカードが力を取り戻した。
二人は二体のジョーカーに攻撃をしかけた。

「カズキ、行くぞ」

「ああ」

デイルライドはバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填してバツクルを閉じた。

《ファイナルフォームライド・フォ・フォ・フォ・フォルス!》

「ちよつと痛いぜ」

「は?」

デイルライドはそう言うと、フォルスの背中に触った。するとフォルスはフォルスラウザーを模した『フォルスセイバー』に超絶変型した。

デイルライドはフォルスセイバーを掴むと、ディオールを切り裂いた。そしてライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

《ファイナルアタックライド・フォ・フォ・フォ・フォルス!》

デイルライドは一気に駆け出し、ディオールに『デイルライドカリバー』を繰り出した。

「くくくくくくくく!!」 「ぐわあああ!!」

デイオールは『デイライドカリバーを受けて爆発した。
デイライドはフォルスセイバーを放り投げた。

フォルスセイバーはフォルスに戻ってデイライドの隣に着地した。

「やったな！渚！」

「……………」

喜ぶフォルスとは逆にデイライドは浮かない顔をしていた。

すると火の中からデイオールが現れた。

「何！？」

「やはりまだ終わってなかったか……………」

「貴様等！許さんぞ！」

デイオールはそう言うのとジョーカーのもとへ走り、ジョーカーの首を掴み雄叫びを上げた。

「うおおおお！！！！」

するとデイオールは白と緑のオーラをまとった。

そのオーラが徐々に大きくなり、オーラが消えた。

そこに居たのは、緑色の鎧をまとった14・『デイオールフォーテ
イーン』だった。

「なんだあいつは！」

「カズキさん！あいつの胸に居るのって……………」

「っ！ハジメ！」

デウォールフォーティーンの胸にはジョーカーが捕らわれていた。

「こいつが居る限り我の力は無限だ！」

デウォールフォーティーンは一気にデライド達に攻撃してきた。

「くくくくわああ！！！！！！」

五人はデウォールフォーティーンの攻撃で吹っ飛ばされた。

デライド達は立ち上がるうとするが、ダメージが大きく、立ち上がる事が出来なかった。

だがフォルスはなんとか立ち上がり、

「ハジメ！お前はそんな奴に捕らわれるような弱い奴だったのか！」

するとギャレンJFとレンゲルも立ち上がり、

「そうだ！お前は誰よりも人間を愛しているんじゃないのか！！」

「そうですよ！そしていつでも僕達を助けてくれたじゃないですか！！」

そしてフォルスが、

「いい加減目を覚ませ！ハジメ！！！」

するとデウォールフォーティーンの胸に居るジョーカーが光だした。

「け、剣谷……」

「ハジメ！？よし、待ってる！今助ける！」

だがジョーカーは、

「待つんだ……。俺を助けても世界は滅びてしまう。だから…俺を倒せ！」

「何言ってるんだよ！」

フォルスはジョーカーを説得しようとするが、ディライドがそれをとめた。

「カズキ、俺にもジョーカーの友人がいる。そしてお前のようにジョーカーを助けようとするやつもいた。だがそいつは世界とジョーカーを守るため自らもジョーカーになっただ」

「じゃあ俺もジョーカーになつて！」

「待て！だが気付いたんだ。それは間違いだつて。だから俺は森本のしたいようにしてやりたいんだ」

「そうか……」

ディライドはディオールフォーティーンの方へ向き合い、

「森本！お前は どうしたい！」

「俺は人間を守りたい！だから俺を倒せ！剣谷！」

「……………わかった！」

フォルスはラウズアブゾーバからラウズカードを二枚取り出した。そして一枚をラウズアブゾーバにラウズした。

《アブゾーブクイーン！》

そしてもう一枚をラウズアブゾーバに装填した。

《エボリユーシヨンキング!》

するとフォルスに十三体アンデッドが融合すると、フォルスは最強の『キングフォーム』に強化変身した。フォルスの手にはキングラウザーが握られている。それを見たデイライドは、

「じゃあ俺も行くかな」

デイライドはバツクルを開きライドブツカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填してバツクルを閉じた。

《ファイナルカメンライド・ブ・ブ・ブ・ブレイド!》

するとデイライドの前に金色のオリハルコンエレメントが現れ、それを通り抜けると、デイライドはデイライド・ブレイド・キングフォームに変身した。

「行くぞカズキ!」

「ああ!」

フォルスKFは五枚のラウズカードをキングラウザーに装填した。

《スピード10!J!Q!K!A!ロイヤルストレートフラッシュ!
!》

するとフォルスKFの前に巨大なラウズカードが五枚現れた。

DブレイドKFもバツクルを開きライドブツカー・ソードモードからカードを一枚取り出しバツクルに装填してバツクルを閉じた。

《ファイナルアタックライド・ブ・ブ・ブ・ブレイド!》

するとDブレイドKFの前に巨大なラウズカードが五枚現れた。
そして二人は飛び上がり、ディオールフォーティーンにロイヤルス
トレートフラッシュを発動した。

「はああああ!!!」「ぐわあああ!!!」

二人のロイヤルストレートフラッシュを受けたディオールフォーテ
イーンは爆発して元のディオールジョーカーに戻ってしまった。
そしてDブレイドKFもディライドに戻った。

「貴様等!よくも!」

怒るディオールを無視してディライドはディオールに近付き、

「貴様だけは許さねえ!人の心を奪う権利など誰にもない!これで
終わりだ!」

ディライドの右手がディープイエローに輝く。

そして『ディメンションインパクト』を発動した。

「はああああ!!!」

「ぐわあああ!!!」

『ディメンションインパクト』を受けたディオールは爆発した。
そしてディライドはフォルスクFとジョーカーの方を見て、

「あとはあいつらに任せるか」

フォルスKFとジョーカーは向き合っていた。

「ハジメ……」

「剣谷、俺はお前達に会えて本当に幸せだった。お前達のおかげで人間を愛することができた。だが俺が生きていては、その愛する者達を滅ぼしてしまう。だから俺を倒せ……」

それを聞いたフォルスKFは、

「……………わかった！」

フォルスKFはジョーカーに向かって走り出した。

そして飛び上がり一気に右足を突きだし、『K・ファントムプラスト』を繰り出した。

「はああああ……！」

キックが当たる直前にジョーカーはこう呟いた。

「この世界を頼む、カズキ……」

カズキはジョーカーを……………ハジメを封印した。
ハジメと世界を護るために。

「ハジメ……………」

そんなカズキにサクヤとムツキはこう言った。

「カズキ、俺達でこの世界を絶対に守り抜こう」
「ハジメさんの想いを無駄にしないためにも……」

その言葉を聞いたカズキは、

「……………ああ！」

三人は向き合い拳を合わせた。
渚はそれを写真におさめた。

岬写真館

「今回は大変だったな……」「うん……………」

そんな暗い二人を見た渚は、

「おいお前ら、そんな暗い顔すんなって」

渚はそう言いながら、机にこの世界で撮った写真とブレイドのFK
Rのカードを置いた。

信次郎は一枚の写真を手に取り、

「おお、これはなかなか良い写真だね」

そう信次郎が感想を述べると、アクアも、

「ほんと、ほんと！カッコいい！」

その写真には拳を合わせるカズキとサクヤとムツキと、それを見守るカリスが写されていた。

「この世界はあの三人に任せておけば大丈夫だな……」

渚がそう言うと、ユウキと彩夏が、

「そうだな！うん！あいつらなら大丈夫だよな！」

「そうね！」

そして渚が、

「んじゃま、次の世界に行くか！」

そう言った瞬間、ブレイドのFKRのカードが光だしていつものようにフォルスのマークがえがかれたカードに変わった。

それと同時に背景ロールも変わる。

そこには不死鳥を模した灰色の異形と天使と悪魔を模した灰色の異形が闘っている様子がえがかれていた。そして渚が、

「……………オルフェノク……………か……」

第9話 ミッシングエース（後書き）

次回、仮面ライダーディライド！

第10話 青き閃光・イプシロン

全てを破壊し、全てを繋げ！

第10話 青き閃光・イブシロン(前書き)

第10話です！

どしどしー！

第10話 青き閃光・イプシロン

これまでの仮面ライダーデイライドは……………。

詳しくは第1〜9話をお読みください。

何処かの夜道。

一人の青年が歩いていった。すると彼の後に次元の壁が出現し、その中から一体の怪人が現れた。

「待て！こそ泥がつ！」

そう言われた青年は、

「ファンガイアか……。つたくめんどくせえな〜」

すると青年は黄緑と黒で彩られた銃をファンガイアに向け、

「わりいけどさ、俺そんな暇じゃないんだわ。じゃね」

そう言って青年は引き金を引いてファンガイアを撃ち抜いた。

「ぐああああ！！！！」

ファンガイアは砕け散り、跡形も無く消えた。

青年は銃をしまつと、

「さて、さてさこの世界の『お宝』を奪いますか」

岬写真館

今は朝で、渚は朝食をとる為にリビングに行ったすると、いつも渚が座る椅子に誰かが座っていた。

「おい、誰だてめえ」

すると椅子に座っていた青年は立ち上がり、

「よっ！なぐぎさっ」

「お前は！」

するとユウキと彩夏も起きてきた。

「どうした？渚」

ユウキは欠伸をしながら渚に訪ねる。
すると青年が、

「よっ！ユウキ。おはよっ！」

「うん、おはよ……って達也じゃねえかよ！」

そして渚が、

「一体なんの用だ、海東」「ん？ああ忘れてた」

そう言うと達也と呼ばれた青年は、

「渚、もう俺の邪魔すんのは辞めてくんね？かな？まあそんだけ、じゃね」

達也はそう言うと写真館から出て行った。

「待て！海東！」

そして渚達も達也の後を追いかけた。

そしていつの間にか起きていた信次郎はテレビをつけてこっぴどい。

「うちもそろそろ地デジにするかな……」

もう一人の世界の破壊者・ディライド。新たなる9つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第10話【青き閃光・イプシロン】

渚は外に出ると服装が変わった。

今の渚の服装はスーツというシンプルなものだった。

「渚君、今度はスーツなの？」

「なんだ？セールスマンか？」

ユウキと彩夏は渚の服装を見ているとあるものに気付く。

「ん？なんだこれ」

ユウキは渚の首にかかった名札を読んだ。

「スマートブレインハイスクール3年B組担任？今回は先生か」
「んじゃま、その学校に行ってみるわ」

渚はそう言つと学校を目指した。

「じゃ、俺達は帰るか」
「だね」

ユウキと彩夏は写真館に入ってしまった。

スマートブレインハイスクール・3年B組

「おーい、席につけよー」

白髪の教師は生徒達にそう言う。
生徒全員が席についたのを確認すると、白髪の教師は話を始めた。

「えー今日はこの3年B組に新しい担任が来た。入ってください」
教室のドアが開き、渚が入ってきた。
そして黒板に自分の名前を書いて自己紹介をした。

「俺は近藤渚だ。よろしく」

軽く自己紹介をすまして、ふと窓ガラスを見ると達也が居た。

「あいつー！」

渚は教室を後にした。

スマートブレインハイスクール・中庭

「おい！海東！こんなところで何してる」

「それは俺の台詞だ。渚、俺の邪魔をすんなって言わなかったか？
知るか」

「そうかよ」

達也はそう言うと、黄緑と黒の銃を渚に向ける。
だが渚は気にせず達也に問う。

「海東、この世界では何を狙ってる？」

「イプシロンのベルト、かな？」

「イプシロン？この世界のライダーか……」

すると校庭の方から生徒達の悲鳴が聞こえてきた。

「なんだ！？」

渚は校庭に走って行った。

校庭に到着すると、センチピードオルフェノク・ロブスターオルフ
エノク・ドラゴンオルフェノク・クロコダイルオルフェノクが生徒
達を襲っていた。

「あいつら、巧の世界じゃラッキークローバーだったな」

渚はそう言つと変身の準備を完了させ、

「変身！」

《カメンライド……ディライド！》

渚はディライドに変身するとライドブッカー・ソードモードでオルフェノク達に攻撃をする。

ディライドはオルフェノク達を圧倒していく。

「どうした？んなもんか？」

「貴様！」

センチピードがディライドに攻撃をすると、ディライドは素早く避け、バツクルにカードを装填した。

《アタックライド……スラッシュ！》

「これでも喰らえ！はあ！」

ディライドはディライドスラッシュでセンチピードを切り裂く。

「ぐああー！！」

するとクロコダイルがディライドに攻撃を仕掛ける。

「ふん！」

「どああー！！」

ディライドは防御をするも、クロコダイルのパワーに押され、吹っ飛ばされた。

「な、なんだ!?!」

クロコダイルはさっきとはまるで別人の様にディライドに襲い掛かる。

「ち!こうなつたら!」

ディライドはなんとかクロコダイルと距離をとり、ライドブッカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

「変身」

《カメンライド……フォルス!》

ディライドはDフォルスに変身して、クロコダイルに反撃する。

「おらぁ!?!」

「ぐおお!?!」

クロコダイルが怯んだ隙に、Dフォルスはライドブッカーからカードを一枚取り出しバツクルに装填した。

《ファイナルアタックライド……フォ・フォ・フォ・フォルス!》
「はっ!」

Dフォルスは飛び上がり『ファントムブラスト』を放った。

「てやあぁ!?!」

「ぐあぁあぁ!?!」

『フロントムブラスト』を受けたクロコダイルは爆発して灰になった。

「ま、こんなもんかな」

Dフォルスからデイライドに戻ったデイライドはそう呟く。
するとクロコダイルの灰が次々と集まっていく。

「ん？」

灰が全て集まると、クロコダイルは復活を果たした。

「な、なんだと!？」

これにはデイライドも驚く。

何故なら渚が乾巧の世界に行った時にはクロコダイルオルフェノクは既に乾巧によって倒されていたからだ。

「マジかよ……」

クロコダイルはデイライドに襲い掛かる。

デイライドは身構えるもクロコダイルは復活したことにより戦闘力が上がっている。

その為、デイライドはクロコダイルに押されていた。

「なんだよこいつ!!」

「それがクロコダイルオルフェノク的能力だ」

すると達也が現れた。

デイライドが達也の言葉を聞いた瞬間、先程までデイライドとクロ

コダイルの闘いを見ていただけのセンチピード、ロブスター、ドラゴンがデイルライドに襲い掛かる。

「ぐああああ!!!」

デイルライドはなんとか体制を立て直すと達也に向かって叫んだ。

「おい海東! てめえ見てねえで手伝え!」

「んゝその必要はねえなあゝ」

「なに? ……ぐああ!」

デイルライドは余所見をした瞬間クロコダイルに吹っ飛ばされた。

そしてドラゴンが止めを刺そうとした瞬間ドラゴンは何者かに撃たれた。

「ん?」

デイルライドは達也の方を見ると達也はただ笑顔で居た。

そしてデイルライドが達也とは逆の方を見ると、そこには緑の複眼にEを横倒しにしたような三本の青いラインの入った仮面、黒のスーツに銀の装甲、そして身体中に流れる青いフォトンブラッドの戦士が居た。

「なんだ? あいつは!」

「イプシロン」

デイルライドの疑問に達也が答える。

「イプシロン……」

ディライドはそう呟きながら絵柄を失ったイプシロンのカードを見た。
イプシロンは手に持っていた銃を携帯電話に戻し、ベルトに装着した。

そして一気に駆け出しオルフェノク達を攻撃をする。

「はあ！」

「おのれイプシロン！」

ロブスターはイプシロンに攻撃をするもイプシロンは簡単に避け、腹部にパンチをお見舞いする。

「とう！」

「うっ！」

そのままロブスターを投げ飛ばし、センチピードの頭部にハイキックを喰らわす。

「それ！」

「うわ！」

センチピードはハイキックを喰らい体制を崩す。
そこへイプシロンの右ストレートが飛んでくる。

「てや！」

「ぐああー！」

そしてドラゴンにパンチとキックの嵐を浴びせる。

「はああああー！……！」

「ぐはあ!!--」

ドラゴンが倒れ、イプシロンが一安心した隙にクロコダイルが背後から襲い掛かるがイプシロンはそれを解っていたかのように、クロコダイルに裏拳をお見舞いする。

「うら!!--」

「どあ!!--」

イプシロンはベルトの左に装着されたデジタルカメラ型のアイテム『イプシロンショット』を取り出し、イプシロンフォンに装着されたミッションメモリーを取り出しイプシロンショットに装填する。

《レディ》

イプシロンはイプシロンショットを右手に装着する。そしてイプシロンフォンを開きエンターを押す。

《エクシードチャージ!!--》

するとベルトからフォトンブラッドが右手に流れていく。

そして一気に駆け出しクロコダイルに必殺のパンチ『グランインパクト』を放った。

「てやああ!!--!!--」

「ぐああああ!!--!!--」

クロコダイルは爆発した。だがまた直ぐに復活するもイプシロンの強さに圧倒され、これ以上戦うのは危険と察し、その場を去った。

デイルイドはイプシロンに近付き、

「お前がイプシロン、この世界の仮面ライダーか？」

デイルイドがそう聞くとイプシロンは何も答えず去っていった。

「お、おい！」

デイルイドはそう言うも、特に何もせず変身を解いた。
すると達也は渚に近付き、

「大丈夫か？渚」

達也はそう言うも渚は舌打ちをしてその場を去った。

岬写真館

渚が学校でがやがやしてる頃、ユウキ達はコーヒーを飲みながらオルフェノクについて調べていた。

「彩ちゃん、何か解った？」

「え〜っと、オルフェノクとは死んだ人間が甦った人類の進化系って書いてある」

すると信次郎が、

「死んだ人間が蘇る？ひえ〜恐ろしいね〜」

アクアも、

「ほんと、ほんと。怖い」

それを聞いたユウキは、

「渚、大丈夫かな……」

すると彩夏も、

「なんだか嫌な予感がする……」

するとユウキが立ち上がり、

「俺、学校行ってくる！」

ユウキはそう言って写真館を出た。

何処かの教室

先ほどのオルフェノクの四人は何処かの教室に居た。

「ふう〜危なかったですね……」

センチピードに変化していた眼鏡をかけた青年・山崎イツロウはそう言った。

「まさかあそこでイプシロンが来るとは思わなかったわね……」

イツロウの次に口を開いたのはロブスターに変化していた女性・蜷原サエコはイプシロンの登場に驚いた。

「ま、次は絶対に倒すけどね……」

ドラゴンに変化していた青年・藤田リュウヤは余裕の表情でそう言った。

「ああ、叩き潰す！」

クロコダイルに変化していた青年・丹羽ゲンタは力強くそう言った。そしてサエコが、

「ええ。神の復活も近いからね……」

不気味な笑みを浮かべて言った。そして教室の奥にあるのは巨大な水槽の中に天使と悪魔を模した灰色の異形が居た。

スマートブレインハイスクール中庭

渚は中庭で花に水をあげていた。

「ん〜良い天気だな〜」

などと呑気なことを呟いていた。すると渚はベンチに座る一人の男子生徒を見つけた。渚は男子生徒に近付き、

「おい、授業始まってんぞ」

渚がそう言つと男子生徒は、

「誰ですか？」

渚は男子生徒の隣に座り、

「近藤渚だ。今日からこの学校に赴任してきたんだ、宜しくな」

渚が自己紹介するも、男子生徒は黙つたままだ。

「お前は？なんていうんだ？」

「僕は、尾川タクマです」「尾川か、宜しく」

だが男子生徒はそれだけ言つとまた黙り込む。

「尾川、どうしたんだ？」「先生には関係ありません」

渚はタクマの無愛想な表情を見てある人物を思い出した。

「巧……」

かつて共にアークオルフェノクを倒した友人の名を呟いた。
するとタクマが口を開いた。

「先生……」

「なんだ？」

「先生は、信じた人に裏切られたらどうしますか？」「んゝまあま
ずなんで裏切られたのかを考えるな。」

それを聞いたタクマは、

「え？」

「裏切られたり傷付けられたりするのには必ず自分が悪いのかもしれない。だから相手も裏切ったり傷付けたりするんだと思う」

すると渚達の前に、

「タクマ！」

「たっくん！」

二人の男女が現れた。

「マリ、ケイタロウ……」

友人と思われる人物の名を呟くタクマ。

「あ、先生！」

マリは渚に声をかける。

「なんだ、芳賀と溝呂木か」

「先生、こんなところで何をしてたんですか？」

ケイタロウが渚に聞くと、

「ん？ああ尾川の相談を受けてたんだ」

するとタクマは立ち上がりその場を去っていった。

「おい、尾川！」

「タクマ！」
「たっくん！」

みんなが名を呼ぶも、タクマは無視して去っていった。

「どうしたんだ？」

すると渚は誰かに後ろから殴られた。

「ぐあ！」

「先生！」

マリは渚の心配をするが、マリとケイタロウの目の前にイツロウ、サエコ、リュウヤ、ゲンタが現れた。

「な、なんですか!?!」

ケイタロウが聞くとイツロウが、

「神の復活の為の生け贄になってもらいます」

すると四人はオルフェノクに変化してマリとケイタロウに襲いかかった。

「きゃー！ー！！」

「うわー！ー！！」

マリとケイタロウの悲鳴が聞こえたタクマは急いで中庭に戻った。

「マリ！ケイタロウ！」

マリとケイタロウはなんとかオルフェノク達から逃げているが、捕まるのも時間の問題だった。
タクマは走り出して、センチピードに飛び蹴りを喰らわした。

「でや！」

センチピードは振り返り、

「貴様！」

タクマに気付いたオルフェノク達とマリとケイタロウ。
マリはとっさに、

「タクマ！逃げて！」

だがタクマは逃げずに上着を脱いだ。
腰にはベルトを装着していた。
するとロボスターが、

「まさか！」

タクマはイプシロンフォンを取り出し、変身コード『4・4・4』
を入力しエンターを押した。

《スタンディングバイ！》

そしてタクマは静かに呟いた。

「変身」

そしてイプシロンフォンをイプシロンドライバーに装填した。

《コンプリート!》

タクマは青い光に包まれて、仮面ライダーイプシロンへと変身した。

「タクマがイプシロン!?!」

イプシロンはオルフェノク達に立ち向かった。
すると先ほどまで気絶していた渚が起きて、

「イプシロン?」

渚は起き上がり、変身準備を完了させる。

「変身!」

《カメンライド……ディライド!》

渚はディライドに変身してイプシロンに加勢する。ディライドはクロコダイルとドラゴン、イプシロンはセンチピードの相手をした。
た。

残ったロボスターがマリとケイタロウに襲いかかるうとしていた。

「やばい!」

ディライドはマリとケイタロウを救いに行こうとするが、ドラゴンとクロコダイルに邪魔されて進めない。

「ぎゃあ……!」

「マリちゃん!!」

ロブスターが二人に襲いかかろうとした瞬間、一台のバイクが体当たりした。

「うわああ!!」

「誰だ!？」

バイクに跨がった青年はバイクから降りて、ヘルメットを取り素顔を見せた。

「待たせたな、渚!」

「ユウキ!」

ユウキはすぐさま変身準備を完了させる。

「変身!」

《スカルフォーム!》

ユウキは幽汽SFに変身した。
そして、

「隠れてろ!」

そう言ってマリとケイタロウを避難させると、サヴェジガッシャーをソードモードに組み立てロブスターに攻撃する。

「ち!こいつら二体はちょっとやべえな……」

デイルイドはクロコダイルとドラゴンに劣勢を強いられていた。

するとクロコダイルとドラゴンは何者かに銃撃された。
そして銃声を聞いて、その場に居た者全員が戦いを辞めた。

「ざまあねえなあ！渚」

「海東……」

「達也！？」

そこへ現れたのは達也だった。

「お、居た居た、イプシロン発見」

達也は黄緑と黒で彩られた銃をイプシロンに向ける。するとセンチ
ピードが、

「なんだ！貴様！」

すると達也は銃を下ろし、

「ちっ、まずは害虫駆除だな」

そう言つて一枚のカードを取り出し、黄緑と黒で彩られた銃に装填
してディエンドライバーと同じ様にアクションを行う。

《カメンライド》

そして銃を天に向け引き金を引く。

「変身……」

《ディセンド！》

達也は黄緑と黒を基調色とし、ライドプレートが半円状に刺さった
新たなる仮面ライダー・仮面ライダーディセンドに変身した。

「ディセンド……」

ディライドはディセンドの名を呟く。

ディセンドは駆け出し、ロボスターに攻撃する。

「はあ！」

ディセンドがロボスターに攻撃したことで先ほどまでロボスターと
戦っていた幽汽SFは吹っ飛ばされ誰かにぶつかつた。

「あ痛！………すみません………あ」

謝罪しながら振り向くとそこには幽汽SFと同じくディライドに吹
っ飛ばされたドラゴンだった。

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙が続く。

「……………敵じゃん」

「ほんとだ」

そして、

「……………うおおりゃああ……………」

幽汽SFとドラゴンは戦い始める。

デイセンドは圧倒的な強さでロブスターを圧していた。

そしてロブスターと距離を置き、左腰に装着されたカードホルダーからカードを二枚取り出し、一枚目をデイセンドライバーに装填する。

《カメンライド……カブキ!》

さらに二枚目を装填する。

《カメンライド……キバ!》

「行け!」

デイセンドは歌舞鬼とキバを召喚してロブスターと戦わせる。

イプシロンはセンチピードを圧倒していた。

そして右腰に装着されたイプシロンポインターを取り出し、ミッシヨンメモリーを装填する。

《レディ》

そして右足に装着する。

さらに右腕に装着された腕時計型アイテム・イプシロンマッハに装着されたミッシヨンメモリーをイプシロンフォンに装填する。

《コンプリート!》

その瞬間、イプシロンのアーマーが展開し、イプシロンの10秒間超高速移動を可能とする特殊形態・仮面ライダーイプシロンマッハフォームに変身した。

そしてイプシロンマッハを起動させる。

《スタートアップ!》

イプシロンMFは高速移動を始め、センチピードを攻撃する。
そして飛び上がり、敵に大量の必殺キック『プラネットスマッシュ』
繰り出す、『マツハプラネットスマッシュ』を発動した。

「はああああ!!!」
「ぐああああ!!!」

『マツハプラネットスマッシュ』を受けたセンチピードは爆発して
灰となった。そしてディセンドも、

「さて、そろそろ決めるか」

そう言うと、ディセンドはカードホルダーからカードを一枚取り出
しディセンドライバーに装填する。

《ファイナルアタックライド》

そしてロブスターにディセンドライバーを向ける。
すると無数のカードが現れロブスターに狙いを定める。
さらに歌舞鬼とキバもそのカードの中に吸収されていった。
そして引き金を引いた。

「はあ!」

《ディ・ディ・ディ・ディセンド!》

ディセンドは必殺の『ディメンションバレット』を発動した。
『ディメンションバレット』を受けたロブスターは爆発して灰とな

った。

「ぐああああ!!!」

残ったクロコダイルとドラゴンは逃げようとするが、四人のライダーに行く手を阻まれる。

「これまでだな」

デイルイドがそう言った瞬間、四人のライダーは何者かに攻撃された。

「くくくくああああ!!!」

そこに居たのは体から灰が落ちていて、完全では無いが、天使と悪魔を模したオルフェノクの神・ゴッドオルフェノクだった。

「神！何をしてるんです！」

「そつだよ、まだ休んでなきゃ」

クロコダイルとドラゴンはそう言うがゴッドは、

「心配いらん」

そう言うつと、腕から触手を出してセンチピードとロブスターを復活させる。

「神よ、助かりました！」

センチピードがそう言うつがゴッドは、

「勘違いするな」

するとゴツドはセンチピードとロボスターの体貫いた。

「くああー!!」

ゴツドはセンチピードとロボスターを吸収して体から灰が落ちるのを防いだ。

「なんだと!?!」

幽汽SFが声をあげると、ゴツドは一気にライダー達に襲いかかる。だがゴツドは木の陰に隠れるマリとケイタロウを発見した。

「丁度いい奴等が居たな」「ひっ!!」

ケイタロウがびびった瞬間ゴツドは、

「おい、こいつらの相手をしる」

ゴツドはライダー達の相手をクロコダイルとドラゴンに任せて、マリとケイタロウの方へ歩いて行く。

「マリ!ケイタロウ!」

イプシロンは二人の所へ行こうとするがクロコダイルに阻まれて行くことができない。

するとディライドがクロコダイルを攻撃し、

「行け！イプシロン！」

デリライドの手助けを得て、イプシロンはマリとケイタロウの所へ向かった。

「やめるー！」

イプシロンはゴツドに攻撃するが逆に跳ね返され変身が解けてしまった。

「うわあああー！」

イプシロンの正体を知ったデリライドは、

「尾川！あいつがイプシロン……！」

そしてゴツドがマリとケイタロウの命を奪おうとした瞬間、何者がその攻撃を防いだ。

「貴様！」

それは生身のタクマだったが、次の瞬間タクマの顔にオルフェノクの模様が浮かびその身体をオルフェノクへと変化した。

「え！？」

「たつくんがオルフェノク！？」

タクマは不死鳥を模したオルフェノク・フェニックスオルフェノクへと変化した。

「そ、そんな……」

デイライドはタクマがオルフェノクへと変化する瞬間を見ていなかった為、状況を理解出来なかった。

「一体何がどうなってるんだ？」

何故タクマがオルフェノクなのか？

そしてデイライド達はこのピンチを切り抜けることができるのだろうか？

第10話 青き閃光・イブシロン（後書き）

次回、仮面ライダーディライド！

第11話 パラダイスロスト

全て破壊し、全てを繋げ！

第11話 パラダイスロスト（前書き）

ようやく書き終わりました！

ではーどござー！

第11話 パラダイスロスト

これまでの仮面ライダーデイライドは！

詳しくは第10話をお読み下さい。

「なんだ、あいつは？」

デイライドはマリとケイタロウを助けたオルフェノクに疑問を抱いた。

「あの二人を守っている？」

幽汽SFはそう言った。

フェニックスはゴッドに立ち向かうが圧倒的な強さで、フェニックスを返り討ちにした。

「邪魔だあ!!！」

「うわああ!!！」

フェニックスは吹っ飛ばされ、タクマに戻ってしまった。

「くっ!!！」

フェニックスの正体を知ったデイライドは、

「尾川!?お前、オルフェノクだったのか……!!！」

驚きを隠せなかった。

タクマは運良く自分の近くに落ちていたイプシロンギアを回収し、イプシロンフォンを操作してイプシロン専用バイク・ソニックウェーブを呼び出した。

ソニックウェーブはバトルモードに変型しゴッドを攻撃する。そしてバトルモードからマシンモードへと戻る。

タクマはソニックウェーブに近付きマリとケイタロウに、

「早く乗って！」

と、言うが二人は動かない。するとケイタロウが、

「マリちゃん！乗って！」

そう言ってマリを無理矢理ソニックウェーブに乗せる。

「たっくん！早く行って！」

タクマに言うが、

「何言ってるんだよ！ケイタロウ！」

タクマはケイタロウを説得するがケイタロウは、

「良いから！！早く行って！！僕は大丈夫だから！！！」

ケイタロウの勢いに圧され、タクマは渋々その場を去った。

「人間！貴様！」

ゴツドはケイタロウを殺そうと近付く。

「やめろー！」

それをデイライドが間一髪で防ぐ。

「貴様ー！」

「せ、先生ー！」

「俺の生徒に……！」

デイライドの右手がディープリエローに輝く。

「手を出すなー！！はああああー！！！」

デイライドはゴツドに『デイメンションインパクト』を放つ。

「ぐおおおおー！！！」

『デイメンションインパクト』を受けたゴツドは吹っ飛ばす。

「神よ！大丈夫ですかー！」

クロコダイルはゴツドを支える。

「一旦退くぞ……！」

ゴツドがそう言うのと、クロコダイルとドラゴンはゴツドを支えその

場を去った。

「ちっ！逃げられた！」

デイルイドは悔しそうに言う。

「ま、俺には関係無いからいつか」

デイセンドはそう言うと、変身を解く。

達也はそのままどこかへ行ってしまった。

「あれ？達也は？」

幽汽SFはそう言いながら変身を解く。

「ほっとけ、ユウキ」

デイルイドもそう言って変身を解いた。

渚はケイタロウに、

「溝呂木、尾川のこと聞かしてくれないか？」

岬写真館

渚達はケイタロウを写真館に招いて、話を聞くことにした。彩夏はケイタロウにコーヒーを出す。それを見たケイタロウは軽く礼を言う。

「溝呂木、話してくれないか？尾川のこと……」

渚がそう言うとケイタロウはタクマのことを話し始める。

「僕とたつくとマリちゃんは小学生の頃から一緒でした。いつも一緒に遊んでました。でも僕達が中学生になったある日、たつくんは学校に来なくなりました。先生は病気って言ってました。暫くしたらたつくんはまた普通に学校に来はじめました。そんなある日オルフェノクの噂が回り始めました。マリちゃん言ってました。オルフェノクなんか大嫌い、人間のふりしてる怪物だって……。その言葉を聞いた時のたつくんの顔、本当に悲しそうだったんです。だから僕その時思ったんです！たつくんオルフェノクなんじゃないかって……。まさか、本当にオルフェノクだったなんて……」

ケイタロウは涙を流しながら話した。

その話を聞いた渚は、

「そういうことが……」

そう呟いて、写真館を出て行った。

その頃タクマとマリはバイクで走っていた。
するとマリは、

「停めて！」

だがタクマは、

「でも……」

「停めて!!」

タクマは渋々バイクを停める。
マリはすぐバイクから降りて、タクマと距離をとった。

「大丈夫か？マリ……」

と、言っつてマリの肩を掴むが、

「やめて!!」

マリはそれを拒絶する。

タクマは何も言わずその場を去った。
それを見ていた渚は、

「ちっ、世話のかかる生徒だな……」

そう言っつてマシンドライダーを走らせた。

タクマは河川敷に居た。

「僕は……僕は……」

タクマの手にはイプシロンギアが握られていた。

タクマはイプシロンギアを持ち上げ、川に投げようとした瞬間、

「それをどうするつもりだ？」

渚が現れた。

「先生……」

渚はタクマの隣に立つ。

「何か用ですか？」

タクマがそう言うと渚は、

「解ったことがあつてな」「解ったこと？」

「ああ。お前は裏切られるのが怖いんだよな？だからオルフェノクであることを隠していた、そうだろ？」「は、はい……」

「でもそれは間違いだ」

「え？」

タクマは渚の方を見る。

「裏切ったのはお前だ、尾川。お前は自分がオルフェノクであることを偽ってきた。それは友達を騙しているってことだ。友達はお前を信じてくれたんだろ？だがお前は自分からその信頼を断ち切ったんだ。だから芳賀もお前を拒絶したんだ。お前をが嘘をついたから一度失った信頼を取り戻すのは難しい。もしかしたら一生取り戻せないかもしれない。それでも信じて戦い続ける、それが『人間』だ」

その言葉を聞いたタクマは、

「僕は……」

すると、

「イプシロンのベルトを渡せ」

タクマが振り向くと達也にディセンドライバーを向けられた。

「海東！」

渚もライドブッカー・ガンモードを達也に向ける。

「邪魔すんじゃないやねえよ、渚あ」

「知るか」するとどこかから、

「久し振りだな、ディライド、そしてディセンド」

鳴滝が現れた。

「鳴滝！」

「ディライド、貴様の旅はここで終わりだ！！」

すると鳴滝の前に次元の壁が出現して、そこから黒い龍騎、すなわち仮面ライダーリュウガが現れた。

「リュウガ！？」

リュウガはデッキからカードを一枚取り出しバイザーに装填する。

《ストライクベント！》

リュウガの右腕にドラグクローが装着される。

そしてドラグクローから漆黒の炎が放たれ、渚達を襲う。

「はああああ！！！！」
「うわああああ！！！！」

渚達はなんとか避けるが、渚はライドブツカーを、タクマはイプシロンギアを離してしまい、ライドブツカーとイプシロンギアが入れ換わってしまった。

鳴滝はその隙に、渚を次元の壁を使い別の世界へ飛ばしてしまう。

「先生！！！」

「イプシロンのベルトが……」

タクマは渚の、達也はイプシロンのベルトの心配をする。

「これでデイルイドは終わりだ！！！」

鳴滝とリュウガは次元の壁の中に消えていった。

「先生は一体どこへ行ったんですか！？」

タクマは達也に問い詰める。
だが達也は、

「イプシロンのベルトを取り戻さねえとな……」

そう言って、次元の壁の中に消えていった。

「おい待て！」

タクマは達也を追いかけようと次元の壁を越えようとしたが、次元の壁は消えてしまった。

「くそっ！」

タクマはライドブッカーを拾い、どうするべきか考えていた。するとタクマの携帯が鳴る。

「はいもしもし」

「たっ た た た た くん！ がっ、学校に、オオオオルフエノクが！」

電話をかけていたのはケイタロウだった。

「なに？ わかった、すぐ行く！！」

タクマは携帯をポケットに入れ、ソニックウェーブに跨がり学校に急行した。

その頃渚は、ライドブッカーが無いため、リュウガに対抗出来ずにいた。

「うわああああ！！」

鳴滝は渚に、

「終わりだ、ディライド……」

その時、渚とリュウガの間に次元の壁が現れた。

「ん？」

すると次元の壁から、達也が現れた。

「海東!?!」

「リュウガ! 行け!」

鳴滝はリュウガを達也に仕向ける。

達也は変身の準備を完了させる。

《カメンライド》

そして一気に駆け出し、

「変身!?!」

《デイセンド!》

達也はデイセンドに変身してリュウガに対抗する。

デイセンドは素早い動きでリュウガを圧倒する。

そしてリュウガと距離を置き、カードホルダーからカードを一枚取り出しデイセンドライバーに装填する。

《カメンライド……ブレイズ!》

「行け!」

デイセンドは深紅のキバ・仮面ライダーブレイズ・キバフォームを召喚する。

ブレイズKFはリュウガに対抗するが、リュウガの方がスペックが一枚上手で、ブレイズKFを圧倒する。

それを見たデイセンドはカードホルダーからカードを一枚取り出しデイセンドライバーに装填する。

《ファイナルフォームライド》

ディセンドはディセンドライバーをブレイズKFに向けて、

「くすぐつたいのは一瞬だ」

そう言つてディセンドライバーをブレイズKFに発砲する。

《ブ・ブ・ブ・ブレイズ！》

ディセンドに背中を撃たれたブレイズKFはブレイズキバットを模した、『ブレイズアロー』に超絶変型する。

それを見たリュウガは、それに対抗するべくデッキからカードを一枚取り出しバイザーに装填する。

《ファイナルベント！》

リュウガの背後にドラグブラッカーが現れる。

リュウガはドラグブラッカーと共に浮かび上がり、『ドラゴンライダーキック』の発動の準備を完了させる。ディセンドもディセンドライバーにカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド……ブ・ブ・ブ・ブレイズ！》

リュウガは『ドラゴンライダーキック』を発動する。

「はああああー！」

ディセンドも『ディセンドボルケーノ』を発動する。

「燃えてきたぜー!」

『ディセンドボルケーノ』と『ドラゴンライダーキック』がぶつかる。だがリュウガは『ディセンドボルケーノ』の威力に負けて、爆発した。

「ぐああああ!」

その瞬間渚とディセンドは元の場所に戻った。いつの間にか変身解除をした達也は、渚からイプシロンギアを奪い捕る。

「こいつは貰って行くぜ」

だが渚は気にせずこう言った。

「持ってけんなもん。そんなもんよりもっと大切なもんがあるからな」

渚はそう言って、その場を去った。

その頃学校では、ゴッドとクロコダイルとドラゴンが生徒達を殺害しようとしていた。すると何処かから、

「やめる!...!...!」

という声と共に火の玉が飛んでくる。

ゴッドは火の玉の飛んできた方を見た。
すると空から巨大な不死鳥に変化した、フェニックスオルフェノク・
飛翔態が現れる。
だがゴッドは、

「くだらん」

そう言って、衝撃波を放ちフェニックスを攻撃する。

「うわああああー!!」

フェニックスは地に落ちてタクマに戻ってしまった。それを見た生徒達は、

「タクマ!?!」

「何であいつが!?!」

「なんだよ! あいつも化け物だったのかよ!?!」

など罵声を浴びせる。

するとマシンディライダーに跨がった渚が現れた。
タクマに手を差し伸べ、タクマを立たした渚を見てゴッドはこう言
った。

「裏切り者のオルフェノクを庇うつもりか? ただの人間が!」

その言葉を聞いた渚はゴッドを鼻で笑いこう言った。

「オルフェノク? 誰のことだ?」

「なに?」

「この世界に生きている者総ては互いを信じる事が出来る。それ

はオルフェノクもだ。だがてめえらは仲間を信じず、騙し、拳げ句の果てには自らの下らない野望の為に仲間を殺してしまう様な屑だ！だがこいつは違う。友達を信じ、自分の命を顧みず友達を救おうとする様な優しい奴なんだ」

だがゴツドは、

「また裏切られるのがオチだ！」

渚はこう続ける。

「それでも信じ続ける。信じることに、信じ続けることが本当の強さなんだ！仲間を犠牲にして得た強さなど偽りに過ぎない！！だからこいつはてめえらなんかとは違う！！人間だ！！」

「先生……」

タクマは渚にライドブツカーを返す。

するとライドブツカーからイプシロン関連のカードが飛び出し、渚がそれをキャッチすると、カードは絵柄を取り戻す。

そしてゴツドは渚にこう問う。

「貴様、一体何者だ！！」

渚は変身の準備を完了させると、いつもの様にこう言う。

「通りすがりの仮面ライダーだ！！頭に叩き込んでけ！！！！変身！！！！」

《カメンライド………ディライド！》

渚はディライドに変身する。

それを見たタクマもフェニックスオルフェノクに変化する。
だがいつもと違い、体が強化されたフェニックスオルフェノク・激
情態となった。

デイルイドとフェニックスはゴッドに向かって走り出す。

「はああああー!!」

だがゴッドは、

「行け!!」

クロコダイルとドラゴンを仕向ける。

デイルイドはクロコダイルと、フェニックスはドラゴンと戦う。

デイルイド達が戦っている隙に、ゴッドは生徒達を襲おうとする。
それを見たデイルイドは、

「止める!!」

ゴッドの方へ行こうとするが、クロコダイルが邪魔をして近付けず
にいた。

するとユウキがマシンデスバードに跨がり現れる。

ユウキは変身の準備を完了させる。

「変身!!」

《スカルフォーム!》

ユウキは幽汽・スカルフォームに変身すると、クロコダイルに飛び
蹴りを喰らわしデイルイドから離す。

「渚!行け!!」

幽汽SFがそう言つとディライドは、

「わかつた!」

そう言つてゴツドに向かつて走り出す。

そしてゴツドに飛び蹴りを喰らわす。

フェニックスはドラゴンと互角の戦いを繰り広げる。だが徐々にドラゴンに圧されていく。

そしてドラゴンの一撃を受けて、タクマに戻ってしまった。

「うわあああ!」

そしてドラゴンが止めを刺そうとするが、それは何者かに阻止された。

ディライドはその人物を見るとこう言った。

「海東?何の用だ?」

達也はそう聞かれると、

「俺の進む道は、俺が決めるんでな!」

そう言つて、タクマにイプシロンギアを投げ渡す。

そして二人は変身の準備を完了させる。

《カメンライド》

《スタンディングバイ》

「変身!」

《ディセンド!》
《コンプリート!》

達也はディセンドに、タクマはイプシロンに変身する。
タクマにイプシロンギアを渡したディセンドにディライドは、

「何の真似だ!海東!」

「まだ見せてもらって無いからな!イプシロンギアより大切な物を
!それにこいつが人間かどうかも見たいんでな」

ディセンドはそう言うとカードを装填する。

《アタックライド……ブラスト!》

ディセンドはディセンドブラストを放つ。

イプシロンはその隙にディライドに加勢する。

「先生!」

「タクマ……よし!行くぞ!」

ディライドとイプシロンはゴッドに猛攻を与える。

そしてゴッドと距離を置き、カードを一枚装填する。

《ファイナルフォームライド……イ・イ・イ・イ・イプシロン!》

「ちょっと痛いぜ」

「え?……うわあ!」

ディライドはそう言うとイプシロンの背中に触る。

するとイプシロンは巨大な剣『イプシロンブレイカー』へと超絶変
型する。

デイルイドはそれを掴むと、ゴツドを切り裂く。

「はああああ!!」

「ぐああああ!!」

その頃幽汽SFは、ユウキベルトにある四つのボタンの内の一つを押して、パスをセタッチする。

《ハイジャックフォーム!》

幽汽SFは幽汽・ハイジャックフォームにフォームチェンジをする。そしてサヴェジガツシャーでクロコダイルを切り裂く。そして再びパスをセタッチする。

《フルチャージ!》

するとサヴェジガツシャーがオーラを纏い巨大化する。

そして『ターミネイトフラッシュハイジャック』を発動する。

「はああああ!!」

「ぐああああ!!」

『ターミネイトフラッシュハイジャック』を受けたクロコダイルは青い炎と共に灰となった。

デイセンドもドラゴンを追い詰めていく。

そしてデイセンドライバーにカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド》

そしてデイセンドライバーの銃口をドラゴンに向けると、無数のライダーカードで造られたターゲットサイトが出現する。
そして引き金を引いた。

《デイ・デイ・デイ・デイセンド!》

「はああああー!」

デイセンドは『デイメンションバレット』を放つ。

『デイメンションバレット』を受けたドラゴンは青い炎と共に灰となった。

「ぐああああー!」

そしてデイライドはイプシロンブレイカーでゴッドを何度も切り裂く。

そしてデイライドライバーにカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド……イ・イ・イ・イプシロン!》

デイライドはオーラを纏ったイプシロンブレイカーを敵に向かって振り下ろす、『デイライドギャラクシー』をゴッドに放つ。

「はああああー!」

『デイライドギャラクシー』を受けたゴッドは青い炎と共に灰となった。

デイライドはイプシロンブレイカーを離し、イプシロンブレイカーはイプシロンに戻る。

そして幽汽HFとディセンドが二人のもとへ来る。

「やったな！渚！」

幽汽HFはそう言うが、ゴツドの灰から触手が伸びクロコダイルとドラゴンを復活させ、そのまま二体を吸収しゴツドは復活する。

「なんだと!?!」

復活したゴツドを見て幽汽HFは驚愕する。

「貴様等!!覚悟しろ!!」

ゴツドがそう言った瞬間、地中から最大のオルフェノク・エラスモテリウムオルフェノクが現れる。

「ここでこいつか!!」

「まだだ！」

ゴツドはそう言うと、エラスモテリウムの頭部に合体する。

「うおおおお!!!!」

エラスモテリウムと合体したゴツドはディライド達に襲いかかる。

「くたばれ!!」

「くくくくあああ!!!!」

全く歯がたたないイプシロン達をみたケイタロウはある物を取り出す。

「たつくん!!これ!!」

そしてそれをイプシロンに投げ渡す。

「なんだ?これ……」

「なんか説明書には変身コードを入力してベルトについでる携帯をそれにつけるんだ!!」

それを聞いたイプシロンはそのある物……ハンドガン型のツール・イプシロンブレイカーに変身コードを《4・4・4・エンター》を入力してイプシロンフォンをイプシロンブレイカーに装填する。

《スタンディングバイ……アンウェイクニム》

その瞬間イプシロンは身体は青色に変わる。

イプシロンは最強の姿、仮面ライダーイプシロン・ブレイカーフォームに変身する。

それを見たデイライドも、

「んじゃ、俺も行くか」

デイライドはデイライドライバーにカードを一枚装填する。

「変身」

《ファイナルカメンライド……ファ・ファ・ファ・ファイズ!》

デイライドは仮面ライダーデイライドファイズ・ブラスターフォームに変身する。

そしてイプシロンBFはイプシロンブレイカーのエンターをおして、

必殺技発動の準備を完了させる。

《エクシードチャージ!》

DファイズBFもライドブツカーからカードを一枚取り出しディライドライバーに装填する。

《ファイナルアタックライド……ファ・ファ・ファ・ファイズ!》

イプシロンBFはイプシロンブレイカー・ブラスターモードを、DファイズBFはライドブツカー・ソードモードをファイズブラスター・ブラスターモードの様に構える。

そして、イプシロンBFは『フォトンバレット』を、DファイズBFは『フォトンバスター』を発動する。

「はああああ!」

「ぐぎゃあああ!」

二人の必殺技を受けたゴッドは今度こそ灰となった。

ライダー達は変身を解いた。

タクマはそのままその場を去ろうとする。

だがマリが、

「タクマ!」

そしてケイタロウと共にタクマのもとへ駆け寄る。

「たっくん、どこに行くんだよ……」

ケイタロウがそう聞くと、

「俺、オルフェノクだからさ……、ここに居ちゃいけないんだ」

だがマリは、

「それがどうしたのよ!」「え……?」

「もうあたし達にはそんなの関係無いよ……」

「マリ……ケイタロウ……」

三人は手を繋ぐ。

その光景はまさにハッピーエンドという言葉が良く似合う光景だった。

それを見た渚は、その光景を写真におさめる。

その頃達也はある物を発見していた。

「まじかよ……」

そこへ渚が現れ、

「海東、なにしてんだ?」「ここは最高だな!! 見ろよ! ライダーズギアだらけだぜ!」

そこにはファイズを除くすべてのライダーズギアがあった。達也はそれらを回収すると、

「イプシロンのベルトより大切な物、こういうことだったんだな! 渚!」

「相変わらずだな、お前……」

達也はその場から去った。

岬写真館

渚はこの世界で撮った写真を見ていた。
その写真を見た信次郎は、

「お！これは良い写真だなあ」

「ああ、三人ならこの先何が起こっても大丈夫だな」

ユウキがそう言うとアクアが、

「うん！きつと大丈夫ね！」

その写真には三人で手を繋ぎ同じ方向を見つめるタクマ達だった。

「んじゃま、そろそろ次の世界に行くか」

渚がそう言うと、ファイズのFKRがイプシロンのマークが描かれたカードに変わる。

そして背景ロールが下りてくる。

そこには、銀色の戦士が静かにたたずんでいる様子が描かれていた。
それを見た渚はこっぴどい。

「アギト………？」

第11話 パラダイスロスト（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第12話 アクト、覚醒

総てを破壊し、総てを繋げ！

第12話 アクト、覚醒（前書き）

今回はすらすらと行けました。

では、ぐんぐん……

第12話 アクト、覚醒

これまでの仮面ライダーデイライドは……。

詳しくは第1〜11話をご覧ください。

イプシロンの世界を後にした一行は次なる世界に足を踏み入れました。

「渚、この世界は何の世界なんだ？」

ユウキがそう聞くと、

「アギト……いや、アクトの世界だ」

渚は絵柄を失ったアクトのKRを手に取りながらそう言った。

「アクト、かぁ……」

するとアクアが別の部屋で、

「わぁ〜！新しいテレビだぁ〜！！」

渚はその言葉を聞き、アクアが居る部屋に行くと、

「あ！渚君、見てくれ！うちもとうとう地デジにしたんだ！」

信次郎は地デジ対応のテレビを渚に見せながら自慢気に言った。

「はあ……」

渚はため息を吐きながら部屋を後にし、写真館の外に出た。

「ちと……」

すると後からユウキと彩夏が遅れて写真館から出てきた。

「渚君、どうするの？」

彩夏がそう聞くと渚は、

「どうするかな……」

すると何処かから、

「あゝ！居た！居た！」

渚が声の聞こえてきた方を見ると一人の女性が近付いてきて、

「こんなところに居たのね！」

「えっ？えっ？」

困惑する渚を無視して、その女性は渚の袖を引っ張り何処かへ連れていこうとする。

「な、なんですか!？」

「今日初日なんだから早く!」

渚と女性の話は全く噛み合っていなかった。

渚は連れていかれる瞬間にこう言った。

「この世界について調べてくれ!」

そう言い残し渚は女性に連れていかれてしまった。

それを見ていたユウキと彩夏は、

「これって……」

「フォルスの世界と一緒にだね……」

「とりあえず、行くか……」

そう言ってユウキと彩夏はこの世界について調べに出掛けた。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第12話 アクト、覚醒

女性に連れ去られた渚は、とある一軒家に連れて来られた。

「はい！ここよ！」

「え！？」

渚は訳の解らないままその一軒家に入っただけだった。

「マナア！新しい家庭教師の方が来たわよお！」

「家庭教師！？俺が！？」

渚は困惑しつつも、とりあえずマナという少女の居る部屋に行くことに。

コン、コン

渚は部屋にノックして、

「あのー、入っても良いかな？」

「はい、どうぞ」

渚は部屋に入り、自己紹介をする。

「俺は近藤 渚だ。よろしくな」

「あ、秋山マナです」

渚は自己紹介をすますと、マナの机に置いてある教科書を手に取り、

「んで、今日は何の勉強をするんだ？」

「折角来てもらったのに申し訳ありませんが、今日はそんな気分じゃないんです……」

「え？どういうことだ？」「渚さんには関係ありません」

マナがそう言っていると渚は教科書を机に置き、

「聞かせてくれないか？」「どうしてですか？」

「いや、これからは一緒に勉強するんだ。生徒のことくらいは知つとかないとな」

するとマナは、

「今日で一年なんです」

「ん？」

「あの人が姿を消してから……」

「あの人？」

「あたしの前の家庭教師です。芦原シヨウヘイっていう人です。ほんとに優しく、一緒に居て凄く楽しい人なんです。でも一年前の今日、急に姿を消したんです」

「どうして？」

「詳しい事は解りませんが、あたしを巻き込まないためって言うてました……」

それを聞いた渚はしばらく考え込む。

（急に姿を消す？これは何かあるな……。っ！！まさかその芦原って奴が！）

渚は急に立ち上がり、

「おい、秋山」

「は、はい！」

「その芦原って奴を捜しに行こう！」

「え！でもどうやって!？」

「そこら辺走ってたら見つかるさ！」

渚はマナの腕を掴みそのまま部屋を出る。

マナの母は驚き、

「渚さん！？勉強は!？」 「校外学習つてやつです！」

渚はそう言い残し、家を出てマシンドライダーを呼び出し、マナと共に芦原シヨウヘイを捜しに行った。

その頃ユウキと彩夏は、

「あゝ手掛かり無しつてやつか」

「ほんとね」

などぼやきながら街をブラブラしていた。

すると二人の目の前をマシンドライダーが通り過ぎた。

「渚！？何処行くんだよ！」

だが渚は無視して走り去った。

しばらく走っていると、二人の目の前にアリの様な怪物が現れた。

「シュウウウ……!!」

渚はバイクを止め、

「アンノウン?」

渚とマナはバイクから降りて、

「な、なんですか!? あれ……」

「秋山、下がってる……」

渚はマナを非難させると、ディライドライバーを装着して変身の準備を完了させる。

「変身!」

《カメンライド……ディライド!》

渚はディライドに変身してアンノウンに対抗する。

「はっ! てやつ!」

ディライドは順調にアンノウンを追い詰めて行く。

そしてライドブツカーをソードモードに変え、アンノウンを切り裂く。

「喰らえ!」

「ゲキヤ!」

デイライドはカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド……デイ・デイ・デイ・デイライド!》

するとデイライドの目の前に巨大なFARカードが十枚現れ、デイライドはそこを通り抜け敵を切り裂く『デイメンションブレイド』を発動する。

「はああああ!!」

「グギヤアアア!!」

『デイメンションブレイド』を受けたアンノウンは爆発した。

「ちよろいな……」

すると木の陰にデイライドの戦いを観戦する者がいた。マナはデイライドに近づき、

「渚さん、今のは?」

「おそらく芦原シヨウヘイの失踪に関係のある奴等かもな」

「シヨウヘイ君の?」

すると一人の戦士がデイライドに殴りかかってきた。

「はああああ!!」

「なに!?!ぐああ!!」

「渚さん!!」

デイライドを襲った戦士は、輝く銀色のボディに、銀色の三本角を持った戦士だった。

その戦士を見たデイルイドは、

「お前がこの世界の仮面ライダー、アクト……いや、芦原ショウヘイ、だな？」「え!？」

渚を襲った戦士、仮面ライダーアクト・アースフォームは、

「お前、いったい何者だ！」

「んなことはどうでも良いさ、芦原ショウヘイ、秋山の所へ帰ってやれ」

デイルイドがそう言うとアクトEFは、

「駄目だ！俺は帰れない!!」

「だったら、力づくでも帰らしてやる！」

デイルイドはアクトEFに攻撃を仕掛ける。

「はあ!!」

「ぐう!!」

二人は互角の戦いを繰り広げる。

するとアクトEFはデイルイドと距離を置き、ベルトの左サイドのスイッチを押す。

するとアクトEFの体は青色へと変わり、ベルトから青と銀の薙刀が現れる。

アクトは仮面ライダーアクト・ウィンドフォームにフォームチェンジする。

アクトWFは武器のウィンドハルバードでデイルイドを攻撃する。

「ぐっ！ちっ！こうなったらー！」

デイルイドはカードを一枚装填する。

《カメンライド……ブレイズ！》

デイルイドはデイルイドブレイズ・キバフォームに変身してアクトWFに対抗する。

するとアクトWFはウィンドハルバードを投げ捨て、今度は右サイドのスイッチを押す。

するとアクトWFの体が赤色に変わり、ベルトから赤と銀の剣が現れる。

アクトは仮面ライダーアクト・ファイアフォームにフォームチェンジする。

アクトFFは武器のファイアソードでDブレイズKFを切り裂く。

「ぐああー！！」

DブレイズKFはなんとかアクトFFと距離を置き、カードを一枚装填する。

《フォームライド……ブレイズ！ガルル！》

DブレイズKFはデイルイドブレイズ・ガルルフォームにフォームチェンジする。そしてガルルセイバーでアクトFFに対抗する。

「大人しく帰れ！」

「駄目なんだ！俺は帰れない！」

アクトFFはDブレイズGFを切り裂く。

「どうしてだ？」

「俺は……」

アクトFFが帰らない理由を言おうとした瞬間、アクトFFは何かの気配を感じ取り、

「おい、あんた！マナちゃんを連れてここから逃げる！」

アクトFFはアクト・アースフォームにフォームチェンジしてその場を去った。

「おい！芦原！」

「シヨウヘイ君！」

DブレイズGFはディライドに戻り、

「秋山、ここで待ってる」「え？でも……」

「大丈夫だ。芦原は必ず連れて帰る」

「渚さん……、わかりました」

ディライドはマナにそう言うと、マシンディライダーに跨がりアクトFFの後を追った。

マナはディライドを見送り不安そうな顔をしていると、マナの目の前に先ほどディライドが倒した筈のアンノウンが現れた。

「きゃああああ……！」

その頃アクトEFは一体の赤いエルロードと対峙していた。

「今日こそお前を倒す!」「ふっ、神に近付き過ぎた愚か者が……」

赤いエルロード……火のエルという言葉聞いたアクトEFは、

「俺は……俺は人間だ!!」

アクトEFはベルトの両サイドのスイッチを押す。

するとアクトEFの左腕が青、右腕が赤、胴体が銀色の仮面ライダー
ーアクト・トリアングルフォームにフォームチェンジする。

アクトTFはベルトからウインドハルバードとファイアソードを取り出し火のエルに斬りかかる。

「はああ!!」

だが火のエルはいとも簡単に避け、火炎弾を放つ。

「愚か者が……、ふん!!!」

「ぐああああ!!!!」

するとそこへマシンライダーに跨がったディライドが駆け付ける。

「大丈夫か?」

「あんた……」

ディライドはアクトTFを立たせると、

「行くぞ!!」

デイライドとアクトTFは火のエルに立ち向かう。

するとそこへ、

「アクトの力……、結構なお宝だな」

達也が現れる。

「海東!？」

「アクトの力、神の力に匹敵する程の力を持っている。まさにお宝だな」

達也はそう言うと、変身の準備を完了させる。

《カメンライド》

「変身!」

《デイセンド!》

達也はデイセンドに変身すると、二枚のカードを装填する。

《カメンライド》

「よっしゃ、行ってこい!」

《ファイズ!カブト!》

デイセンドは仮面ライダーファイズと仮面ライダーカブト・ライダーフォームを召喚した。

「渚の邪魔をしに行け」

デイセンドがそう言うと、ファイズとカブトRFはデイライドに襲いかかる。

「はああ!!」

「海東!てめえ!!」

デイライドはファイズとカブトRFに苦戦を強いられていた。

アクトTFも火のエルに苦戦していたが、

「俺は負けるわけには!!」

アクトTFはそう言うと、アクトTFの体が青色に光り、火のエルを吹き飛ばす。

「うおおお!!」

「ぐっ!!……まさかこいつは!!」

火のエルはそう言うと、アクトTFに黒い光を放つ。

「はあ!!」

「ぐっ!!ぐあああ!!」

アクトTFは黒い光を受けた瞬間、その姿を変えた。

その姿は、青い七本角に青い体に銀色の瞳を持った、仮面ライダーアクト・スプラッシュフォームにフォームチェンジした。

「はあああ……」

「こいつは予想外」

「なんだ、あれは……」

アクトSFは自我を無くし、ディライド達に襲いかかる。

「ぐおおおお……！」

「な、なに!?!」

アクトに一体何が起こったのか？

そして渚はこの世界を救うことができるのか？

第12話 アクト、覚醒（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第13話 新たなる変身

総てを破壊し、総てを繋げ！

第13話 新たなる変身(前書き)

ようやく書けました！

では、ごきげん！

第13話 新たなる変身

これまでの仮面ライダーディライドは……。

詳しくは第12話をお読み下さい。

火のエルによってスプラッシュフォームに覚醒させられたアクトは、自我を失いディライド達に襲いかかる。

「ぐおおお!!」

「くっ! 芦原! やめろ!!」

「こいつは厄介だな……」

そこへ火のエルがディセンド達に、火炎弾を放とうとした瞬間、

「はあああ!!」

幽汽・スカルフォームがそれを阻止する。

それを見たディセンドは、

「今がチャンス!!」

ディセンドはそう言うと、カードを装填する。

《アタックライド……クロスアタック!》

ファイズとカブトRFはクロスアタックの効果で、必殺技の準備を始める。

ファイズはファイズポインターにミッションメモリーをセットする。

《レディ》

そして右足に装着してファイズフォンのエンターキーを押す。

《エクシードチャージ!》

そしてカブトRFもカブトゼクターを操作する。

《ワン! ツー! スリー! ……ライダーキック!》

ファイズとカブトRFは『クリムゾンスマッシュ』と『ライダーキック』をアクトSFに放つ。

「はああああ!」

それを見たデイルイドは、

「やばい! ユウキ! こいつらを止めるのを手伝ってくれ!」

「わかった!」

幽汽SFはデイルイドの隣に立つ。

そして二人はファイズとカブトRFを止める為、必殺技の準備をする。

《ファイナルアタックライド……デイ・デイ・デイ・デイライド！》
《フルチャージ！》

デイルイドと幽汽SFは『デイメンションショット』と『ターミネイトフラッシュスカル』放つ。

「はああああ……！」 「ぐああああ……！」

二人の必殺技を受けたファイズとカブトRFは爆発して消えた。

「また俺の邪魔を……！」

デイセンドは苛立ちを隠せなかった。

するとそこへマナがやってくる。

「渚さん！」

「秋山……！」

マナの姿を見た火のエルは、

「人間？捕らえたはずだが？」

「俺が助けたからな」

マナはあの時アンノウンに襲われそうになったが、ユウキによって救われていたのだ。

「渚さん、シヨウヘイ君は！？」

「あれが芦原だ……！」

デイルイドはアクトSFを指差す。

「シヨウヘイ君！」

マナはシヨウヘイの名を呼ぶが、アクトSFは自我を失っているためマナが誰か解らず、睨みつけた。

「！？シヨウヘイ君……？」

「秋山！芦原は今あいつに操られてる！」

「秋山……？」

火のエルはマナの名前を聞いた瞬間、何かを思い出したかのように笑う。

「くつくつく……！そうか、やはりあの人間が……」

火のエルはマナを指差し、

「おい、人間！」

「え！？」

突然名前を呼ばれた為、マナは困惑した。

「人間、良いことを教えてやろう。お前の親父を殺したのは、そこに居る神に近付きすぎた愚か者だ！」

火のエルはアクトSFを指差す。

「え？アクトがこの娘のお父さんを？」

「どういうことだ……？」「そんな……そんな……嫌あああああ

！……！！」

マナの悲痛な叫びが辺り一面に響いた……。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。
新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第13話 新たなる変身

「なんで！？なんでショウヘイ君が！？」

マナは信じがたい事実に困惑していた。

「落ち着け！秋山！」

「そうだ！そんなのはったりだ！！」

ディライドと幽汽SFはマナを落ち着かせようとするが、

「事実だ」

火のエルはそう言う。
するとディSENDが、

「でも、何故今それを言う必要があんだよ」
「た、確かに……」

幽汽SFは納得する。
火のエルはこう続ける。

「万が一この愚か者が自我を取り戻した時に、その人間を利用してこいつを更に神に近付けさせる、そして人間を滅ぼす」

火のエルの言葉にデイライドは、

（確かに今の状態の秋山と芦原を会わす訳にはいかない……、ならば！）

デイライドはマナの腕を掴み、

「ユウキ！退くぞ！」
「わかった！！」

幽汽SFはデイライドのもとへ走る。
デイライドはカードを装填する。

《アタックライド………ブラスト！》

デイライドは地面に『デイライドブラスト』を放ち、その場から去る。

それを見たデイセンドも、

「じゃあ俺退くか」

そう言うと、カードを装填する。

《アタックライド……インビジブル!》

ディセンドは『ディセンドインビジブル』を発動してその場から去る。

マナの家

渚とユウキと彩夏はマナの母・秋山真紀から事の真相を聞くことにした。

「あの、シヨウヘイさんがマナちゃんのお父さんを殺したって本当なんですか?」

ユウキがそう聞くと真紀は、

「……はい」

「「「!?!?!?」「」」

三人は驚愕する。

「知ってたのか……!!」

「でも!シヨウヘイ君は悪くないんです!」

「どういうことですか?」「あの人を殺された時、言っていました。

『シヨウヘイは悪くない。あいつは俺を守ろうとした、あの化物から。だからあいつを責めないでくれ……』って」

それを聞いた渚は、

「おそらく、覚醒したアクトの力が足りなかったんだろうな。それでも秋山の親父を守ろうとした……」

すると渚はマナの部屋に行き、

「秋山、入っても良いか？」

「……はい」

渚はマナの部屋に入る。

遅れてユウキと彩夏も入ってきた。

そして渚はマナに、

「芦原はお前の親父を殺してはいない」

「え？」

「守ろうとしたんだ。でも力が足りなかった。だからあいつはお前のもとを離れた。お前の親父守れなかった責任と秋山を……マナを巻き込まないために」

渚はマナを下の名前で呼んだ。

「マナ、芦原を受け入れられるか？」

マナは渚の問いに答えられず、下を向いたままだった。

「まあ無理かもな……。でも受け入れられるならとことん受け入れてやれ」

「はい……」

そして渚は立ち上がり、

「俺はお前の様に人を愛することが出来ない。お前の様に人の死を悲しむことが出来ない。でも俺は人を愛せない代わりに、人を信じる、人の死を悲しめない代わりに人を悲しませない。これが、愛すると悲しむを無くした時からの旅の目的だ。自分の記憶を取り戻すことよりも大事なことなんだ」

「渚……」

「それが渚君の本当の旅の理由……」

ユウキと彩夏は渚の旅の理由を知った。

そして渚はマナの肩に手を置き、

「良いか？お前がもし人を愛せず、人の死を悲しめなくなった時、まあそんな日なんか来ないかもしれないけど、俺の旅の目的と同じことをしてくれ。これが俺の最後の教えだ」

「最後の……？」

渚はドアの前に立ち、

「芦原シヨウヘイは俺が必ず連れ戻す。だから安心して待っていてくれ」

「はい！」

マナは笑顔で答える。

「ユウキ、彩夏、お前等はここでマナを守ってやってくれ」
「わかった！任せろ、渚」

渚はその返答に微笑み、部屋を出た。

渚はマシンディライダーに跨がり、アクトを搜索しに行く。

しばらく走っていると、廃工場の前まで来た。すると渚の周りで爆発が起こる。

「ぐっ！なんだ!？」

渚はマシンディライダーを止め、降りる。

すると渚の前にアクトSFが現れる。

「ハアアアア……」

「まさかそちらさんから来てくれるとわな」

アクトSFはゆっくりと渚に近付く。

「来いよ。お前の目を覚まさしてやる」

アクトSFは走り出し渚に襲いかかる。

「ガアアアア!！」

渚は間一髪で避け、アクトSFの動きを止めようとする。

「ぐっ！いい加減目を覚まさしたらどうだ？芦原!！」

その様子を、ディセンドは隠れながら見る。

渚はなんとかアクトSFを抑えるが、アクトSFも負けじと暴れる。

それでも渚はアクトSFを抑えこつ続ける。

「お前はマナを守りたかつたんじゃないのか！！だから今まで一人で戦って来たんだろ！！その魂をあんなふざけた野郎に操られて良いのかよ！！」

デイセンドがその様子を見てみると、デイセンドの後ろにアンノウが現れる。

「つたく、今良いところなんだよ」

デイセンドはそう言いながらカードを装填してライダーを召喚する。

《カメンライド……フォルス！》

「行ってこい！」

デイセンドはフォルスを召喚してアンノウと戦わせる。

その頃渚とアクトSFは、

「芦原！お前は仮面ライダーなんだぞ！仮面ライダーは大切な人とその居場所を守る者なんだ！！お前がマナを、マナの居場所を守らないで誰が守るんだよ！！」

そしてデイセンドは、

「そろそろ終わらせるか」

そう言ってカードを装填する。

《ファイナルフォームライド》

そしてデイセンドライバーをフォルスに向けて発砲する。

「くすぐつたいのは一瞬だ」

《フォ・フォ・フォ・フォルス！》

フォルスはフォルスセイバーにFFRする。
デイセンドはさらにカードを装填する。

《ファイナルアタックライド……フォ・フォ・フォ・フォルス！》

デイセンドはフォルスセイバーを掴み、『デイセンドカリバー』を放つ。

「はああああ！！！」

デイセンドがアンノウンを一掃している頃渚は、アクトSFを突飛ばし、

「いい加減、目を覚ませ！！シヨウヘイ！！！」

渚はアクトSFの顔面を渾身の力を籠めて殴る。
するとアクトSFの動きが止まる。

「がっ！」

アクトSFはシヨウヘイに戻り倒れる。

「……シヨウヘイ！しっかりしろ！」

渚はシヨウウヘイを立たせる。

「大丈夫か？」

「ああ……」

シヨウウヘイは渚の方を見て、

「あんだ、名前は？」

「近藤 渚だ」

「渚、助かった」

「礼には及ばないさ」

すると火のエルがクイーンアントロードを手下にして現れた。

「おのれ！神に近付きすぎた愚か者が！」

火のエルの言葉に渚はこう反論する。

「愚か者？違うな、こいつは愚か者なんかじゃない。神に近付きすぎた訳でもない。こいつは、選ばれたんだ、世界に。この男ならば世界を救ってくれるはずだと！」

「なに……？」

「この男なら、例え何度挫けようとも、何度負けようとも、何度でも立ち上がると！！支えてくれる人が居る限り、人は何度だって立ち上がる！！だから貴様等なんかには絶対負けない！！」

「渚……」

するとアクト関連のカードが絵柄を取り戻した。

渚の言葉に火のエルはこう問う。

「貴様、一体何者だ！」

渚とショウウヘイは変身の準備を完了させる。
そして渚はこう言う。

「通りすがりの仮面ライダーだ！頭に叩き込んで！」

「行こう！渚！」

「変身！！！」

《カメンライド……デイライド！》

渚とショウウヘイはデイライドとアクト・アースフォームに変身する。

それを見たデイセンドは、

「やっぱりアクトの力は持って帰れねえな……」

デイセンドはそう言いながらその場を去った。

「おのれ……！行け！」

火のエルはクイーンアントロードをデイライド達と戦わせる。

「はああああ……！」

二人は抜群のコンビネーションでクイーンアントロードを圧倒する。
デイライドとアクトEFはクイーンアントロードと距離を置き、デイライドはカードを一枚装填する。

《ファイナルフォームライド……ア・ア・ア・アクト!》

デイルイドはアクトEFの後ろに回り、

「ちょっと痛いぜ」

そう言いながらアクトEFの背中に触る。

「うっ!」

するとアクトEFはアクト専用のバイク・マシンスライダーのライダーモードを模したアクトスライダーにFFRする。

「な、なんだ!？」

驚くアクトスライダーを無視して、デイルイドはアクトスライダーに乗る。

「おい渚!？」

「いいから、行くぞ!」

アクトスライダーはデイルイドを乗せクイーンアントロードに突撃する。

そして再びカードを装填する。

《ファイナルアタックライド……ア・ア・ア・アクト!》

デイルイドはライドブッカー・ソードモードを構える。

するとアクトスライダーの前にアクトの紋章が現れ、その紋章と共に敵を切り裂く、『デイルイドサイクロン』を発動する。

「はああああ!!」

「ぐああああ!!」

『デイルライドサイクロン』を受けたクイーンアントロードは爆発する。

それを見た火のエルは、

「おのれ人間ごときが!!」

そう言つて廃工場の中へ入る。

それを見たデイルライドは、

「逃がすか!!」

アクトスライダーはそのまま廃工場のドアをぶち破り工場内へ入る。そしてデイルライドを降ろしアクトEFへ戻る。

「さて、次は貴様だ!!」

「調子に乗るな!!」

火のエルは二人に火炎弾を放つ。

だが二人はそれを避け、火のエルに攻撃する。

だが火のエルは圧倒的な強さで二人をぶっ飛ばす。

「うわあああ!!」

アクトEFはベルトの両サイドのスイッチを押す。

アクトEFはアクト・スプラッシュフォームにフォームチェンジする。

「大丈夫なのか？」

デイルイドの問いにアクトSFは、

「ああ！」

力強く答える。

二人は再び火のエルに立ち向かうが、戦況は変わらず、歯が立たない。

「この野郎！」

デイルイドは殴りかかるが、簡単に避けられる。

「ならば!!！」

アクトSFはパンチを繰り出すが、避けられ火のエルの炎を纏った拳を喰らい、工場の外まで吹っ飛ばされてしまった。

「はああああ！」

「ぐああああ！」

「シヨウヘイ！貴様！」

デイルイドは火のエルに攻撃を仕掛ける。

その頃工場の外に出されたアクトSFは、

「くっ！俺は負けられない！」

アクトSFはゆっくり立ち上がる。

「マナちゃんが待っているんだ!!」

すると先ほどまで雲で隠れていた太陽が顔を出す。

そして太陽の光を浴びたアクトSFはその姿を変えていく。

体を覆っていた青色の装甲が剥がれていき、金色の装甲が現れる。

アクトは最強の仮面ライダーアクト・ダークネスフォームに変身する。

その頃ディライドは火のエルにとどめを刺されそうになっていた。するとそこへアクトDFが現れ火のエルを殴り飛ばす。

「はああ!」

「ぐう!」

アクトDFはディライドを立たせる。

「大丈夫か、渚?」

「ああ、じゃ、俺も本気を出すか」

ディライドはそう言いながらカードを一枚装填する。

《ファイナルカメンライド……ア・ア・ア・アギト!》

ディライドは仮面ライダーディライドアギト・シャイニングフォームに変身する。

「な、なに!?!」

「一気に行くぞ、ショウヘイ!」

「よし！」

DアギトSFはカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド……ア・ア・ア・アギト！》

DアギトSFの前にアギトの紋章が現れる。

アクトDFが構えをとると、アクトDFの前にアクトの紋章が現れる。

二人は『シャイニングライダーキック』と『ダークネスライダーキック』を放つ。

「はああああー！！」

「ぐああああー！」

二人の必殺技を受けた火のエルは爆発する。

「終わった……」

アクトDFはひと安心する。

「いや、まだだ」

だがDアギトSFはそれを否定する。

「え……？」

「まだやることがあるだろ？」

渚はシヨウヘイをマナの家まで連れていった。

「ほら、行けよシヨウヘイ」
「でも……」

シヨウヘイが迷っていると、

「シヨウヘイ君……?」

家からマナとユウキと彩夏が出てくる。

「マナちゃん……!」

「……シヨウヘイ君!」

マナはシヨウヘイに抱き着く。

「おかえり!シヨウヘイ君!」

「……ただいま!マナちゃん!」

渚はその光景を笑顔で見っていた。

「渚さん!ありがとう!」「渚、本当にありがとう!」

二人は渚に礼を言う。

「じゃあ、写真撮って良いか?」

渚の問いに二人は、

「うん!」「」

渚は二人の写真を撮った。そしてバイクに跨がり写真館に帰る。

岬写真館

渚はこの世界で撮った写真を見ていた。

その写真は仲良く並び立つシヨウウヘいとマナを守る様に立つアクト・アースフォームが描かれていた。

「あの二人、本当に嬉しそうだったね」

「ああ、本当に仲が良いな……」

「この世界はあいつに任せておけば大丈夫だな」

渚はアギトのFKRを取り出す。

するとアギトのFKRがいつもの様にアクトの紋章が描かれたカードに変わる。

すると背景ロールが降りてくる。

そこには荒野を走る赤い列車が描かれていた。

「これは、デンライナー？ということとは、電王の世界か？」

渚と彩夏は背景ロールの方へ歩いて行く。

だがユウキだけがその背景ロールを頭を抑え、睨み付けながらこう言った。

「電……王……!？」

そう言ったユウキの瞳は、いつもの黒ではなく、紫に光っていた……。

第13話 新たなる変身（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第14話 二代目電王、参上！

総てを破壊し、総てを繋げ！

第14話 二代目電王、参上！（前書き）

あ、やっと出来た……。

では、ごきごきー！

第14話 二代目電王、参上！

これまでの仮面ライダーデイライド……。

詳しくは第1〜13話をお読み下さい。

アクトの世界を後にした渚達は次の世界に来ていた。渚達は写真館から出てくる。

「渚君、この世界は何の世界なの？」

「電王……いや、ネオ電王の世界だ……」

彩夏の問いに渚は絵柄を失ったネオ電王のKRを手に取りながら言った。

「電王……!」

ユウキは電王と言う言葉を聞いた瞬間頭に激痛が走った。

「ユウキ、どうしたの?」「な、なんでもないよ、彩ちゃん……」

彩夏はユウキを心配するがユウキはなんでもないと言った。

「ちて、どうするかな」

渚が悩んでいるとユウキが、

「じゃあ二手に別れて情報を集めないか？」

「あ、それ良いね」

ユウキの提案に彩夏は同意した。

「じゃあ渚と彩ちゃんはそっち、俺は向こうに行く」「ユウキ、一人で大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

そう言っつてユウキはマシンドレスボードに跨がり走っていった。

「渚君、ユウキの様子変じゃない？」

「確かに……」

すると達也が現れる。

「渚、早めにこの世界を去った方が良いぞ」

「達也さん!？」

「海東、どういうことだ？」

「まあいずれ解るさ」

達也はそう言っつてその場を去った。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第14話 二代目電王、参上

ユウキはマシンデスバードに跨がり街を散策していた。

「俺はまだあれに縛られているのか？」

ユウキは自らの過去を思い出していた。

すると喫茶店を見付け、バイクを停める。

そしてその喫茶店に入ると一人の女性がいた。

ユウキはその女性を見た瞬間、

「!!…………ソラ…………!?!」

すると女性がこちらを向き、

「あ、いらつしゃいませ！」

「あ、あ、どうも」

ユウキはとりあえず椅子に座る。

「ご注文をどうぞ」

「え？えっと…………じゃあコーヒーを…………」

「はい、かしこまりました！」

女性はそう言って店の奥に行った。

「なんだ？この息苦しさは……」

ユウキはまたも過去を思い出していた。

その頃渚と彩夏はマシンデイルライダーで街を散策していた。すると人々の悲鳴が聞こえてきた。

「……きゃあああ！……」

「なんだ！？」

「渚君！あれ！」

渚は彩夏の言う方を見ると、ウルフィマジンが人々を襲っていた。二人はマシンデイルライダーから降りウルフィマジンの方へ走っていく。

「はああああ！」

渚はウルフにタツクルを喰らわせる。

「どあ！？なんだてめえ！」

「うっせー！狼野郎！」

渚がデイルライドに変身しようとした瞬間、何処かから奇妙なメロデ

イが聞こえてくる。

「ん？これは……」

すると空から赤い列車が現れる。

「あれは、デンライナー？」

その赤い列車……ネオライナーは停車する。
ネオライナーから一人の青年が降りてくる。

「おい！そこのあんた！危ないから下がってる！」

「え？なんだお前？」

青年は渚の言葉を無視して、赤と銀で彩られたベルト……ネオデン
オウベルトを取り出し装着する。

そしてポケットから赤いライダーパス……ネオライダーパスを取り
出しネオデンオウベルトに付いてある五つのボタンの内、一番上に
付いてある青色のボタンを押す。

奇妙なメロディが流れ、パスをベルトにセタッチすると同時にこう
言う。

「変身！」

《バーストフォーム！》

青年は姿はNEW電王と同じだが、青い部分が赤、金色の部分が銀
色になり、デンカメンの色は青、バックル部分は銀、太股の一部が
青色になった、仮面ライダーネオ電王・バーストフォームに変身し
た。

「あれがネオ電王……」

ネオ電王BFはウルフに向かって走り出す。

「はああああ！」

ネオ電王BFは武器を使わず、ウルフにパンチとキックの連打を浴びせる。

「調子にのんじゃねえ！」

ウルフは剣でネオ電王BFを切り裂く。

「どああ！」

『おい！俺を使え！』

するとネオ電王BFの頭に声が響く。

ネオ電王BFは立ち上がり、ベルトにある五つのボタンの内、二個目の赤いボタンを押す。

すると奇妙なメロディが流れ、そのままパスをベルトにセタッチする。

《イフリートフォーム！》

するとネオ電王BFのデンカメンが一度閉じ、ベルトのバックル部分が赤色に変わり、太股の一部が赤色に変わり、最後に再びデンカメンが開くと赤色に変わる。さらに赤いイマジンが現れ、そのまま剣に変型してネオ電王の左手におさまる。ネオ電王は仮面ライダーネオ電王・イフリートフォームにフォームチェンジする。

そして一気に駆け出し赤い剣……マチェーイグニスでウルフを何度

も切り裂く。

「喰らえ！」

「ぐあああ！」

『一気に決めるぞ！』

「了解！」

ネオ電王IFはマチェーイグニスの指示に従い、パスをベルトにセ
タッチする。

《フルチャージ！》

すると腰に装備されたネオガツシャーが自動的にソードモードに組
み立てられネオ電王IFの右手におさまる。

そしてネオガツシャー・ソードモードの剣先がウルフを捕らえる。
そしてマチェーイグニスがネオガツシャー・ソードモードに合体す
る。

仕上げに電王・ソードフォームの【エクストリームスラッシュ】と
同じ様に敵を切り裂く【イフリースラッシュ】を発動した。

「これで終わりだ！てやあああ！」

「どああああ！」

【イフリースラッシュ】を受けたウルフは爆発した。

「ま、こんなもんかな？」

ネオ電王IFはそう言って変身を解く。

そしてネオライナーに乗ろうとすると、誰かに止められる。

「待て」

「ん〜？なんだあ？」

それは渚と彩夏だった。

「お前がこの世界の仮面ライダー、ネオ電王か」

「そうだけど……」

「色々聞きたいことがあるんでな」

その頃ユウキは喫茶店で女性と会話していた。

「！……美味しい……！信次郎さんのコーヒーと良い勝負だ……」

ユウキはコーヒーを飲んでそう言った。

「気に入った？」

「はい！」

女性が笑顔で聞くと、ユウキも笑顔で返した。

「貴方、名前は？」

「あ、倉石ユウキです。貴女は？」

「野山愛菜です」

二人は自己紹介をする。

「ユウキ君って私の知ってる人に似ています」
「え？」

ユウキは愛菜も自分と同じことを思っていたことに驚いた。

「桜田侑真っていうんです。私の婚約者でした……。」「
「でした……。？」

ユウキはその言葉が過去形なのに疑問を抱いた。

「はい。結婚式の一週間前に姿を消したんです……。」「そんな……。」「
「あ！すいません、こんな話……。」「

愛菜はユウキに謝る。

「良いですよ。俺にもそんな人がいました、愛菜さんに良く似てて
……。」「

ユウキも自分のことを話し出す。

「神田ソラっていうんです。俺もソラとは将来を誓い合っただんです。
でも、ちょっと色々あって……。」「

ユウキは俯く。
すると愛菜は笑顔で、

「ありがとございます、」自分のことを話してくれて
「え？あ、なんか愛菜さんだと話しても良いかなって……。」「

ユウキは頭を掻きながら言った。

愛菜も微笑みながら、

「私もです、ユウキ君ならなんでも話せそうですね」

二人は微笑み合う。

ユウキは立ち上がり、

「愛菜さんまた来ても良いですか？」

ユウキの問いに愛菜も立ち上がり、

「いつでも来て下さい、サービスします！」

愛菜は綺麗な笑顔で言った。

「ありがとうございます！ではまた！」

ユウキはお辞儀をすると、喫茶店を出て行った。

「ユウキ君……か！」

愛菜はユウキの名前を呟くと、仕事に戻って行った。ユウキはマシンデスボードに跨がりながら、

「愛菜さん……か」

愛菜の名前を呟くと、マシンデスボードを走らせ情報集めを再開した。

その頃渚と彩夏はネオライナーへと案内されていた。そこへ赤いイマジンが現れ、

「おい、誰だその人間は」「お客様だよ、なんでも俺等に聞きたいことがあるらしいんから」

青年はそう言うと、渚と彩夏を座らす。

「俺は野山良介！よろしく！」

ネオ電王に変身する青年・野山良介は陽気に自己紹介する。
すると良介の隣に女性が座り、

「私はユリコ、よろしく」

黒い服に白いスカートの服装の女性・ユリコは微笑みながら自己紹介する。

さらに四体のイマジンがやって来て、

「俺はイグニス、よろしくな」

赤いイマジン・イグニスは普通に自己紹介する。

「俺はウォータってんだ、よろしくね、かわいこちゃん！」

青いイマジン・ウォータは彩夏の隣に行き自己紹介する。

それを見た渚は、

「ウラタロスみたいだな……」

などと呟いていた。

「俺はソルム、気軽におっさんって呼んでくれ」

黄色いイマジン・ソルムは腕を組みながら自己紹介する。

「僕はトルトニス！よろしくね！」

紫のイマジン・トルトニスは元気いっぱい自己紹介をする。
するとネオライナーの客室乗務員と思われる女性がやって来て、

「はい、コーヒーどうぞ」

と言ってコーヒーを持ってくる。
そのコーヒーを見た渚は、

「このコーヒー、まさか……！」

渚は客室乗務員と思われる女性を見る。

「ナ、ナオミ!？」

「え？私はネオライナー客室乗務員のリナですよ？あ、ナオミってデンライナーの客室乗務員だよ」

渚が間違えるのも無理はない。

なぜならナオミとリナが瓜二つだったからだ。

「なんだ、別人か……」

渚は何故かホツとした。
すると奥の扉が開き杖を持った男性が現れた。

「ま、まさか……！？」

渚は嫌な予感がした。
しかしその嫌な予感は的中してしまった。

「オーナー」

良介がその男性の名を呼んだ瞬間渚は、

「やっぱり一緒だあああ！」

思わず叫んでしまった。

渚の予想通りネオライナーのオーナーはデンライナーのオーナー、
ターミナルの駅長と瓜二つだった。
オーナーは椅子に座り、

「リナ君、いつもの」

「はあ〜い」

リナはそう言うと奥へ入っていった。

渚は気を取り直して、

「とりあえずこの世界で今起こっていることを教えてくれないか？」

渚の問いに良介は、

「ある日、俺はあるイメージを追っていた。そのイメージを後一歩
つてとこまで追い詰めた時、黒い服を来た連中と顔面が銅色で大き
な剣を持った男に邪魔されたんだ」

「黒い服？そいつら、揃ってなんか掛け声みたいなのあげてなかつ
たか？」

渚は黒い服の連中について聞く。

「あゝなんか“イーッ！”とか言ってたな」

「やはりシヨッカーか……」

すると渚は立ち上がり、

「とりあえずそのイメージを見付けるのが先決だな」「確かにな、
行くか！」

渚と良介は意見が一致すると、ネオライナーを出て行った。

「あ！ちよつと渚君！」

「私も行く！」

続いて彩夏とユリコもネオライナーを出て行った。

渚、彩夏、良介、ユリコはそのイメージを捜して街を歩いていた。
すると、

『ちよつと俺に任せろ!』

その瞬間イグニス^{イグニス}は良介に憑依する。

「どあー!」

イグニスに憑依された良介は髪に赤いメッシュが入り、髪が腰まで伸び、瞳が赤色になっていた。

「さて、イマジンの野郎を捜すか」

そう言つてあるきだす。

「けどどうやって捜したら良いの?」

彩夏^{イグニス}が良介に聞くと、

「た、確かに……」

すると今度はウォータがイグニスを追い出して良介に憑依する。

『イグニス邪魔だ!』

『ウォータ! てめえ! …… ああああ!』

ウォータに憑依された良介は髪に青いメッシュが入り、髪にカチューシャを付けオールバックになり、瞳が青色になっていた。

「お! 可愛いこちゃん発見!」

するとW良介は街を歩く女性に声をかけようとする。
だがその瞬間ウオータはソルムによって追い出された。

『目的が違うだろ!』

『うわっ!おっさん何すんだよ!』

ソルムに憑依された良介は髪に黄色いメッシュが入り、髪がポニテールになり、瞳が黄色になっていた。

「ったく、今時の若人は!なにしてんだか!」

ソルム
S良介は真面目に情報を集めようとするが、トルトニスによって追い出されてしまった。

『ソルムどいてよ!』

『おい!少年!』

トルトニスに憑依された良介は髪に紫のメッシュが入り、前髪のみが逆立ち、瞳が紫になっていた。

「僕に任せてよ!」

トルトニス
T良介はそのまま歩き出すが、イグニス、ウオータ、ソルムが一度に良介に憑依したため、体の奪い合いを初めてしまった。

『俺がやるんだよ!』

『いや俺がやる!』

『お前は女の子を捜すだけだろ!』

『みんな出て行ってよ!』

良介の問いにガーゴイルは、

「答える必要などない！貴様等はここで死ぬんだからな！」

ガーゴイルがそう言うのと渚は、変身準備を完了させ、

「言ってくれるじゃねえか！変身！」

《カメンライド……ディライド！》

渚はディライドに変身するとショッカー戦闘員をなぎ倒していく。それを見た良介は、

「よし、俺も行くか！」

良介は変身準備を完了させ、

「トルトニス！行くぞ！」 『オツケー！良介！』

良介はベルトに付いているボタンの内の紫のボタンを押してパスをセタツチする。

「変身！」

《ヴォルトフォーム！》

良介はデンカメンとバックル部分と太股の一部が紫になった仮面ライダーネオ電王・ヴォルトフォームに変身した。

そしてトルトニスの変型した巨大な紫の斧・マチェートルトニスでショッカー戦闘員をなぎ倒していく。

「なんだこいつら！多すぎだ！こつなつたら！」

ディライドはショッカー戦闘員から一度離れてカードを一枚装填する。

《カメンライド……アクト！》

ディライドは仮面ライダーディライドアクト・アースフォームに変身する。

「一気に行くぜ！」

DアクトEFはショッカー戦闘員を自慢の格闘技で倒していく。

「うじゃうじゃ居やがる！てかトルトニスこつこついう戦い向いてねえな！」

『なんだよそれ！』

ネオ電王VFの言う通りマチェートルトニスは両手で持たなければ扱えないほど重いのだ。

よつてこつこついう敵が多い場面では扱い難い。

「よし、ソルム！来てくれ！」

『任せろ！良介！』

ネオ電王VFはマチェートルトニスを放り投げ、ベルトに付いている黄色のボタンを押してパスをセタツチする。

《ノームフォーム！》

ネオ電王VFはデンカメンとバックル部分と太股の一部が黄色になった仮面ライダーネオ電王・ノームフォームに変身する。そしてソルムが変型した黄色い弓・マチエーソルムで、遠距離から攻撃する。

「よっしゃ！行くぜ！」

DアクトEFは流石に素手はきついと思い、カードを一枚装填する。

《フォームライド……アクト！ファイア！》

DアクトEFは仮面ライダーディライドアクト・ファイアフォームに変身する。

そしてファイアソードでショットカー戦闘員を切り裂いていく。

「喰らえ！」

ネオ電王NFはマチエーソルムで敵を寄せ付けなかったが、一瞬の隙をつかれショットカー戦闘員に攻撃されてしまった。

「しまった！……ぐあああ！」

『大丈夫か！？渚！』

マチエーソルムはネオ電王NFを心配する。

「ここは……ウォーター！来い！」

『よっしゃ！俺様の出番だ！』

ネオ電王NFはマチエーソルムを放り投げ、ベルトに付いている水色のボタンを押してパスをセタツチする。

《ウンディーネフォーム!》

ネオ電王はデンカメンとバックル部分と太股の一部が水色になった仮面ライダーネオ電王・ウンディーネフォームに変身する。そしてウォータの変型した水色の剣・マチエーウォータでショッカー戦闘員を切り裂いていく。

「一気に行くぜ!」

その頃DアクトFFは、

「くっ! 敵の数が多すぎる!」

敵の多さにうんざりしていた。

「だったら!」

DアクトFFはそう言つとショッカー戦闘員から一度離れ、カードを一枚装填する。

《フォームライド………アクト! ウインド!》

DアクトFFは仮面ライダーディライドアクト・ウインドフォームに変身する。

そしてウインドハルバードでショッカー戦闘員を一気に何体も倒していく。

「喰らえっ!」

そしてDアクトWFとネオ電王UFは合流すると、

「どうする、野山？」

「ここは……一気に決める！が、良いんじゃない？」

ネオ電王UFの提案にDアクトWFは、

「嫌いじゃないぜ！そういうの！」

そう言うとDアクトWFはアースフォームに戻りカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド……ア・ア・ア・アクト！》

DアクトEFは必殺技発動の準備をする。

《フルチャージ！》

ネオ電王UFはパスをセタツチする。

するとネオガツシャーが自動的にロッドモードに組み立てられる。

ネオ電王UFはネオガツシャー・ロッドモードを掴み、シヨツカー戦闘員に向けて投げ全てのシヨツカー戦闘員を捕らえる。

「行くぜ！渚！」

「ああ！」

DアクトEFは【ライダーキック】を、ネオ電王UFは捕らえた敵をマチェーウォータで貫く【ウンディーネアタック】を発動した。

「「はああああー！」「」

二人のライダーの必殺技を受けたシヨツカー戦闘員は全滅した。
DアクトEFはディライドに戻り、

「あとはお前だけだ」

ガーゴイルにそう言う。

「やれるものならやってみる……」

ガーゴイルは静かにそう言った。

「イグニス、行くぞ」

『ああ……!』

ネオ電王UFはネオ電王・イフリートフォームにフォームチェンジ
する。

「行くぞ!」

ディライドとネオ電王EFはガーゴイルに攻撃をするが、いとも簡
単に跳ね返され逆に攻撃を受けてしまう。

「ぐっ!強い……」

すると、

《カメンライド……サソード!サガ!》

仮面ライダーサソードと仮面ライダーサガが現れる。

「まさか！」

「大丈夫か？渚」

デイセンドが現れる。

召喚されたサソードとサガはガーゴイルに攻撃をしかける。

「とりあえず行くぞ！」

デイライドがそう言うと三人のライダーはガーゴイルに立ち向かうが全くはがたたない。

「なんなんだ！？こいつ！」

ネオ電王IFはガーゴイルの強さに驚愕する。

「無駄だ！俺を倒せるのは奴の子孫だけだ！」

「奴の子孫？」

デイライドはガーゴイルの言葉に疑問を抱いた。

「余所見をするな！」

ガーゴイルがデイライドに攻撃をしようとした瞬間、一台のバイクがガーゴイルに激突した。

「ぐあああ！……何者だ！」

「ユウキ！」

ユウキはマシンデスバードから降りる。

そしてデイルライドに駆け寄る。

「渚、悪い遅くなった!」「なんでも良い!行くぞ!」

「ああ!変身!」

《スカルフォーム!》

ユウキは幽汽・スカルフォームに変身してデイルライドと共にネオ電王EIFに加勢する。

「はああああ!」

「ぐっ!貴様は!」

ガーゴイルは幽汽SFを見ると驚愕した。

だが幽汽SFは気にせずネオ電王EIFに駆け寄り、立たせた。

「大丈夫か?」

「ああ、なんとか。ありがとう」

ネオ電王EIFが立ち上がり、その体全体を見た瞬間幽汽SFは苦しみだした。

「ぐっぐっ!」

「え?なんだ……?」

「ユウキ!どうした!」

幽汽SFは苦しみ、最後にこう叫んだ。

「またソラが泣くっつっ!……!」

「ま、まさか!」

「やはりな……」

何か嫌な予感がするディライドに対し、ディセンドは状況を冷静に理解する。

「うがああああ！」

幽汽SFは叫ぶのを止め、急に静かになる。
すると幽汽SFはネオ電王IFに襲いかかる。

「がああああ！」

「な、なんだ!?!」

『良介！避ける!』

ネオ電王IFを襲う幽汽SFを止めようとディライドは走り出す。

「ユウキ！止める!」

ディライドは幽汽SFを羽交い締めにするがすぐに抜け出され、吹っ飛ばされた。

「ぐあああ!」

幽汽SFはディライドを無視してネオ電王IFに襲いかかる。

「野山しか見えていないのか?」

幽汽SFの攻撃を受けたネオ電王IFは変身が解けてしまった。

「ぐあああ!」

『大丈夫か？良介!』

イグニスとは良介に駆け寄り良介を支える。
変身が解けたにも関わらず幽汽SFは未だに良介を倒そうとする。
そこへサソードとサガが駆け付けけるが幽汽SFに一撃で倒されてしまった。

「がああああ！」

「ぐあああ！」「」

それを見たデイセンドは、

「ここは一旦退くか……」

そう言ってカードを一枚装填する。

《アタックライド……インビジブル！》

デイセンドはデイセンドインビジブルでその場を去った。

「海東！あの野郎！」

デイライドはそう言いながら良介の元に行き、幽汽SFを突き飛ばす。

「止める！ユウキ！やめるだ！」

デイライドは呼び掛けるがその声は届かない。

「渚一旦退こう……」

「……わかった……！」

ディライドは了解すると、

「呟！ユリコ！逃げるぞ！」

するとネオライナーが現れ、ディライド達を回収して走り去った。

それを見た幽汽SFはふらふらと何処かへ歩いていった。
その様子を見ていたガーゴイルは、

「くっくっく、こいつは面白くなりそうだな……」

そう言っつてその場を去った。

ネオライナー内。

「渚、話してくれないか？あいつが何者なのかを……」

良介がそう言っつと渚は口を開いた。

「お前らは幽霊列車事件を知ってるか？」

「ああ、生と死を揺るがす程の大事件だろ？」

良介がそう言っつと渚は頷きこつ言っつた。

「ユウキは、その首謀者・死郎の子孫なんだ……」

「『『『『『『『!?!?!?』』』』』』」

その場に居たオーナーを除く全員が驚愕した……。

その頃幽汽SFはビルの屋上に居た。

すると勝手にパスが動き始め、ベルトにセタッチした。

《タイラントフォーム!》

幽汽SFは自動的に、スカルフォームの黒い部分を赤、銀色の部分を金にした仮面ライダー幽汽・タイラントフォームに変身してしまつた。

通常のタイラントフォームはデンカメンが赤色だが、今のタイラントフォームはデンカメンが紫色だった。

「がああああああ!?!?!」

ユウキに一体何が起こつたのか？

そして渚はユウキを救いだし、ガーゴイルイマジンを倒すことが出来るのだろうか……？

第14話 二代目電王、参上！（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第15話 ファイナルカウントダウン

総てを破壊し、総てを繋げ！

第15話 ファイナルカウントダウン(前書き)

今回はバトルメインです。

そしてあとがきは必ずよんでください。

第15話 ファイナルカウントダウン

これまでの仮面ライダーデイライドは……。

詳しくは第14話をお読み下さい。

ネオライナー内。

「渚、それ本当なのか……？」

良介は信じられないという表情で渚を訪ねる。

「本当だ。ユウキが仮面ライダー幽汽に変身してるのが何よりの証拠だ」

渚は冷静に言った。

するとオーナーは、

「やはりそういうことですか。駅長から警告がありましたからね」

「そうなのかよ……」

良介はオーナーの言葉に脱力した。

するとネオライナーに一人の青年が入ってきた。

「だから早く出ていけっつったんだよ」

「海東……」

達也は椅子に座ると、

「今回ばかりはお宝どころじゃないな」

「どういつことなの？」

達也の言葉に彩夏が質問する。

「ユウキは今スーパーショッカーに狙われている。それにスーパーショッカーとユウキをほっとけば世界が荒らされてお宝がゲットできねえからな」

達也は今回の目的を話す。それを聞いた渚は、

「まったく、結局お宝か……。でも……」

渚は立ち上がる。

「協力するか！」

良介も立ち上がる。

「今回だけだな」

達也も立ち上がり、三人はオーナーに、

「オーナー、スーパーショッカーのアジトどこにあるか解るかな？」

良介が聞くと、

「問題ありません。今向かってますから」
「すげえな」

渚はオーナーの行動力に感心した。

とある巨大建造物内。

銅色の仮面をした男が白い服を来た老人と話していた。

「仮面ライダー幽汽が覚醒しました」
「ようやくか……。奴を我等の配下にすれば憎きライダー共に復讐を果たせる！」

白い服を来た老人はそう言う。
そして奥に居る緑色の複眼に銅色のボディをした男が、

「行け、スーパージャーク將軍。ライダー共が来る」「はい。今頃ガーゴイルイマジンも仮面ライダー幽汽を捕えてる筈ですから」

そう言うてSジャーク將軍はその場を去った。

「今こそ、影が光を支配する時だ……！なあ？スーパー死神博士」
「その通りです、スーパーシャドームーン様」

今、巨大なる悪が動き始めた……。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。
新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第15話 ファイナルカウントダウン

ネオライナー内。

「良介、一体どうする？」

イグニス は良介に今回の戦いについて聞く。

「んなもん決まってるんだろ」

「良介、まさか……」

トルトニスは嫌な予感がした。

「正面突破！」

良介の提案にイマジン達、彩夏、ユリコ、リナは呆れた。
だが、

「ま、悪くねえな」

「どこの電王も考えることは一緒か。でも嫌いじゃねえな」

渚と達也は同意する。

「でも渚君！罾とかあるかもしれないだよ!？」

彩夏は反対するが、

「敵の本拠地なんだ、どこから突っ込んだって罾があるに決まっている」

「だったら正面から行って全員ぶっ飛ばしてやる」

渚と達也はそう言う。

「確かに……」

彩夏は納得した。

するとリナがマイクで、

「まもなく、敵の本拠地に到着致します。お降りになられる方はお忘れ物の無いようにお気をつけ下さい!」

リナがそう言うのと、渚達はネオライナーから出ていった。

「あれがスーパーショッカーの本拠地ってやつか」

達也はそう言うと、基地からショッカー戦闘員がぞろぞろ出てきた。

「あら？気付かれてたのか」

良介は呑気に言う。

「さあて、行くか！」

「ああー!!」

渚の声と共に三人は走り出す。

「『『変身!!』』」

《カメンライド……ディライド!》

《カメンライド……ディセンド!》

《バーストフォーム!》

三人は仮面ライダーに変身して、ショッカー戦闘員を倒していく。

「どけっ!お前らに用は無い!」

ディライドは素手でショッカー戦闘員を倒していく。

「はあ、相変わらず多いな……」

ディセンドは脱力しながらも、しっかりショッカー戦闘員を倒していく。

「一気に行くぜ!」

ジンと幽汽TFが居た。

「ユウキ！」

「渚、今のユウキは先祖の呪いに縛られ電王に復讐する事しか考えてない」

三人は立ち上がり、

「だったら俺があいつの相手をする。その隙に二人はあのイマジン
を倒してくれ！」

「待て、野山！それは俺が……！」

デイライドはネオ電王BFの提案に反対するが、

「あいつの狙いは俺だ。俺がやらなきゃ誰がやるってやつだ！」

ネオ電王BFはそう言いつつ、幽汽TFに向かって走って行った。

「渚、行くぞ！」

「……わかった！」

デイライドとデイセンドもガーゴイルに向かって走って行った。

「たあああ！」

ネオ電王BFはネオガッシャーで攻撃する。

だが幽汽TFはいとも簡単に弾き返し、右ストレートを浴びせる。

「ぐああ！なんだこいつ！」

するとイグニスが、

『良介！俺で行け！』

さらに他のイマジン達も、

『俺にやらせろ！』

『あいつに接近戦は無理だ！だからおっさんで行け！』

『ああいう奴は力で倒すのが一番だよ！』

イマジン達が口々に言う中、ネオ電王BFの出した答えは、

「よし！みんな、来い！」 『 『 『 えええ！？』 『 『 『

イマジン達は不満そうな声を上げるが、ネオ電王BFは気にせず赤い携帯電話・ネオケータロスを取り出し、ボタンを四つ押す。

《イグニス！ウォータ！ソルム！トルトニス！》

そして最後にネオケータロスの横部分にあるボタンを押す。

《センチュリオンフォーム！》

その瞬間、ネオ電王の体中にデンレールが現れ、左腕と左足に何かが合体する部分が現れる。

そしてそれぞれのイマジン達の色デンカメンが現れ、肩に走っているデンレールにそれぞれ合体する。

そして最後にネオ電王のデンカメンが二つに開いているところからさらに二つに開き、四つになる。

これがネオ電王の強化形態仮面ライダーネオ電王・センチュリオン

フォーム。

「よし！成功！」

「ったく仕方ねえな」

「あゝ暑苦しい」

「そんなこと言わずに」」「一気に行くっ！」

イグニス、ウォータ、ソルム、トルトニスはそれぞれ感想を述べる。

「みんな、行くぞ！」

ネオ電王SFは幽汽TFに向かってパンチを浴びせる。

「ぐあああああ！」

「お？効いてる？」

怯んだ幽汽TFを見たネオ電王SFは幽汽TFにさらにラッシュを仕掛ける。

「はあああ！」

「喰らえ！」

デイルイドとデイセンドはなんとかガーゴイルに対抗していた。

「ぐっ！なかなかやるな。だったら！」

ガーゴイルは剣を装備して反撃する。

「なに！？」

「ちっ！こいつ！」

ディライドとディセンドも負けじと反撃する。

スーパーショッカー本拠地。

「いつまでやってるつもりだ!」

Sシャドームーンはそう言うと、自ら戦いの場に赴いた。

ネオ電王SFは幽汽TFを圧倒していた。
するとそこへ、

「愚かなライダー共!これまでだ!」

三人は声のする方を見る。

「シャドームーン!」

「何故あいつが!?ディケイドが倒した筈じゃないのか!」

「なんだあいつ……?」

するとSシャドームーンは衝撃波を放ちディライド達に攻撃する。

「くぐぐああああ!」「」「」

三人は一つのところに集まる。

「ぐっ!なんて奴だ……」「こいつはやばいな……」「まだだ!」

尚も立ち上がるうとする三人を見たシャドームーンは、

「しつこい奴等だ。幽汽、やれ！」

命令された幽汽TFはパスをセタツチする。

《フルチャージ！》

「ユウキ！？なんで奴の命令を！？」

「おそらくあのイマジンに洗脳されたんだ」

「あのイマジンにそんな力が……」

三人が話している内に幽汽TFは必殺技を発動しようとしていた。

「やばい！」

だが気付いた時には既に遅く、幽汽TFは拳を地面に叩きつけ敵に衝撃波を飛ばす【タイラントデンライダーパンチ】を発動した。

「くぐあああああ……！！」「」「」

【タイラントデンライダーパンチ】を受けた三人は大ダメージを受けた。

「ぐあああ……」「」

「ま、まじかよ……」「」

「ぐはあああ……」「」

ネオ電王SFは強制変身解除までされていた。

「良介！大丈夫か！」

イグニス達は良介に駆け寄る。
そこへ彩夏とユリコが来るが、

「なに、これ……?」

「良介!」

彩夏は絶句し、ユリコは良介に駆け寄る。
するとディライドは立ち上がり、

「まだだ……!まだ終わっていない!」

ディライドは立ち上がり、カードを一枚装填しようとする。
だがそれを見たディセンドがディライドの下へ駆け寄り、

「やめろ!渚!ファイナルライドは不可能だ!せめてライドを使っ
てから使え!」

ディライドの手に握られていたカードはFARのカードの紋章が銀
色で描かれていた。

そしてディセンドはそれを全力で阻止しようとする。だがディライ
ドは、

「もうこれしか手は無いだ!!!」

「止せ!やめろおお!!!!」

ディセンドの必死の制止を振り切り、そのカードを装填した。

《ファイナルライド……ディ・ディ・ディ・ディライド!》

その瞬間ディライドはディープライエローの輝きに包まれる。

「うおおおおお！……！！」

それを見た彩夏達は、

「渚君！？」

「一体何が……！？」

「渚……！！」

三人はただその光景を見ていた。

「おおおおお！……！！」

尚も叫び続けるデイライド。

そして叫ぶ毎に増すディープイエローの輝き。

一体何が起こるのだろうか？

そして渚達はスーパーショッカーを倒し、ユウキを救うことが出来るのだろうか？

第15話 ファイナルカウントダウン（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第16話 最速の龍・ドラゴ

総てを破壊し、総てを繋げ！

〈予告〉

スーパーショッカー。

かつてディケイドに敗れた悪の組織。

そして今、その野望が再び動き始める。

「渚君！！」

倒れる渚……。

「俺がやるしかないってか……」

立ち上がる達也。

「俺達がやらなきゃ誰がやるってんだよ！」

そして真の力を発動するネオ電王。

現れるスーパーショッカー。

そして今、仮面ライダーが集結する。

「みんな、行くぞ！！！」

M・R・DCDシリーズ 超・仮面ライダーネオ電王&ディライド
スーパーショッカーの野望

てな感じのやつやろうと思ってます。

因みに主人公は良介です。

連載がスタートしたら活動報告で報告します！

第16話 最速の龍・ドラゴ(前書き)

デイルイドに戻って参りました！

そして新しい仲間が登場します！

では、どうぞ！

第16話 最速の龍・ドラゴ

これまでの仮面ライダーデイライドは……。

詳しくは1〜15話、M・R・D・C・Dシリーズ 超・仮面ライダー
ネオ電王 & amp; デイライド スーパーショッカーの野望をお読
み下さい。

ユウキと別れ、ネオ電王の世界を後にした渚と彩夏は次なる世界に
来ていた。

渚と彩夏は写真館でコーヒーを飲んでいた。
すると信次郎が渚がネオ電王の世界で撮った写真を持ってきた。

「渚君、写真出来ただけど……」

信次郎は何故か困惑していた。

彩夏はそれに疑問を抱き、

「どうしたの？おじいちゃん」

「ああ、見てくれ」

彩夏が写真を見ると、他の写真はいつも通りピンぼけ写真だが、一
枚だけ綺麗に撮れていた。

その写真はネオ電王の世界でユウキとの別れの際に撮ったユウキの
立派な後ろ姿だった。

その写真を見た渚は、

「あいつを撮ったんだ、綺麗に撮れて当たり前だ」

笑顔でそう言った。

だが写真館はユウキが居なくなったせいか、どこか寂しげだった。そんな空気に耐えれなくなったのか、彩夏は渚の腕を掴み、

「渚君、早くこの世界のことを調べよう？」

「ああ、そうだな」

そう言って二人は写真館を出た。

そんな二人を監視していた鳴滝は、

「デイルイド、この世界で必ず貴様を……！」

久し振りの登場で張り切っていた。(笑)

二人はあてもなくただただぶらついていた。

「なんにもないね」

「んゝそうだな」

渚はそう言いながら写真を撮っていた。

そうしてあてもなく歩いていると、どこかから人々の悲鳴が聞こえてきた。

「な、何！？」

「あっちだ！」

渚と彩夏は悲鳴のする方へ走って行った。

二人が到着すると、そこにはサナギワームが人々を襲っていた。

「ワーム……ドラゴの世界か……」

渚は絵柄を失ったドラゴのKRカードを持ってそう言った。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第16話 最速の龍・ドラゴ

渚はワームに向かって走り出し、タックルを喰らわす。

「はあ！」

ワームは渚に襲い掛かるが渚はいとも簡単に避け、変身準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド…ディライド！》

渚はデイルライドに変身すると、ライドブッカー・ソードモードでワームを何度も切り裂く。
そしてカードを一枚取り出し装填する。

「こいつで行くか」

《カメンライド…ブレイズ!》

デイルライドはデイルライド・ブレイズ・キバフォームにカメンライドする。

DブレイズKFはワームにパンチとキックの嵐を浴びせる。

だが突然ワームの体が赤くなり、脱皮する。

「脱皮か!？」

脱皮したワームはクロックアップを発動してDブレイズKFを攻撃する。

「どわっ!クロックアップか!」

DブレイズKFはワームの攻撃に反撃出来ず、デイルライドに戻ってしまった。

「ぐあああ!」

「渚君!」

彩夏はデイルライドの身を案じる。

すると何処かから紫色の龍の形をした物がワームに攻撃を仕掛ける。

「ん?」

すると後ろから一人の青年がやって来る。

「誰だ？」

青年は黙ったままジャケットのボタンを外す。

そこにはカブトやガタツクと同じライダーベルトが巻かれていた。

そして青年が右腕を伸ばすと、龍の形をしたゼクター・ドラゴゼクターが青年の右手に収まる。

そしてドラゴゼクターをライダーベルトに装着する。

「変身」

《ヘンシン！》

青年は茶色の複眼に銀色のボディ、さらに二本の角が生えた仮面ライダー・ドラゴ・マスクドフォームに変身した。

「あれが、ドラゴ……」

ドラゴMFはドラゴクナイガン・アックスモードでワームを切り裂く。

だがワームはクロックアップを発動して反撃をした。そしてドラゴMFはドラゴゼクターの口部分を百八十度開く。

するとアーマーが少し外れ、最後に百八十度を開いた口部分を引っ張る。

「キャストオフ」

《キャストオフ！》

その瞬間、ドラゴMFのアーマーが弾け飛び紫色のボディが現れ、

最後に一本の角・ゼクターホーンが上がり、変身が完了する。

《チェンジ！ドラゴン！》

ドラゴ・ライダーフォームはドラゴクナイガンをクナイモードにして、ベルトの右サイドのボタンを押す。

「クロックアップ」

《クロックアップ！》

ドラゴRFはクロックアップを発動してフォームに反撃する。だがフォームも負けじとクロックアップを発動する。

ドラゴRFはフォームを追い詰めていく。

だがその瞬間、青い影がドラゴRFを襲う。

「ぐあ！」

「なんだ!？」

ドラゴRFはクロックアップの世界から出されてしまった。そしてドラゴRFを襲ったライダーは……、

「お前か、ガタック……」

ドラゴRFを襲ったのはガタック・ライダーフォームだった。

「やっかいだな……」

デイルイドがそう言った瞬間、フォームが襲い掛かってきた。だがその瞬間フォームは何者かに打ち抜かれ爆発した。

「なに!?!」
「!?!」

デイルイドとガタツクRFは驚いた。
だがデイルイドはその一瞬の間について『デイメンションインパクト』をガタツクRFに放った。

「喰らええええ!」
「何!?!ぐあああ!」

『デイメンションインパクト』を受けたガタツクRFは大きく吹っ飛ぶ。
そしてなんとか立ち上がると、クロックアップを発動してその場から逃げた。

「ちっ!逃げたか!」

デイルイドは悔しそうに言いながら変身を解く。
ドラゴRFも変身を解く。
渚は青年に駆け寄り、

「大丈夫か?」
「ああ、それにしてもさっきの攻撃は誰だったんだ?」

青年はワームを倒したのは誰か考えていた。
すると後ろから、

「俺だよ、渚」

渚の前に現れたのは、銀色の三本角に緑色の複眼とボディの仮面

ライダーソウガ・ネビリムフォーム、つまり……、

「ユウセイ！」

「よ、久し振りだな、渚」

ソウガNFは変身を解く。

「なんでここにいるんだよ！」

ビストロ・サル。

渚達はドラゴに変身する青年の勤め先でビストロ・サルに来ていた。因みにこの世界での渚の役割はビストロ・サルのアルバイトである。渚達はビストロ・サルの店長の上原加織の手料理を食べていた。

「ん！うま！」

ユウセイは加織の手料理を絶賛していた。すると彩夏が、

「とりあえず自己紹介しない？」

「そうだな」

彩夏がそう言つと青年は賛同する。

「俺は真堂ソウイチだ、宜しく頼む」

「近藤渚だ」

「小野山ユウセイ！宜しく！」

「岬彩夏です！」

四人は自己紹介を済ませる。

渚はユウセイにあることを聞いた。

「なあユウセイ、お前なんでこの世界にいるんだ？」 「俺ソウガだし」

「何言ってるんだよ」

ユウセイはご飯を飲み込むと、ちゃんとこの世界に来た理由を話し始めた。

「あのスーパーショッカーとの戦いの後に、青い蝙蝠が現れてオーロラみたいなのに入ったらこの世界に居たんだ」

「青い蝙蝠ってアクア!？」

彩夏がそう言っているとユウセイは、

「ああ、確かそんな名前だったな」

「なるほど、アクアが……」

渚は納得する。

するとユウセイが、

「そんなことよりソウイチさん、この世界では何が起こってるんですか？」

ユウセイはソウイチにこの世界で起こっていることを聞いた。

「今、この世界はZECTに……いや、ワームに支配されている」
「ワームに？ どういうことだ？」

渚はワームが支配しているというのに疑問を抱いた。

「あるワームによってかつてのZECTは乗っ取られ、さらにマスクドライダーシステムは俺のドラゴゼクター以外全て奴等に洗脳されてしまった」

「洗脳だつて！？ でもどうやって……」

ユウセイは驚愕した。

「マスクドライダーシステムの制御装置のデータを書き換えただけ」
「なるほど、だが何故お前のゼクターだけ無事なんだ？」

確かに何故ドラゴゼクターだけが無事なのかは気になる。
ソウイチはこう答える。

「俺のゼクターは特殊なんだ」
「特殊？」

「ああ。このゼクターは俺の父が独自に開発したマスクドライダーシステム。だからZECTの制御装置の効果を受けないんだ」

ソウイチはドラゴゼクターについて話した。
だが一つだけ疑問が残っている。

渚はその疑問をソウイチにぶつける。

「だが何故変身している人間も操られるんだ？」

渚の問いにソウイチは、

「資格者のベルトはプレスにも制御装置があるんだ。だから資格者も操られる。そしてベルトやプレスを固定することで操られる。」
「なるほど……。じゃあZECTに乗り込んでその制御装置のデータをもう一回書き換えたら良いんじゃないか？」

ユウセイはそう言うがソウイチはため息をついて、

「それが出来たらとづくにやってる」

「ああ……」

何の解決策が見付からないまま時間が過ぎていった。すると、

「お兄ちゃん！」

一人の少女が入ってきた。

「ヒヨリ……」

ヒヨリと呼ばれる少女はソウイチの腕を掴み、

「またアラタが！？」

「アラタ？」

渚はアラタという名前に聞き覚えがあった。

「ガタツクの資格者・桐原アラタだ」

「てかこの子は？」

ユウセイはヒヨリと呼ばれる少女について聞いた。

「あ、真堂ヒヨリです」

「真堂ってことはソウイチさんの妹？」

「はい……」

するとキッチンから加織が出てきて、

「あ、ヒヨリちゃん、買い物お願いできるかな？」

「あ、わかりました」

ヒヨリはそう言うつと買い物に出掛けた。

ソウイチはヒヨリの身を案じ、

「じゃあ俺も行ってきます」

ソウイチはそう言うつと店を出ようとするが、

「待つてソウイチ君！実は今日団体さんが来るから準備手伝ってほしいんだけど」

「あ、じゃあ俺が行ってきますー！」

渚はそう言うつとヒヨリの後を追いつけた。

渚とヒヨリは買い出しを終え、帰路についていた。

二人は一緒に買い出しをしてかなり仲良くなっていた。

「あ、渚君ってカメラマンなの？」

「まあ一応な。下手くそだけど」

二人はそんな他愛もない会話をしていた。
すると渚はヒヨリにあることを聞いた。

「そのアラタって奴は誰なんだ？」

「私の彼氏なんです……」

ヒヨリはアラタのことを聞かれると暗い顔になってしまった。
渚はまずいと思い、

「でも大丈夫だ。俺と真堂が必ずヒヨリの彼氏を救ってやるから」

渚は笑顔でそう言うとヒヨリも笑顔で頷いた。
すると二人の前にサナギワームが一体現れた。

「ワーム！ヒヨリ、逃げろ！」

「うん！」

渚はヒヨリを逃がすと変身の準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド……デイライド！》

渚はデイライドに変身するとワームと戦い始める。
暫く戦い続けていると工場まで来ていた。

デイライドはワームにパンチの連打を浴びせる。

だがまたもワームは脱皮をしてデイライドに反撃する。

「虫には虫ってか？」

デイルライドはそう言うカードを一枚装填する。

《カメンライド…ソウガ！》

デイルライドはデイルライド・ソウガ・アビシオンフォームにカメンライドする。DソウガAFはワームに反撃するが、ワームはクロックアップを発動して反撃する。

「クロックアップか！なら！」

DソウガAFはそう言うカードを一枚装填する。

《フォームライド…ソウガ！ネビリム！》

DソウガAFはデイルライド・ソウガ・ネビリムフォームにフォームライドする。

そしてネビリムマグナムを装備して感覚を研ぎ澄ます。

そして一気に引き金を引いてワームを倒した。

デイルライドに戻った瞬間デイルライドの足元に銃撃が飛んでくる。

デイルライドが振り向くとそこにはガタックRFとザビー・ライダーフォームが居た。

「また洗脳ライダーか。なら新しい力を使うか」

デイルライドはそう言うカードを一枚装填する。

《カメンライド…ネオデンオウ！》

デイライドはデイライド・ネオ電王・バーストフォームにカメンライドする。

「まずはこれだ」

そう言つてカードを一枚装填する。

《フォームライド…ネオデンオウ！イフリート！》

Dネオ電王BFはデイライド・ネオ電王・イフリートフォームにフォームライドする。

そしてマチェーイグニス装備してガタツクRFとザビーRFに斬りかかる。

だがガタツクRFもガタツクダブルカリバーを装備して反撃する。

「ぐああ！」

さらにザビーRFも加勢してかなり押されていた。

Dネオ電王IFは二人と距離を取りカードを一枚装填する。

「ならこれだ」

《フォームライド…ネオデンオウ！ヴォルト！》

Dネオ電王IFはデイライド・ネオ電王・ヴォルトフォームにフォームライドする。

そしてマチェートルトニスで二人に反撃する。

だがネオ電王編で何度も言われてきたことがある。

それはマチェートルトニスは扱いにくいということだ。

「こいつ使いにくい！」

Dネオ電王VFがそう言った瞬間ガタツクRFとザビーRFがクロツクアップを発動してDネオ電王VFを吹っ飛ばした。

「どわあああ！」

その様子を達也が上から眺めていた。

「マスクドライダーだけが持つ能力・クロツクアップ。この俺が頂
く」

達也はそう言うのとカードを一枚装填する。

《カメンライド》

「変身！」

《デイセンド！》

達也はデイセンドに変身するとデイライドに加勢する。

「海東、何の真似だ？」

「勘違いすんなよ？俺の狙いはあくまでお宝だ」

デイセンドはそう言うのとガタツクRFと戦い始める。

だがガタツクRFはダブルカリバーでデイセンドを圧倒する。

「くっ！なら兵隊共、出番だ！」

そう言ってカードを一枚装填する。

《カメンライド…ライオトルーパーズ!》

ディセンドはライオトルーパーを三体召喚するがガタツクRFに三体共一撃で倒されてしまう。

「中々やるな。絶対貰うぜ、その力」

ディセンドはそう言うカードを一枚装填する。

《アタックライド…インビジブル!》

ディセンドは『ディセンドインビジブル』を発動してその場を去った。

その頃ディライドはザビーRFと互角の戦いを繰り広げていた。ザビーRFはクロックアップを発動して反撃する。だがディライドは余裕の表情で、

「クロックアップか……。なら十秒でケリをつけてやる」

ディライドはそう言うカードを一枚装填する。

《カメンライド…イプシロン!》

ディライドはディライド・イプシロンにカメンライドする。さらにもう一枚装填する。

《フォームライド…イプシロン!マッハ!》

Dイプシロンはデイライド・イプシロン・マツハフォームにフォームライドする。

そして左手首に装着されたイプシロンマツハのスイッチを押す。

《スタートアップ!》

DイプシロンMFはクロックアップと同じ速さで動きザビールFに對抗する。

暫く互角の戦いを繰り広げていると、ガタツクRFが現れダブルカリバーで切り裂かれてしまう。

「ぐああ!ガタツクか!」

さらに何者かに銃撃を浴びせられる。

「ぐああああ!」

DイプシロンMFはデイライドに戻ってしまった。

「誰だ!」

デイライドは銃撃の飛んで来た方向を見る。

そこにはトンボをモチーフにした水色のライダー・ドレイク・ライダーフォームだった。

「今度はドレイクか……」

デイライドは三体のライダーに囲まれ絶対絶命だった。

すると壁をぶち破り紫色のバイク・ドラゴエクステンダーに跨がったドラゴRFとレイドチェイサーに跨がったソウガAFが現れる。

「渚！大丈夫か！？」

「ああ、でもなんで？」

「ヒヨリから聞いたんだ」

デイライド、ソウガAF、ドラゴRFはそれぞれザビーRF、ガタツクRF、ドレイクRFと戦い始める。

暫く戦っていると、デイライド達の周りに6体のライダーが現れる。

「サソード、キックホッパー、パンチホッパー、コーカサス、ヘラクレス、ケタロス……」

「残りのライダーか……」「やべえ……」

絶体絶命のデイライド、ソウガAF、ドラゴRF。

果たして彼等はこのピンチを切り抜けることができるのだろうか？
そして、このドラゴの世界を守ることが出来るのだろうか？

第16話 最速の龍・ドラゴ（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第17話 GOD SPEED LOVE

全てを破壊し、全てを繋げ！

第17話 GOD SPEED LOVE(前書き)

17話です！

では、さよなら！

第17話 GOD SPEED LOVE

これまでの仮面ライダーディライドは！

詳しくは第16話をお読みください。

9体の仮面ライダーに囲まれたディライド達。
正に絶体絶命という言葉が似合う。
その瞬間9体の仮面ライダーが一斉にクロックアップを発動してディライド達を襲う。

「くくくあああああ！！！！」

ディライド達は変身こそ解けなかったがかなりダメージを受け、体を動かすのが辛かった。
するとライダー達の後ろから一人のスーツを来た男が現れる。

「哀れな姿だな、ドラ」

「工藤！」

工藤と呼ばれた男はニヤリと笑い、

「今日で貴様も終わりだ」

そう言うと工藤は龍を模したワーム・ドラゴンワームに変身する。

そしてクロックアップで再びデイルライド達を襲う。

「くくくあああああ……！」

さらに9体の仮面ライダーに囲まれ、今度こそ終わったと思ったその時、

《ハイパークロックオーバー！》

デイルライド達の前に巨大な三本の角に茶色の複眼、紫と銀のボディの謎の仮面ライダーが現れた。

「なんだ貴様は！」

ドラグーンは謎のライダーにそう聞くが、謎のライダーはそれを無視し、デイルライド達に駆け寄り、ベルトの左腰に装着されたカブトムシ型の銀色のゼクターのボタンを押す。

《ハイパークロックアップ！》

その瞬間デイルライド達は謎のライダーと共にその場から消えた。

「逃げたか、まあいい」

ドラグーンはそう言うつと変身を解く。

「さあ、実験の第二段階を始めよう……！」

工藤は不気味な笑顔でそう言った。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。
新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第17話 GOD SPEED LOVE

謎のライダーと共に別の場所に移動した渚達。

「なんだ、お前は？」

ユウセイは謎のライダーにそう聞くが、謎のライダーは無言のまま再びハイパークロックアップを発動してその場を去った。

《ハイパークロックアップ！》

「なんだっ たんだあいつは……」

「……ハイパードラゴ」

渚は謎のライダーをそう呼んだ。
ソウイチは無言で渚を見る。

「ハイパードラゴ？」

ユウセイは渚の言葉に首を傾げる。
だがソウイチは納得したような表情で、

「とりあえずビストロ・サルに戻ろう」

ソウイチがそう言うと、渚達はビストロ・サルへと帰っていった。

渚達がビストロ・サルに戻ると、彩夏が出迎えて来た。

「渚君、ユウセイ、ソウイチさん！大丈夫でしたか！？」

「ああ、なんとかな」

渚はそう言うとゆっくりと椅子に座る。

ソウイチは辺りを見回し、

「加織さん、ヒヨリは？」

ソウイチはヒヨリが居ないことに気付き、加織にヒヨリの居場所を聞く。

「ああ、ヒヨリちゃんなら先に家に帰ったよ」

「そうですか」

加織がそう言うと、ソウイチはホッとした表情で椅子に座る。

その頃ヒヨリは帰路についていた。
だがどこか表情が暗い。
やはりソウイチやアラタが心配なのだろう。
そんなことを考えながら歩いていると、ヒヨリの前に一人の男性が
現れる。

「ヒヨリ！」

「えっ？」

ヒヨリはその男性の顔を見て息を呑んだ。
何故ならその男性は、

「……アラタ？」

そう、ZECTに操られた筈の仮面ライダーガタック、即ちヒヨリ
の恋人である桐原アラタだった。
ヒヨリは急いでアラタに駆け寄る。

「どうして！？確かZECTに操られていた筈なのに……」

ヒヨリがそう言うとアラタは、

「何言ってるんだよ。そんなことよりさ、ヒヨリに見せたい物がある
んだ」

「見せたい物？」

「ああ、ちよつと来て！」

アラタはそう言つとヒヨリの腕を掴みどこかへ連れていった。

暫く歩いているとある建物の駐車場に来ていた。
するとアラタは急に立ち止まり、ヒヨリの腕を乱暴に離す。

「アラタ………?」

アラタの表情は先程の優しいものではなく、冷めきった表情をしていた。

ヒヨリはそんなアラタの表情を見ると、思わず後退りをした。

アラタが指を鳴らす。

するとサナギワームが現れヒヨリを捕らえる。

「アラタ!? 一体どういうこと!?!」

「……………」

ヒヨリがそう聞くもアラタは黙ったままだった。

すると駐車場の奥から工藤が歩いてくる。

「良くやった、ガタツク。実験台は手に入った。これでようやく……!
…!クツクツク!」

ワームはヒヨリを連れて行くこととするが、ヒヨリは必死にアラタに助けを求めろ。

「アラタ! アラタ助けて! アラタアアア!」

するとアラタはヒヨリの方を見る。

ヒヨリはもっとアラタに助けを求めろ。

「アラタ！お願い！目を覚まして！アラタ！！」

その瞬間アラタは頭を押さえ、苦しみ始める。

「ぐっ！」

アラタの頭の中にヒヨリとの思い出が甦る。
するとアラタはさらに苦しむ。

「ぐああああ！」

アラタの反応を見た工藤は、

「まさか！」

アラタは苦しむのを止め顔を上げる。

「……ヒヨリ？」

「アラタ！」

「正気に戻ったか！」

アラタは一瞬困惑するが、自分の隣に居る工藤を見て更にワームに捕らえられているヒヨリを見て状況を理解する。
そして今までの自分の行いを思い出す。

「俺はなんてことを……。それより……。！」

アラタはヒヨリを救おうとするが、工藤により阻止される。

「無駄だ！」

工藤はそう言つとドラグリーンフォームに変身してアラタを攻撃する。

「ぐあああああ！」

その頃渚達はビストロ・サルで、今後の行動について話し合つていた。

「さて、これからどうする？」

渚がそう言つとユウセイが、

「とりあえずZECTをどうにかしないと……。でも正面から乗り込んで逆に戻り討ちに合うだけか……。」

一向に進まない話し合い。するとビストロ・サルのドアが大きな音を立てて開く。

全員がドアの方を見ると、血だらけのアラタが倒れこんで来た。恐らく工藤にやられたのだろう。

「お前は、アラタ！？」

「ガタツクだと！？」

渚達はアラタに駆け寄る。するとアラタは苦しみながら、

「ソ、ソウイチ……！ヒヨリが、ヒヨリが……！く、工藤に拐われた……！」

そう訴えかける。

だが渚は全く関係のないことを聞いた。

「お前、洗脳が解けたのか？あのワームの洗脳が」

「えっ？」

「……そういうことか」

そう、渚はライダー達の洗脳はZECTのマスクドライダーシステムの制御装置のデータの書き換えではなく、工藤「ドラグーン」ワームの能力であることに気付いていたのである。

「どうもおかしいと思ったんだ。マスクドライダーシステムには共通の制御装置なんか無い。それに、こいつは恐らく正気だろう。制御装置の書き換えで洗脳されているなら制御装置でしか洗脳は解除出来ない。それにあの工藤とかいう奴が全員の洗脳を解くとも思えないしな」

「なるほど……」

渚の説明にユウセイは納得する。

ソウイチはアラタにヒヨリのことを聞く。

「それよりアラタ！ヒヨリは！？」

「ヒ、ヒヨリは工藤の実験台にされかけてる……。全人類をワームに変えるという実験の……！」

「全人類をワームに！？」

工藤の計画を知ったユウセイは驚愕する。

すると渚は立ち上がり、

「こりゃもうZECTに真っ正面から突っ込むしかねえな。ユウセイと岬はそいつを頼む。真堂、行くぞ」

「ああ」

渚がそう言うのとソウイチは短く返事をして渚と共にビストロ・サルをあとにした。

その頃工藤は、ヒヨリを実験台にして全人類ワーム化計画の第二段階に入ろうとしていた。

するとザビーRFが工藤に駆け寄り、耳打ちをする。

「ふん、くだらん。全員で潰せ」

工藤がそう言うのと8人のライダーは部屋から出ていった。

渚とソウイチがZECTのビルに到着すると、8人のライダーが待ち構えていた。

「大歓迎だな」

「全くだ」

二人がそう言った瞬間ドレイクRFが二人に銃を放つ。二人は銃を避け変身する。

「変身」

《カメンライド…ディライド!》

「変身」

《ヘンシン!》

《キャストオフ!》

渚はディライドに、ソウイチはドラゴRFに変身する。二人はヒヨリがいる部屋を目指そうとするが、8人のライダーに行く手を阻まれる。

「退け!お前等に用は無い!」

「このままじゃヒヨリが!」

二人が苦戦していると、レイドチェイサーとガタツクエクステンダーに跨がったユウセイとアラタが現れる。

「ユウセイ!」

「アラタ!」

二人はディライドとドラゴRFに駆け寄る。

「アラタ、大丈夫なのか?」

「ああ。それに俺のせいでヒヨリが拐われたんだ。いつまでも寝てられるか」

「渚!ソウイチさん!ここは俺とアラタに任して上を目指すんだ!」

ユウセイがそう言うとディライドとドラゴRFは頷き、走り出す。

8人のライダーがそれを阻もうとするが、ソウガAFとガタツクRFが阻止する。

二人はその隙にヒヨリが居る部屋を目指した。

「さて、二人がヒヨリちゃんを救うまで時間稼ぎと行きますか」

ソウガAFがそう言うと、

「じゃあ俺も加勢させてもらおうか」

達也が現れる。

「あんた、確か海東達也」「はじめましてかな？小野山ユウセイ」

達也はそう言うとカードを一枚装填する。

《カメンライド》

「変身！」

《デイセンド！》

達也はデイセンドに変身する。

さらにカードを二枚装填する。

《カメンライド…サイガ！イクサ！》

「行け！」

デイセンドはサイガとイクサ・バーストモードを召喚する。

ガタックRFはザビーRFとドレイクRF、デイセンドはサソードRFとコーカサス、ソウガAFはキックホッパーとパンチホッパー、サイガはヘラクス、イクサBMはケタロスと戦う。

デイセンドはデイセンドライバーの銃撃と高速移動を駆使してサソードRFとコーカサスを圧倒する。

さらにサイガとイクサBMもヘラクスとケタロスを押倒す。

「クロックアップを使われる前に倒すか」

デイセンドはそう言うカードを一枚装填する。

《アタックライド…クロスアタック!》

サイガはサイガフォンのエンターを押す。

《エクシードチャージ!》

フォトンブラッドが右足に送り込まれ、「コバルトスマッシュ」を発動する。

「はああああ!」

「ぐああああ!」

『コバルトスマッシュ』を受けたヘラクスは変身が解け、気絶した。イクサBMはフェッスルをイクサベルトに装填する。

《イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ!》

イクサBMは『イクサジャッジメント』を発動してケタロスを切り裂く。

「たああああ!」

「うわああああ!」

『イクサジャッジメント』を受けたケタロスは変身が解け、気絶し

た。

サイガとイクサBMがヘラク스와ケタロスを倒したのを見たディセンドは、

「じゃあこつちも決めるか」

そう言つてカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド》

サソードRFとコーカサスにディセンドライバーを向けると、大量のライダーカードで造られたターゲットサイトが出現する。

すると、サイガとイクサBMがライダーカードの中に吸い込まれていく。

そして引き金を引き、『ディメンションバレット』を放つた。

「はあっ！」

「ぐああああ！！」

『ディメンションバレット』を受けたサソードRFとコーカサスは変身が解け気絶する。

ソウガAFはキックホッパーとパンチホッパーに自慢の格闘戦で圧倒する。

そして右足に力を送り込み、『アビシオンキック』をパンチホッパーに放つ。

「はああああ！」

「うわあああ！」

『アビシオンキック』を受けたパンチホッパーは変身が解け気絶する。

そこへキックホッパーが襲い掛かる。

「どわああ！」

ソウガAFは大きく吹っ飛び壁にぶつかる。

ソウガAFは壁が壊れたところに落ちていた鉄パイプを拾い、

「豪変身！」

そう言つてソウガ・メリクリウスフォームにフォームチェンジする。それに合わせて、鉄パイプもメリクリウスフォームの専用武器・メリクリウスロッドに変化する。

そしてソウガMFはメリクリウスロッドでキックホッパーに反撃する。

さらにメリクリウスロッドに力を送り込み、『スプラッシュメリクリウス』を発動してキックホッパーに強烈な突きを浴びせる。

「はああああ！」

「ぐああああ！」

『スプラッシュメリクリウス』を受けたキックホッパーは変身が解け気絶する。

ガタックRFはガタックダブルカリバーでザビーRFとドレイクRFを何度も切り裂く。

そしてガタックダブルカリバーを合体させ、『ライダーカッティン

グ』をドレイクRFに放つ。

《ライダーカッティング!》

「はあっ!」

「ぐああああ!」

『ライダーカッティング』を受けたドレイクRFは変身が解け気絶する。

そして素早くガタックゼクターを操作する。

《ワン! ツー! スリー!》 「ライダーキック!」

《ライダーキック!》

ガタックRFは『ライダーキック』をザビーRFに放つ。

「はああああ!」

「うわあああ!」

『ライダーキック』を受けたザビーRFは変身が解け気絶する。

その頃ディライドとドラゴRFは工藤の居る部屋に到着していた。

「工藤!」

「ドラゴか」

「お兄ちゃん!」

工藤はドラグーンワームに変身してクロックアップを発動して二人に襲い掛かる。

「うわああああ!!」

二人は変身が解け倒れてしまう。

「お兄ちゃん!渚さん!」

すると、ライダー達を倒したユウセイとアラタが現れる。

「ヒヨリ!」

ドラグーンは工藤に戻り、アラタにこう言う。

「ガタツク、貴様も哀れだなあ。俺に逆らわなければワームにならずにすんだのになあ」

工藤がそう言うと、渚が立ち上がり、

「はっ!笑わせるぜ。自分が住みにくいからって世界を変えようってか?」

「ああ?」

渚の言葉に工藤は怒りを露にする。

渚はさらに続ける。

「それにお前はこの計画を成功させることは出来ない」

「なんだと?」

「お前には大切な人が居ないからだ。人に限らずワームでも人でも

大切な人が居る限り、たとえどんな罪を犯そうとも、それを逃げずに、背負い、力強く生きることが出来る！」

渚の言葉にアラタはまるで自分のことを言われているような気持ちになった。

渚はさらに続ける。

「人は大切な人が居る限り、たとえ独りになろうとも、その大切な人を守る為に戦い続けることが出来る！」

渚の言葉を聞いたソウイチはゆっくり立ち上がる。

そして渚は工藤にこう言う。

「自分の為に世界を変えようなんざ愚か者のすることだ。自分の為に世界を変えるんじゃない！自分が変われば、世界が変わる！」

渚はそう言うのと右手の人差し指を天に向け、

「それが天の道ってやつだ」

渚がそう言うのと工藤は怒りを爆発させ、

「黙れ！黙れ！黙れええ！さっきから聞いていれば、貴様一体何者だ！」

工藤がそう言うのと渚はニヤリと笑い、

「俺は世界の破壊者、通りすがりの仮面ライダーだ。頭に叩き込んでけ」

渚はそう言つと変身の準備を完了させる。

「行くぞ！ソウイチ！」

「ああ！」

ドラゴゼクターが現れ、ソウイチの右手におさまる。

「変身！！」

《カメンライド…！デイライド！》

《ヘンシン！》

渚はデイライドに、ソウイチはドラゴ・マスクドフォームに変身する。

さらにドラゴゼクターを操作する。

「キャストオフ！」

《キャストオフ！…！チェンジ！ドラゴン！》

ドラゴMFはドラゴ・ライダーフォームにフォームチェンジする。

「ドラゴオオオ！」

工藤はそう叫びながらドラグーンワームに変身して二人に襲い掛かる。

デイライドはドラグーンの攻撃を避け、

「ユウセイ、アラタ、ヒヨリを頼んだぞ」

「わかった！」

デイライドがそう言つとユウセイは力強く返事して、アラタと共にヒヨリの下へ駆け寄る。

デイルイドとドラゴRFはライドブッカー・ソードモードとドラゴクナイガン・クナイモードでドラグーンを何度も切り裂く。

「おのれ！」

ドラグーンはそう言うと翼を広げ屋上に逃げる。

デイルイドはライドブッカーからカードを三枚取り出す。

その三枚は絵柄を失っていたが、力を取り戻す。

そしてその中の一枚を装填する。

《ファイナルフォームライド…ド・ド・ド・ドラゴ！》

「ちよつと痛いぜ」

「え？」

デイルイドはそう言うとドラゴRFの背中を触る。

するとドラゴRFはドラゴゼクターを模した、ゼクタードラゴにFRする。

そしてデイルイドを乗せ、ドラグーンを追い掛け屋上を目指す。

屋上に到着するとゼクタードラゴはドラゴRFに戻る。

「こうなったら俺が直接全人類をワームにしてやる！」

ドラグーンはそう言うと両手にエネルギーをためる。

「厄介だな」

「じゃあ一撃で決めるか」「だな」

デイルイドはそう言うとカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ド・ド・ド・ドラゴ！》

ドラゴRFは再びゼクタードラゴに変型して、ドラグーンに何度も突進する。

そしてドラゴRFに戻りドラゴゼクターを操作する。

《ワン！ツー！スリー！》「ライダーキック」

《ライダーキック！》

さらにデイルイドはFARの効力でクロックアップを発動してドラグーンにライダーキックを放つ。

そしてそのままドラゴRFの下へ行き、ドラゴの『ライダーキック』とデイルイドのライダーキックで敵を挟み潰す『デイルイドスオーム』を発動する。

「はああああー！」「

ぐああああー！」

デイルイドとドラゴRFはドラグーンを倒した……かに見えたが突如ドラグーンの爆発の炎の中からドラグーンワームだがその体に大きな変化があり、ハイパーカブトをイメージさせる、ハイパードラグーンワームに変身する。

そしてクロックアップを発動して二人に襲い掛かる。ドラゴRFも対抗してクロックアップを発動するが、Hドラグーンの方が明らかに動きが早く、ドラゴRFを吹っ飛ばす。

「ぐああああー！」

Hドラグーンのクロックアップを見たデイルイドは気付いた。

「まさか、ハイパークロックアップか！？」

「そつだ。俺はワームを越えた最強のワームになった！誰も俺を止めることは出来ない！」

Hドラグーンはそう言うつと両手にエネルギーをため、再び全人類をワームにしようとする。

「くそつ！どうにかならないのか！」

ドラゴRFは悔しそうに地面を叩く。

だがデイライドは、

「いや、対抗出来るカードはある。それにソウイチ、あの時俺達を救ったライダーを覚えているか？」

「ハイパードラゴか？」

「あれはお前の未来の姿。ということはお前が未来を掴めば、あの姿になれるってことだ」

デイライドがそう言うつとドラゴRFは立ち上がり、

「なら簡単だ。何故なら、俺は既に未来を掴んでいるからな」

そう言うつて左手を上げる。するとどこかからカブトムシ型のゼクター・ハイパーゼクターがドラゴRFの左手におさまる。

ドラゴRFはハイパーゼクターを左腰に装着して、ハイパーゼクターを操作する。

「ハイパーキャストオフ」 《ハイパーキャストオフ！…チェンジ！ハイパードラゴン！》

ドラゴ・ハイパーフォームにフォームチェンジしたドラゴ。

それを見たデイルイドも、

「じゃあ俺も行くか」

そう言つてカードを一枚装填する。

《ファイナルカメンライド：カ・カ・カ・カブト！》

デイルイドはデイルイド・カブト・ハイパーフォームにFKRする。そしてドラゴHFはハイパーゼクターのボタンを押し、DカブトHFはカードを一枚装填する。

《ハイパークロックアップ！》

《アタックライド：ハイパークロックアップ！》

二人のハイパーフォームの装甲が開き、クロックアップを越える速さで動きHドラグーンの下へ行く。

「なに！？」

DカブトHFとドラゴHFはHドラグーンを圧倒する。

Hドラグーンもハイパークロックアップを使用出来るが、流石に二対一はきつく大ダメージを受ける。

「決めるぞ、ソウイチ」

「ああ！」

DカブトHFはカードを一枚装填し、ドラゴHFはハイパーゼクターとドラゴゼクターを操作する。

《ファイナルアタックライド…ド・ド・ド・ドラゴ！》

《マキシマム・ライダー・パワー！》

《ワン！ツー！スリー！》「ハイパーキック」

《ライダーキック！》

DカブトHFとドラゴHFは『ハイパーライダーキック』を放つ。

「はああああ…！」

「ぐああああ！」

『ハイパーライダーキック』を受けたHドラグーンは爆発して、全人類ワーム化計画は阻止された。

二人は変身を解く。

そこへユウセイとアラタとヒヨリがやって来る。

「お兄ちゃん……」

ヒヨリはソウイチに抱き付く。

だがソウイチはヒヨリを自分から離し、

「抱き付く方が違うだろ」

そう言ってアラタの方へヒヨリを押し。

二人は戸惑ったが、二人は幸せそうに愛する者を抱き締める。

その様子をソウイチと渚とユウセイは笑顔で見守る。渚は二人を写真におさめると、

「ユウセイ、帰るぞ」

「ああ」

渚とユウセイは写真館に帰って行った。

岬写真館。

信次郎とアクアは渚がこの世界で撮った写真を見ていた。
信次郎は一枚の写真を見ると、

「おっ、これはなかなか良い写真だなあ」

「ほんと、ほんと！こういうの憧れるう！」

その写真は、幸せそうに抱き締め合うアラタとヒヨリを見守るドラ
ゴが写っていた。

「アラタさんとヒヨリちゃん、良かったね！」

「うん！本当に良かった！」

「この世界はソウイチに任しとけば大丈夫だろ」

すると彩夏はあることに気付く。

「ていうかユウセイ、なんで普通に居るの？」

「良いじゃん、良いじゃん。細かいことは」

「まあ良いじゃないか」

信次郎はユウセイの居候を快く了解した。

渚はカブトのFKRカードを取り出す。
するといつものようにドラゴのマークが描かれたカードに変化する。

「さて、次の世界に行くか」

渚がそう言うと背景ロールが降りてくる。

そこには何も無い荒野に大きな平らな石が置いてある様子が描かれていた。

その頃、鳴滝は、

「デイルイド、次の世界で必ず貴様を……！」

そう言っている鳴滝の後ろに黄色の音撃棒を持った紫がかった黄色のボディを持つライダーがいた……。

第17話 GOD SPEED LOVE (後書き)

次回、仮面ライダーディライト……。

第18話 光鬼と七人の戦鬼

全てを破壊し、全てを繋げ！

第18話 光鬼と七人の戦鬼（前書き）

いよいよ最後の世界です！

では、ごきげん！

第18話 光鬼と七人の戦鬼

これまでの仮面ライダーデイライドは！

詳しくは第1～17話、M・R・DCDシリーズ 超・仮面ライダーネオ電王 & amp; デイライド スーパーショッカーの野望をお読み下さい。

ドラゴの世界を後にした渚一行は次なる世界にして、最後の世界に
来ていた。

この世界での渚の服装はレモン色の道着を着ていた。渚達は何も無い殺風景な荒野を歩いていた。

「渚、この世界は何の世界なんだ？」

「さあな。だが新たななる九つの世界も、ここで最後か……」

「ここが渚君の世界なのかな？」

三人はそんなことを話しながら歩いていると、一つの太鼓の様な平らな石が置いてあった。

渚はそれに触れ、

「これは……」

渚は石に触れながらある人物を思い出していた。

(ヒビキ……)

渚が過去を思い出していると、後ろから声が響く。

「それに触るなっ!」

「ん?」

渚達が声のする方に振り向くと、その姿は確かに鬼と呼ばれる仮面ライダーだが、見習いの鬼の特徴なのか顔はむき出しになっており、体も特に色の無いものだった。

渚は見習いの鬼に向かってこう言う。

「なんだ?見習い鬼君」

渚がそう言うと、見習いの鬼は一気に駆け出し、

「その石に触れるなっ!魔化魍っ!」

そう言われた渚は、

「まったく、これに触れただけで魔化魍扱いか。やだね」

と、呑気な口調で言った。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る?

第18話 光鬼と七人の戦鬼

渚はこちらに走って来る見習いの鬼を迎え撃とうとするが、突然夏の魔化魍であるバケネコが四体現れ、見習いの鬼に襲い掛かる。

「クククキシャアアア!」「」「」

「何っ!?!うわあああ!」

それを見た渚はやれやれと言いたげな表情で変身の準備を完了させる。

「変身」

《カメンライド…デイライド!》

渚はデイライドに変身すると、見習いの鬼を襲ったバケネコに向かって走り出す。

まずバケネコに前蹴りをして見習いの鬼からバケネコを離す。

そして今になって出来た癖でもある、左手首を握る癖をしてバケネコにパンチとキックの嵐を浴びせる。

そしてバケネコと距離を置き、カードを一枚装填する。

「新しい力で行くか」

《カメンライド…ドラゴ!》

デイライドはデイライド・ドラゴ・ライダーフォームにカメンライドする。

そしてさらにカードを一枚装填する。

《アタックライド…クロックアップ!》

DドラゴRFはクロックアップを発動してバケネコを圧倒する。

そして止めとばかりにカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ド・ド・ド・ドラゴ!》

DドラゴRFは『ライダーキック』を発動してバケネコを一体撃破する。

DドラゴRFはデイライドに戻ると、左手首を握る癖をして、

「ま、こんなもんかな」

そう言った瞬間、残りの三体のバケネコがデイライドに襲い掛かる。

「おわっ!この野郎!」

デイライドはライドブッカー・ソードモードでバケネコに反撃する。だがバケネコの数が多くかなり苦戦していた。

「ちっ!数だけは立派だな!」

そう文句を垂れながらライドブッカーで攻撃する。

すると、何処かから光の玉が飛んでくる。

「ギヤアアア!」

その光の玉によりバケネコが一体爆発する。

「誰だ？」

デイライドが光の玉が飛んできた方を見ると、黄色の仮面に、黄色がかつた紫色のボディの仮面ライダーが居た。その仮面ライダーを見た見習いの鬼は、

「コウキさん！」

コウキと呼ばれた仮面ライダーは、黄色の音撃棒・烈光を握り、バケネコに駆け出して行く。

それを見たデイライドは絵柄を失ったKRカードを取り出し、

「あれが、仮面ライダー光鬼か……」

そう言いながら変身を解き、光鬼の戦いを見守る。

光鬼は音撃棒でバケネコを何度も殴り付ける。

そしてベルトのバックルに装着された、音撃鼓・光鼓をバケネコに取り付ける。そして音撃棒を構え、

「音撃打・光王烈波の型！」

そう言って音撃鼓を叩き、バケネコに清めの音を流し込む。

「はぁー……はぁっ！」

そして最後の一撃でバケネコを倒す。
すると残りのバケネコが逃げだそうとする。
それを見た光鬼は意識を集中させる。

「はあああ……」

すると光鬼の体が輝く。

「はあっ！」

その光を払うと、体が黄色に輝く、仮面ライダー光鬼・輝に変身する。

そして一気に駆け出し、清めの音を流し込む。

「音撃打・閃光烈迅波！」

光鬼・輝の音撃打を受けたバケネコは爆発する。

光鬼・輝は顔部分だけ変身を解き、見習いの鬼に駆け寄る。

「大丈夫か？少年」

「はい」

すると二人に渚達が駆け寄り、

「あんたが光鬼か？」

渚がそう聞くとコウキは、

「そつだが、君は？」

コウキがそう聞くと渚は、

「とりあえず、この世界について色々聞きたいんだが」

その頃達也は光鬼の世界でのお宝を探していた。

「さて、さつさとこの世界のお宝、光鬼の音角を奪うか。いや、ついでに威吹鬼と斬鬼のやつも奪うかな？」

そう言いながら歩いていると、コウキのテントに向かっている渚達を発見する。

「あれは……。あいつ等の後をつけりゃあお宝にありつけるかな？」

達也はそう言うと、渚達の後をつけていった。

渚達はコウキのテントに着くと、自己紹介をする。

「俺は近藤渚だ」

「俺は小野山ユウセイ！宜しく！」

「岬彩夏です」

「俺はコウキだ、宜しく！」

「僕はアスカ、コウキさんの弟子です」

全員が自己紹介を済ますと、渚はコウキにこの世界について聞いた。コウキの話によると、この世界には音撃道というものがあり、かつては三つの流派、光鬼流・威吹鬼流・斬鬼流に別れていたが、今では一つになり、互いに協力しあっているという。

「だが、最近妙な事が起きている」
「妙な事？」

渚はコウキの言葉に首を傾げる。

「魔化魍の大量出現だ」

それを聞いた渚はこう呟く。

「……大蛇か」

「ああ。だが妙な事はそれだけじゃない」
「何？」

「普通の魔化魍だけじゃなく夏の魔化魍も大量に出現している」

それを聞いた渚は、

「大蛇の他に何かあるってことか……」

渚はそう呟く。
するとコウキは立ち上がり、

「でもまずは大蛇だ。みんなのところに行って、大蛇を封印しよう」

コウキがそう言うと渚達はある場所に向かった。

その話を聞いていた達也は、

「大蛇以外の何か、ねえ……。あ、奴等が大蛇を封印している隙に音角を奪うのもいいなあ。ま、とりあえず後を追うか」

そう言って渚達の尾行を再開した。

渚達はある道場に来ていた。

だがそこは道場と言うのには程遠かった。

道場とは思えない綺麗な外観。

さらにイケメンと美女しか居ないなんとも爽やかな道場だった。

「これは本当に道場なのかなあ？」

「た、確かにね……」ユウセイと彩夏はその道場らしからぬ外観に驚いていた。

「ここは威吹鬼流の道場です」

「あゝ、なるほどね」

アスカがこの道場のことを説明すると、渚は納得して頷いた。恐らく渚の中でのイブキのイメージはこんな感じなのだろう。

「まあとりあえずイブキに会いに行こう」

コウキがそう言うと渚達は道場の中に入って行った。

渚達が道場の中を歩いていると、一人の美少女が渚達に近付いて来た。

「コウキさん、アスカ君、いらっしやい」

「あ、アキラさんこんにちは！」

「お〜アキラじゃないか」

アキラと呼ばれた少女は渚達をイブキの下に案内する。

「イブキさん、コウキさん達がいらっしやいました」

渚達が部屋に入ると、かなりのイケメンの青年がソファアに座っていた。

「あ、どうもコウキさん。その方々は？」

イブキは渚達について聞く。

「あ〜彼等は今回の大蛇封印を手伝ってくれるいわば助っ人ってところだ」

「大蛇……、もうそんな時期ですか」

「大蛇の封印に時期があるんですか？」

コウセイがそう聞くと、アキラが変わりに答える。

「はい。大蛇は一年に一回必ず封印の儀式を行わなければ、復活し

てしまいます。復活の時期に近付くと魔化魍が大量出現するんです」
「なるほど……」

アキラの説明にユウセイは納得する。

「だが今回は大蛇だけではない」

「どついうことですか？コウキさん」

アキラがそう聞くと、イブキがこう答えた。

「……邪鬼、ですか？」

「恐らくな」

イブキがそう言つとコウキは頷いた。

すると渚が、

「邪鬼？」

渚の言葉にコウキが答える。

「邪鬼。千年に一度現れる最強最悪の魔化魍だ」

「じゃあその千年に一度が近付いていて、ちょうどそれが大蛇と被つてしまったってことか……」

コウキの説明を元に渚は光鬼の世界で起きていることを完璧に理解する。

するとイブキは立ち上がり、

「じゃあ次は斬鬼さんの所に行きますか」

イブキがそう言うと渚達は威吹鬼流の道場を後にした。

「今度はやけに道場っばいなあ」

「ほんとだあ」

斬鬼流の道場は威吹鬼流の道場よりよっぽど道場っばかった。

「斬鬼といえは轟鬼。まあこんな感じだろな」

渚の中の轟鬼のイメージはまんまこんな感じだった。

渚達が道場に入ると、一人の暑苦しい青年が渚達の前に現れる。

「コウキさん！アスカ君！いらっしやいっす！」

「お〜トドロキ〜。相変わらずだな〜」

「こんにちは！」

トドロキは渚達をザンキの下に案内した。

渚達がザンキの部屋に入ると、畳にあぐらをかいているザンキが居た。

「コウキか……、何の様だ？」

ザンキはかなり渋い声で問う。

「大蛇の時期だ」

その瞬間ザンキは突然立ち上がり、

「じゃあ行こうか」

「はいっす！ザンキさん！」

ザンキとトドロキはそのまま道場を出ていった。
それを見た渚は、

「暑苦しいねえ〜」

そう言っただ道場を後にした。

封印の場。

渚達は先程コウキと出会った荒野に来ていた。

「じゃあ、始めるか」

コウキがそう言った瞬間、周りから大量の魔化魍が現れる。

「コウキさんは行って下さい」

「魔化魍の相手は俺達に任せる」

「頼んだ」

コウキは音角を取り出し指に当てる。

音角から音が発せられ、音角を額にかざす。するとコウキの体が光に包まれる。

コウキがその光を払うと、仮面ライダー光鬼へと変身する。それを見た渚達も変身の準備を完了させる。

「変身!!」

《カメンライド…デイルイド!》

渚はデイルイド、ユウセイはソウガ・アビシオンフォーム、イブキは威吹鬼、アキラは天鬼、ザンキは斬鬼、トドロキは轟鬼にそれぞれ変身する。

「少年、彩夏ちゃんを安全な場所へ!」

「はい!」

光鬼がそう言うときアスカは彩夏と共に避難する。

「じゃあコウキ、封印は頼んだ!」

「おう!」

デイルイドがそう言うとき光鬼は石の所まで走り出す。デイルイド達も魔化魍に向かって走り出す。

轟鬼は音撃弦・烈雷で魔化魍を次々と切り裂いていく。

斬鬼は音撃真弦・烈斬で魔化魍を次々と切り裂いていく。

天鬼は音撃管・烈風で魔化魍を次々と撃ち抜いていく。

威吹鬼は音撃真管・烈嵐で魔化魍を次々と撃ち抜いていく。

ソウガAFは自慢の格闘技で魔化魍を次々となぎ倒していく。

デイルイドはライドブッカー・ソードモードで魔化魍を次々と切り裂いていくが、敵の数に少しずつ圧倒されていく。

「ちっ！ならこいつだ」

そう言っただけカードを一枚装填する。

《カメンライド…セイリユウ！》

デイライドはデイライド・聖龍にカメンライドして、ライドブツカー・ソードモードで魔化魍を次々と切り裂いていく。すると、ライダー達の戦いを見ていた彩夏とアスカに魔化魍が襲い掛かるうとする。

「きゃああー！」

「彩夏さん、危ない！」

アスカは彩夏の腕を掴みなんとか魔化魍の攻撃を避ける。

「岬！アスカ！」

D 聖龍は二人の下に行こうとするが、魔化魍に阻まれて二人の下に行くことができなかった。

すると、彩夏とアスカの前に達也が現れ魔化魍にデイセンドライブを発砲して二人を救出する。

「海東！？どういっつもりだ？」

D 聖龍は達也の行動に疑問を覚える。

「なあに、たまには人助けも良いかな？と思っただけ」

「なんだ!?!」

D 聖龍はディライドに戻り、ネオ電王BFは消滅してしまった。全員が衝撃波の飛んできた方を見ると、そこには紫を基調とした体色に、どこことなく鬼をイメージさせる魔化魍が居た。それを見た斬鬼は、

「あれは……邪鬼!」

「あれが邪鬼……」

邪鬼は一気にライダー達に詰め寄り、襲い掛かる。

「何!?!ぐあああ!」

ライダー達は邪鬼の攻撃に全く抵抗出来ずにいた。それを見た光鬼は、

「みんな!?!やばい!」

そう言つて封印を放棄してディライド達に加勢する。だが一人増えたところで戦況は全く変わらず、ただやられる一方だった。その様子を見ていた鳴滝は、

「ディライド、貴様の旅もここで終わりだあ!ふっはははは!」

そう言つて次元の壁の中へ消えていった。

彩夏とアスカはディライド達がやられるのをただ見ていることしか出来なかった。

だがアスカはその状況に耐えなくなり、思わず駆け出してしまった。

「あつ！アスカ君！」

アスカがこちらに走って来るのを見た光鬼は、

「少年！何してるんだ！」

アスカは光鬼の言葉を無視して、ディスクアニマルで邪鬼に攻撃する。

それに気付いた邪鬼は、標的をアスカに変え、ライダー達を吹き飛ばし、アスカに向かって走り出す。

「やばい！」

光鬼はそう言うと邪鬼を追い掛ける。

邪鬼はアスカを殺そうと、右腕を振り上げる。

そしてアスカの体を右腕で貫こうとする。

アスカはもう駄目だと思い目を閉じる。

だがいつまでたっても攻撃が届かない。

ゆっくりと目を開けると、そこには顔だけ変身を解いた光鬼がいて、その体は邪鬼に貫かれ血を流していた。

「少年……大丈夫か……？」

「あ……あ……」

光鬼は安心して笑顔になり、静かに目を閉じた。

「コ、コウキサあああん！！！！！」

「コウキさん……」

「そんな……」

「おのれ邪鬼!!」

「コウキさんが……」

「ちくしょう!」

ソウガAF達が悲しみの声を上げる中、ディライドは黙ったまま体を震わせていた。

そして彼の頭の中に、今まで人間を守るために犠牲になった人物が浮かんできた。

(真司……一真……木場……ダークカブト……マサト……マリ
ア!)

その瞬間、ディライドの中で何かが弾け、ディライドは雄叫びを上げる。

「あああああ!!!!」 「渚!?!」

ソウガAFは突然のことに困惑する。

「……まさか!」

ディセンドは何かに感付き、ディライドを抑えよつとする。

「ユウセイ!渚を抑えるんだ!」

「達也!?!一体どうしたことだ!?!」

「いいから早く!」

ソウガAFはディセンドに言われるままディライドを抑えるが、デ

イライドは二人を吹き飛ばし、突然黙り込み俯く。
そして顔を上げると、普段なら薄ピンクのシグナルポインターが紫
に変色し、ディメンションヴィジョンが歪んでいた。
その姿は正に、ディケイドが破壊者としての運命を受け入れた姿と
同じものだった。

ディライドは仮面ライダーディライド・激情態へと変化を遂げた…
…。

第18話 光鬼と七人の戦鬼（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第19話 旅の終わり

全てを破壊し、全てを繋げ！

第19話 旅の終わり（前書き）

遂に第一章完結です！

では、ごきげん！

第19話 旅の終わり

これまでの仮面ライダー・ディライドは！

詳しくは第18話をお読み下さい。

激情態へと変身してしまったディライドは、そのまま一気に駆け出し邪鬼に襲い掛かる。

邪鬼はディライド・激情態の攻撃に抵抗出来ず、ただやられる一方だった。

ソウガAF達はその状況をただ見ているだけだった。

「渚、一体どうしたんだ？」

ソウガAFはディライドの変化に疑問を抱いた。
ディセンドはそれについて説明する。

「恐らくあいつは悲しみを感じないだけでその思いはずっと心に貯まっていたんだ。それがあのコウキって奴が死んだことにより爆発してしまっただんだ」

「そんな……」

すると、突然地震が起き地中から巨大な魔化魍・大蛇が現れる。

「しまった！大蛇が復活してしまった！」

復活した大蛇はそのままソウガAF達に襲い掛かる。

「やばい！……うわあああ！」

ソウガAF達は大蛇に対抗出来ず、ただやられる一方だった。

その頃デイライド・激情態は邪鬼を追い詰めていた。だが邪鬼は両手から紫の炎を出してデイライド・激情態の視界から消えた。

「くっ！」

デイライド・激情態は邪鬼を捜しに行き、その場から去っていった。すると、大蛇も突然攻撃を止めどこかへ行ってしまった。

「なんとか助かったみたいだな……。っ！渚は！？」

ソウガAFは辺りを見回すが、デイライド・激情態の姿は無かった。

「ん？あらま……」

デイセンドは自分の足下に転がっていたある物を拾う。

「ま、貰ってくか」

そう言ってその場から去っていった。

威吹鬼達はアスカに駆け寄り、

「アスカ君、大丈夫か？」

その声を掛けるも、アスカはそのままふらふらと歩いて行ってしまった。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第19話 旅の終わり

達也は先程拾ったある物・音角を見詰めていた。

「お宝はゲットしたが……。なんか気に入らねえ……」

達也は暫く考えると、何かを思い付き、

「ちっ、結局こうしなきゃなんねえのか……。ま、そうしなきゃお宝の価値が出ねえから仕方ないか」

そう言っと達也はある場所を目指した。

その頃アスカは、コウキのテントで座り込んでいた。

「僕のせいだ……、僕の……。僕が余計なことさえしなければコウキさんは……」

と、ただ自分を責め続けていた。

イブキ達は威吹鬼流の道場で今後の行動について話し合っていた。

「とりあえず大蛇を何とかしないと……」

イブキはそう言う。

「でもどうやって大蛇を倒すんですか？」

アキラがそう言うとザンキは、

「コウキが居ないとすると、難しいな」

ザンキの言葉にトトロキは、

「でもそんなこと言ってる場合じゃないっすよ……」
「そうだよね……」

トドロキの言葉に彩夏は頷く。

すると、今まで黙っていたユウセイが口を開く。

「俺はとりあえず渚を捜しに行く。それに渚を捜していれば邪鬼も見付けられるからな」

ユウセイはそう言つと道場を出てレイドチェイサーに跨がり渚を捜しに行った。

翌日。

イブキの弟子の一人が大慌てでイブキの部屋に入ってくる。

「イブキさん！大変です！大蛇がまた現れました！」
「なんだと！？」

それを聞いたイブキ達は急いで道場を出て行った。
彩夏はそれをただ見ていただけだった。

イブキ達は大蛇が出現した現場に到着する。

「イブキさん、一体どうするんですか？」

アキラがそう聞くとイブキは、

「とりあえず、なにがなんでも大蛇を倒す、それだけだ！」

イブキがそう言うと、

「そうですね！」

「コウキの為にもな」

「全力で行くっす！」

アキラとザンキとトドロキは力強く答える。

四人は鬼に変身すると、それぞれの音撃武器を構え、大蛇に突っ込んで行く。

その頃ユウセイは、ディライド・激情態を捜してただひたすらレイドチェイサーを走らせていた。

「渚、どこに居るんだ……」

暫く走り続けると、邪鬼を捜してふらふらと歩くディライド・激情態を発見する。

「渚！」

ユウセイはレイドチェイサーから降りると、ディライド・激情態の前に立ちほだかる。

「渚！目を覚ませ！」

ユウセイがそう言うとディライド・激情態は、

「黙れ。邪魔をするならお前も消す……」

そう言われたユウセイは、

「なるほど、自我も失ってるってことか」

そう言うと、ユウセイは変身の準備を完了させる。

「変身！」

ユウセイはソウガ・アビシオンフォームに変身する。

「渚、俺がお前の目を覚まさしてやる」

ソウガAFはそう言うと、ディライド・激情態に向かって走り出す。

「はああああ！」

ソウガAFはディライド・激情態に攻撃をするが、いとも簡単に避けられ、逆にパンチとキックの連打を浴びる。

「雑魚が」

「うわあああ！」

ソウガAFはディライド・激情態の一撃で大きく吹っ飛ばす。

「くそっ！俺じゃあ渚を救うことが出来ないのか!？」

ソウガAFは自分の不甲斐なさに地面を殴る。
暫く黙り込むと、ソウガAFはある決心をする。

「俺がやらないと……。俺しか居ないんだ！あれを使うか……」

ソウガAFはそう言うと再び変身ポーズをとる。

すると、レークルに銀色の装飾が出現する。

さらにレークルに埋め込まれている霊石・レグヌムが黒色に染まる。

「はああ……豪変身！」

その瞬間、ソウガAFの体は黒色に銀色のラインが入ったものになり、三本角から五本角になった。

ソウガAFは『無限の闇』とも呼ばれる最強フォーム、仮面ライダーソウガ・インフィニティフォームに変身した。

ソウガIFは大きく深呼吸をすると、ディライド・激情態に向かって走り出す。

「はああああ！」

その頃達也はある場所に来ていた。

「ここか……」

そこは、一つの黄色いテントだった。
達也はそのテントの扉を乱暴に開け、中に入る。
そして中に居たアスカを無理矢理外に出した。

「何するんですか!？」

アスカは達也に怒鳴るが、達也はそれを無視して、

「てめえ、いつまでそんな面してんだ? ああ!？」

達也はいつになく怒りを露にする。

アスカはそんな達也に少しながら怯える。

「コウキって奴はお前をそんなつまんねえ奴に育てたのか？」

「それは……」

達也の言葉にアスカは返す言葉が見付からなかった。

「俺はな、お前みたいにないつまでも拗ねて、自分のせいって分かっているくせになんもしねえ奴が大っ嫌いなんだ」

達也は少し間を置いて再び話し始める。

「今お前の仲間が戦ってんだぞ? お前のせいで復活しちまった大蛇とな。なのに大蛇を復活させた張本人のお前がなにいつまでも拗ねてやがんだ!」

達也はそう言うとアスカの腕を乱暴に掴み、

「ちょっと来い！」

そう言つてアスカをどこかに連れて行つた。

その頃ソウガIFはデイルイド・激情態と互角の戦いを繰り広げていた。

デイルイド・激情態が一発殴ればソウガIFも一発殴る。

そんな五分五分の戦いだった。

だがデイルイド・激情態はその状況を打破する為に『デイメンションインパクト』を放ちソウガIFを吹っ飛ばす。

「ぐああああ！」

ソウガIFは体制を立て直すと、

「これで決める！」

そう言つて右足に力を貯め、一気に駆け出す。

そしてジャンプして空中で一回転して『インフィニティキック』を発動する。

「渚ああああ！」

「ぐああああ！」

『インフィニティキック』を受けたデイルイド・激情態は大きく吹っ飛び変身が解ける。

それを見たソウガIFも安心して変身が解ける。
ユウセイは渚に駆け寄り、渚を起こす。

「渚、大丈夫か!？」

「ユ、ユウセイ……。俺は何を？」

渚は激情態になっていた時のことを覚えていなかった。

ユウセイはそれに驚き、

「覚えてないのか!? コウキさんが殺された瞬間急に暴れだしたんだぞ!？」

「……………！確かにコウキが殺された瞬間俺の中で何かが弾けたような……………」

ユウセイは達也から聞いた暴走の理由を話した。
それを聞いた渚は、

「そういうことか……。でもユウセイ、お前の思い、伝わった。ありがとう。」

渚がそう言うとユウセイは笑顔になり、

「まったく、お騒がせな奴だ」

そう言って渚の手を握り、立たせる。
するとそこへ邪鬼が現れ二人を襲う。

「がああああ！」

「うわあああ!！」

二人は邪鬼の攻撃で吹っ飛ぶ。

「くっ！渚、行けるか!?!」

「当たり前だ!」

二人はそう言うつと変身の準備を完了させる。

「変身!!!」

《カメンライド…: デイライド!》

渚はデイライド、ユウセイはソウガ・アビシオンフォームに変身する。

そして邪鬼に向かって走り出す。

だが二対一でも邪鬼を抑えるのがやっとだった。

邪鬼の攻撃で二人は吹っ飛び、再び邪鬼が攻撃しようとする、邪鬼が何者かに撃たれた。

二人がその方向を見ると、デイセンドライバーを構えた達也とアスカが居た。

「達也!」

「海東、何の用だ?」

渚がそう言うつと達也は、

「別に。ただ今回のお宝の価値を見に来ただけだ」

達也はそう言うつと再び邪鬼を撃つ。

邪鬼を見たアスカは拳を強く握り締め、

「邪鬼……!」

それを見た達也は、

「良いか少年。人が死ぬは体を貰かれた時か？寿命が来た時か？いや違う。魂を受け継ぐ奴が居なくなつた時だ。お前にはコウキの魂を受け継ぐ義務がある！」

達也がそう言うとデイライドが、

「海東てめえ！俺の台詞奪いやがったな！」

そう言われた達也は、

「うるせえ！言つとくがなあ！俺はてめえよりもずっと前から、通りすがりの仮面ライダーだ！頭に入れときやがれ！」

達也はそう言うとカードを一枚装填する。

《カメンライド》

「変身！」

《デイセンド！》

デイセンドの言葉にアスカは何かを感じ取る。

デイセンドは音角を取り出し再び話し始める。

「そうじゃねえとコウキ本当には死んじまう。それで良いならこの何の価値も無い音角は俺が頂いても良いのか？俺としてはお前がコウキの魂を受け継いで戦い続けて価値が出てきてから奪いたいんだがな」

デイセンドは少し間を置いてアスカにこう問う。

「さあどうする？ 鬼になるか、ならないか」

デイセンドがそう言うのとアスカは音角を取り、

「コウキさんの魂は消えない！ いや、消させない！ 僕は鬼になってコウキさんの魂を受け継ぐ！」

そう言うと、アスカは指に音角を当てる。

そして音角を額にかざす。するとアスカの体が光に包まれ、その中でアスカの体に変化する。

そしてその光を払うと、アスカは仮面ライダー光鬼に変身する。

光鬼は一気に駆け出し邪鬼にパンチとキックの連打を浴びせる。だが邪鬼も負けじと反撃して光鬼を吹っ飛ばす。

「うわっ！」

すると光鬼の前にデイライドとデイセンドが立ちはだかり、二人はカードを一枚装填する。

《《アタックライド… プラスト！》》

デイライドは『デイライドプラスト』、デイセンドは『デイセンドプラスト』を放ち邪鬼を攻撃する。

「行けアスカ！ お前が決める！」

「はい！」

デイライドがそう言うのと光鬼は音撃棒で邪鬼を何度も攻撃する。

そして音撃鼓を邪鬼に取り付け、音撃棒を構える。

「音撃打・光王烈波の型！」

そう言つて邪鬼に清めの音を流し込む。

「はあー……はあ！」

最後に強烈な一撃を与える。

光鬼の音撃打を受けた邪鬼は大きく吹っ飛んだ。

すると大蛇と戦っていた威吹鬼達が吹っ飛んできた。

「……うわあああ……！！」「……」

「イブキさん！アキラさん！ザンキさん！トドロキさん！」

デイライド達は威吹鬼達に駆け寄る。

すると大蛇が現れデイライド達を襲つ。

「うわあああ！」

デイライドと光鬼は同じ場所に吹っ飛ぶ。

「厄介だな」

デイライドがそう言つと光鬼は、

「必ず倒す！コウキさんの為にも！」

「そうだな」

光鬼がそう言つとライドブッカーからカードが三枚飛び出す。

デイルイドがそれを手に取ると、カードは力を取り戻す。

「じゃあ行くか！アスカ！」

「はい！」

デイルイドはカードを一枚装填する。

《ファイナルフォームライド…コ・コ・コ・コウキ！》

「ちよつと痛いぜ」

「え？」

デイルイドが光鬼の背中を触ると、光鬼はアサギワシを模した、コウキアサギワシに変型する。

コウキアサギワシは飛び上がり大蛇を攻撃する。

そしてさらにもう一枚カードを装填する。

《ファイナルアタックライド…コ・コ・コ・コウキ！》

コウキアサギワシは音撃鼓を模した、コウキオンゲキコに変型して大蛇に張り付く。

デイルイドは光鬼の音撃棒を手に、大蛇に乗りコウキオンゲキコを叩き始める。さらに轟鬼も音撃弦を大蛇に突き刺し清めの音を流し込む。

天鬼は大蛇に何発か音撃管を撃ち込み、清めの音を流し込む。

さらに威吹鬼と斬鬼、デイセンドとソウガAFも音撃棒を手に清めの音を流し込む。

『デイルイドストリーム』を受けた大蛇は遂に爆発する。

コウキオンゲキコは光鬼に戻りデイルイドの横に立つ。

すると鳴滝が現れ、

「おのれデイルイドオ！この強化された邪鬼で貴様を始末してやる！」

鳴滝は次元の壁に消え、次元の壁から強化された邪鬼が現れる。

「鳴滝の野郎！いらねえことしやがって！」

デイルイドがそう文句垂れている内に、邪鬼がデイルイド達に襲い掛かる。

デイルイド達は邪鬼の攻撃に対抗出来ずにいた。するとデイスンドが光鬼に近付きあるものを渡す。

「少年、これを」

「これは、装甲声刃！？」

デイスンドが光鬼に渡したのは黄色い装甲声刃だった。

光鬼は直ぐ様立ち上がり、装甲声刃に音声を入力する。

「光鬼、装甲！」

その瞬間光鬼は輝になり、体中にディスクアニマルが合体していく。光鬼は黄色い鎧を身に纏った最強フォーム、仮面ライダー装甲光鬼に変身した。それを見たデイルイドは、

「面白い、俺も行くか！」

そう言ってカードを一枚装填する。

《ファイナルカメンライド…ヒ・ヒ・ヒ・ヒビキ！》

デイライドはデイライド・装甲響鬼にファイナルカメンライドする。D装甲響鬼と装甲光鬼はライドブッカー・ソードモードと装甲声刃で邪鬼を切り裂く。そしてD装甲響鬼はカードを一枚装填して、装甲光鬼は装甲声刃に力を込める。

《ファイナルアタックライド…ヒ・ヒ・ヒ・ヒビキ!》

「はああ……鬼神覚醒!はあ!」

D装甲響鬼と装甲光鬼は音撃刃・鬼神覚醒で邪鬼を切り裂く。

「はああああ!」

「ぐああああ!」

二人の必殺技を受けた邪鬼は爆発した。

「達也さん!」

次の世界へ行こうとする達也をアスカが呼び止める。

「何か用か?」

達也がそう聞くとアスカは、

「貴方のお陰で、僕は立ち直り、鬼になることが出来ました!本当にありがとうございます!」

そう言うアスカに達也は、

「そんなことより、俺のお宝の価値を下げない様にこれからもしっかり戦っていけ、いいな？」

「はい！」

達也がそう言うのアスカは力強く返事する。

達也は笑顔になり、次の世界へ旅立った。

その様子を見ていた渚達は、

「達也って案外良い奴なんだな」

「そうだね」

ユウセイと彩夏がそう言う渚は、

「ただのこそ泥だ」

そう言いながらアスカを写真におさめた。

岬写真館。

信次郎は渚の撮った写真の内、一枚を手に取り、

「ほお、これは中々良い写真だな」

その写真は力強く前を向くアスカを見守るコウキが写っていた。

渚は新たなる九人の仮面ライダーのカードを机に並べていた。

「九つの世界を巡り終えたんだよな？」

コウセイがそう聞くと、

「ああ。カードも全て力を取り戻したしな。それに……」

渚は響鬼のFKRカードを取り出す。

するといつものように光鬼のマークが描かれたカードに変わる。

渚はあることを考えていた。

（九つの世界を巡ったが、俺の世界は……）

渚がそんなことを考えているのを見ていた彩夏は、

（渚君が世界を破壊するなんて、あり得ない！絶対に……）

彩夏がそんなことを考えているとアクアが、

「さあさあ！次の世界にいきましょう！」

すると渚が、

「なに？もう九つの世界は巡り終えたぞ？」

そう言いながら立ち上がると、背景ロールが降りてくる。

それは爆発の中逃げ惑う人々が描かれていた。

それを見た彩夏と渚は、

「私の、世界……」

「元の世界に戻る時が来たようだな……」

仮面ライダーディライド・第一章、完結。

第19話 旅の終わり（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第20話 第二章・襲撃、ダークライダー

第二章予告編・完全版（前書き）

今、デイルイドキャラクター大百科を執筆中なんですが、中々終わらないので息抜きで第二章の予告編の完全版を書きました。

では、どうぞ！

第二章予告編・完全版

ディライド、果てしなき旅へ……。

「輝ける光の王……いや、究極の破壊者……！」

「これが俺の新しい力……」

究極のディライドVSダークライダーズ。

「兄貴を助けるまでは死ねねえ！」

「渚、君の力を貸してくれないか？大切なお宝を取り戻す為にね」

青き怪盗。

「貴様の心を貰う！」

「お願い、もう一度立って！渚君……！」

迫りくる新たな組織。

「士と旅してたんだ。あんたが破壊者じゃないってことぐらい解るさ」

「衝撃集中爆弾！」

究極の闇と忍者ライダー。

「士君に似てますね」

「スーパー真空地獄車！」

白き女王と深海開発用ライダー。

「仲間が居るから、強くなれるんだ」

「俺も戦うぜ。大切なお宝……仲間の為にな」

「私達はその事を旅で学んだ」

「仲間を守る為なら俺は何度でも立ち上がる！」

最終決戦。

「貴様、何者だ……？」

「通りすがりの……いや、やはり俺は、輝く光の戦士だ！」

仮面ライダーディライド・第二章、始動。

第二章予告編・完全版（後書き）

さて、頑張ってキャラクター大百科を書ききろう！

仮面ライダーディライドキャラクター大百科(前書き)

漸く出来た……………。

一部適当な所があるかも……………、とりあえずどうぞ！

仮面ライダーディライドキャラクター大百科

旅の間

近藤 渚 / 仮面ライダーディライド

この物語の主人公。

24歳。

物語開始の5年前から様々な世界を旅している。

かつてはマシンディライダーの世界を渡る能力で世界を旅していたが、彩夏の世界に来た際にその能力が失われてしまい、そのまま岬写真館に居候することになった。

ある世界での戦いで『人を愛する』と『悲しむ』という感情が欠如してしまった。

だがその代わりに人を信じることを辞めないという決意を固めている。

かつては自らを『輝く光の戦士』と名乗っていたが、ある世界での出来事から『通りすがりの仮面ライダー』と名乗っている。

黄色のトイカメラを首に提げている。

左手首に黄色のレザールのブレスレットを付けている。渚はこれのことについて何も覚えていないが、『すごく大切な人に貰った』ということだけ覚えている。

渚はこのブレスレットが過去への道しるべと感じている。

果たして第二章で彼を待ち受ける試練とは何なのか？

仮面ライダーディライド

渚が変身する仮面ライダー。

別名は『もう一人の世界の破壊者』、『輝く光の戦士』とも呼ばれる。

体はディケイドではマゼンタだった部分がディープイエロー、銀だった部分が金になっており、ディケイドライダーとライドブッカーで銀だった部分が金、ディケイドライダーで緑だった部分が青になっている。複眼は青、シグナルポインターは薄ピンク、ライドプレートは右目に斜め右上に三本、左目に斜め左上に三本、真ん中と右目と左目に一本ずつ装着されている。

ネオ電王の世界以降、左手首を握る癖がある。

現在変身出来る仮面ライダーは、『クウガ・ライジングアルティメット、ソウガ、G3、アクト、ゾルダ、聖龍、イプシロン、カリス、フォルス、轟鬼、光鬼、ドラゴ、電王・超クライマックスフォーム、ネオ電王、キバ・ドガバキエンペラーフォーム、キバ飛翔態、ブレイズ、W、オーズ』。

必殺技は右手に力を込め、ディープイエローに輝く右手で敵を攻撃する『ディメンションインパクト』、ファイナルアタックライドで発動する『ディメンションスマッシュ・ディメンションブレイド・ディメンションショット』。

倉石ユウキ / 仮面ライダー幽汽

この物語の前期サブ主人公。

22歳。

幽汽の世界出身で、かつて電王の世界で死んでいる人間と生きている人間を入れ換えようとした男・死郎の子孫。

先祖である死郎の呪縛により、電王に激しい憎しみの感情が芽生え暴走するが、渚の活躍によりその呪縛から開放された。

ネオ電王の世界での戦いが終わり、ドラゴの世界に行こうとする前に、幽汽の世界に危機が訪れていることを知らされ、自分の世界を救う為に新たなる九つの世界を巡る旅を離脱する。

神田ソラという将来を誓い合った仲の女性がいたらしい。

ネオ電王の世界の野山良介の姉である野山愛菜にソラの面影を重ねており、愛菜もユウキに恋人だった桜田侑真の面影を重ねている。果たして彼は自分の世界を守り抜くことが出来るのだろうか？

仮面ライダー幽汽

ユウキが変身する仮面ライダー。

基本的な部分は全てゴーストイマジンと死郎が変身するものと同じである。

スカルフォーム

幽汽の基本形態。姿、能力は全てゴーストイマジンの変身するものと同じである。

使用する武器は、サヴェジガツシャー・ソードモード。

必殺技はサヴェジガツシャー・ソードモードで敵に衝撃波を飛ばす『ターミネイトフラッシュ・スカル』。

ハイジャックフォーム

幽汽の強化形態。

姿、能力は全て死郎の変身するものと同じである。

使用する武器は、サヴェジガツシャー・ネオソードモード。

必殺技はオーラを纏い巨大化したサヴェジガツシャー・ネオソードモードで敵を切り裂く『ターミネイトフラッシュ・ハイジャック』。

タイラントフォーム

幽汽の最強形態。

姿はハイジャックフォームの黒だった部分を赤、銀だった部分が金になっている。

暴走状態時はデンカメンが紫になり、通常時は赤。

必殺技は『タイラントデンライダーパンチ』、『タイラントデンライダーキック』、『ターミネイトフラッシュ・タイラント』。

小野山ユウセイ/仮面ライダーソウガ

この物語の後期サブ主人公。

23歳。

ソウガの世界出身。とある遺跡で発見された、霊石レグヌムがはめ込まれたベルト・レークルを直感で身に付けたことにより、仮面ライダーソウガに変身してグロンギと戦う。

みんなの笑顔を守る為に戦うが、争いが嫌いで戦う度に自分の拳を見つめ、悲しみを堪えている。

未確認生命体0号を倒す為には、『無限の闇』と呼ばれる姿にならなければいけないが、その力を制御出来る自信が無く変身出来ずに

いたが、渚の言葉により自信をつけ、結果的に『無限の闇』となり0号を倒すことに成功した。
その後は世界中をレイドチェイサーで旅に出る。
ネオ電王の世界での戦いの後、アクアに連れられドラゴの世界に訪れ、渚達の旅に同行することになる。

仮面ライダーソウガ

ユウセイが変身する仮面ライダー。
クウガと同じ超古代の戦士で、姿・能力はクウガと酷似している。
クウガでは金だった部分が銀に、レークルは黒っぽい金色をしている。
角は三本で、一本が前に付きだし、残りの二本は後ろに仰け反る様に生えている。

ノーマルフォーム

不完全なソウガ。
疲れている時や大きなダメージを受けた時になる形態。
角が短く、基本色は白、複眼と霊石レグナムの色はオレンジ。
必殺技は『ノーマルキック』。

アビシオンフォーム

ソウガの基本形態。
バランスが良く、格闘戦を得意とする炎を司る戦士。基本色と複眼と霊石レグナムの色は赤。

必殺技は『アビシオンキック』。

メリクリウスフォーム

素早さとジャンプ力に優れ、棒術戦を得意とする水を司る戦士。

基本色と複眼と霊石レグヌムの色は青。

武器は『メリクリウスロッド』。

必殺技は『スプラッシュユメリクリウス』。

ネビリムフォーム

視覚と聴覚に優れ、銃撃戦を得意とする風を司る戦士。

基本色と複眼と霊石レグヌムの色は緑。

武器は『ネビリムマグナム』。

必殺技は『ブラストネビリム』。

グラジャラボラスフォーム

攻撃力と防御力に優れ、剣術戦を得意とする大地を司る戦士。

基本色と複眼と霊石レグヌムの色は紫。

武器は『グラジャラボラスソード』。

必殺技は『カラミティグラジャラボラス』。

インフィニティフォーム

『無限の闇』と呼ばれるソウガの最強形態。

三本角から五本角になっている。

後ろに仰け反っている角の生え際から一本ずつ生えている。

レークルに銀色の装飾が付いている。

基本色は黒に銀色のラインが入っている。

複眼は赤、霊石レグヌムの色は黒。

力を制御出来ると複眼は赤に、制御出来ないと黒になる。

メリクリウスフォームとネビリムフォームとグラジャラボラスフォームの武器を使用することが出来る。

武器は『インファイニティロッド』、『インファイニティマグナム』、

『インファイニティソード』。

必殺技は『インファイニティキック』、『インファイニティパンチ』、

『スプラッシュインファイニティ』、『ブラストインファイニティ』、

『カラミティインファイニティ』。

ソウガレントム

ソウガのファイナルフォームライド形態。

本編には登場していない、ソウガを支援するカプトムシ型のマシン・レントムを模した姿をしている。

必殺技はソウガレントムが捕らえた標的にディライドのライダーキックを放つ『ディライドアビス』。

岬 彩夏

この物語のヒロイン。

19歳。自分の世界で祖父の岬信次郎と二人で岬写真館に住んでいる。

光 夏海と同じくライダー大戦の夢を見ている。

その為、ディライドの存在を知っていた。

彩夏の世界に訪れた渚に出会い、渚がディライドであることを知り、彼の旅に同行することになる。

鳴滝に夏海同様ディライドを止めれる存在と言われている。

鳴滝から度々ディライドを破壊者だと言われているが、渚の優しさを信じ鳴滝の言葉を否定している。

海東達也 / 仮面ライダーディセンド

ディエンドの世界出身でディエンドである海東大樹の弟。

24歳。

兄である大樹同様にお宝を探し世界を巡っている。

渚とは彩夏と出会う前からの知り合いで、初めて会ったのは乾巧の世界。

さらに渚の過去を知っている唯一の人物。

彼の信条は『自分の進む道は自分で決める』である。お宝の為なら手段を選ばないが、時には人の為に戦うことがある。

ただそれも、世界を荒らされてはお宝をゲット出来ないからという理由からきている。果たして次なる世界での彼のターゲットとは？

仮面ライダーディセンド

達也が変身する仮面ライダー。
体はディエンドではシアンだった部分が黄緑、銀だった部分が金、シグナルポインターはレモン色、ディセンドライバーはディエンドライバーではシアンだった部分が黄緑、銀だった部分が金、赤だった部分がレモン色になっている。
ライドプレートは半円状に装着されている。
全てのライダーカードを所持している。
必殺技はファイナルアタックライドで発動する『ディメンションバレット』。

アクアキバット

渚達の旅に同行するキバット族。
姿は水色のキバットバット三世。
渚達の旅に同行するが、鳴滝の配下でもある。
ユウキをブレイズの世界に、ユウセイをドラゴの世界に連れて来た張本人。
その行動は全てが謎に包まれており、自らを『謎の女』と名乗る。
果たして彼女の目的とは？

岬信次郎

彩夏の世界出身。

彩夏の祖父で岬写真館のオーナー。

67歳。

基本的能天気で、異世界の住人や怪人でも快く受け入れる。いつも優しく、渚達を見守る立場にいる。

何故彼の写真館が世界を渡れるのかは不明である。

世界を渡る者

紅石 巨ノ仮面ライダーブレイズ

オリジナルの仮面ライダーブレイズ。

22歳。

突如渚の前に現れ、彼に新たなる九つの世界を巡る使命を与える。現在は仲間と共に彩夏の世界の滅びを防いでいる。

鳴滝

ディライドを付け狙う謎の男。

かつてはディケイドを標的にしていたが、現在はディライドを標的にしている。様々な世界で渚を葬ろうとする。

果たして彼の目的とは？

新たなる九人の仮面ライダー

芦原シヨウヘイ／仮面ライダーアクト

仮面ライダーアクトに変身する23歳の青年。

秋山マナの家庭教師をしていたが、ある日突然アクトの力に目覚め火のエルに追われることになる。

マナの父を火のエルから守れず、死なせてしまい、それに責任を感じマナの下から姿を消し、人知れずアンノウンと戦い続けていた。

一度火のエルにスプラッシュフォームへと覚醒させられるが、渚の言葉により自我を取り戻し、渚と共に火のエルを倒す。

その後、渚に連れられマナと再会する。

仮面ライダーアクト

シヨウヘイが変身する仮面ライダー。

アギトの亜種形態。

レルタリングから発せられる光に包まれ、変身する。姿はアギトと変わらないが、アギトは角が二本だがアクトは三本になっており、アギトでは金だった部分が銀、銀だった部分が金になっている。

クロスホーンの開き方は、二本の角はアギトと同じ様に開き、三本の角は伸びる。

アースフォーム

アクトの大地を司る基本形態。

能力はアギト・グランドフォームと同じ。グランドフォームと違い、基本色は銀。

必殺技は『ライダーキック』。

ウインドフォーム

レルタリングの左サイドのボタンを押すことで変身する風を司る形態。

基本色は青。

武器は『ウインドハルバード』。

必殺技は『ウインドスラッシャー』。

ファイアフォーム

レルタリングの右サイドのボタンを押すことで変身する炎を司る形態。

基本色は赤。

武器は『ファイアソード』。

必殺技は『ファイアセイバー』。

トリアングルフォーム

レルタリングの両サイドのボタンを押すことで変身する大地・風・炎を司る形態。

基本色は銀と青と赤。

武器は『ウインドハルバード』と『ファイアソード』。

必殺技は『ライダーシュート』と『ダブルブレイバー』。

スプラッシュフォーム

水を司るアクトの強化形態。

基本色は青、複眼は銀、クロスホーンは青。

必殺技は『スプラッシュボンバー』。

ダークネスフォーム

闇を司るアクトの最強形態。

スプラッシュフォームが太陽、又は月の光を浴びることで変身する。基本色は金。

必殺技は『ダークネスクラッシュ』、『ダークネスライダーキック』。

アクトスライダー

アクトのファイナルフォームライド形態。

本編には登場していない、アクト専用バイク・マシンライダーのスライダーモードを模した姿をしている。

必殺技はアクトスライダーの前にアクトの紋章が現れ、デイライドがライドブッカー・ソードモードで切り裂く『デイライドサイクロ

ン』。

辰山シンヤ／仮面ライダー聖龍

聖龍の世界で仮面ライダー聖龍として戦う23歳の青年。

ライダーバトルに参加する理由は、ライダー同士の戦いを止める為。その言動から渚はシンヤに、城戸真司／仮面ライダー龍騎の面影を重ねていた。怖い話が好きでよく話しみんなを怖がらせたりするが、ユウキには通じず落胆していた。

ラストバトルが近付く中、ライダーバトルの発端が自分であることを知り、絶望する。

その隙をついた虚像のシンヤに体を乗っ取られてしまいが、自ら命を絶ったユイの姿を見て、虚像のシンヤを追い出し聖龍に変身してリュウガを倒す。

その後ディライドと協力してシロウを倒す。

最後は、渚が旅に出るのを見送った後、松田レン／仮面ライダーナイトと共にサバイブに変身してレイドラグーンの大群に突っ込んでいく。

その後どうなったか不明だが、ネオ電王の世界での戦いに参加していたことから、レンと共にレイドラグーンの大群を一掃したと思われる。

仮面ライダー聖龍

シンヤが変身する仮面ライダー。

姿は龍騎では黒だった部分が白、銀だった部分が金になっている。
属性は光。

契約モンスターは金色のドラグレッダー・ドラグライトニング。
バイザーであるライトバイザーはドラグバイザーでは銀だった部分が金になっている。

武器は全て龍騎が使用する武器が聖龍の配色になっている。
必殺技は『ライトニングライダーキック』。

仮面ライダー聖龍サバイブ

聖龍が『サバイブ 閃光』のカードを使って変身する最強形態。
姿は金色の龍騎サバイブ。バイザーもライトバイザーツバイに変化しており、配色も聖龍のものになっている。

ドラグライトニングも金色のドラグランザー・ドラグシャイニングにパワーアップしている。

必殺技はバイクモードになったドラグシャイニングに跨がり敵に突っ込む『ドラゴンライトニングストーム』。

セイリユウドラグライトニング

聖龍のファイナルフォームライド形態。

ドラグライトニングを模した姿をしている。

必殺技はデイルイドが『ライトニングライダーキック』を放つ『デイルイドシャイニング』。

尾川タクマ／仮面ライダーイプシロン／フェニックスオルフェノク

イプシロンの世界で仮面ライダーイプシロンとして戦う17歳のスマイトブレインハイスクール3年B組の生徒。

イプシロンとしてオルフェノク達と戦うが、その正体は不死鳥の性質を持つオルフェノク・フェニックスオルフェノクである。

オルフェノクであることを隠して生活していたが、ラッキークローバーとの戦いでマリとケイタロウにオルフェノクであることがばれてしまい、マリから拒絶されイプシロンとして戦うことを放棄しようとするが、渚の言葉で再び人間を守る為に戦う決意する。

渚と協力してゴッドオルフェノクを倒した後学校を去ろうとするが、マリとケイタロウに止められ、再び三人で同じ道を歩み始めた。

仮面ライダーイプシロン

タクマが変身する仮面ライダー。

仮面は緑の複眼にEを横倒しにした青いラインが入っている。

スーツの形状はフェイスと同様。

フォトンブラッドの色は青。

変身コードは『4・4・4』。

必殺技はイプシロンショットを使って発動する『グランインパクト』

、イプシロンポインターを使って発動する『プラネットスマッシュ』

、専用バイク・ソニックウエーブのハンドルから取り出すイプシロンエッジを使って発動する『ライティクルカット』。

マツハフォーム

イプシロンマツハに装着されているミッションメモリーをイプシロンフォンに装着することで変身するイプシロンの強化形態。

イプシロンマツハを起動することで10秒間だけ超高速移動を発動出来る。

複眼は青、フォトンブラッドは銀色になっている。

さらにアーマーも開いている。

必殺技はイプシロンの必殺技を全て高速で発動するもの。

ブレイカーフォーム

イプシロンがハンドガン型のイプシロンブレイカーにイプシロンフォンを装着することで変身するイプシロンの最強形態。

複眼は青、フォトンブラッドは黒、全身は青。

イプシロンブレイカーはブラスターモードと剣型のブレイカーモードがある。

コードを入力することで飛行することも可能。

必殺技は『ブレイカープラネットスマッシュ』、『フォトンバレット』、『フォトンセイバー』。

イプシロンブレイカー

イプシロンのファイナルフォームライド形態。

イプシロンブレイカー・ブレイカーモードを模した姿をしている。

必殺技は『デイルイドギャラクシー』。

フェニックスオルフェノク

タクマが変化する不死鳥の性質を持つオルフェノク。巨大な不死鳥の姿になる飛翔態と体が強化された激情態がある。

剣谷カズキ／仮面ライダーフォルス

フォルスの世界で仮面ライダーフォルスとして戦う22歳の青年。普段は世界的大企業・BOARDで他のライダー達と清掃員として働いている。

人の為に働くことが大好きで、渚はカズキのそんな姿に剣崎一真／仮面ライダーブレイドの面影を重ねていた。

戦いの中で仲間である森本ハジメ／仮面ライダーカリスがジョーカーであることを知り、世界を守る為に倒すか悩んでいたが、ハジメの決意、渚の言葉でハジメを封印する。

最後はハジメの分まで戦い続けると仲間と決意を固めた。

仮面ライダーフォルス

カズキが変身する闇を司るスピードの仮面ライダー。

黒のスーツに白の鎧、仮面ライダーグレイブなど新世代ライダーと同型のスーツ。

姿はグレイブと酷似しているが、複眼があり、色は赤。

武器は醒剣・フォルスラウザー。

必殺技は『ファントムスラッシュ・ファントムブラスト・ファントムソニック』

ジャックフォーム

フォルスがスピードのQとスピードのJをラウズアブゾーバーにラウズすることで変身するフォルスの強化形態。

鎧の所々が白銀になっており、背中に三対の翼が出現している。

フォルスラウザーも強化されている。

必殺技は『J・フロントムスラッシュ』。

キングフォーム

フォルスがスピードのQとスピードのKをラウズアブゾーバーにラウズすることで変身する13体のアンデッドと融合した最強形態。

白銀の鎧にはアンデッドの絵が描かれている。

武器はキングラウザー。

必殺技は『ロイヤルストレートフラッシュ』、『K・フロントムブラスト』。

フォルスセイバー

フォルスのファイナルフォームライド形態。

フォルスラウザーを模した姿をしている。

必殺技は『デイルイドカリバー』。

コウキ／仮面ライダー光鬼

光鬼の世界で仮面ライダー光鬼として戦う32歳の男性。

光鬼流の師範代でありアスカの師匠でもある。

長年光鬼として戦い続け、現在では大蛇封印には欠かせない最強の鬼と呼ばれていた。

だが邪鬼の復活により封印は失敗、さらにはアスカを守る為邪鬼の攻撃を受け命を落とす。

そしてそれが渚の溜め込んだ悲しみを爆発させる引き金になってしまった。

アスカ／仮面ライダー光鬼

光鬼の世界で、命を落としたコウキの魂を受け継ぎ光鬼に変身する14歳の少年。コウキの唯一の弟子で、誰よりもコウキを尊敬していた。

自らの失敗でコウキが命を落としてしまったことで、完全に自信を無くしていたが、達也の言葉で自信を取り戻し、コウキの魂を受け継ぎ光鬼として立ち上がる。

今回の件以降、達也に尊敬の念を抱いている。

仮面ライダー光鬼

コウキとアスカが変身する仮面ライダー。

仮面は黄色、基本色は黄色がかつた紫。

武器は音撃棒・烈光と音撃鼓・光鼓。

さらに、鬼闘術・烈光拳、烈光脚、鬼光、鬼爪等があり、鬼棒術・烈光弾、烈光剣等も使用出来る。

必殺技は標的に音撃鼓・光鼓を取り付け、音撃棒・烈光で清めの音を流し込む『音撃打・光王烈波の型』。

光鬼輝

光鬼の強化形態。

修行を積むことで、基本色が黄色一色になる。

通常時に使用出来る鬼闘術、鬼棒術も使用出来るが、威力は桁違いになっている。必殺技は標的に音撃棒で直接清めの音を流し込む『音撃打・閃光烈刃波』。

装甲光鬼

光鬼の配色になった装甲声刃を使用することで変身する光鬼の最強形態。

装甲声刃を使った戦いや、音撃棒、鬼闘術を使った戦いを得意とする。

さらに鬼闘術の『烈光拳』と『烈光脚』も『閃光拳』と『閃光脚』に進化している。

必殺技は装甲声刃で敵を切り裂く『音撃刃・鬼神覚醒』。

コウキアサギワシ

光鬼のファイナルフォームライド形態。

アサギワシを模した姿をしている。

コウキオンゲキコ

ファイナルアタックライドを発動するとコウキアサギワシが変型する姿。

必殺技は『ディライドストリーム』。

真堂ソウイチ／仮面ライダードラゴ

ドラゴの世界で仮面ライダードラゴとして戦う25歳の青年。

何よりも妹の事を考え、妹の為なら何処でも駆け付ける優しい兄。

ビストロ・サルでコックとして働くなど、料理の腕はプロ級いやプロ以上の実力があるらしい。（自称）

また長年ライダーとして戦って来たこともあり、戦闘力はかなり高い。

妹の幸せを誰よりも願ひ、最後は妹の幸せを見て満面の笑みを浮かべていた。

仮面ライダードラゴ

真堂ソウイチが変身する仮面ライダー。

名前の通り龍をモチーフとしていることから最強のマスクドライダーシステムと言われている。

基本色は紫、複眼は茶色。

マスクドフォーム

ドラゴの変身時の姿。

防御力が高く、耐久性にも優れている。

主にドラゴクナイガン・アックスモードを使った戦闘を得意とする。頭部からは二本の角が生えている。

ライダーフォーム

ドラゴの通常形態。

クロックアップによる高速戦とドラゴクナイガン・クナイモードによる戦闘を得意とする。

角は二本。

必殺技は『ライダーキック』。

ハイパーフォーム

ドラゴがカブトムシ型のゼクター・ハイパーゼクターを使い、ハイパーキャストオフした最強フォーム。

角が大きくなり、体色は紫と銀を基調色にしている。さらにパーフェクトゼクターも使用出来る。

必殺技は『ハイパーライダーキック』、さらにパーフェクトゼクターを使用した『マキシマムハイパーストーム』、『マキシマムハイパートルネード』。

ゼクタードラゴ

ドラゴのFFR形態。

ドラゴゼクターを模した姿をしている。

必殺技はゼクタードラゴが標的を連続で攻撃した後、ドラゴRFとデイライドのライダーキックで標的を挟み潰す『デイライドスオー

△』。

野山良介 / 仮面ライダーネオ電王

ネオ電王の世界でネオ電王として戦う20歳の青年。性格は明るく活発で、誰とでも仲良くなれる。だが、本編では描かれなかったが、野上良太郎同様かなり運が悪い。戦闘では良太郎と違い基本的に単独で戦う。唯一の家族である姉の野山愛菜とはかなり仲が良い。

イグニス

良介の仲間のイマジンの一人。モチーフは不死鳥で赤を基調色にしている。一番最初に良介と出会ったことから、良介のことを一番理解しており、良介も彼を一番信頼している。良介に憑依すると、赤い瞳に赤いメッシュの入った腰まである長髪になる。性格のイメージは『テイルズオブヴェスペリア』のユーリ・ローウエル。

ウオータ

良介の仲間のイマジンの一人。

モチーフは龍で青を基調色にしている。

女好きで、良介に憑依してあらゆる場所に彼女を作るなどウラタロスに似通う部分がある。

だが以外に人の本質を見抜くなど観察力がある。

良介に憑依すると、青い瞳に青いメッシュの入った、カチューシャを着けたオールバックになる。

性格のイメージは『テイルズオブシンフォニア』のゼロス・ワイルダー。

ソルム

良介の仲間のイマジンの一人。

モチーフはライオンで黄色を基調色にしている。

自分のことをオッサンと呼んだりトルトニスの面倒をみるなど頼りになる。良介に憑依すると、黄色い瞳に黄色のメッシュが入った長髪をポニーテールにしている。

性格のイメージは『テイルズオブヴェスペリア』の女好きじゃないレイヴン。

トルトニス

良介の仲間のイマジンの一人。

モチーフは熊で紫を基調色にしている。

他のイマジンに比べると、子供っぽいが様々な小道具を開発しネオ電王の戦闘をサポートするなど以外としっかりしている。

良介に憑依すると、紫の瞳に紫のメッシュの入った前髪を逆立たせた髪型になる。

性格のイメージは『テイルズオブヴェスペリア』のカロル・カペル。

ルーメン

良介の仲間のイマジンの一人。

モチーフは騎士で白を基調色にしている。

性格は真面目で良介の指示は絶対としている。

イグニスと仲が良く、意見も合う。

普段は良介達とは別行動をとっているが、良介達が危機に陥ると助っ人としてオーナーに呼ばれることがある。

良介に憑依すると、白い瞳に白いメツシュが入る。

他のイマジンとは違い髪型が変化しない。

性格のイメージは『テイルズオブヴェスペリア』のフレン・シーフオ。

仮面ライダーネオ電王

良介が変身する仮面ライダー。

別名『二代目電王』とも呼ばれる。

姿はNEW電王と酷似しておりNEW電王では青だった部分が赤に金だった部分が銀に、銀だった部分が金になっている。

フォームチェンジの際は、デンカメンとバツクルと太股の一部が各イマジンの色になる。

バーストフォーム

良介のみで変身するネオ電王の基本形態。

デンカメンと太股の一部が青、バツクルは銀。

基本的に武器は使用せず、格闘戦を得意とするが、たまにネオガツシャーを使用することもある。因みにネオガツシャーの全形態を使用することが出来る。必殺技は『バーストスパート』のパンチバージョンとキックバージョン。

イフリートフォーム

ネオ電王がイグニスの変身した赤い剣・マチエーイグニスを装備した炎を司る形態。デンカメンとバックルと太股の一部は赤。必殺技はネオガツシャー・ソードモードの剣先を相手に突き刺し、マチエーイグニスとネオガツシャーを合体させ敵を切り裂く『イフリートスラッシュ』。

ウンディーネフォーム

ネオ電王がウオータの変身した青い剣・マチエーウオータを装備した水を司る形態。デンカメンとバックルと太股の一部は水色。必殺技はネオガツシャー・ロッドモードで敵を捕縛しマチエーウオータで強烈な突きを浴びせる『ウンディーネアタック』。

ノームフォーム

ネオ電王がソルムの変身した黄色の弓・マチエーソルムを装備した地を司る形態。

デンカメンとバツクルと太股の一部は黄色。
必殺技はネオガツシャー・ガンモードで敵の動きを封じマチエールムで射ぬく『ノームシヨット』。

ヴォルトフォーム

ネオ電王がトルトニスの変身した斧・マチエールトルトニスを装備した雷を司る形態。

デンカメンとバツクルと太股の一部は紫。

必殺技はネオガツシャー・アックスモードで敵を捕縛しマチエールトニスで叩き斬る『ヴォルトチョップ』。

レムフォーム

ネオ電王がルーメンの変身した白い剣・マチエールルーメンを装備した光を司る形態。

他のフォームとは違うネオデンオウベルトを使用している。

さらに全体のカラーリングは電王・ウイングフォームと同じになっている。

必殺技はネオガツシャー・ブーメランモードとハンドアックスモードで敵を捕縛しマチエールルーメンで敵を切り裂く『レムスマッシュ』。

センチュリオンフォーム

ネオ電王がネオケータロスを使用し、イグニス・ウオータ・ソルム・トルトニスの力を借りた強化形態。

姿はデンカメンが二つから四つに開き、肩から伸びているデンレールにイフリートフォーム・ウンディーネフォーム・ノームフォーム・ヴォルトフォームのデンカメンを装着し、胸と左腕と左足にデンカメンの装着部位が装備されている。さらにデンカメンを装着出来るセンチュリオンフォーム専用の剣・センチュリオンソードも使用出来る。

そして四体のイマジンを憑依させている為、最強形態のエンシエントフォームを凌ぐ戦闘力を発揮する。

必殺技は四つのデンカメンを左足に装着してライダーキックを放つ『センチュリオンスパート・キックバージョン』、左腕に装着してライダーパンチを放つ『センチュリオンスパート・パンチバージョン』、胸に装着して巨大な竜巻を放つ『センチュリオンタイフーン』、センチュリオンソードに装着して敵を切り裂く『センチュリオンスラッシュ』等がある。

エンシエントフォーム

ネオ電王がネオケータロスを用いて召喚した四体のイマジンの能力を宿した銃剣・エンシエントソードにライダーパスを装填する事で変身するネオ電王の最強形態。

姿は全体的にネオライナーを模している。戦闘力はバーストフォームを遥かに凌ぐが、四体のイマジンを憑依させているセンチュリオンフォームよりかは若干劣る。

必殺技はエンシエントソードからイグニスのを借りて敵を切り裂く『エンシエントスラッシュ』と敵を撃ち抜く『エンシエントブラスト』、ウォータの力を借りて敵に強烈な突きを放つ『エンシエントアタック』と敵を撃ち抜く『エンシエントバレット』、ソルムの力を借りて敵を撃ち抜く『エンシエントショット』と敵を切り裂く『エンシエントセイバー』、トルトニスの力を借りて敵を叩き斬る

『エンシエントチョップ』と敵を撃ち抜く『エンシエントバスター』、四体のイマジンの力を借りて敵を切り裂く『エンシエントブレイカー』と敵を撃ち抜く『エンシエントブレイク』、さらにフルチャージしてライダーパンチを放つ『エンシエントスパート・パンチバージョン』とライダーキックを放つ『エンシエントスパート・キックバージョン』。

超センチュリオンフォーム

センチュリオンフォームにルーメンの力を追加ネオ電王の究極形態。姿はセンチュリオンフォームの背中にルーメンのデンカメンを装着している。

さらにルーメンのデンカメンを展開する事で巨大な翼を形成し空を飛ぶ事が出来る。

必殺技はセンチュリオンフォームの必殺技を全て空中から繰り出す。

デンオウデンカメン・ウイングモード

ネオ電王のFFR形態。

バーストフォーム・イフリートフォーム・ウンディーネフォーム・ノームフォーム・ヴォルトフォームのデンカメンがそれぞれディライドの胸・両腕・両脚に合体し、ネオ電王本体が変型するウイングモードを背中に合体させることで完成する。

背中ウイングパーツによる空中戦を得意とする。

デンオウデンカメン・ブレードモード

FARを発動する事でウイングパーツが剣に変型し、五つのデンカメンが合体する事で完成する巨大な剣。
必殺技は敵を切り裂く『デイルイドエンシエント』。

野山幸介／仮面ライダートライ電王

ネオ電王の世界の未来からやって来た良介の孫。

18歳。

性格はイグニス達と出会った頃はひねくれており、良介やイグニス達を馬鹿にしていたが、彼等と共に戦っていく内に打ち解けていった。

良介同様運が悪いが、相棒のイマジンであるグラキエスのサポートにより運の悪さを気にせず生活している。

グラキエス

幸介の相棒のイマジン。

モチーフは狼で水色を基調色にしている。

性格は真面目で、幸介の事を一番に考えている。

たまにイグニス達から無視されるなどかわいそうな立ち位置にいる。

仮面ライダートライ電王

幸介が変身する仮面ライダー。

別名『三代目電王』とも呼ばれる。

姿はNEW電王と酷似しており、NEW電王では青だった部分が黄色、銀だった部分が銅になっている。

フォームチェンジはネオ電王と同様にデンカメンとバツクルと太股の一部が各イマジンの色になる。

バスターフォーム

トライ電王の基本形態。

デンカメンと太股の一部は紫、バツクルは銅。

基本的にトライガツシャーを使用して様々な形にして戦う。

必殺技はフルチャージしてライダーキックを放つ『バスタースパイト・キックバージョン』とライダーパンチを放つ『バスタースパイト・パンチバージョン』。

セルシウスフォーム

トライ電王がグラキエスの力を借り、グラキエスの変身した水色の剣・マチェーグラキエスを使う氷を司る形態。

デンカメンとバツクルと太股の一部の色は水色になっている。

必殺技はマチェーグラキエスで敵を切り裂く『グラキエススラッシュ』。

瀬戸ワタリ／仮面ライダーブレイズ

ブレイズの世界で仮面ライダーブレイズとして戦う17歳の青年。
人間とファンガイアのハーフ。

自らの世界を守る為に過去に行った際にユウキと出会い、共に秋葉
原トワを守る。

ユウキが現代に現れて共に行動する様になってから、彼に父親の面
影を重ねる。アークとの戦いの際に、ユウキと親子の絆とも呼べる
程の関係を築き上げる。

ブレイズキバット

ワタリの相棒で炎を司るキバット族。

ワタリの手で噛み付く事で彼にブレイズの鎧を与える。

フェニックス

ブレイズをクリムゾンフォームに変身させるフェニックス族。

さらにアームズモンスター達を用いた必殺技も強化する事が出来る。

仮面ライダーブレイズ

ワタリが変身する仮面ライダー。

別名『深紅のキバ』とも呼ばれる。

姿・能力はキバと全く同じだが、唯一の違いは鎧が全て赤に輝いて
いる部分。

キバフォーム

ブレイズの基本形態。

キバ・キバフォームと特に大差は無い。

必殺技はブレイズキバットがウエイクアップフェッスルを吹く事で発動する『ファイアームーンブレイク』。

ガルルフォーム

ブレイズがガルルの力を借りた青を基本色にする剣術戦を得意とする形態。

必殺技は『ガルル・ハウリングスラッシュ』。

バツシャーフォーム

ブレイズがバツシャーの力を借りた緑を基本色にする銃撃戦を得意とする形態。必殺技は『バツシャー・アクアトルネード』。

ドツガフォーム

ブレイズがドツガの力を借りた紫を基本色にするハンマーを使った戦いを得意とする形態。

必殺技は『ドツガ・サンダースラップ』。

クリムゾンフォーム

ブレイズがフェニクロスの力を借りて真の力を解放したブレイズの最強形態。

別名『灼熱のキバ』とも呼ばれる。

姿はキバ・エンペラーフォームと酷似しているが、金だった部分が赤、赤だった部分が金になっている。

必殺技は『クリムゾンムーンブレイク』、さらにアームズモンスターの力を借りて放つ『クリムゾンハウリングスラッシュ』、『クリムゾンアクアトルネード』、『クリムゾンサンダースラップ』、さらにファンガイアの王に伝わる伝説の剣・ザンバットセイバーで敵を切り裂く『バーニングザンバット斬』。

ブレイズ飛翔態

本編ではアークに強制的に変身させられたが、正しい変身の仕方はフェニクロスの持つフェッスルをブレイズキバットに吹かせてフェニクロスと一体化する事で変身する不死鳥を模した飛行形態。

姿はキバ飛翔態と酷似しているが、金だった部分が赤、赤だった部分が金になっている。

必殺技は口から強力な火炎放射を放つ『バーニングストライク』。

ブレイズアロー

ブレイズのFFR形態。

ブレイズキバットを模した巨大な弓矢。

必殺技は敵を射ぬく『デイルイドボルケーノ』。

仮面ライダーディライドキャラクター大百科（後書き）

次回からは第二章です！

第20話 第二章・襲撃、ダークライダー（前書き）

遂に第二章です！

第20話 第二章・襲撃、ダークライダー

これまでの仮面ライダーデイライドは……。

詳しくは第1〜19話をお読み下さい。

光鬼の世界を後にした渚達は、次の世界・彩夏の世界に来ていた、いや戻って来たと言った方が良いだろうか。

写真館から出て来た渚達はとりあえず歩く事にした。

「へえ〜ここが彩夏ちゃんの世界かあ。でも特に変わった所は無
いよなあ〜」

ユウセイはそう言いながら伸びをする。
それを聞いた渚も表情を険しくして、

（だが、何か妙だな……。静かすぎるというか、異常な静かさだな
……）

そう考えていると突然彩夏が、

「何か違う……、なんか嫌な感じがする……」
「えっ？？どういうこと？」

彩夏の言葉にユウセイは疑問を抱いた。

確かに彩夏は自分の世界に帰って来たというのに笑顔はおろか、言葉さえ発しなかった。

「やっぱりお前も感じていたか。この世界、妙に静かすぎる」

渚がそう言った瞬間、彼等の後ろから拍手の音が聞こえた。

「……ん？」

三人は振り向いた瞬間一気に警戒体制に入った。

それもその筈だ。

何故なら拍手をしていたのは、真っ黒な体に赤いラインが入った鬼をイメージさせる『怪人』だった。

その怪人を見た渚は静かに怪人の名前を呟いた。

「……………ネガタロスか……………」

もう一人の世界の破壊者・デイルイド。

新たなる九つの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第20話 第二章・襲撃、ダークライダー

渚達の前に現れた怪人・ネガタロス。
警戒する渚達に対しネガタロスは攻撃する様子は無かった。
すると突然、

「よくやったな、デイライド」
「は？」

ネガタロスの言葉に渚は間抜けな声を出した。
ネガタロスは気にせず続ける。

「お前のお陰でこの世界は救われた、ということだ。つまり、お前の旅は終わった訳だ」

得意気に話すネガタロス。渚は目付きを鋭くしてこっぴどく聞いた。

「じゃあ教えてもらおうか。旅をして、俺が得たものとは何だ？」

渚の問いにネガタロスはまたも得意気に、

「お前の、生きるべき世界」

ネガタロスはそう言うとそのまま去って行った。

「俺の、生きるべき世界………？」

渚はネガタロスの言葉が引つ掛かった。
するとユウセイが、

「とりあえず歩かない？ そうすれば渚と彩夏ちゃんの言う妙な感じが分かるかもしれないし」

「そうだね」

「じゃあ行くか」

ユウセイがそう言うと三人は歩き始めた。

だがいくら歩いても何もなければ誰も居なかった。

渚達は立ち止まり、

「確かに妙だな……、誰も居ない……」

ユウセイも漸くこの世界の違和感に気付いた。

その時だった、

「おめでとう、デイルイド」

渚達は声のする方に振り向くと、そこには鳴滝が居た。

「鳴滝！」

渚は警戒するが鳴滝はネガタロス同様攻撃する様子は無かった。

「旅を終え、君は君の生きる世界を見付けた。私も嬉しいよ」

鳴滝はそう言うと不敵な笑みを浮かべて次元の壁へと消えて行った。

「ふんっ、気持ち悪い」

渚は結構きつめの事を言っていた。

歩き続けていると、漸く人に出会った。

だがどの人も普通にお茶をしたり買い物をしており、怪しい所は何も無かった。すると渚達の目の前にまたもネガタロスが現れた。

「どうだ？この世界の居心地は」

ネガタロスは嘲笑うかの様に渚に聞く。

それに怒りを覚えたのか渚は鋭い目付きで、

「ふざけんな、こんな気持ち悪い世界が居心地良い訳ねえだろ」

渚がそう言うと彩夏が後ろを見ながら、

「渚君！ユウセイ！あれ……………」

渚とユウセイは彩夏に言われる通り後ろを見ると、さっきまで普通にしていた人達が虚ろな瞳で渚達を見詰めていた。

「なんだ？気味わりい……………」

ユウセイと彩夏は一気に警戒心を高めた。

渚はネガタロスの方を向きこつ聞いた。

「ここは何の世界だ？」

ネガタロスは得意気に、

「ネガの世界つてところだ」

「ネガ？裏つてことか？」

渚が考えているとネガタロスは指を鳴らし、

「来い！」

するとネガタロスの後ろから三人の仮面ライダー、アナザーアギト・リュウガ・歌舞鬼が現れる。
それを見た渚は、

「ダークライダー!?!」

するとネガタロスはゆっくり前に出てこう言った。

「お前はいずれこの世界の王になる。そして俺達の宝を受け継ぐことになるだろう。だがまずは、小手調べだ」

ネガタロスはそう言うとデンオウベルトを取り出し装着する。
そしてライダーパスを取り出し、

「変身」

そしてライダーパスをデンオウベルトにセタッチする。

《ネガフォーム!》

ネガタロスは仮面ライダーネガ電王・ネガフォームに変身した。

「さあ、かかってこい」

ネガタロスがそう言うと渚とユウセイは前に出て、

「岬、下がってる。ユウセイ行くぞ!」

「ああ！」

渚は彩夏を避難させると、ユウセイと共に変身準備を完了させる。

「変身！！」

《カメンライド…デイルライド！》

渚とユウセイはデイルライドとソウガ・アビシオンフォームに変身した。

二人は変身すると同時にダークライダーに向かって走り出す。

デイルライドはリュウガとネガ電王NF、ソウガAFはアナザーアギトと歌舞鬼と戦う。

二人は何とか応戦するがダークライダーの戦闘力に徐々に押され始める。

その瞬間、ダークライダーに銃弾が降り注ぐ。

「くっ！誰だっ！」

ネガ電王NFがそう言っていると物陰から一人の青年が現れる。

「海東」

デイルライドはその青年の名を呟く。

達也はネガ電王NFの方を向き、

「おい黒鬼野郎！てめえは間違ってる」

「は？何言ってるんだ、達也」

ソウガAFは達也の言葉に困惑する。

達也は気にせず続ける。

「宝を受け継ぐのはこの俺に決まってるんだろ」

どうやら先程ネガ電王NFの言っていた宝の話を聞いていたのだから。

それを聞いたソウガAFは、

「あ、そういうことね……………」

呆れていた。

そういうしている間に達也は変身準備を完了させる。

《カメンライド》

「変身！」

《ディセンド！》

達也はディセンドに変身すると、直ぐ様歌舞鬼に攻撃する。

仲間が増えたことでソウガAFの負担は減り、ディライドもソウガAFを心配せず戦う事が出来る。

「んじゃま、一気に行くか」

ディライドはそう言うカードを一枚装填する。

《フォームライド…ネオデノオウ！ノーム！》

ディライドは直接ディライド・ネオ電王・ノームフォームに変身する。

そしてマチェーノームで遠距離から反撃する。

「ちっ！っざってえ！」

ネガ電王NFはそう言つとデンガツシャーをガンモードに組み立て、反撃する。

Dネオ電王NFとネガ電王NFが激しい撃ち合いをしている際に、リュウガはドラグセイバーを装備してDネオ電王NFに背後から襲い掛かる。

「はあ！」

「何っ！ぐああ！」

Dネオ電王NFが怯んだ際に、ネガ電王NFはデンガツシャー・ガンモードを乱射する。

「喰らえ！」

「ぐあああ！」

Dネオ電王NFは攻撃に耐えきれずデイライドに戻ってしまった。ネガ電王NFはさらに攻撃しようと、デンガツシャーをアックスモードに組み立てデイライドに向かって走り出す。さらにリュウガもデイライドに向かって走り出す。前からはネガ電王NF、後ろからはリュウガ。

「そんなもんか！」

「くっ！」

デイライドは何とか二人の攻撃をかわすと、カードを一枚取り出し、

「ならこいつだ！」

そう言つてカードを一枚装填する。

《カメンライド…セイリユウ!》

デイライドはデイライド・聖龍にカメンライドするとさらにもう一枚装填する。

《アタックライド…ソードベント!》

D聖龍はライトセイバーを装備すると、ライドブッカー・ソードモードとの二刀流でネガ電王NFとリュウガに反撃する。

デイライドは見事なまでの二刀流で二人のライダーを圧倒する。そして二本の剣による強烈な一撃でリュウガを吹っ飛ばす。

「喰らえええ!」

「ぐああああ!」

リュウガを退けるとD聖龍はデイライドに戻り右手をディープライエローに輝かせる。

「はあああ!」

「ぐあああ!」

デイライドは『ディメンションインパクト』でネガ電王NFを吹っ飛ばす。

少し遅れてアナザーアギトと歌舞鬼もネガ電王NFとリュウガの下へ来た。

ソウガAFとディセンドにやられたのだろう。

三人のライダーは集まると止めを刺そうとする。

だがネガ電王NFは余裕の表情で指を鳴らす。

すると先程まで何もしていなかった人間達が突然ネガ電王NF達の目の前に立ち塞がる。

「何っ!?!」

「何で人間達がっ!?!」

「こっすりゃあ退くだろ」

デイセンドはデイセンドライダーを人間達に向ける。だが人間達は微動だにしなかった。

「おいおいマジかよ……」

デイセンドはそう言うとカードを一枚取り出し、

「人間相手は気が引けるわ」

そう言うとカードを装備する。

《アタックライド…インビジブル!》

デイセンドは『デイセンドインビジブル』を発動しその場から去った。

「渚、ここは一旦退いた方がいいんじゃないか？」

ソウガAFがそう言うとデイライドはライドブッカーをガンモードに変型させ、

「確かにな。岬!逃げるぞ!」

デイライドはそう言うつとライドブッカー・ガンモードを地面に放ち目眩ましをしてその隙にその場から去った。

「ちっ！逃げたか」

ネガ電王NFがそう言うつとアナザーアギトが、

「追いますか？」

「いや、いい。まずはあれを潰す。行くぞ」

ネガ電王NFがそう言うつとダークライダー達は何処かを目指し歩き始めた。

渚達は森の中を歩いていた。

「ここまでくれば大丈夫だろ……………」

ユウセイがそう言うつと渚達は休憩として走るのを止め歩き始めた。

「どうなってるの？何で人間達が……………」

「ていうか、あれ人間なのか？なんか人間って感じがしなかったけど……………」

彩夏とユウセイは困惑していた。

それに比べて渚はいたって冷静だった。

「まあ確実に普通の人間じゃないだろな」

そんなことを言いながら歩いていると、突然草むらから一人の人間が現れた。

その人間を見た瞬間三人は驚愕した。

特に彩夏は驚きすぎて尻餅をついていた。

「お、お前は？」

「……………この世界の？」

渚がそう言うとその人間はゆっくり頷く。
そして彩夏が、

「あ、私……………？」

そう、渚達の目の前に現れたのはボロボロの服を来た彩夏だった。

「貴方達は表の世界の人間ね？」

「じゃああなたはネガの世界の唄か」

渚がそう言うとN彩夏は、

「着いてきて、私達の村に案内するわ」

N彩夏はそう言うと歩き出す。

渚は彩夏を立たせるとN彩夏に着いていく。

渚はN彩夏に、

「なあ、この世界はどうなってんだ？」

渚の問いにN彩夏は、

「この世界にはもう本物の人間は殆ど居ない。みんな殺された。今普通に生活しているのはみんなダークライダーか怪人だけ」

「人間が殆ど!?!」

ユウセイは驚愕した。

彩夏は信じられないという表情をしていた。

渚はさらに問う。

「村って何なんだ?」

「生き残った人間達の隠れ家」

N彩夏がそう言つと彩夏は、

「そこは安全なの!?!」

「いや、見付かるのは時間の問題。そろそろ移動の準備を始めてるわ」

「そんな簡単に見付かるもんなのか?」

ユウセイがそう聞くとN彩夏は表情を暗くして、

「うん。私が『アレ』を持っているかぎり……」

「『アレ』……?」

渚はN彩夏の言う『アレ』という言葉が引っ掛かった。すると彩夏が、

「渚君!あれ!」

渚達は彩夏の指差すを見る。
すると向こうの方から火が上がっていた。

「まさか、もう奴等に!？」

N彩夏はそう言つと火が上がつて方へ走り出した。

「俺達も行くぞ」

渚がそう言つと三人はN彩夏を追い掛けて行つた。

三人が村に到着すると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「そんな……………」

N彩夏はその場に崩れ落ちる。

「マジかよ……………」

ユウセイも顔を真っ青にしている。

「酷い……………」

彩夏は目を背ける。

「……………」

渚は黙つてはいるが、その表情は明らかに穏やかなものじゃなかった。

彼等が見たもの、それは四人のダークライダーが生き残った人間達を虐殺している光景だった。

渚達が到着したのに気付いたネガ電王NFは挑発するかのよう、

「よう、遅かったなあ。まあ今更来ても無意味だがな」

ネガ電王NFはそう言うとまだ生きていた人間にデンガツシャー・ソードモードを突き刺し止めを刺した。

「うっ！」

それを見たユウセイは、

「なっ、てめえ！止める！」

怒鳴り付ける。

渚はネガ電王NFに明らかにいつものような冷静さを失いながらこう言った。

「なにしゃがんだ……なにしゃがんだこの情の無い虫けら共がっ！」

渚はそう言うと走りだし変身する。

「変身っ！」

《カメンライド……ディライド！》

ディライドはライドブッカー・ソードモードでダークライダー達を切り裂いていく。

ユウセイも渚に続いて走りだし変身する。

「変身！」

ソウガ・アビシオンフォームはディライドに加勢するが、ディライドは完璧に自我を失っており、ソウガAFも攻撃する。

「ああああ！」

「渚っ！？ぐあああ！」

ソウガAFを吹っ飛ばすとディライドはさらにダークライダー達を追い詰めていく。

だがネガ電王NFはそれを待っていたかのように、

「いまだっ！」

そう言って指を鳴らす。

その瞬間ディライドの目の前に小さいブラックホールの様な物が現れ、そのままディライドを何処かへ消し去ってしまった。

「渚っ！？？」

ソウガAFは困惑している内にダークライダー達の猛攻を浴びる。

「ぐあああ！」

「ユウセイ！」

果たして渚は何処へ行ってしまったのか？

そしてこの世界を救うことが出来るのか？

第20話 第二章・襲撃、ダークライダー（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……。

第21話 輝ける光の王Ⅱ究極の破壊者

全てを破壊し、全てを繋げ！

第21話 輝ける光の王Ⅱ究極の破壊者(前書き)

今回は結構戦闘が多めです。

第21話 輝ける光の王Ⅱ究極の破壊者

これまでの仮面ライダーディライドは……………。

詳しくは第20話をお読み下さい。

ネガ電王NFの作り出したブラックホールに吸い込まれてしまったディライド。動揺するソウガAFの隙についてダークライダー達は猛攻を浴びせる。

「ぐあああ!」

「ユウセイ!」

彩夏はソウガAFに駆け寄る。

「大丈夫!? つか渚君はっ!?!」

「そっだ、渚! おいお前! 渚をどうした!」

ソウガAFがそう聞くとネガ電王NFは、

「さあな。だが帰って来る頃には奴はもう奴じゃないだろうな」

「どっついうことだ!」

ソウガAFはそう聞くが、ネガ電王NFは聞く耳を持たずソウガAFに歩み寄る。さらにアナザーアギト達も近付いて来る。彩夏は慌

てて、

「ユウセイ、どうしよう!?!」

「ここは一旦退く」

ソウガAFは重い体を無理矢理動かし、

「豪変身!」

ソウガAFはメリクリウスフォームにフォームチェンジすると、彩夏とN彩夏を抱え、

「しっかり捕まってて!」

ソウガMFはそう言うのと自慢のジャンプ力でその場から去って行った。

「逃げたか。まあいい、あの女が『アレ』を持っているかぎり奴等の場所など直ぐ判る」

ネガ電王NFはそう言うのとダークライダー達と共に歩き出した。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る?

第21話 輝ける光の王Ⅱ究極の破壊者

ダークライダー達からなんとか逃れることが出来たユウセイ達は街の目立たない所に身を隠していた。

「くそっ！あいつらなんてことしやがんだ！」

ユウセイはダークライダー達の先程の虐殺に激しい怒りを覚えていた。

「私のせいだ……、私が『アレ』を持っているから……」

N彩夏はまたも『アレ』という言葉を発した。気になったユウセイはN彩夏に、

「なあ、気になってたんだけど『アレ』ってなんなんだ？」

ユウセイがそう聞くとN彩夏は茶色い巾着を取り出しユウセイと彩夏に見せる。

「これ……」

それを見せられたユウセイは、

「何が入ってるんだ？」

「奴等の宝。輝く光の戦士を輝ける光の王にする物」

それを聞いたユウセイは、

「輝く光の戦士……それが渚ってことか？」

「うん。彼にこれを何があっても渡さないと……」

N彩夏がそう言った瞬間、

「じゃあ俺が渡してやろう」

三人が声のする方に振り向くと、そこにはネガ電王NFと三人のダークライダーが居た。

「もうバレたのか！」

ユウセイはそう言うと二人の彩夏を守る様に立つ。

「おい、女。それを渡せば命を助けてやるぞ」

ネガ電王NFはそう言うが、

「渡しちゃ駄目だ！あいつがそんな簡単に命を助けてくれる筈が無い！」

ユウセイはネガ電王NFの言葉を真っ向から否定する。そして変身の準備を完了させる。

「変身！」

ユウセイはソウガAFに変身すると、

「渚は絶対に帰って来る！だから絶対に渡しちゃ駄目だ！」

ソウガAFはダークライダーに向かって走り出す。すると物陰から達也が現れ、

「どうやらこの世界の宝は渚にしか使えねえようだな。どんなもんか見てえから手伝ってやるよ」

達也はそう言つと変身準備を完了させる。

《カメンライド》

「変身！」

《ディセンド！》

達也はディセンドに変身するとソウガAFに加勢する。

「こ、ここは……………？」

渚が目を覚ました場所、それは何も無い真っ黒な空間。

「そうか、俺はネガ電王と戦っていて……………」

渚は何故自分がここに居るのかを理解した。すると後ろから、

「やっと来たか」

渚が後ろに振り向くと、

「な！お、お前は……………？」

「俺は……………お前だ……………！」

渚の前に現れたのは紛れもなく渚その者。唯一の違いは悪魔の様な冷たい目。もう一人の渚はゆっくり歩きながら、

「ここはネガ空間」

「ネガ空間！？」

「俺はお前の闇。ここで自らの闇に溺れた者は永遠にネガ空間から出ることは出来ず、変わりに闇が表に現れる」

「要するに、体に乗っ取るってわけか？」

「まあ、そういうことだ」

ネガ空間の仕組みを理解した渚は一気に警戒心を高める。だがもう一人の渚は余裕の表情で、

「そんなに力むなよ。安心しろ、ここは言わば裏の世界。今現在裏である俺の方が確実に有利。つまりお前はここで終わる」
「なに！？」

もう一人の渚はそう言うつと変身準備を完了させる。

「変身……………！」

《カメンライド……デイライド！》

もう一人の渚はディメンションヴィジョンを歪ませ、シグナルポイントを変色させた、デイライド激情態に変身した。

「くっ！」

渚は変身準備を完了させる。

「変身！」《カメンライド…ディライド!》

ディライドに変身すると戦闘体制に入る。
だがディライド激情態は呆れた様に、

「はあ、無駄だっつってんに……」
「黙れ！」

ディライドはそう言うと激情態に向かって走り出す。すかさずパンチを放つが激情態は余裕で受け止める。

「何!?!」
「残念!……消える！」

激情態はディライドの手を離すと瞬時に『ディメンションインパクト』を放つ。

「ぐあああ!」

激情態の攻撃でディライドは大きく吹っ飛ぶ。

「ちっ!この野郎！」

ディライドはそう言うとカードを一枚装填する。

《カメンライド…G3!》

デイライドはデイライド・G3にカメンライドする。
そしてライドブッカー・ガンモードを激情態に放つ。だが激情態は
難なくかわし、カードを一枚装填する。

《アタックライド…ギガント!》

激情態は仮面ライダーG4の必殺武器のミサイル・ギガントを装備
する。

激情態はDG3にギガントを向けミサイルを二発発射する。

「やばっ!」

DG3は間一髪避けるが、残りの二発のミサイルが直撃してしまう。

「ぐあああ!」

DG3はデイライドに戻ってしまい、大ダメージを受けてしまう。

「ま、こんなもんか」

激情態は余裕の表情でギガントを投げ捨てる。

デイライドは重い体を無理矢理動かし、

「くそが!」

そう言ってカードを一枚装填する。

《カメンライド…ゾルダ!》

デイルライドはデイルライド・ゾルダにカメンライドする。
Dゾルダはライドブッカー・ガンモードで激情態を狙い撃ちながら、
走り回る。

「ちっ！ちょこまかと！」

激情態はそう言うとかードを一枚装填する。

《アタックライド…アドベント！》

するとDゾルダの頭上に突如、仮面ライダー龍騎の契約モンスター・
ドラグレッダーが現れる。

「何！？」

ドラグレッダーはそのままDゾルダを掴み、上昇する。
そして一気にDゾルダを地面に叩きつける。

「うわあああ！」

ドラグレッダーは役目を終え消滅し、Dゾルダもデイルライドに戻る。

「そんなもんかあ？表の俺よお」

激情態は挑発するかの様に言う。
デイルライドは再び立ち上がり、

「ならこれだ！」

そう言つてカードを一枚装填する。

《カメンライド…カリス!》

デイライドはデイライド・カリスにカメンライドする。

そしてライドブッカー・ソードモードで激情態に斬りかかる。

「はあ!」

だが激情態はそれを軽々とかわしカードを一枚装填する。

《アタックライド…キングラウザー!》

激情態は仮面ライダーブレイドの最強形態・キングフォームの武器・キングラウザーを装備してDカリスを何度も切り裂く。

「おらおらおらあ!」

「どわあああ!」

さらに激情態はカードをもう一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ブ・ブ・ブ・ブレイド!》

激情態とDカリスの間に五枚の巨大なラウズカードが現れる。

激情態はキングラウザーを構えラウズカードを通り抜けて『ロイヤルストレートフラッシュ』を発動する。

「はあああ!」

「くっ!ぐあああ!」

Dカリスはなんとか防御をするが予想以上の威力にぶっ飛ばされデ
イライドに戻る。

「なんて強さだ……！」

デイライドは激情態の戦闘力に驚愕する。

激情態はキンググラウザーを投げ捨て、

「言つたる？このネガ空間じゃあ俺の方が有利だつて」

激情態はそう言つがデイライドは諦めず再び立ち上がる。

「んなもん知るか。俺は諦めるつてのが一番嫌いなんだ！」

デイライドはそう言つとカードを一枚装填する。

《カメンライド…トドロキ！》

デイライドはデイライド・轟鬼にカメンライドする。さらにもう一
枚装填する。

《アタックライド…オンゲキゲン・レッツライ！》

D轟鬼は音撃弦・烈雷を装備して激情態に向かって走り出す。

「はあゝ、懲りない奴だなあゝ」

だるそうに言いながらカードを一枚装填する。

《アタックライド…オンゲキボウ・レッカ！》

激情態は仮面ライダー響鬼の武器・音撃棒・烈火を装備する。そしてこちらに走って来るD轟鬼に火の弾を放つ。

D轟鬼はそれを烈雷で叩き落とし激情態に斬りかかる。

「おらあ！」

「無駄だ！」

だが激情態はそれを烈火で受け止め、烈雷を弾き飛ばし腹に数発音撃棒を叩きつける。

そして大量の火の弾を浴びせる。

「終わりだあ！」

「ぐああああ！」

D轟鬼はデイルイドに戻り、その場に倒れる。

そして、動かなくなってしまった。

その頃ソウガAFとデイセンドはダークライダーに圧倒されていた。

「くっ！こいつら強い！」「流石の俺もこれはちときついな」

二人はそう言いながらもダークライダー達に立ち向かう。

だが二対四という圧倒的に不利な状況だった。

一人を相手すればもう一人が襲いかかる、反撃の余地が全くなかった。

その状況を見ていたN彩夏は茶色い巾着を握りしめ、

「私がこれを渡せば……………」

「えっ？駄目だよ！渡したって助かる保証なんか無いんだよ！？」

彩夏はそう言っつてN彩夏を引き留める。

それを聞いたソウガAFは、

「そうだ！絶対に渡しちゃ駄目だ！それに渚は絶対帰って来る！だから信じて待つんだ！」

ソウガAFがそう言っつとN彩夏はゆっくり頷く。

それを見たソウガAFもゆっくり頷き、

「豪変身！」

ソウガAFはグラジヤラボラスフォームにフォームチェンジして防御力を上げダークライダー達の攻撃に耐える。

「渚！絶対帰って来い！待ってるぞ！」

「いつまで待たせんだよ！早く来いっつんだよ！」

ソウガGFとディセンドはそう言いながらダークライダー達と戦い続ける。

ネガ空間。

動かなくなってしまったディライド。
それを見た激情態は、

「案外しぶとかったな、まあこれまでだがな……………ん？」

そう言った瞬間激情態は自分の目を疑った。

何故なら、先程まで動く気配すら無かったディライドが立ち上がっているのだから。

「いつてえな〜」

ディライドは先程の大ダメージがまるでかすり傷かのような発言をした。

激情態は激しく動揺していた。

「な、何故だ!？」

「なんか呼ばれてる気がするんだよ、仲間に。あんまり呼ばれるとうせえからとつとけりつけるわ」

「なんだと!？」

ディライドはそう言うカードを一枚装填する。

《ファイナルカメンフォームライド…ク・ク・ク・クウガ!》

ディライドは仮面ライダークウガの究極形態、禁断の闇とも呼ばれるクウガ・ライジングアルティメットにファイナルカメンフォームライドする。

「それがどうした!」

激情態はそう言うとDクウガRUに向かって走り出す。『ディメンションインパクト』を放つがDクウガRUはそれを片手で受け止める。そして残った方の腕に業火を灯し、激情態を殴りつける。

「はあ！」

「ぐああ！」

DクウガRUはカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ク・ク・ク・クウガ！》

DクウガRUは両足に業火を灯し激情態に『ライジングアルティメットキック』を放つ。

「はあああ！」

「ぐあああ！」

『ライジングアルティメットキック』を受けた激情態は、

「この俺が、負ける？馬鹿な…ぐあああああ！」

激情態はそのまま消え去った。

「はあ………」

DクウガRUはため息をつくと変身が解けそのまま倒れてしまった。

「あれ？体が動かねえ……。ああ、やっぱり限界の状態であのクウガはまずかったかな………」

そう言っただけ目を閉じようとした瞬間、

「ちょっとあんた！何やってんの！？」

「はい！？」

突然聞こえてきた女性の声。

それを聞いた瞬間渚は先程の傷がまるで嘘かのように起き上がった。そして頭に拳骨が降り注ぐ。

「いでえ！」

渚は立ち上がり振り向くと、

「な！マリア！？」

渚の後ろには同じ年位の一人の女性が居た。マリアと呼ばれた女性は渚の胸ぐらを掴み、

「あんたこんなところでなにしてんの！？」

「それはこっちの台詞だっつうの！！」

渚は明らかにいつもの様なクールな感じてはなかった。まるでこっちの方が本当の渚の様だった。

「あんたがいつまでもちんたらやってるから助けに来てあげたのよ！」

「ちんたらっしてお前なあ！」

「仲間が待ってるんでしょ？」

急に真剣になるマリア。
それと同時に渚も真剣な表情になる。

「ああ。でもどうやったらかっから出られるんだ？」
「それがあ
るじゃない」

マリアはそう言つと渚の左手首についてある黄色のブレスレットを指差す。

「これが……」

「それは渚と仲間を繋ぐもの。私はそう思う。だからそれを信じれば必ず帰れる」

そう言つた瞬間マリアは光輝き始める。

「マリア！？お前はどうなるんだ？」

「私はこれからもずっと渚を見守っている。渚が旅を続けるかぎり……」

マリアはそう言つと光となって消える。

「マリア……ありがとう……」

渚はそう言つとブレスレットを握りしめる。
ブレスレットは輝き出し渚を包み込んだ。

その頃ソウガGFとデイセンドはダークライダー達に追い詰められていた。

ネガ電王NFがソウガGFに止めを刺そうとデンガツシャー・ガンモードを向けた瞬間、眩い光が現れその場に居た全員がそれに注目する。

そして光が消えるとそこには渚が居た。

「っ！出れた！」

それを見たネガ電王NFは、

「ちっ！裏に乗っ取られてねえか！」

そう言うとデンガツシャー・ガンモードを渚に向ける。

「っ！」

それに気付いた渚は避けようとするが激情態との戦いで傷が痛み動けなかった。

「終わりだ」

ネガ電王NFは引き金を引く。

渚は覚悟をしたのか目を瞑った。

だがいつまでも経っても自分に銃弾が来なかった。

疑問に思った渚は恐る恐る目を開けた。

するとそこには渚を守る為ネガ電王NFの攻撃を受けたN彩夏が居た。

「なっ！？」

N彩夏はその場に倒れる。

渚は彼女を抱き抱える。

ソウガGFは、

「お前ええ！」

そう言つてネガ電王NFに掴みかかる。

デイセンドも立ち上がり、

「気に入らねえ……！」

そう言つてダークライダー達をデイセンドライダーで撃つ。

渚は彼女を抱き抱え、

「おい！しっかりしろ！」「こ、これを………」

N彩夏は最後の力を振り絞り絞り茶色い巾着からある物を取り出す。

それはディープライエローと黒で彩られたタッチパネル式ツール・ケ
ータッチ。

N彩夏はケータッチを渚に渡す。

渚がそれを受け取つたのを確認したN彩夏は、

「これで、私の役目は終わった………」

「馬鹿野郎何言つてんだ！まだあるだろ！」

「え………？」

「生きるんだよ！こんなところで死んでどうすんだ！」

N彩夏は渚の言葉に涙を流しながら、

「お願い……………、この世界を……………」

「この世界は俺が救う！だから死ぬな！死ぬな！！」

だが渚の言葉は伝わることは無く、N彩夏はゆっくりと目を閉じた。渚は黙って彼女を抱き抱え彩夏の下へ歩み寄る。

そしてN彩夏を丁寧に寝かせると一言こう言った。

「彼女を頼む」

「うん」

N彩夏を彩夏に託し、渚はゆっくり歩き出す。

するとネガ電王NFが、

「この世界で生きる、渚！お前の旅は終わったんだ。この世界でなら何でも好きな物を与えよう！あらゆる快楽を！幸福を！」

その言葉を聞いた渚は、

「ふつ、幸福？笑わせるぜ。幸せってのは誰かに与えられるもんじやない、自分で掴むもんだ！そして本当の幸せってのはその幸せを探して生きていく事こそが本当の幸せなんだ！そしてその幸せを探す旅を邪魔する権利は誰にも無い！」

渚の言葉を聞いたネガ電王NFはこう聞いた。

「貴様……………何者だ？」

そう聞かれた渚は変身準備を完了させこう言う。

「通りすがりの……………いや、やはり俺は……………輝く光の戦士だ！変身！」

《カメンライド…デイライド!》

「ちっ!やれ!」

ネガ電王NFがそう言うとなナザアギトとリュウガと歌舞鬼はデイライドの方へ行く。

そしてソウガGFとデイセンドにはレイドラグーンが襲いかかる。デイライドは三人のダークライダーに攻撃を仕掛けるが、三対一ということもあって簡単に吹っ飛ばされてしまう。

「うわあああ!」

デイライドは立ち上がり立ち向かおうとした瞬間、突然ライドブッカーから九枚のカードが飛び出して来た。

「なんだ?」

そのカードとはクウガからキバのFKRカードが変化して出来た新たな九人の仮面ライダーの紋章が描かれたカードだった。

そしてそのカード達は一つに重なり新たなカードを作り出す。

そのカードは新たな九人の仮面ライダーの紋章とデイライドの紋章を描かれたカード・コンプリートカードへと変化した。

「これは……………」

それを手に取ったデイライドは咄嗟にN彩夏から譲り受けたケータツチを取り出しコンプリートカードを装填する。

そしてケータツチに浮かび上がった新たな九人の仮面ライダーの紋章をタッチしていく。

《ソウガ!アクト!セイリユウ!イプシロン!フォルス!コウキ!

ドラゴ！ネオデンオウ！ブレイズ！》

そして最後に自身の紋章をタッチする。

《ファイナルカメンライド…デイルライド！》

するとデイルライドの頭部にデイルライドのFKRカードが装着され、体色がデイルパイエローから銀に変わり、デイメンションヴィジョンが青からデイルパイエローに変わり、シグナルポインターが薄ピンクから青に変わり、胸から肩にかけて新たなる九人の仮面ライダーのカードが装着されたヒストリーオーナメントが形成され、仕上げにバックルを右腰に装着し、バックル部分にケータッチを装着する。

これこそが、デイルライドの真の姿・仮面ライダーデイルライド・コンプリートフォーム！

それを物陰から見ていた鳴滝は、

「輝ける光の王……いや、究極の破壊者！」

そう呟いた。

デイルライドCFはライドブッカー・ソードモードで三人のダークライダーを圧倒的な強さで追い詰める。

そしてライドブッカーをリュウガに突き刺しケータッチの紋章をタッチする。

《アクト！カメンライド…ダークネス！》

するとヒストリーオーナメントのカードが全てアクト・ダークネス

フォームのカードに変わり、デイルイドCFの隣にダークネスカ
バーを持ったアクト・ダークネスフォームが召喚される。
デイルイドCFはリュウガからライドブッカーを抜きカードを一枚
装填する。

アクトDFの動きはデイルイドCFとシンクロしている。

《ファイナルアタックライド…ア・ア・ア・アクト!》

アナザーアギトは『アサルトキック』を放つ。

デイルイドCFとアクトDFはそれに対抗し『ダークネスクラッ
シュ』を放つ。

「はあああ!」

「はあああ!」

『ダークネスクラッシュ』を受けたアナザーアギトは爆発する。

そしてアクトDFは役目を果たし消滅する。

すると今度はリュウガが必殺技を放とうとする。

《ファイナルベント!》

デイルイドCFはライドブッカーを地面に突き刺しケータッチの紋
章をタッチする。

《セイリユウ!カメンライド…サバイブ!》

ヒストリーオーナメントのカードが全て聖龍サバイブに変わり、デ
イルイドCFの隣に聖龍サバイブが召喚される。

そしてライドブッカーを抜きカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…セ・セ・セ・セイリュウ!》

リュウガは『ドラゴンライダーキック』を放つ。

「だああああ!」

デイルイドCFと聖龍サバイブは『シャイニングセイバー』を放ちドラグブロッカーもろともリュウガを撃破する。

「はあああ!」

「ぐああああ!」

役目を果たした聖龍サバイブは消滅する。

ソウガGFはアビシオンフォームにフォームチェンジしてレイドラグーンに『アビシオンキック』を放つ。

「はあああ!」

デイセンドもカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド》

そしてレイドラグーンに狙いを定め一気に引き金を引く。

「はあ!」

《デイ・デイ・デイ・デイセンド!》

デイセンドは『ディメンションバレット』でレイドラグーンを撃破

する。

歌舞鬼は音撃棒と音撃鼓を構え必殺技の体制に入る。デイルイドC Fはケータツチの紋章をタツチする。

《コウキ！カメンライド…アームド！》

ヒストリーオーナメントのカードが全て装甲光鬼に変わり、デイルイドCFの隣に装甲光鬼が召喚される。そしてカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…コ・コ・コ・コウキ！》

歌舞鬼は音撃打を放つ。

「はあああ！」

デイルイドCFと装甲光鬼は飛び上がり、『閃光脚』を放つ。

「はあああ！」「」

二人の必殺技は歌舞鬼の必殺技を打ち破り、そのまま歌舞鬼を撃破した。

「ぐああああ！」

ネガタロスは仲間が全員撃破されると、逃げる様に去っていった。

渚達は簡単にだがN彩夏の墓を作った。

彩夏は涙を流し、ユウセイは悔しげに唇を噛み締め、渚は彼女に託されたケータツチを握りしめていた。

「……………安らかに眠ってくれ」

渚は一言そう言つとユウセイと彩夏と共に写真館へと帰っていった。

岬写真館。

信次郎は渚に、

「あれ？今日は写真撮らなかつたんだ」

「コーヒーを出しながらそう言った。

渚はコーヒーを一口飲むと、

「ああ、なんかそれどころじゃなかつたし……………」
「そうか」

信次郎は優しい表情でそう言つと奥へと入っていった。

「さて、次の世界に行くか」

渚がそう言つとユウセイは、

「え？どういふことだ？」

彩夏もハテナマークを浮かべていた。

「世界は無限に広がっているってことさ」

渚がそう言うと新たな背景ロールが現れる。

そこには四枚の手配書、一枚はデイセンドのマーク、もう一枚はデイセンドのマークに似た青い紋章、あとの二枚はAが描かれており、一枚は赤、もう一枚は緑で描かれていた。それを見た渚は静かにこう呟いた。

「……………海東」

第21話 輝ける光の王Ⅱ究極の破壊者（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……………。

第22話 デイセンドの世界：青き怪盗

全てを破壊し、全てを繋げ！

仮面ライダーディライド・コンプリートフォーム

ディライドがケータッチを使用することで変身する最強形態。

体色は銀、デイメンションヴィジョンはディープライエロー、シグナルポインターは青になっている。

頭部にディライドのFKRカードが装着されており、胸から肩にかけて新たなる九人の仮面ライダーのカードが装着されたヒストリーオーナメントが形成されている。

戦闘力は通常形態は勿論、激情態をも上回る。

さらにケータッチを操作することで各ライダーの最強形態を召喚し、共に必殺技を放つことができる。

さらに通常形態では使っただけで重傷を負うファイナルライドも重傷を負うことなく使用できる。

必殺技は各ライダーの最強形態の技と『ディライドウルティメイト』。

第22話 テイセンドの世界・青き怪盗（前書き）

今回は少し短めです。

第22話 ティセンドの世界・青き怪盗

これまでの仮面ライダーデイライドは……………。

詳しくは第1〜21話をお読み下さい。

ネガの世界を去った渚達は次なる世界に来ていた。

「ここは何の世界だ？」

写真館を出て一番に言葉を発したのはユウセイだった。
ユウセイと彩夏は周りを見渡すが、外はとてものどかだったが不思議なことに誰も居なかった。

「誰も居ない……………まさかまたネガの世界？」

彩夏が不安そうにそう言うとさっきまで黙っていた渚が口を開いた。

「呟、安心しろ。ここはネガの世界なんかじゃない」「え？」

そう言うと渚は一枚の看板を指差す。

それには全国指名手配犯とされた『海東達也』の手配書だった。

もう一人の世界の破壊者・ディライド。
幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第22話 デイセンドの世界：青き怪盗

「達也さんが指名手配!？」

彩夏は手配書を見て驚きを隠せなかった。
だが渚はいたって冷静に、

「驚くことか？ いつつも泥棒ばつかしてるから当然だろ？」
「ええ〜……」

渚の言葉に彩夏は呆れた様な驚いた様な声を上げた。するとユウセイが何かを見付け、

「見る！ 達也だけじゃないぞ！」

手配書は他にも『禍木慎』、『三輪春香』、さらに『海東大樹』と書かれたものがあった。

「この世界荒れてんな」

渚は一言そう呟くと歩き始めた。

ユウセイと彩夏も渚に続いた。

歩き始めて一時間経つが、渚達はまだ誰にも会ってなかった。不審に思った渚達は立ち止まり周りを見渡す。

「なんか変だな……………」

「人が居る気配はするのに……………」

「うん……………」

そう言っていると突然、

「おい人間共！」

「あ？」

渚達は声のする方に振り向く。

そこにはゴキブリを模した真っ黒な怪人・ローチが居た。

「ゴ、ゴキブリ!?!」

彩夏は驚き渚の後ろに隠れる。

渚はそんな彩夏を若干めんどくさがりながら、

「怪人さんが何の用だ?」「貴様等こんな所で何をしている!」

ローチの問いに答えたのはユウセイだった。

「何って…………、まあ強いて言えば散歩かな?」

「15（ファイフティーン）様の許可を得ていない人間は外出禁止な

の知らないのか!？」

それを聞いた渚は、

「成程な、そういうことか。てか15って誰だ？」

渚がそう聞くがローチは、

「貴様等には関係無い!掟を破った人間は処刑する！」

そう言ってローチは渚達に襲いかかろうとした。
すると、

「待てえ！」

突然響く男の声。

ローチが振り向くと二人の男女が走って来た。

「なんだ?あいつら」

二人の男女はローチに飛び掛かり渚達から引き離れた。

「おのれ、仮面ライダー！」

「仮面ライダー？」

二人の男女は緑のバックルと赤のバックルを取り出す。
そしてカードを装填し腰に装着する。

「「変身!!!」」

《《オーブンアップ!!》》

男は緑を基調色にし、Aを模した仮面ライダー・ランスに変身する。女は赤を基調色にし、Aを模した仮面ライダー・ラルクに変身する。

「行くぜえ！」

ランスはそう言うと槍型の武器・ランスラウザーを装備しローチを切り裂く。

ラルクはボウガン型の武器・ラルクラウザーで遠距離から攻撃し、ランスを援護する。

ある程度ダメージを与えるとランスカードを一枚取り出しランスラウザーにスラッシュする。

《マイティ！》

緑色のオーラを纏ったランスラウザーでローチを切り裂いた。

「オラアア！」

「ぐああああ！」

ローチを倒し一息吐いていたランスとラルクに再びローチが襲いかかる。

しかも今度は三体だ。

それを見た彩夏は、

「渚君！」

「はいはい」

彩夏は渚に二人を助けるよう促す。

言われた渚はめんどくさがりながらもすっかり変身準備を完了させる。

「変身」

《カメンライド…ディライド!》

渚はディライドに変身すると、ライドブッカー・ソードモードを構えローチに向かって走り出す。

「あらよっ!」

「なんだ!？」

「あれは……」

ディライドの突然の登場に戸惑うランスと何かを感じたラルク。

ディライドはライドブッカー・ソードモードでローチ三体を圧倒すると、カードを一枚装填する。

《アタックライド…スラッシュ!》

「これで終わりだ!」

ディライドは『ディライドスラッシュ』でローチ三体をあつという間に撃破した。

「ま、こんなもんか」

ディライドはそう言うつと変身を解除する。

同時にランスとラルクも変身を解除する。

ランスに変身していた男とラルクに変身していた女は渚に近付き、

「なあ、お前何者だ?」

「まさか、ディケイド?」

そう聞かれた渚は、

「デイケイド？ああ、士の事か。まあ似たようなもんかな」

答えるのが面倒なのか、適当に返答する渚。

今度は渚が二人に聞いた。

「とりあえず、この世界の事について教えてくれないか？」

何処かの草原、一人の青年が歩いていた。

「遂に帰って来たか、俺の世界に」

青年『海東達也』はそう呟く。

すると一枚の看板を見付ける。

「ああ、あ、俺も指名手配かよ。ま、じゃあねえか」

自分の手配書を見てめんどくさそうに言う達也。

すると後ろから、

「見付けたぞ！海東達也！」

数体のローチが現れる。

達也はディセンドライバーをローチ達に向け、

「わりいけど、お前等雑魚に用はねえんだ」

そう言つてローチ達にディセンドライダーを放つ。

渚達はランスとラルクに変身していた男女にこの世界の事について聞くことにした。

因みにランスに変身していた男は『禍木慎』、ラルクに変身していた女は『三輪春香』という名前らしい。慎はこの世界の事について話し始めた。

「この世界はかつて14（フォーティーン）って奴に支配されていた。だが俺達はディケイドと協力して14を倒す事に成功したんだ。だが真の黒幕は俺達のかつての仲間、『海東純一』だったんだ。純一は自分が第二のフォーティーンになるって言い出しやがった。そしてそのまま純一は姿を消し、短い間だがこの世界に平和が訪れた。でもその平和は直ぐに崩れ去った」

今度は春香が話し始めた。

「純一が再び現れたの。でもそいつは純一の体を奪った15だったの。私達と純一の弟・海東達也と一緒に15を倒そうとした。でも達也には力が無かった。実力はあつたけどライダーとしての力は無かった。そこで達也は自分の兄・海東大樹に頼んで世界を渡り力を求めて旅立った。それっきり達也とは連絡がつかないの」

それを聞いた渚は、

「海東ならこの世界に居るぜ？」

「え？」

春香は渚の言葉に目を丸くした。
すると慎が、

「なんでわかるんだ？」

この質問に答えたのはユウセイだった。

「達也は俺達の行く所に必ず居るんです。だから俺達がここに居る
つてことは達也も居るってことなんです」

ユウセイがそう言つと、

「その通り」

「達也！」

達也が現れた。

「待たしたな」

達也はそう言いながらディセンドライバーをくるくる回す。
それを見た慎は、

「準備完了つてか？」

「ああ、そついつこつた」

そして春香が、

「これで役者は揃つたわね」

そう言つた瞬間大量のローチが現れる。

「威勢が良いなあ、ゴキブリ共」

渚はそう言うとユウセイに、

「ユウセイ、岬を写真館に連れて帰れ」

「わかった！直ぐに合流する！行こう、彩夏ちゃん」「うん！渚君、みんな気を付けてね！」

そう言うとユウセイは彩夏を連れてその場から離れた。

「さて、害虫駆除と行きますか」

渚がそう言うと四人は変身準備を完了させる。

《カメンライド》

「っっっ変身！！！！」「っっ」

《カメンライド…！デイライド！》

《デイセンド！》

《《オープンアップ！！》》

四人は仮面ライダーに変身するとそれぞれの武器を構えローチ達に攻撃する。

デイライドはライドブッカー・ソードモードでローチ達を切り裂く。デイセンドは持ち前の俊敏さとデイセンドライバーによる銃撃でローチ達を撃破していく。

だがローチ達の数が多くめんどくさくなったデイセンドは、

「数だけは立派だな。だったら援軍だ」

デイセンドはそう言うのとカードを一枚装填する。

《カメンライド…ライオトルーパーズ!》

「行け、兵隊共!」

召喚されたライオトルーパー達は一瞬の内にローチ達を撃破した。それを確認したデイセンドはランスとラルクの下へ向かった。ランスとラルクは自身のラウザーでローチ達を次々と倒していく。

その頃ユウセイと彩夏は写真館を目指していた。するとユウセイと彩夏の前に一人の青年が現れる。

「あんたは?」

ユウセイがそう聞くと青年は黙ってランスとラルクのバックルと同じ形のバックルを取り出す。

「それは!」

青年はバックルにカードを一枚装填して腰に装着する。

「変身」

《オーブンアップ!》

青年は金を基調色にしたAを模した仮面ライダー・グレイブに変身した。

「グレイブ!?!」

グレイブはユウセイと彩夏に襲いかかる。

ユウセイは彩夏を庇いながらグレイブの攻撃を避ける。
そしてあることを思い出す。

「まさか、海東純一！？ということは、お前が純一さんの体を奪った15かつ！純一さんの体を返せ！」

ユウセイはそう言つと変身準備を完了させる。

「変身！」

ユウセイはソウガ・アビシオンフォームに変身すると、

「彩夏ちゃん、隠れてて！」

「わかった！」

ソウガAFは彩夏を避難させると、グレイブに戦いを挑んだ。

ある程度ローチを倒したデイライド。

するとデイライドの目の前にローチのボスと思われる甲虫を模した怪人が現れた。

「親玉の登場か？」

デイライドは呑気にそう言いながらケータッチを取り出し、コンプレイトカードを装填し紋章をタッチしていく。

《ソウガ！アクト！セイリユウ！イプシロン！フォルス！コウキ！
ドラゴ！ネオデンオウ！ブレイズ！…ファイナルカメンライド…デ
イライド！》

デイライドはコンプリートフォームに変身するとライドブツカーで
ローチ達を切り裂き、ある程度倒すとケータッチを操作する。

《ネオデンオウ！カメンライド…エンシエント！》

ヒストリーオーナメントのカードが全てネオ電王・エンシエントフ
ォームに変わり、デイライドCFの隣にネオ電王EFが召喚される。
デイライドCFはカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ネ・ネ・ネ・ネオデンオウ！》

デイライドCFとネオ電王EFはライドブツカーとエンシエントソ
ードを構成『エンシエントブレイカー』を発動する。

「はあああ！！」

デイライドCFとネオ電王EFの攻撃でローチ達は全滅した。

役目を終えたネオ電王EFは消滅し、ヒストリーオーナメントも通
常のものに戻る。

ランスとラルクはローチ達を圧倒していくが、敵が一向に減らず段
々追い詰められていく。

するとディセンドが現れ、ランスとラルクに加勢する。

「達也！」

「大丈夫かあ！？」

「助かる！」

三人のライダーは一気にローチの数を減らしていく。するとどこから衝撃波飛んできてデイセンド達を襲う。

「くっ！誰だ！」

デイセンドがそう言うと、現れたのは、

「俺だ、ライダー共」

「グレイブ！？ってことは……………」

「純……………いや、15！」

デイセンド達の目の前に現れたのはグレイブだった。グレイブは見せ付けるかのように何かを出した。

「なっ！ユウセイ！」

グレイブが出したのは傷だらけのユウセイだった。

それに怒りを覚えた三人のライダーはグレイブに向かって走り出した。

「てめえ！」

ローチ達を撃破したディライドCFは変身を解き、

「あつちはもう終わったのか？」

そう言って歩き出した瞬間、足下に銃弾が飛んできた。渚は慌てることなくゆっくり振り向く。

「やあ、君が近藤渚、仮面ライダーディライドかい？」

そう言ったのは渚と同じ年か少し上位の青年だった。青年は青いディSENDライバーをくるくる回しながら笑顔で、

「君の実力、試させてもらおうよ？」

そう言われた渚は青年を見て静かにこう呟いた。

「海東……………大樹」

第22話 デイセンドの世界・青き怪盗（後書き）

次回、仮面ライダーデイライド……………。

第23話 兄弟の絆、大切な宝

全てを破壊し、全てを繋げ！

第23話 兄弟の絆、大切な宝（前書き）

今回は大樹の他にもう一人、特別ゲストが登場します！

第23話 兄弟の絆、大切な宝

これまでの仮面ライダーディライドは……………。

詳しくは第22話をお読み下さい。

渚の前に現れた青年『海東大樹』。

大樹は笑顔を崩さず、じつと渚の方を見ていた。

「実力を試す？」

「ああそうさ。君の力、見せてもらおうよ」

大樹はそう言うとカードをディエンドライダーに装填する。

《カメンライド》

ディエンドライダーを天に向け、引き金を引いた。

「変身！」

《ディエンド！》

大樹は仮面ライダーディエンドに変身した。
それを見た渚は、

「なんだか知らねえが、面白い！」

そう言うと変身準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド…デイライド！》

渚はデイライドに変身すると、ライドブッカー・ソードモードを構える。

暫くの沈黙の後、二人のライダーは一斉に走り出した。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。

幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第23話 兄弟の絆、大切な宝

デイSEND達はグレイブに圧倒されていた。

15が体に乗っ取っているからなのか、異常なまでの戦闘力を発揮していた。

恐らくユウセイもこれに破れたのだろう。

グレイブは武器を使わずに三人のライダーを軽々と相手していた。

「こいつ、強い！」

「15の影響なの!？」

「この俺がこんな苦戦するとはな……………」

グレイブはグレイブラウザーを装備し、さらに攻撃する。

ディライドとディエンドは互角の戦いをしていた。

「へえ、中々やるね！」

「あんたもな！」

ディエンドはディライドの攻撃を避けると、ジャンプしディライドを飛び越える。

「ならこいつはどうかな？」

ディエンドはそう言うとカードを装填する。

《カメンライド…ガオウ!》

「いつてらっしやい」

ディエンドは仮面ライダー牙王を召喚する。

牙王はガオウガッツシャーをソードモードに組み立て、ディライドに攻撃する。

「くっ!そっいやぁディエンドもライダー召喚出来るんだっけ……………」

「…!」

デイルイドは牙王の攻撃を避けると牙王と距離を取る。

「これ使うか」

そう言うのとカードを装填する。

《ファイナルカメンフォームライド…デ・デ・デ・デンオウ!》

デイルイドはデイルイド・電王・超クライマックスフォームにファイナルカメンフォームライドする。
それを見たディエンドは、

「へえ、超電王にもなれるんだ」

呑気にそう言っていた。

D電王SCFは圧倒的な強さで牙王を攻撃する。

「さて、そろそろ決めるか」

D電王SCFは牙王を蹴り飛ばしカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…デ・デ・デ・デンオウ!》

「はあ!」

D電王SCFは飛び上がり、巨大な翼を展開し一気に右足を突きだし『超ボイスタースキック』を放つ。

「はああああ!」

牙王はガオウガッシャーで防ごうとするが、そんなものは意味が無

く、D電王SCFの右足は牙王に直撃した。

「ぐああああ！」

『超ボイスターズキック』を受けた牙王は消滅した。だがディエンドは動じることなく、ディエンドライバーを回しながらこう言った。

「やるね、渚。君に折り入って頼みがある」

「頼み？」

電王SCFからディライドはディエンドの言葉に首を傾げる。

「ああ、君の力を貸してほしいんだ。大切なお宝を取り戻す為にね」

「大切なお宝？」

ディライドがそう言った瞬間、

「」「うわあああ！！！！」「」

先程までグレイブと戦っていたディセンドとランスとラルクが飛ばされて来た。

「海東！？」

「あの野郎！」

するとグレイブが現れ、

「ここまでだ、仮面ライダー。貴様等はここで死ぬ」

グレイブはそう言いながらグレイブラウザーを構えながらディセン

ドに歩み寄る。

「くそが！兄貴を助けるまでは死ねねえ！」

デイセンドはそう言いながらデイセンドライバーを構える。

グレイブは武器を下ろし、不気味に笑い始めた。

「くつくつくつく……！兄貴？ああ、この体の事か……。この姿を見てはまだ、兄と呼べるのかっ！」

グレイブはそう言うと禍々しいオーラを放ちながらその姿を変える。禍々しいオーラが晴れるとそこに居たのはグレイブではなく、真っ黒なカミキリ虫を模した姿に黄色の鎧を身に纏い黒と黄色の双振りの剣を持った怪人だった。その姿を見たデイライドは、

「ジョーカー？」

だがその怪人はデイライドの言葉を直ぐ様否定する。

「違う！我が名はジョーカーを越える最強生命体・15（フィフティーン）ジョーカー！」

「結局ジョーカーじゃねえか」

デイライドがそう言った瞬間、15ジョーカーは二本の剣を交差させ、エネルギー溜め剣を振り下ろし強力なエネルギー波を放った。

「くらええええ！」

「ヤバイ！」

デイライド達は攻撃を避けようとするが間に合わず、攻撃を受けて

しまつ。

「「「「うわああああ……!……!……!」」」」

五人のライダーは15ジョーカーの攻撃で変身が解けてしまつ。

「ちっ!反則だろ、あれ……」

渚はなんとか立ち上がろうとするが、ダメージが大きく立ち上がるのが困難だった。
すると、

「渚君!」

彩夏が駆け寄る。

「岬!?!」

「大丈夫!?!」

彩夏は渚を立たせると、次にユウセイを抱え渚に駆け寄る。

「渚君、ユウセイが!」

「やべえな」

すると大樹が、

「ここは一旦退こう」

「だな」

大樹と達也はそう言うそれぞれのドライバーで地面を撃ち、煙り

をたてその隙に憤と春香と共に退散した。

「呷、俺達も退くぞ」

「うん」

渚は彩夏からユウセイを受け取り逃げようとした瞬間、

「ただで逃がすと思うな！」

15ジョーカーは一気に彩夏に詰め寄り腹に一発パンチを入れ気絶させ彩夏を抱えると、渚を蹴り飛ばし、

「この女を返してほしくばライダー共を集め我の下へ来い！」

15ジョーカーはそう言うと言姿を消した。

「なっ！待てっ！」

だが15ジョーカーは既に消えていた。

呷写真館

ユウセイの手当を終えた渚は信次郎に彩夏が拐われた事を伝えた。

「そんな！彩夏が拐われた！？」

うるたえる信次郎に渚は冷静に、

「大丈夫だ、俺が必ず助ける」

「わかった、頼むよ！渚君！」

その頃彩夏は縄で縛られ身動きが取れなかった。

「安心しろ、必ずやライダー共が助けに来てくれるさ」

純一は嘲笑う様に言った。それを彩夏は怒りの籠った眼差しで睨み付けていた。

「ちっ、俺も指名手配かよ」

渚は達也・大樹・慎・春香の手配書に自分も加えられていたことに不快感を覚えていた。

「それに、なんで海東なんかと写らなきゃなんねえんだ」

渚がそう言つと、

「それはこっちの台詞だ」

達也が現れる。

すると渚は突然全く関係のない話を始めた。

「巧の世界で会った時から俺はお前を単なるこそ泥かと思ってたが、実際は違つんだな」

「は？」

疑問に思う達也を無視して渚は続ける。

「お前は自信が無かったんだ。海東大樹からライダーの力を与えられたが、海東純一を救う自信が無かった。だから宝を集め、敵と戦うことで自分に自信をつけていた、違うか？」

渚がそう言つと、達也は手配書の張り付けてある看板を蹴り飛ばし、

「わかつた様な口聞くんじゃねえよ！」

「わかつちまつたもんはしょうがねえだろ」

怒りを露にする達也に対し渚は冷静に返す。

「なあ海東、この際だ、手を組まないか？」

「ああ？」

渚のいきなりの要求に達也は困惑する。

「俺は岬を助けない、お前は海東純一を助けない。目的は違つが標的は一緒なんだ。どうだ？悪い話じゃねえだろ？」

「断る」

達也の返答に渚はやっぱりという表情をする。

だが渚は、

「お前一人で何が出来るんだ？あいつの強さを見ただろ、一人じゃ到底敵わない」

「黙れ、俺一人で充分だ」「一人で充分？バカかお前は。人なんて一人じゃなんもできない。仲間が居るから、強くなれ、なんでも出来るんだ」

すると達也の背後から、

「その通りさ、達也。それに仲間より素晴らしいお宝は、どの世界にも存在しないのさ」

「兄貴……」

大樹は達也にそう言う。

さらに渚の背後から慎と春香が現れ、

「俺達全員でやるっぜ、達也」

「仲間は多い方が良いでしょう？」

そう言われるも達也は未だに否定する。

「うるせえなあ！」

そう言って渚を殴ろうとするが渚は簡単に受け止め無理矢理握手をしてこう言った。

「達也、何故俺がここまでお前との共闘を望むか教えてやるうか？理由は一つ、達也、お前を信じているからだ。それ以外に何かいるか？」

純一は暇そうにしていると、あるものを発見した。

「来たか」

それは達也を中心にゆっくりと堂々と歩いてくる仮面ライダー達だ

そう言つてデイセンドとデイエンドの周りに居るローチ達を切り裂き通り道を切り開く。

「すまない!」

「頼む!」

デイセンドとデイエンドはそう言つと15ジョーカーに向かって走り出す。

ドライバーを構え15ジョーカーに放つが簡単に避けられ、逆に攻撃を受けてしまう。

「下らん!」

「なに!ぐあああ!」

「うわあああ!」

15ジョーカーはデイセンドとデイエンドが怯んだ隙に一気に斬り込む。

その状況を見兼ねたランスとラルクは、

「渚!達也と大樹の所に行つてくれ!」

「ローチは私達に任せて!」

ランスとラルクはそう言つとデイライドがデイセンドとデイエンドにしたように、デイライドの周りに居るローチ達を攻撃し道を切り開く。

「頼むぞ!」

デイライドはそう言つと、一気に15ジョーカーの下へジャンプし上からライドブッカー・ソードモードで15ジョーカーを切り裂く。

「はああ！」

「ぐはああ！」

デイルイドはデイセンドとデイエンドに駆け寄り、

「しっかりしろ！」

「わぁーってるよ！」

「すまない」

三人は並び立ち15ジョーカーに反撃しようとしたその時、15ジョーカーはまたも禍々しいオーラを放つ。

だが今度は姿を変えるだけでなく巨大化までしていた。

そしてオーラが晴れると15ジョーカーは黒い14（フォーティーン）に黄色い鎧を身に纏った究極邪神・デモンズ15へと変貌する。

「これが本当の姿……」

「面倒だな」

「全くだ」

「あんなのアリかよ！」

「14に似ている!?!」

デイルイド達がそれぞれ感想を述べると、デモンズ15はデイルイド・デイセンド・デイエンドに襲いかかる。

「まずい！」

デイルイド達は走り出し攻撃を避けようとするが、避けきれず攻撃を受けてしまう。

「「「うわあああ！！！」「」」

デモンズ15はデイライド達に、

「人間など所詮死ぬ運命にある。だから足掻いても無駄だ。ならば
我の手の内で生きれば良いのだ！」

デモンズ15がそう言うと、

「確かに、人は必ず死ぬ」

デイエンドはそう言いながら立ち上がる。

「だからって何でてめえの手の内で生きなきゃなんねえんだよ」

デイセンドもそう言いながら立ち上がる。

そしてデイライドが、

「その通りだ！人は確かにいつか死ぬ、だが人は死ぬってわかって
るからこそ必死に足掻き、生きる。そして自分の生きた証を残そう
とする。最早それは人の使命みたいなもんだ。生きてる限り、人は
足掻き続けるんだ。そしてそれを邪魔する権利はお前に無い！」

デイライドがそう言うとデモンズ15は、

「貴様、何者だ？」

デイライドは仮面の中でにやりと笑いながら、

「輝く光の戦士だ、頭に叩き込んでけ！」

デイルイドはケータッチを取り出しコンプリートカードを装填し操作する。

《ソウガ！アクト！セイリユウ！イプシロン！フォルス！コウキ！ドラゴ！ネオデンオウ！ブレイズ！ファイナルカメンライド…デイルイド！》

デイルイドはコンプリートフォームに強化変身する。それを見たデイエンドは、

「なら僕も行こうかな」

デイエンドはそう言うとケータッチを取り出しコンプリートカードを装填し操作する。

《ジーフォー！リユウガ！オーガ！グレイブ！カブキ！コーカサス！アーク！スカル！ファイナルカメンライド…デイエンド！》

デイエンドもコンプリートフォームに強化変身する。デモンズ15は手に持った剣でデイルイドCF達を攻撃するがデイルイドCF達は簡単に避け、

「渚、僕があいつの鎧を破壊する。トドメは任した」「わかった」

デイエンドCFはそう言うとカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ディ・ディ・ディ・ディエンド！》

デイエンドCFは無数のレーザーを放つ『デイエンドインパルス』

を放つ。

「はあ！」

「ぐあああー！」

『ディエンドインパルス』を受けてデモンズ15の鎧は破壊されてしまう。

「我の鎧が！」

「一気に決める！」

ディライドCFはそう言うとケータッチを操作する。

《フォルス！カメンライド…キング！》

ディライドCFはフォルス・キングフォームを召喚するとカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…フォ・フォ・フォ・フォルス！》

ディライドCFとフォルスKFはライドブッカー・ソードモードとキングラウザーを構え一気にジャンプし巨大なカードを潜り抜け敵を切り裂く『ロイヤルストレートフラッシュ』を発動する。

「はああああー！」

「ぐあああー！」

ディライドCFとフォルスKFは着地すると、フォルスKFは役目を終え消滅する。

ディセンド達はディライドCFに駆け寄り、

「やったのか!?!」

ランスはそう言うが、

「いや、まだまだ……」

デイエンドCFがそう言った瞬間何か黒いオーラが集まり15ジョーカーは復活を果たす。

「しぶとい奴だ……」

デイライドCFはめんどくさそうに呟く。

「この野郎!」

デイセンドはデイセンドライバーを放つが防御され、15ジョーカーは剣から衝撃波を放ちデイセンドに攻撃する。

「うわああ!」

「先ずは貴様からだ、デイセンド!」

15ジョーカーは今度は二本の剣から衝撃波を放つ。

デイセンドは思わず目を逸らす、デイエンドCFがデイセンドの前に立ち攻撃を受ける。

「ぐあああ!」

「兄貴!」

デイエンドCFは強化変身が解け通常形態に戻ってしまう。

さらに15ジョーカーは一気にディセンドとディエンドに詰め寄り、トドメを刺そうと剣を振り上げディエンドを切り裂こうと剣を振り下ろした。

「うわっ！」

「「「大樹！……」」」

だがディエンドの数センチ手前で剣は止まっていた。ディエンドが戸惑っていると15ジョーカーは苦しみだす。

「なっ！貴様！」

「まさか………！」

15ジョーカーはある人物の声でこう言った。

「慎……春……香……達……也……大……樹………！」

「「純ー！……」」

「兄貴！」

「兄さん！」

そう海東純一だ。

純一は自らの精神力で一時的に15の心を抑えていた。

「俺を……倒……すん……だ！」

「……え？」

突然の言葉に戸惑うディセンド達。

すると、そろそろ限界なのか、純一は苦しみだし、

「は……早く……！」

「黙れええ!」

15ジョーカーは漸く主導権を取り返し、ディエンドにトドメを刺そうとする。

だがその瞬間ディライドCFが15ジョーカーを押さえつけ、

「おい!どうすんだ!海東純一を倒すのか!倒さないのか!このまま純一のくれたチャンスを無駄にすんのか?!このまま純一を苦しめるのか!?!」

ディライドCFがそう言うとランスとラルクが、

「純一……純一いい!」

「渚退いて!」

二人はそれぞれのラウザーを構え走り出す。ディライドCFは15ジョーカーから離れ、それと同時にランスとラルクの必殺技が15ジョーカーに決まる。

「はああああ!」

「ぐうう!」

さらにディセンドもカードを装填しディセンドライバーを構える。

《ファイナルアタックライド》

そして一気に引き金を引く。

「はあっ!」

《ディ・ディ・ディ・ディセンド!》

次にデイセンドの『ダイヤモンドバレット』が15ジョーカーに直撃する。

「ぐあああー！」

デイエンドはデイライドCFに駆け寄り、

「渚、これを」

そう言つて、自身のカメンライドカードを渡す。

デイライドCFはそれを受け取ると迷わず装填する。

《ファイナルアタックライド…！デイ・デイ・デイ・デイ・デイエンド！》

ヒストリーオーナメントのカードが全てデイエンドのカードに変わると、デイライドCFとデイエンドはライドブッカー・ガンモードとデイエンドライバーを構える。
そして、

「大樹、これが俺とお前の力だ！」

デイライドCFがそう言つと二人は一気に引き金を引き『ダイヤモンドシヨンシユート』を放つ。

「はああー！！」

「ぐああああー！！」

『ダイヤモンドシヨンシユート』を受けた15ジョーカーは、純一の声に変わり、

「ありがとう……慎、春香、達也……大樹」

そう言うと静かに消滅した……。

変身を解いた五人のライダー。

「渚、今回はありがとう」

大樹は渚にお礼を言う。

「良いつてことだ。それより大樹、お前これからどうするんだ？」

そう聞かれた大樹は当たり前な表情で、

「決まってるさ、新しいお宝を探しに行くのさ。だから渚、今度会う時は敵かもね」

大樹は笑顔でそう言うとその場を去った。

渚は次に達也にも同じ質問をする。

「達也、お前の方はこれからどうするんだ？」

そう聞かれた達也は、

「愚問だな。決まってるだろ、新しい宝を探しに行くんだよ。もっとすげえ〜宝をな」

達也はそう言つとその場を去つた。

「兄弟揃つてこそ泥かよ」

渚は笑いながらそう言つと、

「呟、帰るぞ」

「うん！」

そう言つた瞬間渚は次元の壁に包まれてしまった。

「ここは……」

渚が居たのは夜の公園。

すると後ろから、

「久し振りだな、渚」

渚は声の主を見た瞬間目を見開いた。

「……士！？」

仮面ライダーディケイドこと門矢士。

「なんでここに？」

「ちよつと警告にな」

「警告？」

「ああ、次の世界はお前にとつても俺にとつても厄介な世界だ。オマケに更なる脅威がお前を襲つ」

「更なる脅威？」

「ああ。そこでだ、お前はこれから例えどんなことがあっても仲間と戦い続けるか？」

渚がその問いに答えようとすると、士がそれを遮る。

「いや、答えはまだ聞かない。次に俺がお前の前に現れた時に聞かせてくれ。お前の……」

「俺の？」

士は一呼吸おき、

「完全なる答え《PERFECT ANSWER》をな」

その瞬間渚は眩い光に包まれ、元の場所へと戻っていた。

「完全なる答え《PERFECT ANSWER》……」

「渚君？」

彩夏は心配になり渚に声をかける。

「ああ、悪い……」

「どうしたの？」

「なんでもない、帰るぞ。じいさんが待ってる」

岬写真館

渚はコーヒーを飲みながら士の言葉を考えていた。するとユウセイが、

「渚？どうしたんだよ、難しい顔して」

「ああ、なんでもない」

ユウセイは首を傾げるが気を取り直して、

「じゃあ行くこうぜ、次の世界に！」

「ああ！」

「うん！」

ユウセイは背景ロールの鎖を引っ張る。

「なんだあ？」

そこには様々な種類の車や飛行機が置かれてある巨大な格納庫が描かれていた。

第23話 兄弟の絆、大切な宝（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……………。

第24話 6人の冒険者II 轟轟戦隊

全てを破壊し、全てを繋げ！

特報

M・R・D・C・Dシリーズ 仮面ライダーディライド PERFECT ANSWER

多分執筆予定！

P E R F E C T A N S W E R は知っている人は知っています。

第24話 6人の冒険者II 轟轟戦隊(前書き)

今回はトライRさんの『仮面ライダーディライト』とのコラボです！

第24話 6人の冒険者II 轟轟戦隊

これまでの仮面ライダーデイライドは……………。

詳しくは第1〜23話をお読み下さい。

デイエンドの世界を後にした渚達は次なる世界に足を踏み入れている。

「渚、今度は何の世界だ？」

ユウセイは渚にそう問う。だが渚は写真を撮りながら面倒くさそうに、

「さあな、何の世界だろうな」

かなりの棒読みでそう言った。

「すごい棒読みだね……………」

彩夏が呆れていると、

「あ！退け、渚！」

一人の青年が渚にぶつかると、

「いて！てか達也じゃねえか。ん？なんだその箱」

渚は達也が持っている奇妙な箱について聞く。
達也はそれを自慢気に見せながら、

「これはこの世界ではかなり貴重な宝だ」

「そうなのか？只の奇妙な箱だろ？」

渚はそう言われるも今一宝の価値が分からなかった。達也は呆れた表情で、

「ま、お前にはわかんねえだろうな。それに……」

達也は少し間を置き、

「この世界程、お前に似合わない世界は無い。何故ならここは、ライダーの居ない世界だからな」

「ライダーの居ない……世界？」

すると渚達のかなり後ろから、

「見付けた！おい！お前！」

そう言って達也に向かって走ってくる青年は銀色のジャケットの様な服を着て、茶髪に一部だけ白髪が混じった青年だった。
それを見た達也は、

「ちっ、もう来やがったのか。じゃあな、渚」

そう言つて走り去る。
走つてきた茶髪の青年は、

「くそっ！待ちやがれえ！」

そう言つて達也の後を追う。
それを見た渚は、

「騒がしい奴等だ」

そう言つた瞬間渚達の前に二人の男女が現れる。

「あの子どこ行つたのかしら？」

「ったくあの野郎、ちょこまか逃げやがって」

その二人とは、銀髪のショートヘアの女性とウェーブのかかった黒髪を後ろだけ括っており、煙草を加えた男性だった。

渚達がその二人を不思議そうに見ていると、銀髪の女性が渚に気づき、

「ん？結構なイケメンじゃない？」

そう言つて渚に近付き妖艶な雰囲気醸し出し渚に近付くが、

「なんだ？なんかようか？」

普通の男性なら間違いなく一目惚れすること間違いなしの美貌を持つている女性に声をかけられても一切興味を示さない渚。
それを見た煙草を加えた男性は、

「なんだこの野郎、巡ちゃんに近寄られてても無反応かよ、失礼な奴だ」

渚はとにかく面倒くさそうな表情で、

「もう一度聞く、何か用か？」

そう言われた巡と呼ばれた女性は渚の耳元でこう囁いた。

「釣れないわねえ、デイルイド……」

「!?!?」

渚は直ぐ様巡から離れ警戒体制に入る。

「そんなに怖い顔しないでよ。それよりそろそろ行かない？周？」
「だな」

そう言うと巡と周は渚達に背を向けこう言った。

「また会えると良いわね」「輝く光の戦士さんよ」

「待て！お前等何者だ！」

渚は二人を呼び止めるが、二人は無視して走り去ってしまった。

「なんだったんだ？」

「なんだったんだらうね」

ユウセイと彩夏が疑問に思っていると、

「「「「「きゃあああ……!?!?!?!?!」「「「「「」

「なんだ!？」

人々の悲鳴が聞こえ、現場に駆け付けると、怪人が人々を襲っていた。

渚はデイルाइドライバーを取り出し、

「ライダーは居なくても怪人は居るってか」

そう言っつて渚がデイルाइドライバーを装着しようとした瞬間、

「待てえ！」

「ん？」

それぞれ赤、黒、青、黄、桃のジャケットを着た男女5人組が現れた。

その中で黄色のジャケットを着た女の子と桃色のジャケットを着た女性が渚達に、

「ここは危険だよ！」

「早く逃げて下さい！」

そう言われた渚達は、

「なんだ？」

「なんか皆ジャケットお揃いだ」

「なんだろ……」

そうこう言っている内に5人組は勇ましく並び立つ。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。
幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第24話 6人の冒険者Ⅱ 轟轟戦隊

並び立った5人は、

「菜月、準備は良い？」

菜月と呼ばれた黄色のジャケットを着た女の子は、

「大丈夫だよ、さくらさん！」

さくらと呼ばれた桃色のジャケットを着た女性に元気良くそう返す。

「チーフ、早く終わらしましょう」

青いジャケットを着た男性は赤いジャケットを着た男性にそう言う。
すると黒いジャケットを着た男性が、

「こんな奴等直ぐ終わらせてやる」

そしてチーフと呼ばれた赤いジャケットを着た男性が、

「だが油断するな。行くぞ！」

チーフと呼ばれた男性がそう言うと5人は左腕に収納された携帯電話型のツールを取り出しボタンを押し携帯電話を起動させる。

「レディ！」

「『『『『『ボウケンジャー・スタートアップ！！！！』』』』」

5人は携帯電話を腕に滑らせ、取り付けられたタービンを回す。すると5人は忽ち姿を変える。

赤、青、黒、黄色、桃色の車をイメージしたマスクを被った五色の戦士。

「なんだ？あれ……」

渚達が首を傾げていると、赤色の戦士・ボウケンレッドが、

「アタック！」

そう言って指を鳴らすと、5人は怪人に向かって走り出す。

5人は腰に装着された共通武器・サバイバスターをサバイブレードに変型させ怪人達を切り裂いていく。

だがボウケンジャーが幾ら怪人達を倒しても怪人達は減る気配がない。

寧ろ増えていた。

「なんなんだよこいつら！ウジャウジャ出て来やがる！」

黒色の戦士・ボウケンブラックは敵の数にうんざりしていた。その状況を見かねた彩夏は、

「渚君、ユウセイ、助けないと!」

「確かに。行こう、渚!」「仕方ない……」

ヤル気を見せるユウセイに対し面倒くさそうな渚。だがしつかり変身準備を完了させる。

「「変身!」!」

《カメンライド…デイライド!》

渚とユウセイはデイライドとソウガ・アビシオンフォームに変身する。

デイライドはライドブッカー・ソードモードを装備しボウケンレットに加勢する。

「大丈夫か?」

「なんだ?その姿は……」 「話は後だ!」

デイライドはそう言うとライドブッカー・ソードモードで怪人達を切り裂いていく。

ソウガAFは桃色の戦士・ボウケンピンクに加勢する。

「大丈夫ですか!?」

「貴方は!?」

「詳しい話は後です!先ずはこいつ等を倒しましょう!」
「わかりました!」

以外にも結構なコンビネーションで怪人達を圧倒していくソウガA
Fとボウケンピンク。

「おいあんた、決めるぞ！」

「わかった！」

デイルイドはそう言うのとカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…デイ・デイ・デイ・デイルイド!》

デイルイドの前に巨大なFARカードが現れ、ライドブッカー・ソ
ードモードを構えそれを潜り抜けていく。そしてデイルイドは『デ
イメンションブレイド』発動し、怪人達を一掃する。
それに続いてボウケンレッドも、

「ボウケンジャベリン！」

槍型のボウケンレッド専用の武器を装備し、

「ジャベリンクラッシュ！」

必殺の『ジャベリンクラッシュ』を発動し怪人達を一掃した。
全ての敵を倒し、全員は変身を解く。
チーフと呼ばれた男性は渚に近付き、

「君は一体何者だ？」

そう聞くと渚は、

「ちょうど良い、俺もあんた達に聞きたいことがある」

その頃達也は、

「ふう、何とか撒いたか」

そう言って休憩しようとした瞬間、

「誰を撒いたって？」

「私達を忘れてない？達也君」

「ああ、忘れてた」

先程渚達の前に現れた巡と周。

彼等も達也の盗んだ宝を狙っていた。

「さあ、観念してそれを渡せ」

「もう逃げても無駄よ？」

巡と周は達也にそう言うが、

「ああ、めんどくせー。てか邪魔だ、ディスティール、ディシーフ」

達也は突然二人を別の名で呼んだ。

「言ってくれるじゃねえか、ディセンド」

周はそう言うと水色と藍色を基調色にしたハンドボウガンを構える。

それに続いて巡も赤と桃色を基調色にしたナイフを構える。
達也もそれに対抗してディセンドライバーを構える。その時、

「言つとくが、それは俺様達のプレシヤスだ！」

先程まで達也を追っていた銀色のジャケットを着た男性が現れる。

「そつだ、こいつも居たんだ……………」

達也は心底めんどくさそうにそつ言つと変身準備を完了させる。

《カメンライド》

「まあ良い、全員纏めて相手してやる、変身！」

《ディセンド！》

達也はディセンドに変身する。

「ヤル気じゃねえか、達也。巡ちゃん、達也とついでにボウケンシルバーもやつちまおうぜ」

「そつね、悪いけど本気で行かせてもらつわ」

二人はそつ言つと変身準備を完了させる。

《カメンライド》

「変身！！」

《ディシーフ！》

《ディステイル！》

巡と周は頭部はディケイド、体はディエンドの仮面ライダーに変身する。

しかし巡の変身したディシーフは赤と桃色を基調色とし、周の変身したディステイルは水色と藍色を基調色にしている。

「何だか良く分らんが、やるしかないみたいだな！」

銀色のジャケットを着た男性は左手首に装着されたブレスを開き、

「レディ！ボウケンシルバー・スタートアップ！」

銀色のジャケットを着た男性は銀色の戦士・ボウケンシルバーに変身する。

「援軍といくか」

ディセンドはそう言うのとカードを二枚装填する。

《カメンライド》

「行け！」

《シザース！ライア！》

2人のミラーライダーを召喚すると、その場に居る戦士達は自らの武器を手に戦い始める。

渚達はボウケンジャーの基地であるサージェスミュージアムのサロ
ンに案内されていた。

「俺は明石暁、ボウケンレッドだ」

「伊能真墨、ボウケンブラック」

「最上蒼太、ボウケンブルー。宜しくね」

「間宮菜月、ボウケンイエローなんだ。宜しくね」

「西堀さくら、ボウケンピンクです」

「俺は近藤渚」

「小野山ユウセイです！」「岬彩夏です、宜しくお願いします」

全員が自己紹介を終え、渚達の旅の事を話し、ボウケンジャーの世界の事がある程度把握した渚はボウケンジャーにある事を聞いた。

「最近この世界で何か変わった事は無いか？」

渚がそう聞くと蒼太が、

「新たな敵が現れたんだ」

「新たな敵？」

ユウセイが首を傾げると今度はさくらが話す。

「はい。ネガティブでは無い、黒い服を着た謎の集団」

「黒い服？」

渚は黒い服という言葉が引っ掛かった。

そして暫く考え、

「ちょっと待て、そいつ等何か掛け声みたいなのあるんじゃないか？」

渚がそう聞くと菜月が、

「うん、なんか『イーツ、イーツ』って言ってたよ？ね、真墨」
「確かにそんな妙な掛け声してたな」

それを聞いた渚は、

「またシヨツカーかよ……………」
「シヨツカー？何だそれは」

渚の言葉に反応した暁は渚に質問する。

「俺達仮面ライダーの敵だ」
「成程、つまりそのシヨツカーが再び活動始めたという訳か……………」
「ん？待てよ……………」
「どうした？明石」

渚は何かを考え込んでいる暁が気になり声を掛けた。

「ついさつき俺達が保管していたプレシヤスが何者かに盗まれたんだ。まさかそいつもシヨツカーなのか？」
「いや」

だが渚は暁の考えを否定した。

「それは単なるこそ泥だ。シヨツカーなんかじゃない」
「こそ泥……………」

するとユウセイが、

「あ、そうだ。俺達とボウケンジャーで協力しませんか？」

ユウセイがそう言つとさくらが、

「確かにその方が効率が良いかもしれませんが。どうしますかチーフ？」

「そうだな。じゃあ何か分かったら連絡してくれ。俺達も何かあったら連絡する」

「わかった」

こうして渚達とボウケンジャーは協力するという形で話し合いは終了した。

サロンを出た渚達は、

「あ、そうだ渚君、折角だから博物館観ていかない？」

彩夏そう言つとユウセイが、

「確かにそれ良いかもな。どうする？渚」

ユウセイが渚にそう聞くと渚は適当に、

「良いんじゃないか」

そう言つて3人は博物館を観ていくことにした。

そしてここにも博物館を楽しむ男女四人組が居た。

「見てみてツルギちゃん、恐竜だよ！」

「本当だ……」

「はあくすげえくなあく」「確かに凄い」

そして、

「わあく恐竜だあく」

「博物館って言ったらやっぱこれだよな」

「ふくん」

博物館を楽しむユウセイと彩夏に対し渚は興味が全く無かった。すると渚達はその男女四人組と同じ恐竜の剥製を見ていた。渚は四人組の一人の男性をふと見ると目を見開いた。

「なっ、あれは……」

渚はその男性に近付き、

「お前、闇影だよな？」

「え？」

闇影と呼ばれた男性は渚を見ると、彼同様目を見開き、

「君は、渚か!？」

「久し振りだな、闇影!」「ああ、久し振り!渚!」

渚と闇影が再開を喜んでいると、

「渚君、その人は？」

「先生、その人誰？」

渚は彩夏にそう聞かれると、

「俺の恩人だ」

闇影は少女に、

「ああ、黒深子、彼は俺の大事な仲間だよ」

それを聞いた闇影の仲間の一人の青年が、

「そうなのか？どの世界で会ったんだ？」

するとユウセイも、

「確かに、いつ会ったんだ？」

ユウセイがそう言っていると渚は、

「まあこんな所で立ち話もなんだ、写真館に案内するよ。良いよな
？岬」

「うん、良いよ」

岬写真館

渚達と闇影達は写真館で話していた。

渚と親しい青年の名は煌闇影、仮面ライダーディライトに変身するお節介教師な仮面ライダーである。

そして闇影を先生と慕う少女の名は白石黒深子、一見普通の少女だがその正体はスワンオルフェノクであり、オルフェノクになったことで生きる意味を見失っていたところを闇影に救われて以来彼を先生と慕うようになった。

闇影の仲間の一人の青年の名は赤竜コウイチ、仮面ライダーリュウガ。

闇影が最初に訪れたダークライダーの世界で出会った青年。

詳しい設定は是非仮面ライダーディライトを読んでください！

「嘘だろ!?!」

コウイチはほつといて、次は闇影の仲間の一人の少女、ツルギこと仮面ライダーサソード。

まあ可愛らしい子で愛着が沸きますね。

「説明がない……」

詳しい設定は是非仮面ライダーディライトを読んでください！

「おい作者！めんどくさがってんじゃねえよ！」

「渚？誰に言ってるんだ？」

「あ、なんでもない……」

闇影は首を傾げるが、気を取り直して話を続ける。

「ところでこの世界は何の世界なんだ？」

「ここはライダーの居ない世界らしい」

それを聞いた闇影は、

「ライダーの居ない世界!？」

ライダーの居ない世界という言葉に驚きを隠せなかった。

「俺も初めて……………いや待てよ」

渚はそう言つと一冊の本を取り出す。

「その本は？」

闇影がそう聞くと、

「わからない、記憶を無くした俺がバツクルとカード以外に持っていた唯一の私物だ」

渚は本を開き読み始める。そこには様々な世界についての情報が記されていた。そして、

「あつた、ライダーの居ない世界」

「何々?ライダーの居ない世界は一般的にスーパー戦隊の世界と呼ばれ、スーパー戦隊にもライダーの世界と同じく種類がある。例えばシンケンジャーの世界等」

「じゃあここはボウケンジャーの世界ってわけか……………」

そう言つて渚が本を閉じようとするとき闇影が、

「待て、渚このページは？」

闇影が指摘したのは本の最後の方のページだった。

「そついやあまだ読んでなかったな」

そう言つてそのページを開く。

そこには『人の思いを受け戦う銀色の剣士』、『無限の可能性を秘めた嘗ての勇者達、すなわち仮面ライダー達の総司令官』と記されていた。

「なんだ、このライダーは？」

「俺達の総司令官……」

渚と闇影が考えていると黒深子が、

「ねえ先生、渚さん達を私達の家以案内しない？」

「そつだね、そつしようか」

「わかった」

渚はそう言つて本を閉じ、写真館を出た。

そして渚の本に記された二人のライダー。

このライダー達について語られるのはまた別のお話……。

その頃ディセンドはボウケンジャーから奪ったプレシヤスを守る為、
ディシーフとディステイルとボウケンシルバーと激闘を繰り広げていた。

「相変わらず厄介だな、お前等は！」

デイセンドはそう言いながらディシーフとディステイルにディセンドドライバーを放つ。

「厄介なのは貴方も同じでしょ？」

「厄介者同士仲良くやり合おうぜ！」

そう言いながらディシーフとディステイルは自身のドライバーでデイセンドを攻撃する。

「何なんだこいつ等！」

ボウケンシルバーは自身の武器・サガスピアでシザースとライアを攻撃する。

そしてその様子を見ていた者が居た。

「不味い、早くディライドをこの世界から追放しなければ！」

そう言ったのは鳴滝だった。

「ライダーの居ない世界にライダーが居てはならない……………」

するとデイセンド達の前に白い怪人が数体現れた。

「何だこいつ等？」

デイセンドが困惑しているとボウケンシルバーが、

「こいつ等は、カース！」 「カース？何だそりゃ」

カース、それは嘗てボウケンジャーと戦ったゴードム文明の戦闘員。

「馬鹿な！ゴードムは封印した筈じゃねえのか！？」

そう、ゴードム文明はボウケンジャーにより封印された。

「何で封印された奴等が出て来んだよ！」

デイセンドがそう言った瞬間、

「デイライドのせいだ！奴がこの世界に訪れたからだ！」

鳴滝が現れそう言った。

「デイライドが悪いつてのによ？」

デイスティールが鳴滝にそう聞くと、

「ああそうだ！この世界も奴によって破壊されてしまった！」

するとデイシーフが、

「本当にそうなのかしら？」

「君達もいずれ解るだろう。奴がどれ程世界に歪みをもたらすのかを！」

鳴滝はそう言うのと次元の壁に包まれ姿を消した。

デイセンド達は戦闘を止めカース達を倒していく。

「先ずはこいつ等だな！」

デイセンドがカーズ達に集中していると、何者かがプレシヤスの入った箱を奪った。

それに気付いたデイセンドは、

「ん？あつ！てめえ何すんだ！」

デイセンドは箱を奪った何者かから箱を奪い返そうとするが逆に返り討ちに合ってしまう。

「うわああ！」

ボウケンシルバーはその何者かを見た瞬間目を見開いた。

「なっ！貴様は、ガジャ！」

「久し振りだな、ボウケンシルバー」

ゴードム文明の大神官ガジャ。

白い岩石の様な鎧を身に纏った男だ。

「何故貴様が……？」

ボウケンシルバーはガジャにそう聞くと、

「さあな、私にも分からん。だがそんなことはどうでもいい！再びこの地球を征服してやるのだ！」

ガジャがそう言った瞬間ショッカー戦闘員と謎のロボットが現れる。

「てめえ等は、ショッカー！」

シヨツカー戦闘員達はディセンド達に襲いかかる。

その頃渚達は黒深子の家を目指し歩いてきた。
暫く歩くとディセンド達の戦闘に遭遇した。

「何だあれ？」

ユウセイがそう言っていると渚が、

「あれはシヨツカー！？それに達也に、あの銀色の奴……………ボウケ
ンシルバー？ってことはあいつが高丘映二か？」

渚がそう言っていると闇影が、

「あれは、巡と周じゃないか！」

すると彩夏が、

「それより助けなきゃ！」「だな！行くぞ、みんな！」

闇影がそう言っていると渚達は走り出す。
渚達はディセンドに駆け寄り、

「苦戦してんな、達也」

「渚か。てか苦戦なんかしてねえよ馬鹿野郎が」

「あっそう」

渚は適当に返すと彩夏に、

「岬、明石達を呼べ」

「わかった！」

そして渚達は変身準備を完了させる。

「くくくく変身！……！！」「くくく」

《カメンライド……デイルライド！》

《カメンライド……デイルライド！》

《ヘンシン！》

渚はデイルライドに、ユウセイはソウガ・アビシオンフォームに、闇影はデイルライトに、コウイチはリュウガに、ツルギはサソード・マスコドフォームに変身する。

さらに黒深子もスワンオルフェノクに変化する。

デイルライドとデイルライトとサソードMFはライドブッカー・ソードモードとライトブッカー・ソードモードとサソードヤイバーでショッカー戦闘員やカーズ達を切り裂いていく。

ソウガAFとリュウガとスワンは格闘技でショッカー戦闘員やカーズ達を薙ぎ倒していく。

暫く戦っていると、デイルライドとデイルライトを何者かが襲った。

「くぐああああー！！」「く」

「渚！」

「闇影！」

二人を襲ったのは紫色の異形だった。

それを見たボウケンシルバーは、

「あいつは、デスペラート!?!」

デスペラート、それは大神官ガジャがこの世の全ての災厄が詰まった箱・パンドラの箱を体内に取り込みそれを形にしたことで現れた最強の怪人。

「何だか知らねえが、行くぞ闇影!」

「ああ!」

二人は武器を構えデスペラートに向かって走り出す。すると漸くボウケンジャーが到着した。

「映二!」

「遅いぞ明石!」

「てか、何でゴードム文明!?!」

蒼太はこの状況に困惑する。

「良く解らんが、デイルイドって奴のせいらしい」

「デイルイドって近藤か!?!」

「渚君が悪いの!?!」

真墨と菜月は驚きを隠せなかった。

「そうと決まった訳じゃない。後で聞けば良い事だ、行くぞ!」

暁がそう言うところ人は携帯電話型ツール・アクセルラーを機動させ、

「レディ！」

「「「「「ボウケンジャー・スタートアップ！！！！！！」」」」」

5人はボウケンジャーに変身するとそれぞれ戦いを始める。

デイルイドとディライトはデスペラートに苦戦していた。

「くっ！こいつ中々やるな」

「だが、俺達なら行ける！だよな、渚？」

デイルイドがそう聞くとディライトは、

「愚問ってやつだな。行くぞ、闇影！」

「ああ！」

二人は武器を構えデスペラートに向かって走り出す。そして見事なコンビネーションでデスペラートを攻撃する。

デイルイドはデスペラートと距離を置き、

「こいつで行くか」

そう言ってカードを一枚装填する。

《カメンライド：ネオデノオウ！》

デイルイドはデイルイド・ネオ電王・バーストフォームにKRすると、再びデスペラートに攻撃する。

それを見たディライトは、

「おっ！なら俺も！」

そう言っつてカードを一枚装填する。

《シャドウライド…ネガデノオウ！》

デイルイトは自らの影をネガ電王・ネガフォームにSRさせる。

そしてDネオ電王BFとデイルイトとSネガ電王NFはデスペラートを一気に追い詰めていく。

だがデスペラートも負けじと反撃してくる。

「なに！？」

「凄い力だ！」

三人はデスペラートの攻撃で吹き飛ばされ、Dネオ電王BFはデイルイトに戻ってしまい、Sネガ電王NFは消滅してしまった。

「くっ！手強い……」

デイルイトがそう言っつとデイルイドが、

「まだ手はあるー！」

そう言っつてデスペラートに向かって走り出す。

デイルイトもそれに続き走り出す。
するとデイルイドが、

「闇影！」

そう言つて自身のライドブツカーをディライトに投げ渡す。
一枚のカードだけ抜き取つて。

「時間稼ぎ頼むぜ」

「……………わかつた！」

ディライトはライドブツカーとライトブツカーの二刀流でデスペラートを攻撃する。

ディライドはケータッチを取り出しコンプリートカードを装填しクレストをタッチしていく。

《ソウガ！アクト！セイリユウ！イプシロン！フォルス！コウキ！ドラゴ！ネオデソウ！ブレイズ！ファイナルカメンライド…ディライド！》

ディライドはコンプリートフォームに強化変身するとデスペラートに向かつて走り出し、パンチを浴びせる。

「待たしたな、闇影」

「よし、行くぞ！」

ディライトはディライドCFにライドブツカーを返すと二人は先程より倍の勢いでデスペラートを攻撃する。そしてディライドCFは慣れた手付きでケータッチのクレストをタッチする。

《ドラゴ！カメンライド…ハイパー！》

ディライドCFのヒストリーオーナメントのカードが全てドラゴ・ハイパーフォームに変わり、ディライドCFの隣にパーフェクトゼクター・ガンモードを持ったドラゴHFが召喚される。

そしてデイルイトもカードを一枚装填する。

《ファイナルシャドウライド…カ・カ・カ・カブト!》

デイルイトは自らの影をパーフェクトゼクター・ガンモードを持ったカブト・ハイパーフォームにFSRさせる。

そしてデイルイドCFとデイルイトはカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド》

《ド・ド・ド・ドラゴ!》 《カ・カ・カ・カブト!》

デイルイドCFとドラゴHFとデイルイトとスカブトHFはそれぞれの武器を構え『マキシマムハイパートルネード』と『マキシマムハイパーサイクロン』を放つ。

「……はあああ……!!……!」

「があああ!」

四人の必殺技を受けたデスペラートは爆発した。

「さて、あつちに帰りますか」

「行こう!」

デイルイドCFとデイルイトはソウガAF達の下へ走り出した。

その頃ディSEND達は、

「まったく、敵多すぎだっつんだよ!」

戦闘員の多さにうんざりしていた。
ガジヤはディセンド達が戦闘員達と戦っている隙に、

「このゴードムの脳髓があれば私は更なる力が手に入る！」

そしてショッカーのロボットが、

「だったら早くそれを取り込め」

ロボットにそう促されたガジヤはゴードムの脳髓を取り込もうとする。

それに気付いたボウケンレッドとボウケンシルバーはそれを阻止しようとして走り出す。

「不味い！」

「させるか！」

だが、それは間に合わずガジヤはゴードムの脳髓を取り込んでしまった。

そしてそれにより起きた暴風でボウケンレッドとボウケンシルバーは吹っ飛ばされてしまう。

「しまった！」

「遅かったか！」

するとそこへ、

「「はああああー！」「」

デイルイドCFとデイルイトが現れガジヤを切り裂こうとする。

「ふん、くだらん」

だがガジヤはそれを難無くかわす。

「お前が誰だか知らねえが、とりあえず気に入らねえから倒す！」

デイルイドCFがそう言っつてガジヤに攻撃しようとした瞬間、

「そこまでだ！」

シヨッカーのロボットが突然そう叫んだ。

何故なら、

「ゆっ、岬！」

彩夏が人質に取られていた。

「デイルイドよ、この女を助けてほしくば大人しく変身を解け！」

「渚君……………！」

するとデイルイドCFは何の躊躇いも無く変身を解いた。

「変身を解いたぞ。さあ、岬を返せ！」

だがロボットはそれを嘲笑うかのように、

「やはりこの女を見殺しには出来ぬか！」

そう言うとロボットは水晶を取り出す。
すると水晶からレーザーが発射され渚の心臓を貫いた！

「がはっ！」

だが、渚は倒れる事もなく無傷だった。

「何をした？」

渚がそう聞くとロボットは不気味に笑い、

「くっくっく、さらばだデイライド。貴様の心を貰う！」

そう言った瞬間渚から黄色のオーラが現れそのまま水晶に吸収され
水晶は黄色に染まる。

すると渚はその場に力無く倒れてしまった。

「渚！」

デイライドは渚に近付き彼を抱き抱える。

「渚！しっかりしろ！」

だが渚は闇影の声に反応しない。

目も開いていれば、呼吸もしているのに。

だが目は開いているが、その目には輝きが無く、虚ろな目をしてい
た……………。

第24話 6人の冒険者II 轟轟戦隊（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……………。

第25話 最高のプレシャス

全てを破壊し、全てを繋げ！

第25話 最高のプレシヤス（前書き）

今回でトライイRさんとのコラボは終了です！

トライイRさん、ありがとうございました！

第25話 最高のプレシヤス

これまでの仮面ライダーディライトは……………。

詳しくは第24話をお読み下さい。

ショッカーのロボットの持つ謎の水晶により心を奪われてしまった
渚。

「渚！しっかりするんだ！」

ディライトは渚に必死に呼び掛けるが渚は何も答えない。
そこへソウガAFがディライトに駆け寄り、

「闇影さん、渚に一体何が!？」

「解らない、恐らく奴の持っているあの水晶のせいだ！」
「そうか…：だつたら！」

ソウガAFはショッカーのロボットに、

「おいお前！彩夏ちゃんとその水晶を渡せ！」

そう言われたショッカーのロボットは、

「ああ渡してやろう。この女だけな！」

シヨッカーのロボットはそう言つと彩夏を投げ飛ばす。

「きゃああー！」

「危ない！」

ソウガAFは彩夏を受け止めると、

「お前！何するんだ！」

ソウガAFはそう言つがロボットは無視して、

「ガジャ、そろそろ戻るぞ。目的は果たした」

「そうじゃな」

そう言つてロボットとガジャが去るつとするとディライトが、

「待て！お前は何者だ！」

そう聞かれたロボットは、

「良いだろう、教えてやる。我が名はギガシヨッカーが大幹部の一人、怪魔ロボット・ガリオスだ！」

「ギガシヨッカー？」

ディセントはギガシヨッカーという単語が引つ掛かった。

「また会おう仮面ライダー、そしてボウケンジャー！」

ガリオスはそう言つとガジャと共に次元の壁に包まれ姿を消した。

「なっ！待て！」

ソウガAFは二人を追い掛けるが既にガリオスとガジヤは居なかった。

「くそっ！」

ソウガAFがそう言うのと全員は変身を解く。達也と巡と周以外は渚に駆け寄る。

「渚さんどうなったの？」

黒深子は闇影にそう聞く。

「解らない、一体どうすれば……………」

すると蒼太が、

「チーフ、とりあえずサロンに運びましょう」

「そうだな。行こう」

もう一人の世界の破壊者・デイライド。

幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

渚をサロンの医務室に運んだ闇影達。

現在蒼太がガリオスの持っていた水晶について調べていた。

「渚は体の何処にも異常が無いらしい」

暁がそう言っていると闇影が、

「じゃあ本当に心を奪われたっていいのか？」

闇影がそう言っていると真墨が、

「例えそうだとしても、そんなプレシヤス聞いた事無いぞ」

すると菜月が、

「だから今蒼太さんが調べてんじゃん」

すると蒼太が、

「ビンゴ！チーフ、ありましたよあの水晶！」

「モニターに出してくれ」「りょくかいっ」

蒼太はパソコンを操作して水晶の詳細をモニターに出し説明する。

「これは人の心を奪うことが出来る『ハートクリスタル』というプレシヤスだ。このハートクリスタルで吸収した心はハートクリスタルを持つ者にその心の持ち主と同等の力を能えることが出来るそうです」

「じゃああのガリオスは渚の力を自分の物にしようとしているのか？」

暁がそう言つと、

「恐らく」

蒼太が短くそう答える。
するとさくらが、

「奴等の居場所は特定出来ませんか？」

そう聞かれた蒼太はパソコンを操作しながら、

「ちょっと待って下さい……………あ、出来ます！異常な力を発している建物があります。でも特定は出来ません」

すると暁が、

「だったら自力で探せばいい事だ」

「久し振りに楽しい冒険になりそうだぜ」

映士は映士なりのヤル気の表しを示した。

「よし、みんな行くぞ！アタック！」

暁がそう言つと全員がサロンを出て行くとする。
すると闇影とユウセイが彩夏と黒深子呼び止める。

「待つんだ、黒深子、彩夏ちゃん」

「どうしたの？先生」

黒深子がそう聞くと、

「君達二人はここに居てくれ。渚に何かあったら連絡してほしいんだ」

「うん、分かった！」

そう言つて闇影とユウセイがサロンを出ようとする。すると彩夏がユウセイを呼び止める。

「ユウセイ！」

「どうした？」

「ギガシヨツカーのアジトが解つたら連絡して？念のために。それ
にもしかしたら渚君けるって起きるかもしれないし」

それを聞いたユウセイは笑顔で、

「渚の事だからな。分かった、連絡するよ」

そう言つと闇影とユウセイはサロンを出て行った。

未だ不安そうな表情をする彩夏に黒深子が、

「彩夏ちゃん、大丈夫だよ！きつと先生達がギガシヨツカーから渚
さんの心を取り戻してくれるよ！ね？」

そう言われた彩夏は笑顔になり頷く。

二人は椅子に座ると、黒深子が彩夏にある事を聞いた。

「ねえねえ、彩夏ちゃんって渚さんの事好きなの？」

そう言われた彩夏は、

「えっ！？べつ別にそんなんじゃない………！」

慌てて黒深子の言葉を否定する。

だが黒深子は意地悪そうな顔で、

「またまたあゝ、そんな事言っちゃって」

「本当に違うんです！」

彩夏は真剣な表情になり、

「私は渚君の相棒だと思ってる」

「相棒？」

「うん。でも最近渚君の帰る場所になりたいて思う様になったの」

「帰る場所？」

黒深子も彩夏の真剣な言葉を聞き真剣な表情になっていた。

「うん。渚君、どの世界にも居場所が無くて、破壊者とか悪魔って言われて……、渚君気にしてない様に振る舞ってるけど本当は苦しいんだと思う。だから私だけはずっと渚君の味方で居ようって思っ
つて」

それを聞いた黒深子は、

「そっか…………、私も先生の帰る場所に…………」

闇影達はそれぞれ二人一組に別れてギガショッカーのアジトを搜索していた。

真墨 & 菜月ペア

「ギガショッカーのアジトって何処にあるのかなぁ？」

菜月は辺りを見回しながらそう言った。

真墨はアクセララーを操作しながら、

「さあな。だが、何処かに妙なエネルギーを発している場所がある筈だ。根気強く探すぞ」

「はい」

真墨と菜月はそんな話をしながら搜索を続ける。

蒼太 & さくらペア

「しかしあのギガショッカー、一体何なんですかね」

蒼太はさくらにそう問う。さくらはその質問に、

「さあ。でも確実に今までのネガティブより強力でしょうね」

「僕達も気を引き締めないと、ですね」

「ええ」

二人はそう言つと搜索を続ける。

ユウセイ&コウイチペア

「なあユウセイはどうやって渚さんに出会ったんだ？」

コウイチはユウセイに渚との出会いを聞いた。

「あいつが俺の世界に来て、色々派手にやってる時に出会ったんだ。最初は何だこいつって思ったけど俺はあいつに救われた。俺だけじゃなく俺の世界も。だから俺はあいつの助けになれたらって思ったんだ」

ユウセイは今まで語つた事が渚への思いを口にした。

「すごい人なんだな、渚さんって」

「ああ」

ユウセイはコウイチに、

「コウイチは？どうやって闇影さんと？」

同じ質問をした。

「俺も似たようなもんだよ。俺自身も救われ、世界も救われた。だからこうしてあいつと旅をしてる。この先どんな事があるうともな
それを聞いたコウセイは、

「そっか。じゃあ俺もこの先何があるうともあいつと同じ旅路を歩む」

コウセイは決意に満ちた表情でそう言うとコウイチが、

「じゃあ絶対渚さんを救おうぜ！」

「ああ！行こう！」

コウセイとコウイチは会って間もないが、確かな絆を作り出していた。

闇影&ツルギペア

「闇影さんはギガシヨッカーという組織を知っているんですか？」

ツルギの質問に闇影は苦い表情で、

「いや、正直聞いた事もない組織だ。だがこれから更なる脅威になることは間違いない」

闇影がそう言うとツルギは、

「じゃあ、尚更渚さんの力を悪用させるわけにはいきませぬね！」

「ああ、必ず渚の心を取り戻す！渚の仲間達の為にも！」

「ですね。行きましょう、闇影さん！」

「ああ！」

闇影とツルギはギガシヨツカーのアジトの搜索をより力を入れて再開した。

暁&映士ペア

「しかし、あのギガシヨツカーって奴等何なんだ」

映士はサガスナイパー・サガスモードでギガシヨツカーのアジトを搜索しながらそう言った。

「わからん。ただ俺達も気を抜いてはいけないということだ」

「はっ、俺様達が負けるわけねえがな」

映士がそう言った瞬間、

《ヒット！》

サガスナイパーがギガシヨツカーのアジトの反応を捉えた。

「明石、ここだ！」

「何？」

だが其処には建物らしき物等全く見当たらず、草原が広がっているだけだった。

「どういうことだ？何も無い……………」

「恐らく、特殊な結界を張ってるみてえだな」

映士がそう言うと暁は納得したように、

「成程、だから詳しい場所が特定出来なかったのか……………」

暁は気を取り直して、

「よし、みんなを呼ぼう」

アクセララーを操作しながらそう言った。

連絡が届いたユウセイは、

「彩夏ちゃんに連絡しよう」

そう言って携帯電話を取り出し彩夏に電話をする。

サロン

「わかった、気を付けてね」

彩夏はユウセイとの連絡を終えると、更に不安そうな表情になる。
それを見兼ねた黒深子は、

「彩夏ちゃん、ちょっと待ってて？何か飲み物買ってくるから」
「うん……………」

黒深子はそう言うとサロンを出ていった。

すると彩夏はさっきまでの不安な表情から一転して決意に満ちた表情で立ち上がりそのままサロンを出ていった。

暁と映士からの連絡を受けボウケンジャーと闇影達は反応があった場所に集合していた。

「本当にここにギガシヨツカーのアジトがあるんですか？」

闇影は映士にそう聞く。

「ああ、サガスナイパーが確かにここを指している」「だが、一体どうすれば……………」

暁がそう考えていると、

「しょうがねえ、俺達がこのバリアを吹き飛ばしてやるよ」「え？」「

闇影達が振り向くと、そこには達也と巡と周が居た。

「巡、周！何故お前達が？」

「それに達也も、どついう風の吹き回しだ？」

闇影とユウセイがそう聞くと、

「ギガシヨツカーって奴等に渚の力が渡れば、面倒だからな」

「だから今回は協力してあげるってわけ」
「感謝しろよな」

上から達也、巡、周の台詞。

3人はそう言うつと変身準備を完了させる。

《《カメンライド》》 「 「 「変身！！！」 「 「 「

《デイセンド！》

《デイシーフ！》

《デイスティール！》

3人は仮面ライダーに変身するとそれぞれのドライバーを構える。

「危ねえから下がってな」

デイセンドがそう言うつと3人は何も無い場所にドライバーで攻撃を放つ。

するとまるでガラスが割れるかのような音が鳴り響き、ギガシヨツカ
ーのアジトが姿を現した。

「やった！」

コウイチは歓喜の声を上げるが、

「何か妙じゃね？」

「確かに。もしかして……………畏？」

デイシーフとデイスティールがそう言った瞬間、

「性懲りもなくまた現れよって！」

「ガジャ！」

声の主はゴードム文明の大神官・ガジャ。

そして彼の周りにはカーズやシヨツカー戦闘員、様々な仮面ライダーの世界の怪人達。

つまり、闇影達はまんまと罠にはまってしまった。

「見事にやられたな」

デイスティールのその口調からは焦りより余裕が感じられる。

「上等だ！やってやるぜ！」

「一気に片付けます！」

「本気出しちゃうよ〜！」「そうそう蒼太！久し振りに楽しい冒険になりそうだね！」

「性懲りもなくまた現れたのはお前の方だ、ガジャ！」

「もう一度封印……………いや、今度は確実に倒す！」

上から映士、さくら、菜月、蒼太、真墨、暁の台詞。そして、

「行くぞ！」

「……………おう……………！」

6人はそれぞれ変身ツールを起動させ、

「レディ！」

「……………ボウケンジャー・スタートアップ……………！」

その瞬間6人は瞬く間に姿を変える。

そしてここからがスーパー戦隊の一番の見せ場とも言えるシーンが始まる。

「熱き冒険者、ボウケンレッド！」

「速き冒険者、ボウケンブラック！」

「高き冒険者、ボウケンブルー！」

「強き冒険者、ボウケンイエロー！」

「深き冒険者、ボウケンピンク！」

「眩き冒険者、ボウケンシルバー！」

そしてボウケンレッドが彼等の戦う原動力でもある台詞を口にする。

「果てなき冒険スピリッツ！」

そして……、

「……………轟轟戦隊！！！！！！ボウケンジャー！！！！！！！」

彼等の名乗りは見事なまでに決まった。

そしてこちらも、

「俺達も行こう、みんな！」

「……………ああ……………」

闇影の言葉を合図に3人は変身準備を完了させる。

「……………変身……………」

《カメンライド……デイライト！》

《ヘンシン！》

闇影はデイルイト、ユウセイはソウガ・アビシオンフォーム、コウイチはリュウガ、ツルギはサソード・マスクドフォームに変身する。さらに、

「キャストオフ！」

《キャストオフ！》

サソードはライダーフォームへフォームチェンジする。

「行くぞー！！」

デイルイトとボウケンレッドの掛け声を合図に全員は一気に戦闘を始める。

その頃サロンでは

「彩夏ちゃん、ジュース買って来た　　！」

黒深子は突然息を飲んだ。何故なら、そこに岬彩夏という人物等居なかったからだ。

黒深子はジュースを置きサロンを出てある場所に向かう。

「ここにも居ない……」

黒深子は渚が“居る筈”の医務室に来ていた。

“居る筈”のだ。

「渚さん？……まさか！」

黒深子は血相を変え医務室から出ていった。

その頃彩夏は渚を抱えながらギガシヨツカーのアジトの前に来ていた。

尤も、ディライト達が戦っている場所とは反対側だが。

「どつしよつ……向こうはみんなが居て止められるし……」

彩夏がどうするか悩んでいると、突如彼女の後方に次元の壁が現れ、そこから一人の男が現れた。

「ん？」

彩夏は男の姿に疑問を抱いた。

男は黄色のメッシュが入った黒髪に黒色のスーツを着崩した姿をしている。

これだけなら普通だが、彩夏が疑問を抱いたのは彼の顔だ。

何故なら男は顔が全く見えない黄色と黒の仮面を被っていたから。

男は彩夏に近付くと、

「中に入れてやる」

デイルイト達はそれぞれの武器を手にカースやショッカー戦闘員、怪人達を次々と蹴散らしていく。デイルイトが戦っていると、

「先生！」

「黒深子!？」

黒深子はスワンオルフェノクに変化しながらデイルイトに近づく。

「どうしたんだ!？」

「彩夏ちゃんが居なくなつたの!それに渚さんも居ないの!？」

「何!?!まさか……………」

デイルイトは嫌な予感がしソウガAF達に、

「みんな!ここは頼む!俺がギガショッカーのアジトに行く!」

「わかつた!任せろ!」

デイルイトはアジトに向かって走り出す。

その途中怪人達が行く手を阻もうとするがそれらは全てソウガAF達によって蹴散らされ、デイルイトはそのままアジトに入っていた。

ギガシヨツカーアジト内。

「準備は整った！これで破壊者の力は私の者だ！」

ガリオスはハートクリスタルを手にそう叫ぶ。

だがそれを止めようとする者の声が響く。

「そうはさせない！」

ガリオスは声の主を見る。それは渚を抱えた彩夏だった。

「女か。一人で乗り込んで着たのは大した度胸だが、何が出来るんだ？」

ガリオスは見下す様にそう問う。

「渚君の心を取り戻す！」

彩夏は力強くそう言う。

だがガリオスは、

「戯れ言を！」

そう言って彩夏を攻撃しようとした瞬間、

「待て！」

デイルイトが現れガリオスの攻撃を叩き落とす。

「おのれデイルイト！」

「さあ、渚の心を返せ！」

デイルライトはガリオスを指さしそう言う。
ガリオスは余裕の表情で、

「この水晶を奪った所で状況は変わらん！デイルライドの心は私が死ぬまで永遠に水晶に囚われ続ける。私を倒すしか方法はない！」

「だったら、倒すまでだ！」

デイルライトはライトブッカー・ソードモードを手にガリオスに斬りかかる。

だがガリオスはそれを余裕で避け、デイルライトに強烈な一撃を浴びせる。

「ふん！」

「うわあああ！」

「闇影さん！」

彩夏はデイルライトの身を案じる。
ガリオスは、

「さあどうする？デイルライト」

そう言った瞬間、

「はあ！」

「ぐあああ！」

背後から斬撃を受ける。

「貴方は！」

それは先程彩夏をギガシヨツカーアジトに侵入させた仮面の男だった。

男は本型の剣、いや、そう言うよりライドブツカーと呼ぶべきか。

男はライトブツカーでガリオスを幾度となく切り裂く。

反撃を全く許さない程の圧倒的な強さを見せて。

「凄い……………」

「何者だ？生身でガリオスに反撃もさせないなんて……………」

彩夏とデイライトが唾然としていると、

「岬彩夏！」

「えっ！？何で私の名前を？」

男は彩夏の疑問を無視して、

「願え！そして叫べ！近藤渚を救うんだ！」

男の言葉に彩夏は力強く頷く。

そして、

「渚君、私はいつまでも渚君の味方！渚君が破壊者でも悪魔でも関係無い！私は渚君を否定しない！だからお願い！みんなが待ってるから！もう一度立って！渚君！！！」

その瞬間、ハートクリスタルにひびがはいる。

「何！？」

すると彩夏は渚の重味でバランスを崩し倒れそうになる。

「あー！」

だが彩夏は倒れる事なく立っていた。

何故なら先程まで支えていた人物に支えられているのだから。

「まさか、こんな事が！」

その瞬間ハートクリスタルは無惨に砕け散る。

そして渚はゆっくり目を開ける。

「闇影、呷……………」

渚は自分の仲間の名前を呟く。

「渚！」

「渚君！」

2人は歓喜の声を上げる。

「闇影、迷惑かけたな」

「迷惑なんてこれっぽっちもかけられてないさ」

渚は笑顔になり彩夏の方を見る。

「お前の声、しっかり俺の心に届いた。ありがとう、
“彩夏”」
「えっ？」

彩夏は目を見開いた。
初めて会った時から苗字で呼び続けた渚が、初めて名前で呼んだのだから。

彩夏は自然に笑顔になり、渚もつられて更に笑顔になった。
すると、

「何故だ！ハートクリスタルの呪縛から逃れる事が出来るわけが！」

ガリオスは怒り狂うかの様に言う。
するとディライトが、

「人の魂は誰にも縛られない！」

「何!？」

「人の魂程強く、確かな物はこの世に無い！ましてやそれを縛ろう等更々無理だ！それに渚には仲間がついてる！仲間が居る限り、彼は何度倒れようとも、何度でも立ち上がる！そんな彼の魂がちんけな石ころ収まるわけがない！」

ディライトがそう言うのとガリオスは、

「貴様、何者だ！」

「お節介教師な仮面ライダーだ！宜しく！」

そして渚は変身準備を完了させる。

「そして俺は、輝く光の戦士だ！頭に叩き込んで！変身！」

《カメンライド…ディライト!》

渚はディライドに変身する。

するとガリオスが、

「おのれえええ！」

そう言いながら体から光を放ちながら、アジトから外へ出る。
その瞬間地震が起き、アジトが崩れ始める。

「やばい！」

「渚君どうしよう！」

慌てる2人に対してディライドは冷静にカードを一枚装填する。

《ファイナルフォームカメンライド…キ・キ・キ・キバ！》

すると眩い光がディライドを包み、キバ飛翔態へとFFKRする。

「捕まれ！」

Dキバ飛翔態がそう言うのと2人はDキバ飛翔態に捕まる。

「おい、あんたも！」

Dキバ飛翔態は仮面の男にそう言うが、

「俺なら大丈夫だ、行け」「え……、わかった！」

Dキバ飛翔態は一瞬戸惑ったが、彼の言葉に何かを感じ、ディライ
トと彩夏と共にアジトを脱出した。

その頃ボウケンジャー達は、

「ジャベリンクラッシュ！」

「ハンマーブレイク！」

「ナツクルキャノン！」

「スクーパーフロントム！」

「シューターハリケーン！」

「スナイパーガトリング！」

それぞれの必殺技でカース達を一掃していく。

その状況を見兼ねたガジヤは、

「おのれボウケンジャー！こうなったら私が直々に貴様等を地獄に葬ってやる！」

ガジヤはそう言うつと禍々しいオーラを放ち、その姿を変える。

姿はどことなくいつものガジヤを思わせるが、人間的部分完全に無くなり、完璧な怪人へと姿を変えた。

「姿が変わった!？」

サソードRFがそう言うつと、

「我が名はガジヤドム！」

そう名乗ったガジヤドムはボウケンジャー達に強烈な一撃を浴びせる。

デイルイドがそう言うと、全員は再び立ち上がる。

「みんな、まだまだ！行くぞ！」

ボウケンレッドがそう言うと全員は一気にガジヤドムに向かって走り出す。

「カース！」

ガジヤドムをカース呼び出し行く手を阻む。

「闇影、こいつは俺に任してくれ」

デイルイドがそう言うと、

「わかった。勝てよ、渚」「ああ」

そう言うとデイルイトはボウケンジャー達に加勢する。

「彩夏、危ないから下がってる」

「わかった」

デイルイドは彩夏を避難させると、

「さて、たっぷりお返しさせてもらうぜ、ポンコツロボット！」

「やれるものならやってみろ！」

デイルイドはガリオスに右ストレートを放つがガリオスはそれを簡単に避け、デイルイドの腹部にゼロ距離で衝撃波を放つ。

「うわあああ！」

デイライドは大きく吹っ飛ぶが直ぐ様体勢を立て直し、

「だったら！」

デイライドはケータッチにコンプリートカードを装填してクレストをタッチする。

《ソウガ！アクト！セイリユウ！イプシロン！フォルス！コウキ！ドラゴ！ネオデノウ！ブレイズ！ファイナルカメンライド…デイライド！》

デイライドはコンプリートフォームにFKRすると、反撃を開始する。

そしてこちらも、

「後はお前だけだ、ガジャ！」

「どこまでも邪魔しおって！」

そして仮面ライダー達、ボウケンジャー達はガジャドムに止めを刺すべく怒涛の攻撃を開始する。

まずはデイスティール。

「さあ行くぜ！大根野郎！」

《ファイナルアタックライド…デイ・デイ・デイ・デイスティール！》

「喰らいな！」

デイスティールは『ディメンションスコール』をガジヤドムに放つ。

「ぐおおお！」

次はデイスーフ。

「お仕置きよ」

《ファイナルアタックライド…ディ・ディ・ディ・デイスーフ！》

「それっ！」

デイスーフは自身のドライバーでガジヤドムに強烈な斬撃を浴びせる。

「ぐあああ！」

次はサソードRF。

「行きます！ライダースラッシュ！」

《ライダースラッシュ！》「はあああ！」

サソードRFは毒を帯びたサソードヤイバーで敵を切り裂く『ライダースラッシュ』を放つ。

「ぐっ！」

次はスワンオルフェノク。

「えええええい！」

スワンは自身の剣でガジヤドムを貫く。

「がはっ！」

次はソウガAFとリュウガ。ソウガAFは構えを取り、右足に力を送る。

リュウガはブラックドラグバイザーにカードを装填する。

《ファイナルベント!》

ドラグブロッカーが現れリュウガは構えを取る。

「はあ!」「」

2人は飛び上がり、『アビシオンキック』と『ドラゴンライダーキック』を放つ。

「はあああ!」「」

「ぐあああ!」「」

次はデイルイト。

「行くぞ!」「」

デイルイトはカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド!…ディ・ディ・ディ・デイルイト!》

デイルイトは10枚の巨大なカードを潜り抜け敵にライダーキック

を放つ『デイメンションレッグ』を放つ。

「はあああ！」

「ぐおおお！」

そしてだめ押しの一撃にボウケンジャーとデイセンド。

「アクセルテクター！」

ボウケンレッドは銀色の鎧を見に纏う。

「デュアルクラツシャー！」

ボウケンレッドは必殺武器を呼び出し、構える。

そしてそれを支える様にボウケンブラック、ボウケンブルー、ボウケンイエロー、ボウケンピンクがそれぞれ配置につく。

さらにボウケンシルバーもサガスナイパーを構える。デイセンドもカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド》

そして悪を打ち砕く正義の一撃を浴びせる！

「コラボレーションシュート！」

「はあ！」

《デイ・デイ・デイ・デイセンド！》

ボウケンジャーの『コラボレーションシュート』、デイセンドの『デイメンションバレット』が決まりガジヤドムは今度こそ、二度と復活することなく爆発した。

「ぐああああ！」

デイルイドCFは圧倒的な強さでガリオスを追い詰めていく。
更に両手をディープライエローに輝かせ連続で『ディメンションイン
パクト』を放つ。

「はああ！」

「ぐああ！」

2人の距離がある程度開くとデイルイドCFはケータッチのクレス
トをタッチする。

《イプシロン！カメンライド…ブレイカー！》

ヒストリーオーナメントのカードが全てイプシロン・ブレイカーフ
ォームに変わり、デイルイドCFの隣にイプシロンBFが召喚され
る。

そしてカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…イ・イ・イ・イ・イプシロン！》

デイルイドCFとイプシロンBFは駆け出し、飛び上がる。
空中で一気に右足を突きだし『ブレイカープラネットスマッシュ』
を放つ。

「はああああ…！」

「ぐああああ！」

2人の攻撃を受けたガリオスは大きく吹っ飛ぶ。
デイルイドCFとイプシロンBFは着地すると、イプシロンBFは
役目を終え消滅する。

「やったか？」

だがこの程度で終わるガリオスでは無かった。

「許さんぞ！デイルイドオオオオオ！」

炎の中から聞こえる憎悪の籠った叫び声。

ガリオスは脱皮をするかの様に鋼鉄の体を破棄する。そしてその中
から巨大な漆黒の龍が現れる。

「ガアアアアアア！」

ガリオスはガリオスドラゴンへと変貌する。

「なっ、何だと！？」

流石のデイルイドCFも驚きを隠せない。
すると、

「「渚！！」」

「闇影！明石！」

デイルイドとボウケンレッドが駆け付ける。

「これは…」

「これが奴の真の姿か！」

デイライトとボウケンレッドがそう言った瞬間ガリオスドラゴンが3人に襲い掛かる。

「ガアアアアアア！」

「うわああああ！！！！」

3人は体勢を立て直しそれぞれの武器を構え応戦するが、ガリオスドラゴンはその巨大な体で彼等の攻撃を全く寄せつけない。

「くそっ！何て強さだ！」「このままでは！」

少しずつ焦り始めるデイライトとボウケンレッド。だがデイライドCFは決して諦めない。

「弱音を吐くな！俺は今こいつを倒す事考えて、すげえワクワクしてんだよ！」

その言葉を聞いた瞬間ボウケンレッドが、

「そうだ、それが冒険スピリッツだ！」

「え？ピンチの時こそワクワクする、それがあれば勝てる！絶対に！」

「これが、冒険！」

「よし！やっつてやるぜ！」

そしてデイセンドは切り札を投入する。

《カメンライド》

「大サービスだ！行け！」《オーガ！フォルス！》

デイセンドはオーガとフォルスを召喚する。

オーガとフォルスは召喚された勢いでそのままガリオスドラゴンに斬りかかる。

「渚！明石さん！一気に決めよう！」

「ああ！！！」

デイライドCFとデイライトはカードを一枚装填する。

《《ファイナルフォームライド》》

《オ・オ・オ・オーガ！》《フォ・フォ・フォ・フォルス！》

デイライドCFとデイライトはオーガとフォルスをストランザーオーガとフォルスセイバーにFFRさせる。

そしてボウケンレッドも黄金の剣・スバーンを取り出す。

デイライトはストランザーオーガを掴み、ボウケンレッドはスバーンをデイライドCFに渡し、自分はフォルスセイバーを掴む。

デイライドCFとデイライトはカードを一枚装填する。

《《ファイナルアタックライド》》

《オ・オ・オ・オーガ！》《フォ・フォ・フォ・フォルス！》

更にデイライドCFのライドブッカーからカードが一枚飛び出す。

デイライドCFがそれを掴むとカードは絵柄を取り戻す。

そしてそれを迷う事無く装填する。

《アタックライド…ズバーン！》

3人は武器を構え一気に振り下ろす！

「ズババババン！！！！」

3つの斬撃は1つになりガリオスドラゴンに直撃する。

「グギヤアアアア！」

3人の攻撃を受けたガリオスドラゴンは爆発した。

変身を解いた3人。

「やったな、渚！」

「君が来なければ俺達は負けていた」

「大したことしてねえよ」

渚は照れ隠しするように顔を逸らし、ポケットに手を入れようとす
る。

すると、

「ん？」

渚は自分のポケットに入っていたカードを取り出す。

「何だこのカード？」

見覚えの無い絵柄を失ったカード。
するとカードは突然力を取り戻す。

そこには銀色の鬼が描かれていた。

「このライダーは一体？」

その瞬間彼等の前に次元の壁が出現する。

そしてそこから1人の男が現れる。

「あつ、あれは！」

闇影はその男を見た瞬間目を見開く。

その男は闇影と同じ茶色のジャケットを着込み、柔らかく尖った銀色がかつた白髪、左目に黒い眼帯を着けた優しい雰囲気を持った男。

「マバユキさん……………」

闇影はその男の名前を呟く。

「何だ？この世界は……………」

マバユキは辺りを見回しそう言う。

すると闇影に気付き、

「おつ、青年のそのジャケット、俺と同じじゃないか！」

「えっ？……………別の世界のマバユキさん？」

マバユキはさらに続ける。

「良く似合ってるじゃないか。それに良い目をしている。まるでどんな闇も光に変えてしまう程に！」

そう言われた闇影は涙を流す。

「あ、そうだ！俺の息子にもこれを着せよう！なんか青年見てたら息子の事を思い出した。ありがとう」

マバユキはそう言つと、

「俺の名前はマバユキ、お節介な鬼のおじさんさ。じゃあな、良い目をしている青年。またいつか会おう！」

マバユキはそう言つと次元の壁へと消えていった。すると渚の持っていたカードは絵柄を失ってしまった。だが渚はそれを闇影に渡す。

「闇影、このカードはお前が持つておけ。力は無いかもしれない、だがあのマバユキって人の思いが詰まってる筈だからな」

渚はマバユキの事は知らない。だが闇影にとつて大事な人だという事は分かった。だからカードを渡した。受け取つた闇影は、

「ありがとう、渚……………！」

闇影は更に涙を流す。

暁は闇影の肩に手を置き、

「最高のプレシヤスだな」「はい！」

闇影は最高の笑顔で返事をする。

それを見ていた彩夏は笑顔になる。
すると彼女の視界にある人物が入る。
それは彼女を二度も救った仮面の男だった。
仮面の男が去ろうとする。彩夏は男を追い掛け、

「ちょっと待って下さい！」

「ん？」

彩夏は男を呼び止める。

そして、

「あの、今回はありがとうございます！」

「礼には及ばないさ」

彩夏は男に礼を言う。

そして彩夏は、

「あの、せめてお名前を！」

そう言うが、

「名乗る程の男じゃないさ」

そう言うが彩夏は食い下がる。

「じゃあせめて素顔だけでも！」

「はあ」

男はやれやれという感じに溜め息を吐き、

「なら、この事は誰にも言つなよ？」

男はそう言つと仮面を外す。

彩夏は驚愕した。

「あ、貴方は……………！」

男は直ぐ仮面を被り、

「また会おう、彩夏」

そう言つと次元の壁へと消えていった。

彩夏は未だ驚愕の色を隠せなかつた。

すると、

「彩夏！帰るぞ」

「あ、うん」

別れの時。

先ずは渚達とボウケンジャーから。

「明石、今回は本当に世話になった」

「だが、久し振りに楽しい冒険が出来た、礼を言つのはこつちだ。ありがとう」

暁はそう言つと仲間と共に去っていく。

渚はその姿をカメラに収めた。

次は渚達と闇影達。

渚と闇影は黙ったままだった。

そしてゆっくり近付き握手をする。

最早2人に言葉等いらなかった。

それ程までに2人の絆は固かった。

彼等は言葉を交わす事無く別れる。

渚はそんな彼等をカメラに収めた。

「帰るぞ」

そうして自分達の帰る場所へと歩いていった。

岬写真館。

渚達はコーヒーを飲んでいた。

すると信次郎が、

「渚君写真出来たよ」

そう言って2枚の写真を持ってくる。

「この2枚は良い写真だよ」

2枚の写真の内の1枚は6人の冒険者達の2つの姿が写されていた。そしてもう1枚は力強く前を見詰める闇影を優しい笑顔で見守るマバユキが写されていた。

渚はその写真を手に取り、

「これから頑張れよ、闇影」

そう呟くと写真を置き、

「さて、次の世界に行くか」

渚がそう言うのと同時に背景ロールが降りてくる。

「これは……………」

背景ロールにはどこの世界にもない文字が記された石板が描かれていた。

「……………クウガ？」

今、更なる戦いが始まる……………。

第25話 最高のプレシヤス（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……………。

第26話 最終三部作：第一部・前編“クウガの世界”

全てを破壊し、全てを繋げ！

第26話 最終三部作：第一部・前編 “クウガの世界” (前書き)

今回、オリジナルのライダーが登場します。

第26話 最終三部作：第一部・前編 “クウガの世界”

これまでの仮面ライダーデイライドは……………。

詳しくは第1〜25話をお読み下さい。

ボウケンジャーの世界を後にした渚達は次なる世界に足を踏み入れていた。

渚達はとりあえず町を歩いていた。

「今度は何の世界だ？」

「見たところ変わった所は無いよ？」

「どの世界も最初はそんなもんだろ」

上からユウセイ、彩夏、渚の台詞。

渚の言う様にどこの世界も最初は平和だ。

最初の内は。

「イーッ！イーッ！」

妙な掛け声と共に黒い服を着た集団が現れる。

「シヨツカーか。相変わらずしつこい奴等だ」

渚はめんどくさそうに言う。

「渚、奴等はシヨツカーじゃない」

「何？」

「奴等はギガシヨツカーっていうらしい」

「ギガシヨツカーだろうが何だろうが関係ねえ。叩き潰すだけだ」

渚はそう言つと変身準備を完了させる。

「変身！」

《カメンライド…！ デイライド！》

渚はデイライドに変身するとライドブツカー・ソードモードを構えシヨツカー戦闘員達に向かつて走り出す。

もう1人の世界の破壊者・デイライド。
幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

第26話 最終三部作：第一部・前編“クウガの世界”

デイライドはライドブツカー・ソードモードでギガシヨツカー戦闘員達を次々と薙ぎ倒していく。

「ギガシヨツカーだか何だか知らねえが、大したことねえな」

デイライドは途中喋りながらも余裕で戦闘員達を倒していく。するとデイライドの前方に次元の壁が出現し、2体の怪人が姿を現す。

「オルフェノクとイマジンか……………」

デイライドの前に現れた2体の怪人。

フロッグオルフェノクとバットイマジン。

2体はデイライドに襲い掛かるが、デイライドは余裕で避け、

「ギガシヨツカーってのは色々な世界の怪人が結託してるって訳か」

デイライドはそう言うと言いつつライドブッカー・ソードモードでフロッグとバットを滅多斬りにすると、ライドブッカーをブックモードに変型させ、左腰に戻す。

そこへフロッグが右ストレートを放つが、デイライドはしゃがんで避け、右手をディープライエローに輝かせアッパーの要領で『デイメーションインパクト』フロッグに放つ。

「はあっ！」

「ぐあああー！」

『デイメーションインパクト』を受けたフロッグは跡形も無く、青い炎と共に灰と化した。

だがそこへバットが低空飛行でデイライドに突進して来た。

「どわっ！」

デイライドは軽く吹っ飛ぶが、直ぐ様体勢を立て直しライドブッカー

ーからカードを一枚取り出す。

「こいつで行くか」

そう言っつてカードを一枚装填する。

《カメンライド…アクト!》

デイルイドは淡い光に包まれ、デイルイド・アクト・アースフォー
ムにKRする。DアクトEFは低空飛行を続けるバットに一気にし
がみつぎ、バットを地上に引き摺り降ろし連打を仕掛ける。

「これで決める!」

DアクトEFはライドブッカーからカードを一枚取り出し装填する。

《ファイナルアタックライド…ア・ア・ア・アクト!》

DアクトEFはクロスホーンを展開させ構えをとる。

そして一気に飛び上がり右足を突きだし『ライダーキック』を放つ。

「はあああ!」

「ぐあああ!」

DアクトEFは着地すると、デイルイドに戻り左手首を握る。

「ま、こんなもんか」

デイルイドは一息漫くが、

「ん？」

何かの気配を感じ後ろを振り返る。

「何？」

そこにいたのは、ネガの世界で倒した筈の、

「アナザーアギトとリュウガだと!？」

アナザーアギトと仮面ライダーリュウガだった。

「お前等はネガの世界で仕留めた筈じゃ？」

デイライドが困惑しているとどこから声が聞こえて来た。

「そいつらはネガの世界のライダーではない」

「ああ、僕達ギガシヨッカーが生み出したダークライダーさ」

「その声は……!」

デイライドはどこかから聞こえて来る声を聞いた瞬間今までに無い程に憎しみの籠った声を発した。

「やあ、久し振りだね、デイライド」

「少しは強くなったか？」

声の主である2人の青年が姿を現した瞬間デイライドは冷静さを欠いた様に、

「お前等!」

2人の青年の内、1人は赤いライダーズジャケットに身を包んだ青年。
もう1人は髪を右側をクリップで留め、分厚い本を持った青年。
デイルイドは2人の青年の名を呟く。

「照井竜！フィリップ！」

照井竜。

フィリップ、本名は園崎来人。

仮面ライダーWの世界でガイアメモリを悪用する組織・ミュージアムから風都と呼ばれる街を守った仮面ライダーである。

因みにフィリップは左翔太郎と仮面ライダーWに変身し、照井竜は仮面ライダーアクセルに変身する。

だが何故今この組合せなのか？

気になる所だが今は触れないでおこう。

いずれ解る事なのだから。竜はデイルイドに、

「久しぶりに会ったんだ。お前がどれだけ腕を上げたか見せてもらおうか。行け」

竜がそう言うとアナザーアギトとリュウガはデイルイドに襲い掛かる。

「ちっ！退け！邪魔だ！お前等に用は無い！」

デイルイドは悪態をつきながらアナザーアギトとリュウガに応戦する。

「あんまりそのダークライダー達を甘く見ない方が身のためだよ？」

何故ならネガの世界のダークライダーとは戦闘能力は別格だからね」
フィリップが言う様にアナザーアギトとリュウガはネガの世界の時より比べものにならないくらい強かった。
それでも応戦出来るデイルイドも様々な世界を巡り格段に強くなっているという事だろう。
だが強くなったのはデイルイドだけではなかった。

「変身！」

ユウセイは走りながらソウガ・アビシオンフォームに変身しアナザーアギトに飛び蹴りを放つ。

「はあ！」

「ぐっ！」

ソウガAFはアナザーアギトと対峙する。

「ソウガか、彼も中々厄介だね」

「無限の闇になられる前に………」

竜とフィリップがそんな事を言っていると、アナザーアギトとリュウガは何者かに撃たれた。

「ディセンド、だね」

フィリップは冷静に言う。

「「達也……！」」

達也はディライドとソウガAFに駆け寄り視線を竜とフィリップに向ける。

「てめえ等が出て来たって事は、アイツが動き出したのか？」

「アイツ………？」

ディライドは疑問の声を上げるが達也は無視して、

「アイツ、本気なのか………？」

「ああ、奴は本気だ」

「誰も彼を止める事は出来ない」

達也の疑問に答える竜とフィリップ。

その答えを聞いた達也は変身準備を完了させ、

《カメンライド》

「させねえ！絶対に！変身！」

《ディセンド！》

達也はディセンドに変身するとアナザーアギトとリュウガにディセンドライバーを放つ。

ソウガAFもそれに続きアナザーアギトに右ストレートを放つ。

ディライドは今までに無くディセンドが真剣だったのに疑問を抱いていた。

「達也の奴、一体どうしたんだ？」

ディライドが困惑していると竜とフィリップが、

「1人仲間外れになった様だな」

「だったら僕達が相手になるよ？」

竜とフィリップがそう言った瞬間ディライドは身構える。

竜は2つのスロットが設けられた赤いベルト・ダブルドライバーを装着する。

するとフィリップの腹部にもダブルドライバーが装着される。

フィリップは緑色のガイアメモリを、竜は赤色のガイアメモリを取り出しボタンを押す。

《サイクロン！》

《アクセル！》

そして2人は声を揃えて言う。

「「変身！」「」

そう言うとフィリップはサイクロンメモリを右スロットにインサートする。

するとサイクロンメモリは消えフィリップもまるで魂が抜けたかのように倒れる。消えたサイクロンメモリは竜の装着するダブルドライバーの右スロットに現れる。

竜はサイクロンメモリをインサートするとアクセルメモリを左スロットにインサートし両スロットを展開する。

《サイクロン！アクセル！》

その瞬間竜は瞬く間に姿を変えた。

姿形は仮面ライダーWそのものだが、複眼は青く左半身が赤の仮面ライダーW・サイクロンアクセルに変身した。

『さあ、腕試しだ』

W C A に存在するフィリップの意思が喋っているのか、右の複眼が点滅する。

そしてW C A はエンジンブレードを構え、

「さあ、振り切るぜ」

そうやってデイライドに向かって走り出す。

デイライドはライドブッカー・ソードモードで応戦する。

デイライドとW C A の戦いは激しさを増し、戦いの場は河川敷へと変わる。

勿論、ソウガAF達も同じ場所で戦っていた。

「この程度か？デイライド」

「黙れ！」

デイライドは冷静さを欠いているのか、W C A の挑発に簡単に乗っけてしまったライドブッカー・ソードモードを振り回すだけの無鉄砲な戦法になっていた。

その隙を突いたW C A はエンジンブレードでデイライドの腹部に強烈な一撃を浴びせる。

「はあ！」

「ぐっ！」

デイライドは後退りするだけで無く膝まで着いてしまう。

W C A はその隙も見逃さず一本のガイアメモリを起動させる。

《エンジン！》

W C Aはエンジンメモリをエンジンブレードにインサートする。

《エンジン！》

そしてエンジンブレードのトリガーを引き、必殺技発動の準備を完了させる。

《エンジン！マキシマムドライブ！》

W C Aは風を纏ったエンジンブレードで敵をCの字に切り裂く【ダイナミックサイクロン】を放つ。

「^っダイナミックサイクロン！！」^っ

「ぐあああ！」

デイルイドは【ダイナミックサイクロン】を受け大きく吹っ飛ばす。W C Aはそこへさらに追い撃ちを掛けるべく、エンジンブレードを地面に突き刺し左スロットからアクセルメモリを引き抜きベルトの右腰に設けられたスロット・マキシマムスロットにアクセルメモリをインサートする。

《アクセル！マキシマムドライブ！》

するとW C Aの周りに竜巻が出現しW C Aをゆっくりと持ち上げていく。

そして一気に両足キックの体勢に入り、サイクロンサイドとアクセルサイドが分離し順にキックを浴びせる【アクセルエクストリーム】を放つ。

「『アクセルエクストリーム!!』」
「ぐあああ!」

【アクセルエクストリーム】を受けたデイライドはそのまま川に落ち流されていってしまった。

「「渚!!」」

「渚君!」

ソウガAF達は仲間の名を叫ぶ。

だがその瞬間に出来てしまった隙を突かれソウガAFとデイセンドはアナザーアギトとリュウガに強烈な一撃を浴びせられた。

「「ぐあああ!!」」

アナザーアギトとリュウガはWCAと合流する。

ソウガAFとデイセンドは何とか立ち上がる。

「デイライドは始末した。もう貴様等に用は無い」

WCAはそう言うがデイセンドは、

「そういう訳には行かねえんだよ!お前等の好きにはさせねえ!」

デイセンドはそう言うがWCAは、

『照井竜、デイライドが居ないなら僕達は勝ったも同然。退くよ
「だな」』

WCAはそう言うつとエンジンブレードのトリガーを引く。

《エンジン！マキシマムドライブ！》

WCAは敵にCの字の衝撃波を放つ【サイクロンスラッシャー】を放つ。

「『サイクロンスラッシャー！！』」

放たれた【サイクロンスラッシャー】はソウガAF達に当たる事無く地面に当たり、大きな土煙を上げる。

「『うわああ！！！！』」

ソウガAF達は軽く吹っ飛び、WCA達はその隙に姿を消した。

「くそっ！逃げられた！」

デイセンドがそう言うと2人は変身を解く。

「とにかく渚を探さないと！」

「うん！」

ユウセイがそう言うとユウセイと彩夏は走り出した。達也はその場に佇みながら、

「絶対にさせねえ……………、絶対に！」

達也はそう言うとWCA達を探す為に走り出した。

1人の青年が河原を走っていた。

「一体、何が！」

恐らく先程のディライドとWCAの戦闘の際に起きた爆発等を聞きつけ現場に向かっていているのだろう。

「ん？」

青年は走っているとあるものを見付けた。

「……………人！？」

青年が見付けたあるものとは、人。渚だった。

青年は渚を川から上げた。

暫くすると渚は目を覚ました。

「ん……………ここは？」

「あ、気が付いた。大丈夫か？」

青年は渚に近付きそう聞く。

「ああ、なんとか。あんたが助けてくれたのか？」

渚がそう聞くと青年は、

「ああ、そこに倒れていたから」

そう言っつて渚の倒れていた場所を指差す。

「ありがとう、助かった」「良いつて良いつて！あ、それより……」

青年はある物を取り出し渚に差し出す。

「これ、あんたのか？」

青年が差し出してきた物、それはドライライダーとライドブツカーだった。

「ああ、俺のだ」

渚はそう言っつとドライライダーとライドブツカーを受け取る。
青年は渚にある事を聞く。

「なあ、あんたもしかしてドライライドか？」

そう聞かれた渚は、

「そうだが、なんだ、あんたも俺を破壊者だの悪魔だの言っつつもりか？」

渚は皮肉混じりにそう言っつた。

それもその筈だ。

今までのどの世界に行こうと必ず言われてきているのだから。だが青年は意外な返答をしてきた。

「アイツと……………土と旅して来たんだ、あんたが破壊者じゃないって事ぐらいわかるさ」

「土と……………？」

「ああ」

渚は青年の顔を暫く見詰める。

そしてハツとした顔になり、

「あんたまさか……………」

渚がそう言つと青年は自らの名を名乗つた。

「俺は小野寺ユウスケ、仮面ライダークウガだ」

ユウスケはそう言つと微笑んだ。

その頃竜とフィリップは、

「どつするフィリップ。デイルイドはあの程度では死なんぞ」

「ああ、そんな事わかってるさ」

「どつするつもりだ」

「誘き出す」

「どつやって?」

フィリップはそう聞かれると怪しい笑みを浮かべ、

「人間を襲えば現れるんじゃないかな」

フィリップがそう言うのと竜とフィリップは歩き出した。

渚はユウスケにこの世界に関する事を聞いていた。

まずここは小野寺ユウスケの変身する仮面ライダークウガの世界。平和になった筈のこの世界に突如としてギガシヨツカーが襲来しユウスケはクウガとなり戦っていた。

そんなある日苦戦を強いられていたユウスケの前に、ギガシヨツカーを追って現れたレジエンドライダーの1人、仮面ライダーZXが現れクウガと協力しギガシヨツカーと戦っていた。

だがZXはギガシヨツカーの策略により元のZXの世界に戻されてしまい、ユウスケはまた1人で戦っているのだという。

「成程な、ギガシヨツカーは今様々な世界を侵略しようとしてるって訳か」

「ああ」

渚は頷きながらギガシヨツカーの目的をある程度把握しようとしていた。

すると街の方から爆発が起きた。

「何だ!？」

「まさか、ギガシヨツカー!？」

渚はそう言うと駆け出した。

ユウスケもそれに続いた。

渚とユウスケが現場に到着するとそこにはWCAとアナザーアギトとリュウガと様々な世界の怪人達が人々を襲っていた。

「あいつ等!」

渚は憎しみの籠った瞳でWCAを睨みつける。

それを見たユウスケは、

「あいつに何か恨みがあるのか？」

そう聞かれた渚は、

「あいつ等は俺を救ってくれた家族を壊した!俺は絶対にあいつ等を許さない!」

それを聞いたユウスケは、

「復讐なんか、意味が無い。何も残らない」

「何？」

「渚を救ってくれた家族はそんな事を望んでいるのか?俺はそうは

思わない。渚にとって今守るべきモノは何だ？」

「俺の守るべきモノ……………」

渚は暫く考え小さく呟いた。

「仲間……………」

それを聞いたユウスケは微笑みながら、

「だったらそれを守れば良い。それは渚を救ってくれた家族を忘れる訳じゃない。二度と同じ悲しみを繰り返さない為に。仮面ライダーの力を復讐なんかに使っちゃ駄目だ。人々の笑顔の為に仲間の笑顔の為に使っんだ！」

「小野寺……………」

ユウスケは確かな眼差しで渚にそう言った。
すると、

「渚！」

ユウセイと彩夏が駆け付ける。

「この人達が渚の仲間か」「ああ」

ユウスケがそう言うと渚は一步前に出て、

「ユウセイ！小野寺！行くぞ！」

「ああー！！」

3人は変身準備を完了させる。

「『変身！』」

《カメンライド…ディライド！》

渚はディライド、ユウセイはソウガAF、ユウスケは仮面ライダー
クウガ・マイティフォームに変身する。

「行くぞ！」

ディライドがそう言うのと3人のライダーは走り出す。仲間の為、世
界の為に。

『来たようだよ、照井竜』「お前の言う通りだったな、フィリップ」

WCAはエンジンブレードを構えそう言った。

ディライドはライドブッカー・ソードモードで怪人達を切り裂いて
いく。

ソウガAFとクウガMFは格闘で怪人達を薙ぎ倒していく。
するとアナザーアギトとリュウガがディライドに襲い掛かる。
だがディライドはそれを避け、先程とはまるで違う勢いでアナザー
アギトとリュウガを圧倒する。

「どうした、そんなもんか？」

ディライドがそう言うのとアナザーアギトとリュウガは動きを止める。
するとアナザーアギトは構えをとる。

その瞬間淡い光がアナザーアギトを包む。

光が消えると、そこにいたアナザーアギトは別の姿に変わっていた。
姿形はアギト・シャイニングフォームそのものだが、赤い部分が緑、
銀の部分が銅、複眼が灰色になった、アナザーアギト・ファントム

フォームに強化変身する。

さらにリュウガはデッキからカードを一枚取り出す。それは羽の描かれたカード、【サバイブ 漆黒】を取り出す。

するとブラックドラグバイザーが銃型のブラックドラグバイザーツバイに変化し、カードを装填する。

《サバイブ!》

リュウガは漆黒の炎に包まれ、リュウガサバイブに強化変身する。

「パワーアップしやがっただと!?!」

流石のデイライドもこの展開に動揺していた。

アナザーアギトFFとリュウガSはデイライドに襲い掛かる。

デイライドは何とか応戦するがパワーアップしたことで格段に強くなった2人のダークライダーに少しずつ圧されていた。

するとそこへ、

《カメンライド…ヘラクレス!ケタロス!》

仮面ライダーヘラクレスと仮面ライダーケタロスが現れアナザーアギトFFとリュウガSに攻撃する。

「大丈夫か?渚」「達也か。何とかな、助かった」

デイセンドはデイライドの無事を確認すると、

「じゃあお前はあのダークライダー共を頼むぜ。Wは俺がやる」

「ああ、任した。俺も直ぐ合流する」

デイルライドがそう言うのとデイスンドは走り出す。

デイルライドはヘラクスとケタロスが戦っている隙にケータッチを取り出しコンプリートカードを装填しクレストをタッチしていく。

《ソウガ！アクト！セイリユウ！イプシロン！フォルス！コウキ！ドラゴ！ネオデンオウ！ブレイズ！ファイナルカメンライド…デイルライド！》

デイルライドがコンプリートフォームに強化変身したと同時にヘラクスとケタロスはアナザーアギトFFとリュウガSに倒されてしまう。だがそこへデイルライドCFがライドブッカー・ソードモードで2人のダークライダーを切り裂く。

デイルライドCFはアナザーアギトFFとリュウガSに全く反撃させずに何度も切り裂く。

そしてある程度距離が開くとケータッチのクレストをタッチする。

《コウキ！カメンライド…アームド！》

ヒストリーオーナメントのカードが全て装甲光鬼変わり、デイルライドCFの隣にアームドセイバーを持った装甲光鬼が召喚される。そしてカードを一枚取り出し装填する。

《ファイナルアタックライド…コ・コ・コ・コウキ！》

デイルライドCFと装甲光鬼はライドブッカー・ソードモードとアームドセイバーを構える。

そしてそれを大きく振るい斬撃を放つ【音撃刃・鬼神覚醒】を放つ。

「はあああ！！」

「ぐあああ！！」

【音撃刃・鬼神覚醒】を受けたアナザーアギトFFとリュウガSは無惨に爆発した。

デイセンドはWCAに圧倒されていた。

「ちっ！中々やるじゃねえか！」

デイセンドはそう言ってデイセンドライバーを放つがWCAはそれを避けエンジンブレードで切り裂く。

「ぐっ！」

だがその瞬間デイライドCFがWCAをライドブッカー・ソードモードで切り裂く。

「はあっ！」

「ぐっ！」

そしてデイライドCFは一気にWCAにラッシュを仕掛ける。

2人は互角の戦いを繰り返していた、端から見れば。

「なんだこいつ！」

『先程とは比べものにならない程に強くなっている！』

コンプリートフォームに強化変身しているからか、それとも先程のユウスケの言葉で焦りを無くしたのか、確実にWCAを圧していた。この状況を不利と感じたのか、WCAは次元の壁を出現させる。

そしてデイライドCFの相手を怪人達に任せ自分は次元の壁を越え別の世界に逃亡した。

「待て！」

デイライドCFはWCAを追おうとするが怪人達がそれを遮る。

するとそこへドラゴンフォームにフォームチェンジしたクウガとグラジャラボラスフォームにフォームチェンジしたソウガが駆け付け、

「渚！ここは俺達に任して！」

「Wを追うんだ！」

「わかった！頼む！」

ソウガGFとクウガDFに促されデイライドCFは次元の壁を越える。

だが、

「ぐあっ！」

越えると同時にコンプリートフォームの変身が解けてしまう。

「久しぶりだからか？」

久しぶりに世界を次元の壁で越えたせいなのか、デイライドは少しダメージを負った。

「それより、ここは……………」

デイライドが来たのは夜の街。

すると、

「久し振りだな、渚」

デイルイドは声のする方へ向く。

「お前は、村雨良!」

村雨良、仮面ライダーZX。

「てことは、ここはZXの世界?」

デイルイドがそう言うと良は、

「世界の破壊者、デイルイド!悪いがここでお前を倒す!」

「何!?!」

デイルイドは驚愕した。

それもそのはず、かつてともに戦った仲間が自分を倒そうとするのだから。

「変身!」

良は構えをとりそう叫ぶ。

「仮面ライダー、ZX!」

変身を完了させポーズをとる。

そして飛び上がりデイルイドに襲い掛かった………!

第26話 最終三部作：第一部・前編 “クウガの世界”（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……………。

第27話 最終三部作：第一部・後編 “究極の闇と忍者ライダー”

全てを破壊し、全てを繋げ！

第27話 最終三部作：第一部・後編“究極の闇と忍者ライダー”（前書き）

今回もオリジナルライダーが登場します。

そしてとあるゲームのとある力が登場します。

第27話 最終三部作：第一部・後編“究極の闇と忍者ライダー”

これまでの仮面ライダーディライドは……………。

詳しくは第26話をお読み下さい。

W・サイクロンアクセルを追って別の世界に移動したディライド。
だが彼はそこで以外な人物に会った。

「村雨良!?!」

そう、レジェンドライダーは1人、村雨良/仮面ライダーZX。
良はZXに変身するとディライドに襲い掛かった。

「止める!良!」

ディライドはZXを説得するがZXは聞く耳を持たず攻撃を続ける。

「くそっ!どういう事だ!」

ディライドは防戦するしかなかった。
するとZXが何者かに撃たれた。

「ぐっ!」

ディライドが銃弾の飛んできた方向を見ると、そこにはディセンドライバーをクルクル回しながらこちらに歩いて来るディセンドがいた。

「恐らくここはZ Xの世界だな」

ディセンドはそう言いながらディライドに近づく。

「だろうな。だが何故良は俺に？」

「さあな。でも今はこいつの相手をしてる暇はねえんだよ」

ディセンドはそう言うとカードを一枚装填する。

《カメンライド》

「頼むぜ」

《ファム！》

召喚されたファムはZ Xに斬りかかる。

「何だ！？」

ファムの登場に動揺するZ X。

そして、

「さ、今の内にWを追え」「わかった！」

ディライドはZ Xがファムと戦っている隙にWを追う為に走り出した。

もう一人の世界の破壊者・デイライド。
幾つもの世界を巡り、その瞳は何を見る？

あれからかなり時が過ぎ、昼間になっていた。
そんな街中を竜とフィリップが歩いていった。
特に何かをする訳では無いが、何かを待っている様にも見える。
その時だった、街の至るところから金属音が聞こえて来た。

「漸くか」

「意外と早かったね」

竜とフィリップがそう言った瞬間、突如車の窓から聖龍にKRした
デイライドが二人に襲い掛かった。

「はあっ！」

だが二人はD聖龍の攻撃を簡単に避ける。

「漸く見付けた！ミラーワールドを走り回った甲斐があったな！」

D聖龍は昨晩から竜とフィリップを捜すべくミラーワールドを走り
回っていたのだ。

D聖龍はライドブッカー・ソードモードを構え、

「さあ、覚悟しろ！」

D聖龍がそう言うのと竜とフィリップは変身準備を完了させ、

「悪いが覚悟するのは貴様の方だ」

「行くよ、照井竜」

《ヒート！》

《アクセル！》

「変身！！」

《ヒート！アクセル！》

竜とフィリップは右半身と左半身が赤の、W・ヒートアクセルに変身した。

WHAはエンジンブレードを構え、

「さあ、振り切るぜ！」

そう言ってD聖龍に向かって走り出す。

D聖龍も対抗するべく走り出す。

二人は激しい斬り合いを展開する。

だがWはヒートアクセルになった事でサイクロンアクセルより強力な戦闘能力を発揮している。

その状況を不利と判断したD聖龍はWHAから離れミラーワールドに入る。

そしてWHAの背後の窓から現れ切り裂く。

「何っ！？」

WHAは振り向くと同時にエンジンブレードを振るうがD聖龍は再

びミラーワールドに入り姿を消す。

そして再び不意打ちをするという戦法を続ける。

そんな状況に痺れを切らしたWHAは、

『仕方無い…………、オーガ！グレイブ！』

WHAがそう言った瞬間D聖龍が窓から現れ切り裂こうとするが、突如D聖龍の背後からオーガとグレイブが現れオーガストランザーとグレイブラウザーでD聖龍を切り裂いた。

「なっ！？ぐあっ！」

D聖龍は突然の攻撃に成す術も無く地面に叩き付けられた。

『残念だったね。ダークライダーはアナザーアギトとリュウガだけじゃないんだよ』

WHAはD聖龍を踏みつけながらそう言った。

「ま、まさか、九人のダークライダー全てを！？」

「その通りだ。全ては貴様を葬る為にな」

WHAはそう言うとエンジンブレードを構えD聖龍に突き刺そうとする。

だがその時、

《アタックライド……ブラスト！》

黄緑の弾丸がWHAを襲った。

「ぐっ！デイセンドか……！」

WHAの言う通りデイセンドがドライバーを構えながらこちらに走ってきた。

D聖龍はその隙を突きライドブッカー・ソードモードでWHAを切り裂く。

「はあっ！」

「ぐっ！」

D聖龍はWHAを退かしデイセンドに駆け寄る。

「悪い、助かった！」

「それよりあいつ等だ」

デイセンドがそう言うとD聖龍とデイセンドはそれぞれの武器を構えWHAとオーガとグレイブの方を向く。するとWHAがデイセンドにある質問をする。

「デイセンド、何故貴様は俺達の邪魔をする？」

「アイツを止める為。彼女はそんな事を望んでいないと伝える為」

デイセンドはWHAの質問にいつもとは全く違う口調で答えた。

『デイライド、君は？復讐かい？』

WHAは嘲笑うかのようにD聖龍に質問した。

だがD聖龍は鼻で笑い、

「復讐？馬鹿かお前は。俺はお前等なんか眼中に無い。俺の目的は

渚と達也の前に現れたのは、

「良！」

仮面ライダーZXこと村雨良。

渚と良は場所を変え、工場にあるコンテナとコンテナの間の目立たない場所で話していた。

「お前を疑って悪かった……………」

良は渚に謝罪する。

だが渚はその事を全く気にせず、

「一体何があつたんだ？」

渚がそう聞くと、

「鳴滝という男に言われてな。お前がこの世界を破壊すると」

「また鳴滝か……………」

渚は鳴滝の行動に呆れていた。

「やはりあの男の言う事は嘘だったという事が」

「ああ、嘘ばかりだ」

渚はそう言うと次の質問をした。

「小野寺ユウスケに会ったのか？」

「ああ、ユウスケとは共に戦った。ユウスケは今どうしている？」

良がそう聞くと渚は、

「戦っている、独りで、ずっと……………」

「そうか……………」

良が暫く黙っていると渚が、

「戻る事は出来ないのか？クウガの世界に」

「分かん。何せ最近ギガシヨツカーは全く現れなくなったからな」

「じゃあ俺やWが久し振りの敵って事か」

「そうなるな」

渚と良が話込んでいると、突如二人の遠くにあるコンテナが爆発した。

「っ！なんだ!?!」

二人は急いで広い場所に出た。

そこにはオーガとグレイブとギガシヨツカー戦闘員達と様々な世界の怪人が居た。

「ちっ、俺達を探してたって訳か」

「その様だな」

二人はそう言うと変身準備を完了させる。

「変身!!」

《カメンライド…デイライド!》

「仮面ライダー、ZX!」

デイライドとZXはそれぞれ戦いを始める。

最初こそは優勢だったものの、敵の数の多さとオーガとグレイブのスペックの高さに段々と押され始めていた。

「数が多い!」

ZXがそう言った瞬間何体かの怪人とグレイブがZXに襲い掛かる。

「何っ!ぐあああ!」

それを見たデイライドは、

「良!ちっ、ならこれだ!」

デイライドはそう言うカードを装填する。

《フォームライド…イプシロン!マッハ!》

デイライドはデイライド・イプシロン・マッハフォームにFRする。

《スタートアップ!》

DイプシロンMFはイプシロンマッハを起動させZXの下へ行く。
そして高速移動で敵を翻弄し、一気に怪人達を片付ける。

「はあっ！」

DイプシロンMFがディライドに戻った瞬間、ディライドとZXにオーガとグレイブに襲い掛かった。

「ぐああー！」

ディライドとZXは何とか応戦するも戦闘員や怪人達に邪魔され思う様に戦えなかった。

ディライドはその状況を打開すべくカードを一枚装填する。

「これで行く！」

《ファイナルカメンフォームライド：キ・キ・キ・キバ！》

ディライドはディライド・キバ・ドガバキエンペラーフォームにFKFRする。

そしてライドブッカー・ソードモードを装備して周りの怪人達を一掃すると、オーガとグレイブに反撃する。

だが再び怪人達が現れるがZXが一人でそれを引き受けDキバDEFは思いつきりオーガとグレイブと戦う。

オーガとグレイブはDキバDEFの圧倒的な強さの前に、撤退するべく次元の壁を出現させクウガの世界に帰還する。

だがその際一時的にZXの世界とクウガの世界が繋がる。

「クウガの世界と繋がった！」

クウガの世界ではユウセイとユウスケが竜とフィリップと対峙していた。

「今なら！」

DキバDEFはクウガの世界に行こうとするが、怪人達がそれを阻止する。
だがその時、

「衝撃集中爆弾！」

ZXが怪人達を一掃して、

「渚！行くだ！この世界は俺が守る！」

「……………頼んだ！」

DキバDEFはZXに促され次元の壁に特効する。
だがWを追った時と同様に変身が解けてしまう。

「渚！」

ユウスケは渚に駆け寄り彼を立たせる。
竜は渚に、

「いい加減諦めろ。お前等に勝ち目は無い」

竜がそう言つと渚は、

「何故お前にそんな事言われなきゃなんねんだ？それにそう言われてはい、わかりましたって言う程俺も馬鹿じゃねえんだ」

するとフィリップが、

「相変わらずしつこいね」

渚はさらに続ける。

「それに達也と何か因縁があるらしいが、話聞いてりゃ誰かの勝手で世界を壊そうとしてるらしいじゃねえか。ふざけるなよ、一人の都合で何で今を精一杯生きてる奴等が死ななきゃなんねえんだ！ そんなの俺が絶対に許さん！」

渚がそう言うと竜とフィリップは渚を睨み付ける。

渚はそんな二人を無視してユウスケの方を向き、

「だよな、ユウスケ」

「ああ！」

ユウスケは渚の問い掛けに力強く返事する。

するとフィリップが、

「随分偉そうな事言ってくるねえ。君、何様のつもりだい？」

そう聞かれた渚は変身準備を完了させいつものあれを言う。

「俺は、輝く光の戦士だ！変身！」

《カメンライド…！ デイライド！》

渚はデイライドに変身する。

するとライドブツカーからカードが一枚飛び出す。

デイライドがそのカードをキャッチすると、カードは絵柄と力を取り戻す。

それはZXのKRカードだった。

するとカードが何者かに奪われた。

「達也」

ZXのカードを奪ったディセンドは、

「このカードはお前には使えない」

ディセンドはそう言うとそのカードを装填する。

《カメンライド》

「はっ！」

《ゼクロス！》

召喚それたのはZXではなく村雨良だった。

「良さん……………」

「久し振りだな、ユウスケ！」

ユウスケと良は再会を喜ぶ。

そこへユウセイが入り、

「よし、二人共、行こう！」

「ああー！！」

三人は変身準備を完了させる。

「『変身！！』」

ユウセイとユウスケと良はソウガ・アビシオンフォーム、クウガ・マイティフォーム、ZXに変身する。

「何人来ようが同じだ」

「行くよ、照井竜」

竜とフィリップは変身準備を完了させる。

《ヒート！》

《アクセル！》

「変身！！」

《ヒート！アクセル！》

竜はWHAに変身する。

そしてWHAの後ろにオーガとグレイブが現れる。

「行くぞ！」

デイルイドの声を合図に全員は一気に走り出す。

デイルイドは飛び上がりWHAに攻撃しようとするが、オーガがそれを阻止した為デイルイドは仕方無くオーガと戦う事になった。

代わりにデイスンドとソウガAFがWHAと、クウガMFとZXがグレイブと戦う。

クウガMFとZXはグレイブと互角の戦いをしていた。

だが二対一という事もあってグレイブは若干圧され気味だった。

クウガMFとZXはこのまま一気に押しきろうとするが、グレイブは二人の攻撃を避け、ジャンプして二人の背後に廻る。

そして左腕に装着された機械・ラウズアブゾーバーにスピードでも何でも無いカテゴリーQのカードを装填する。

《アブゾーブクイーン！》

さらにカテゴリーQと同じくスピードでも何でも無いカテゴリーKをラウスする。

《エボリューションキング!》

グレイブはラウスアブゾーバーの力によりカテゴリーKと融合した黄金の重剣士、グレイブ・キングフォームに強化変身する。

「パワーアップした!？」

グレイブKFは重醒剣キングラウザーでクウガMFとZXを切り裂く。

「「うわあああ!！」」

グレイブKFの圧倒的な強さの前にクウガMFとZXは手も足も出ない。

「ここは、あれだ!！」

クウガMFはそう言うと再び構えをとる。

するとクウガMFから黒いオーラが発生する。

「超変身!！」

クウガMFは究極の闇と呼ばれる、クウガ・アルティメットフォームに強化変身する。

だがグレイブKFは臆せず立ち向かおうとするがクウガUFはゆっくり右手をグレイブKFに向け、超自然発火能力を発動しグレイブKFを吹き飛ばす。

「うわああああ！」

クウガUFとZXは並び立ち、

「ユウスケ、決めるぞ！」「はい！」

クウガUFとZXは一気に飛び上がる。

そして【アルティメットキック】と【ZXキック】を放つ。

「ダブルキック！！！」

【ダブルキック】を受けたグレイブKFはダメージに耐えきれず大爆発した。

「ぐああああ！」

デイルイドとオーガは互角の戦いをしていた。

二人は全く隙も見せず幾度となく切り合う。

だがデイルイドはオーガがオーガストランザーを振り上げた瞬間に出来た一瞬の隙を見逃さなかった。

「っ！そこだ！はあっ！」

デイルイドはライドブッカー・ソードモードでオーガの腹部に強烈な一撃を浴びせる。

「ぐっ！」

オーガは後退する。

するとオーガストランザーを破棄してオーガのカラーリングになったファイズブラスター、オーガブレイバーを取り出す。

そしてオーガブレイバーに変身コードを入力する。

《000…スタンディングバイ》

そしてオーガフォンをオーガブレイバーに装着する。

《アンウェイクニム！》

オーガは全身が金色に輝く強化形態、オーガ・ブレイバーフォームに変身する。

「こいつもか」

オーガBFはオーガブレイバーにコードを入力する。

《104…ブレイカーモード！》

オーガBFはオーガブレイバーを剣型のブレイカーモードに変型させ、デイルイドに斬りかかる。

デイルイドはライドブツカー・ソードモードで応戦するも、オーガBFのスペックの高さに苦戦していた。
そして、

《エクシードチャージ！》

オーガブレイバーは巨大なエネルギーブレードを形勢する。それを一気に振り下ろし【ブレイバーストラッシュ】を放つ。

「ぐっ！ぐあああ！」

デイルイドは防御するもあまりの威力に吹き飛ばされてしまう。

「ちっ！ならこっちもパワーアップだ！」

デイルイドはケータッチを取り出しコンプリートカードを装填しクレストをタッチしていく。

《ソウガ！アクト！セイリユウ！イプシロン！フォルス！コウキ！ドラゴ！ネオデンオウ！ブレイズ！ファイナルカメンライド…デイルイド！》

デイルイドはコンプリートフォームに強化変身すると一気に反撃を開始する。

デイルイドCFとオーガBFの戦いは正に互角。

だが所詮相手は造られた人形、少しずつ圧され始める。

そして遂にオーガBFに隙が生じるとそこに一気に斬り込む。

そしてある程度距離をとるとクレストをタッチする。

《ブレイズ！カメンライド…クリムゾン！》

ヒストリーオーナメントのカードが全てブレイズ・クリムゾンフォームに変わりデイルイドCFの隣にザンバットセイバーを持ったブレイズCFが召喚される。

デイルイドCFはカードを一枚取り出し装填する。

《ファイナルアタックライド…ブ・ブ・ブ・ブレイズ!》

デイルイドCFとブレイズCFはライドブッカー・ソードモードとザンバットセイバーを構える。
すると二人の刃は業火を纏う。

二人はそのまま刃を振るい斬撃を放つ【バーニングザンバット斬】を発動する。

「はあああ!」

「ぐあああ!」

ブレイズCFは役目を終え消滅する。

ソウガAFとディセンドはWHAに圧倒されていた。

「はあっ!」

「ぐあっ!」

二人は何とか体勢を立て直すWHAはそこへ追撃を加える。

《エンジン!》

WHAはエンジンメモリを起動させエンジンブレードにインサートする。

そしてトリガーを引く。

《エンジン！マキシマムドライブ！》

WHAは敵にH型の斬撃を放つ【ヒートスラッシャー】を発動する。

「ヒートスラッシャー！！」

「ぐああああ！！」

二人は防御出来ず諸に【ヒートスラッシャー】を受けてしまう。

『さあ、君達の負けだよ』

WHAはエンジンブレードを振り上げ二人を切り裂こうとするが、

「はあっ！」

そこへディライドCFがライドブッカー・ソードモードでWHAの刃を防ぐ。

そこへクウガUFとZXが現れ、

「ダブルパンチ！！」

クウガUFとZXはWHAに【ダブルパンチ】を放つ。

WHAは思わず後退する。

「おのれ！！」

WHAはそう言つとエンジンブレードのトリガーを引く。

《エンジン！マキシマムドライブ！》

「『ダイナミックヒート!!』」

WHAはエンジンブレードで敵をH字に切り裂く【ダイナミックヒート】を放つ。だが、

《アタックライド…バリア!》

ディセンドはARを発動しバリアを形勢する【ディセンドバリア】で【ダイナミックヒート】を防ぐ。

「何!？」

それを好機と感じディライドCFはカードを一枚取り出す。

「ユウスケ、行くぞ!」

「ああ!」

ディライドCFはそう言うのとカードを一枚装填する。

《ファイナルフォームライド…ア・ア・ア・アルティメット!》

ディライドCFはクウガUFの背後に立ち、

「ちょっと痛いぜ」

「えっ?何だ?」

そう言うってクウガUFの背中を触る。

するとクウガUFはクウガゴウラムが強化されたアルティメットゴウラムに超絶変型する。

「よし、これなら!」

アルティメットゴウラムはWHAに特効する。

アルティメットゴウラムは空中を舞いWHAを翻弄する。

「くっ!なら!」

WHAはそう言うのとアクセルメモリをマキシマムスロットにインサートする。

《アクセル!マキシマムドライブ!》

WHAは両の拳に炎を灯し飛び上がる。

「『アクセルグレネード!』」

技名を発し分離しようとしたその時、

「させるか!」

そこへアルティメットゴウラムが飛来しWHAを挟み込みマキシマムドライブを中断させる。

「何!?!」

そしてデイライドCFがアルティメットゴウラムに飛び乗り、

「これでも喰らえ!はあっ!」

デイライドCFは【ディメンションインパクト】を放ちWHAを吹

き飛ばす。

WHAはそのまま地面に叩き付けられる。

「ユウスケ、一気に決めるぞ！」

「ああ！」

デイルイドCFはそう言うのとカードを一枚装填する。

《ファイナルアタックライド…ク・ク・ク・クウガ！》

FARが発動するとアルティメットゴウラムは業火を纏う。

そこへデイルイドCFが右足をアルティメットゴウラムに突き付けそのまま敵に特効する【アルティメットアサルト】を放つ。

「はああああー！！」

「ぐああああー！！」

【アルティメットアサルト】を受けたWHAは大きく吹っ飛ばす。だがWHAはそれでも立ち上がる。

「まだだ！」

デイルイドCFとクウガUFは着地する。

「しつこい奴等だ」

デイルイドCFは呆れる様に言う。

「この程度で終わるか！」 『見せてあげよう、ギガシヨッカーの力の一部を！』

そう言った瞬間WHAの背後に巨大な次元の壁が出現する。
そこから最大級のオルフェノク、エラスモテリウムオルフェノクが
出現する。

「またこいつか！」

デイライドCFは悪態をつく。
だがデイセンドは異変に気付く。

「何か違う……………、まさか！」

デイセンドが気付いた異変を変わりにWHAが説明した。

「奴の力だ」

『彼の極光さ』

それを聞いたデイセンドは呟く。

「闇の力……………」

デイセンドがそう言った瞬間エラスモテリウムは口から闇の波動を
吐き出しライダー達を襲う。

だがその時デイライドCFの頭にユウスケの言葉が浮かんだ。
“仲間を守る為に！”

「くっ！」

デイライドCFは仲間を守る為に身を呈してエラスモテリウムの攻
撃を防ごうとする。

そして攻撃が当たろうとしたその時、デイルイドCFから虹色の眩い光が発せられる。

「なんだ？」

光を発しているデイルイドCF本人も困惑している。

それを見たWHAは、

「まさか、奴に本当の！？」

『真の極光………ファイブ ril!』

デイルイドCFから発せられるている光・ファイブ rilはさらに輝きを増し、エラスモテリウム of 攻撃を消滅させる。するとクウガUFがデイルイドCFの隣に立つ。

「ユウスケ、決めるぜ？」 「ああ！」

そつやり取りすると、ファイブ rilがクウガUFを包み込む。

「暖かい光だ………」

クウガUFは光の中でその姿を変える。

「これは………」

クウガUFは禁断の闇と呼ばれる、クウガ・ライジングアルティメットに変身する。

二人は頷き合つと飛び上がる。

《ファイナルアタックライド………デイ・デイ・デイ・デイ・デイルイド!》

ディライドCFとクウガRUは【ディライドウルティメイト】と【ライジングアルティメットキック】を放つ。

「はああああ!!」

「ぐぎゃああああ!!」

二人の必殺技を受けたエラスモテリウムは消滅した。WHAもその隙に退散した。

ZXはクウガRUと向き合い、

「ユウスケ、これだけは覚えておいてくれ。俺達は離れていてもずっと仲間だ、勿論渚達もな」

ZXはそう言うとカードの効果が切れたのか、自分の世界へと帰っていった。

渚とユウセイはユウスケと別れの挨拶をしていた。

「ユウスケ、世話になったな」

「どつって事ないさ」

ユウスケは一呼吸置いて再び口を開く。

「渚、また何かあったらいつでも呼んでくれ。どこにいても、必ず駆け付ける」「ありがとう、ユウスケ」

渚はそう言うとユウスケを写真に収める。

ユウスケはトライチェイサーに跨がり去っていった。

岬写真館

渚はこの世界で撮った写真を見ていた。すると信次郎が一枚の写真を見て、

「お、これは中々良い写真じゃないか」

その写真にはサムズアップするユウスケと勇ましく立つ良、その後ろにクウガMFとZXが写されていた。

「二人共良い顔しているな」

ユウセイはコーヒーを飲みながらそう言う。

「そう言えば渚君もなんか凛々しい顔になったよね？」

彩夏は渚の顔を見てそう言う。

「あ、本当だ！」

ユウセイもそう言う。

「う、うるせえ！」

「あ、顔赤い」

「照れるなよ」

渚達がそんな事を言いながらじゃれあっていると、背景ロールが下りてくる。

全員は背景ロールを見る。そこには坪写真館とはまた違った写真館が描かれていた。

それを見た渚はこっぴどい。

「……………写真館？」

第27話 最終三部作：第一部・後編“究極の闇と忍者ライダー”（後書き）

次回、仮面ライダーディライド……………。

第28話 最終三部作：第二部・前編“闇夜の女帝・キバーラ”

全てを破壊し、全てを繋げ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0193k/>

M・R・DCDシリーズ 仮面ライダーディライド

2011年10月17日01時58分発行